

魔法少女リリカルなのは
は√クロスハート

アルケテロス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、平凡な筈だった小学3年生の少女ー、高町なのはが、数奇な運命の末に『パティシエール』と『魔王』へ至る御話。少しでもヒロイックでリリカルな一大悲喜劇が今、幕を開ける。

※原作換算で、2期まで完結済み。

※インフィニティソウルズ要素は、第49話から少々。

※基本的に全員強め&タグは保険込み。

目次

【無印編】

- 第0話：悲しみの雨で芽吹くモノ 1
- 第1話：ガール・ミーツ・マジックなの 4
- 第2話：結成、非公式海鳴ガーディアンズなの 12
- 第3話：思うからこそ不満なの 20
- 第4話：それは、如何しようも無かった出来事なの？ 28
- 第5話：新たな誓いなの 37
- 第6話：千客万来、月村邸なの 44
- 第7話：思いと砲撃は一方通行なの 51
- 第8話：束の間の安息なの 59
- 第9話：向き合う気持ちは本気なの 67
- 第10話：コミュニケーションは大事なの 76
- 第11話：変わる時なの 84
- 第12話：来たる第三勢力なの 92
- 第13話：淡紅色が照らすモノ【前編】

第14話：淡紅色が照らすモノ	【中編】	100
第15話：淡紅色が照らすモノ	【後編】	108
第16話：立ち込める暗雲なの		117
第17話：決闘は夜明け前になの		125
第18話：星が輝く時なの		134
第19話：在りし日の追憶、揺蕩うモノ		143
【前編】		
第20話：終焉。崩れ行く思いなの		156

第21話：在りし日の追憶、揺蕩うモノ		163
第22話：訪れた平穏と痛みなの	【後編】	174
第23話：それぞれの思惑なの		180
第24話：そして日常への帰還なの		189
第25話：重ねた心に芽生えるモノ		197
第26話：欠け行く非日常なの	【幕間編】	206

第27話・傷痕は、何時か癒えるモノな

の？

233

第28話：予期せぬ終わりと始まり

第29話：とある少女と騎士達的一幕

250

第30話：ハレのち曇りなの

262

第31話：独りぼっちの牙城なの

第32話：群青色に染まれども【本編】

284

第32.7話：群青色に染まれども【閑

話

第33話・露草色に染まるる夏なの【前

編】

300

第33.5話：露草色に染まるる夏な

の【後編】

309

第34話：あざみし風に憂いを乗せて

317

【A's編】

第35話：フィンブルヴェトの訪れ

第36話：気を取り直して行きましょ

う。なの

334

第37話：テンコート・テンキ

412	第43話：未来（あす）への飛翔	401	第49話：甚大なる余波	491
	如し		第50話：波及せし変化	502
	第42話：禍福は糾（あざな）える縄の	391	第51話：主観的既存概念の転回	
			【補完編】	
	第41話：薄氷の上より、水底を望む。	377	第48話：今暫く、雪は融けじ	478
			第47話：積もり積もりて歪むモノ	464
	第40話：収束派生のジャンクション	367	第46話：厄災一過	450
	編			440
	第39話：新たなる辰星と極光なの	357	第45話：ラストダンスは盛大に	425
	編		編	
	第38話：新たなる辰星と極光なの	347	第44話：ラストダンスは盛大に	425
			編	
			【前	
			【後	

513

第52話：回帰性日常風景と懸念

522

【B O A 編】

第53話：アサキユメにて相見（あいま

み）ゆる

529

第54話：闇より零（こぼ）れ落ちた影

538

第55話：困惑……。想定外の助っ人

なの

547

第56話：討てども晴れず

557

第57話：混沌たるヴィルデヤークト

568

第58話：望まぬ再演

582

第59話：弔いの砲声

592

第60話：対峙すべき深淵【前編】

601

第61話：対峙すべき深淵【後編】

612

第62話：幽（かそ）けき夢が終わる頃

に

620

第63話：√ロスト・プリズム

628

【追憶編】

第64話：篝火（かがりび）を灯す

636

647 第65話：より善く、より高みへ。

【無印編】

第0話：悲しみの雨で芽吹くモノ

格好良くつて強いお父さん、ももこ「高町士郎」さん。優しくて温かいお母さん、きょうや「高町桃子」さん。努力家で見守つてくれるお兄ちゃん、きょうや「高町恭也」さん。勉強家で色々教えてくれるお姉ちゃん、きょうや「高町美由希」さん。そして、そんな素晴らしい家族の一員である私——「高町なのは」は末っ子として歳相応に甘え、愛されて育ちましたが、その幸せはそう長く続きませんでした。

切っ掛けは、私が4歳の頃。

お父さんが「危険だが、大切な仕事なんだ」と言っていたボディーガードの仕事で殉職したと伝えられて、何故か棺は空っぽのまま見送ったけれど、その日を境にお母さんはお店の経営に専念するようになり、お兄ちゃんとお姉ちゃんは、お母さんを手伝いつつも鍛錬に打ち込むようになりました。

そして、そういった変化に取り残されてしまった私は、取り敢えず笑顔でいるように努めました。家族に心配されないように。私は独りでも、大丈夫なんだよって。それが、当時の私に出来る精一杯の配慮だったのです。

それから1年が過ぎ、2年が過ぎ去り……。居候の2人が加わった頃には家族の中の重い雰囲気は和らぎ、自然な笑顔や会話も以前のように戻りつつあると言うのに、私はその幸せには慣れず、むしろ空虚な気持ちがどんどん膨らむばかりで、いつそ張り裂けてしまえば少しぐらいいは変わったのでしょうか？

お父さんは過去の人で、私達は今を生き、未来へと向かいます。だから次第に遠くなって、記憶でも別れて、薄れて、忘れていくのは極自然な事で、それが普通で道理なのだという事も知っています。しかし、如何しても受け入れ難い事実でした。

もしかしたら、お父さんは生きているのかもしれない。

あの日、棺に入つてなかったお父さんは、きつと今も何処かで生きているのだと。そんな可能性にすがっている小さな私を、私は置いて行けなかったのです。だから、それを確かめられない日々が辛くて、でも何処にも居なかつたら如何しようとも怯えたまま追憶と歳月を重ね、私は小学3年生へと成り果てました。そして何故だか、二度目となる転機もまた迎えてしまったのです。

誰もが予想だにしなかった、そんな転機を。

決して、望みはしませんでした。不変の思い、魔法の力、非日常、闘争、誰かの不幸、そして降りかかる火の粉。でも、何時の間にか手にしてしまって、訪れてしまって。だから私は、毅然と立ち向かうしかありませんでした。それしか知らず、そうする事でし

か道は拓けないと信じていたからです。これは、そんな少女が描く軌跡を辿る物語。

『魔法少女リリカルなのは√クロスハート』、始まります。

第1話：ガール・ミーツ・マジックなの

S i d e : なのは

学校からの帰宅途中、幻聴がやけに騒がしかったので其の発生源へ向かうという盛大なフラグを立ててしまった結果、私——「高町なのは」は、少なからず後悔する事となりました。

発生源を求め、公園内の人気の無い場所に出遭ったのは黒い何か。「もしかして、白目夢だったら嬉しいんだけど……」と現実逃避しつつも私は、身体を全力で真横に投げ出しました。直後に傍を通り過ぎる黒い何か。それは進行上の木々を押し折りながら止まったものの、私への害意は未だに途切れず、再度攻撃してくる事は明らかでした。

一体、これは何なのだろう？

ぱつと見たところ、黒いヘドロの集合体の様でありながら、一抱え程ありそうな太い樹木を簡単に折る質量と加速力を持つ謎物体。こんな物とぶつかれば、トラックに撥ねられるのと同義ですし、ましてや子供の足では逃げ切れる気がしません。まさに絶体絶命の危機。——そんな風に考えていた時が、私にもありました。

その後、何処からともなくやって来た喋るフェレット擬もどきが持つガラス玉と仮契約し、私の中に眠っていた強力なマジカルパワーで謎物体を封印。九死に一生を得るとはこの事でしょうね……。

ええ、はい。もう訳が分かりません。それくらいあつと言う間でしたし、助かりたいが為に分からない物を分からないまま使用して決着がついたので、今後の説明回に期待したいところなのですが、どうもこのガラス玉改め「レイジングハート」曰く、持ち主である「ユーノ・スクライア」という名のフェレット擬もどきの許可が無い限り返答しかねるとの事。そしてその肝心の持ち主は疲労と安堵からか気絶していた為、取り敢えず近くの動物病院に彼ごと預け、私はようやく帰宅する事が出来ました。

午後7時に。

結論から述べますと、セーフでした。これまで放課後は、自宅へ直帰する良い子ちゃんで通して来たので当然のように家族達から心配されましたが、「帰宅途中にフェレットを保護した」という美談と共に動物病院から一報を入れていたお陰で何とかありませんた。その夜、学校の宿題をささっと仕上げた後は戦闘イベントによる疲労もあつた為、迷わず就寝を選びました。夢なら覚めて欲しい。そういう気持ちも、あつたのかもしれない

ません。

そんなこんなで翌朝。昨日の折れてしまった樹木等の戦鬪痕はニュースで取り上げられる程度には騒ぎとなっており、現実と記憶に齟齬そごが無いことを確認しつつ公園管理者への申し訳なさから気が重い朝食を終え、そそくさと学校へ登校しました。

尚、通学バスの中で友人の「アリサ・バニングス」ちゃんと、「月村すずか」ちゃんと合流した際に再度世間話として話題に上がった為、私は少しばかり居心地の悪さを感じながらも、当たり前障りの無い応答でその場を何とか凌ぎました。

此処までは、まだ良かったのです。

学校に着いて暫くして、テレパシーのような魔法的な何かを受信したのですが、送信者は例のフェレットもと擬きことスクライアさんからで、時間が惜しいとばかりに、これまでの経緯や魔法について色々と説明してくれました。そう……。それは朝の会でも、授業中でも、休み時間でも関係無く、本当に色々と話してくれました。

家事手伝いやゲームで鍛えた並列思考マルチタスクが有るとはいえ、長時間に渡って行われるそれは苦行でしかなかったのですが、話を聞くにつれて、彼の抱く危機感の全容が分かってきました。

昨日、謎物体を封印した時は小さな宝石のような何かに変化したのですが、それは『ジュエルシード』と呼ばれる物で、異世界で高度に発達した魔法技術の遺産——『ロストロギア』の一種であるらしく、事象を改変して願いを叶えるような代物との事。

但し、それは人間などが願えば複雑過ぎる思考すら読み取った挙句、大凡望まぬ方向へと暴走するらしいので然るべき場所 で保管してもらわなければならないのですが、その道中に事故または襲撃が起こり、結果として散らばってしまったジュエルシードを回収すべくこの地球へ降り立ったようです。

ちなみに、私の住む海鳴市の近辺にジュエルシードが纏まって落ちたらしく、その数にして21個。既に封印が解けた物が暴走をし始めており、昨日の謎物体はその一例でしかなく、更に襲撃者が存在する場合は何に悪用するのも分からないので、居ても立ってもいられない。そういった内容でした。

その後、遙かな次元の先にある異世界の話や、魔法の話、発掘を生業とする彼のスクライア一族の話など、向こう側の情報を色々とする事が出来たのですが、その弊害として心此処に有らずといった感じに見えるようで、担任や友人からも心配され、更に昼休みを一人で過ごすと言って空き教室へ向かった時は、心底不安そうに見送られました。

「> それで、スクライアさんは私に如何して欲しいんですか? <」

テレパシーもとい念話の疲れを癒すため、窓越しに遠くの景色を眺めてみましたが、

見慣れた平和な町並みが広がっており、私は疲労度が5回復した気分になりました。並列思考の無駄？ 多分、ランナーズハイみたいな感じのオーバークロックな限界突破で脳回路的な何かが焼き付いている影響なのかもしれません。ええ、はい。カット。

「> お願ひ出来るのなら、ジュエルシード集めに協力して欲しい。悔しいけれど僕では力不足だし、きつと高町さんの方が、事態を早く収束させる事が出来ると思うんだ

<>

「> んー……。それなら、私のお兄ちゃんやお姉ちゃんの協力が必要になりますが、それでも構わないのでしたら手伝っても良いですよ？」 <>

「> 魔法文明の無い世界で、そういった情報を広める事はあまり好ましくはないんだけど……。如何してなんだい？」 <>

> 如何してって、それは—— <>

そも、スクライアさんが居たミッドチルダなる世界と違って法規制が異なるのは勿論なのですが、特に顕著なのが自立の早さです。スクライアさんの世界では、能力さえあれば年齢を問わずに就職が出来て、そうやって生活が成り立てば一人前として認められるとの事ですが、私が住む地球の日本国では、20歳に満たねば様々な制約が課せられてしまいます。

なので、そういった違いを説明しつつ、ジュエルシード探しは放課後や休日がメイン

となる事。そして夜などの遅い時間帯は、大人かそれなりの年長者が同伴でないと言われ、その旨を説明したところ、渋々といった感じでした。了承を得られました。

それから午後の授業を念話混じりに淡々とこなし、帰りの会が終わった頃。アリサちゃんが勢いよく立ち上がり、私の席までやって来ました。表情から察するに、「今日はずつと上の空だったみたいだけど、何か悩み事があるなら友達である私に話してみなさない」と言わんばかりで、実際そうでした。

ちなみに、「すずか」ちゃんもアリサちゃんを抑える為にそつと付いて来てくれましたが、同様に事情を聞きたいようで、ブレーキ役というよりも加速制御装置として絶妙な加減速をしてくれました。友達思いな親友が二人も居て、私は幸せ者だと思います。

「実は、家族会議物の案件を持ち込もうと思っているんだけど、どう切り出そうかなって」

案件の内容までは話さなかったので、若干ずれたアドバイスを貰いつつも「取り敢えず、無事を祈つとくわ」、「早く解決すると良いね」等の応援で送り出され、帰宅。通学鞆を部屋に置き、自宅に併設されている道場へと向かうと、そこでは何時ものようにお兄ちゃんとお姉ちゃんが模擬戦をしていました。

『永全不動八門一派・御神真刀流小太刀二刀術』——通称、御神流。

そんな名前の古武術をお父さんが修めていた事もあり、今ではお兄ちゃんが師範代と

なってその後を継ぎ、お姉ちゃんに指導しているのです。一時期は狂ったように鍛錬していました。最近は大分落ち着いたようにも見えます。しかしそれでも、二対四本の木製小太刀が風を切り、ぶつかり合う様は凄まじく、超人的な体術も相俟って目まぐるしく繰り広げられる攻防は圧巻の一言です。

私もお父さんの血を引いている筈なのですが、走る事以外はどうもイマイチなので見学と柔軟運動くらいしかやってません。なのである意味、お父さんを近くに感じられる二人が羨ましかったです。尚、勝負自体はお兄ちゃんの勝ちで終わり、お姉ちゃんはまだしても連敗記録を伸ばしたのです。

「お帰り、＼なのは」。ずっと待っていたみたいだが、何か話でもあるのか？」

「＼なのは、お帰り」

「ただいま。お兄ちゃん、お姉ちゃん。実は、ちよつと折り入った話がありました……」
言うや否や、魔法発動。多分出来るはずと思いつつ、天使のような羽を背中に展開してみました。結果は、ちよつとデイトイルが甘くて角ばってしまいました。ぶつつけ本番にしては我ながら良い出来だと思えます。

「魔法少女、始めてみました」

尚、お兄ちゃんの珍しい驚き顔が見れた代償として待っていたのは、とても長い質問攻めと、それよりも更に長い家族会議でした。軽率さは時として仇になる。そう強く実

感じた瞬間でもありました。

第2話：結成、非公式海鳴ガーディアンズなの

S i d e : なのは

あれから、お兄ちゃんとお姉ちゃんの質問攻めを経て、更にお母さんや居候のレンちゃんも晶ちゃんも交えた家族会議で説明し、そして何時の間にか動物病院から脱走していたスクライアさんにも来て貰って説明をして、説明をして、説明をして……。後顧の憂いが無くなってしまいました。ええ、それはもう奇麗さっぱりとです。

少なからず危険なので、お母さんに反対されたらどう説得しようとか。一人で出歩くと補導されるので、お兄ちゃんかお姉ちゃんが同伴してくれないかなとか。そういつた心配事はあったのですが、どうも今まで我が儘の「わ」の字すら表に出さなかつた私の我が儘を内心では嬉しく思っているようで、単独なら夜の7時、同伴なら夜の10時を目安として帰る事を条件に許可されました。

そして早速、外出する事に。

時刻は夜の9時頃。あまり遠くまで行けません、割と近場で反応があつたらしいのでそこへ向かいます。メンバーは、私とお兄ちゃんとお姉ちゃん。そしてスクライアさんから借りた「レイジングハート」の3人と1機です。ちなみにスクライアさんは、怪

我による不調もあるので御留守番となりました。

見送りの際、スクライアさんは魔法初心者のもと、実力が未知数なお兄ちゃんとお姉ちゃんとのコンビに不安を覚えていましたが、私は案外大丈夫なのではと思つてます。出発前に、職質されない程度の装備をしたお兄ちゃんとお姉ちゃんに現状最速の魔力弾を撃つてみましたが、余裕で回避されました。どうも弓矢程度の速度だと、見るまでもなく避けられるとの事。

ついでに魔力弾や防御魔法を試し切りしてもらったのですが、「徹せば何とかかなりそうだ」という斜め上の返答と共に凄まじい連撃で霧散させたのを見て、改めてお兄ちゃんの非凡さを思い知りました。ちなみにお姉ちゃんも同様にやってみせたので、私が魔法に対して抱きつつあった信用が見事リセットされてしまいました。

閑話休題。

リリカルマジカル以下略。観測地点へ到着後、近くで励起状態から暴走状態へと移行しつつあったジュエルシードを発見。直ちに封印・回収しました。てつきり戦闘パートナーかと思いましたが、良い意味で肩透かしを食らった結果となりました。

「どうやら、上手く行ったみたいだな」

「うん。今回は、だけどね」

実は、前回のジユエルシードも変身後は大した事はなかったのですが、スクライアさん曰く、願いの核となるモノが無い状態での暴走はまだマシな方らしく、人が手にした場合の被害や脅威度は予測不能との事。なのでそうならない様に、早期発見と迅速な対処を心掛けていきたい所存です。

「次もそうだと良いね、"なのは"。それじゃ、遅くならない内に帰ろつか？」

「はい」

ミツシヨンコンプリート。あとは帰って湯浴みして寝るだけ等と考えていましたが、はたと気付きました。そうなのです。放課後の相談と家族会議とジユエルシード回収でやってなかったのですが、宿題という学生の敵がまだ残っていました。内容は大した事はないのですが、貴重な時間が削れる事には変わりません。それが今夜か、翌日の早朝かの違いなだけで。

そして私は今夜を選び、宿題を終えた代償に寝不足な翌朝を迎えました。今後を考えるなら、宿題などの時間配分は考えてやった方が良いかもしれません。

「"なのは"ちゃん、なんやフラフラしとるけど、ほんまに大丈夫かー？」

「取り敢えず、白湯を持って来たからまずは一杯。ほら、ぐいぐいっと」

レンちゃんに心配されつつ、晶ちゃんから手渡された湯呑みの白湯を機械的に飲み干

した私は、半覚醒状態のまま洗面台で顔を洗い、それから2人が作ってくれた朝食に手を合わせ、食べ終わる頃には無事起動する事が出来ました。

「うう……。授業で寝ちやう人の気持ちも分かるような……」

ちなみに今回、初めて夜更かしなるものをやってみましたが、どうもこの「小学生ぼで」では無理があるようです。残業やら一夜漬けやら、カラオケでオールナイトする人が世の中には居るようですが、改めて凄いなーと思いました。

それから制服に着替え、心配してくれたレンちゃんやんが通学バスの乗り場まで付き添ってくれて、乗車後はアリサちゃんとすずかちゃんに問題解決の報告をざっくりして、何時の間にかバスから降りていました。オカシイ。何処か記憶が飛んでいるような……？

「「なのは」く、目的地に着いたわよー。ほら、しゃきつとしなさいなー」

「あの、「なのは」ちゃん。眠気覚ましに、飴でも舐める？」

「うん。有り難う……」

それから私は、「すずか」ちゃんから貰った飴を舐めつつ、更にこれ以上の迷惑を掛けない為にも、知覚神経と思考速度を魔法で活性化させる事にしました。これで気分がすつきりして……って、これでは完全に違法ドラッグをキメてる人と同類になるので、昼休みは寝て過ごし、午後の授業では使わないようにしました。如何しても眠くなった

時は、ステルス化させた探索魔法を町中に飛ばして、ジュエルシードを探したりして気を紛らわせ、何とか放課後へ。

何時もの私なら、平日は塾や習い事で忙しいアリサちゃん達に別れを告げ、真っ直ぐ帰路に着くところですが、今回は授業中に探知したジュエルシードらしき物の反応を確かめる為、その現場へ少し寄り道する事にしました。

現場である八束神社へと続く石段の前で、応援として駆けつけてくれたスクライアさんと合流。一先ず、山の中腹にある境内を目指して石段を登り「きゃー!!」——もとい駆け上がります。

石段を登り詰め、境内を見回すと気絶している人と、明らかに異形な獣の姿がそこにあります。なので、飛行魔法で地理的優位を取った上で、そこから誘導弾を念入りに撃ち込み、ぴくりとも動かなくなつた状態で封印。無事にジュエルシードを回収する事が出来ました。

尚、一連の行動にスクライアさんから「やり過ぎなような……」と若干引いた感じの指摘をされましたが、ジュエルシード等という訳の分からない物は、変に暴走される前に「初見殺し」且つ「先手必勝」の心構えで対処した方がより安全に、そして被害の局限化に繋がるのではと自論を語つたところ、「確かに「なのは」さん程の魔力が有れば、それでやれなくもないんだけど……」と前置きして、色々なやり方を教えてくれました。

隙を突いて攻撃を差し込むやり方。行動を誘って移動先に攻撃を置くやり方等々。どれもゲームでは御馴染みの戦術でしたが、魔法という分野でも似たような事が出来ると気付かされ、不思議なことに胸が高揚感で満たされて行きました。

正直言つて、ジユエルシード集めは危険で怖くて、痛い事もその内あるかもしれません。ですが魔法を使うのは本当に楽しくて、もし私のような他の魔導師ともゲームの様に対戦が出来たりしたら、それはもう最高に楽しいんだろうな。そう思うと、ワクワクが止まらないのです。

そんな訳で、私は更なる技量向上を目指すべくスクライアさんに御教授を願う事になりました。「スクライアさん。デバイス無しで魔法を使うコツってありますか？」——と。

……

……

……

そして帰宅後。夕食やら湯浴みを済ませて、時刻は夜の7時半頃。灯台下暗しとはまさにこの事でしょうか。スクライアさんと練習がてら、デバイス無しで探索魔法——通称“サーチャー”を飛ばしていたところ反応を検知。場所は、私が通う私立聖祥大付属小学校でした。時間帯が時間帯なので、お兄ちゃんかお姉ちゃんのだちらかに同伴して貰おうと思ったのですが、どちらも付いて行くとの事だったので共に現場へ。

お兄ちゃんとお姉ちゃんは、何時ものように軽快な走りです。そして私は、歩幅差がどうしようも無いため魔法で身体強化をして強引に付いて行っていますが、こうして一緒に走ってみると、なかなか如何して楽しく感じます。年齢が離れている事もあり、これまで一緒に何かをするという事は余り無かったのですが、これからはお兄ちゃんとお姉ちゃんの朝のランニングに付いて行くのも有りなんじゃないかなー、と思いました。

「あ、お兄ちゃんお姉ちゃん。敷地に入るのは、ちよつと待ってて」

閉ざされた校門を飛び越えようとする二人を呼び止め、意識を魔法構築へと集中させます。

「如何した。何かするのか？」

「境界を張って、部外者弾きと被害の局限化を少々。……うん、何とか出来た。如何でしょうか、スクライアさん？」

「申し分の無い出来だと思ふよ。ただ、*“*なのは*”*さんの戦闘スタイル的にはちよつと狭いかもだけど」

「へえ……。魔法つて何でも有りなんだねー」

そして私達は、夜の学校という学生なら心躍るシチュエーションを大いに満喫したのでした。ちなみに、戦闘自体は角が生えた成人男性サイズの鼠ねずみさんっぽいのを「試しにやらせてくれないか？」との事で、お兄ちゃんとお姉ちゃんが攪乱かくらんし、共同で切り崩す

という大変スプラッタな戦闘となり、やはり魔法には魔法で対処すべきだなと私は現実逃避しつつ、なるべく残骸を見ないようにジュエルシールドを封印。その哀れな暴走を終わらせてあげました。

尚、SAN値チエックでクリティカル判定を出したスクライアさんは、発狂とまでは行きませんが、苦悶に満ちた表情で静かに気絶していました。出来れば、私も女の子らしく穏やかな表情で気絶したかったです。お兄ちゃんやお姉ちゃんの鍛錬による擦り傷や切り傷などを見慣れてしまった為か、知らず知らずの内に血肉への耐性が付いていたようです。

しかしそれでもやはり、しばらくは肉料理を見たくないなーと少し思いました。

第3話：思うからこそ不満なの

S i d e : なのは

あの惨劇を経て再帰宅後、お兄ちゃんとお姉ちゃんは興奮冷めやらぬのか山へ模擬戦しに向かい、スクライアさんは悪夢にうなされていたので、お兄ちゃんの部屋へと放置。そして私は、シャワーで軽く汗を流してからキツチンでホットミルクを作り、2階の自室へと戻りました。ええ、はい。そうなのです。これは寝る為の準備ではなく戦う為の準備であり、私はこれから学生の宿敵たる宿題と戦わなくてはなりません。

今まで帰宅部だった事もあり、あまり苦には感じませんでした。ジユエルシードを集める傍らでやろうと思うと、これが結構煩わしいのです。

ただでさえゆっくり出来ないのに、アリサちゃんや「ずずか」ちゃんとメールで遣り取りする時間、家族や晶ちゃんやレンちゃんと話す時間、テレビを見る時間、本を読む時間。そういった贅沢な時間の使い方が出来なくなってしまう、私は平日を学業と塾と習い事で予定を埋めているアリサちゃんと「ずずか」ちゃんに、尊敬の念を抱かずにはいられませんでした。

そんなこんなで宿題終了。ホットなミルクが常温になるまでには終われたのですが、

時刻は夜の9時42分。何かをして寝るには時間が足りず、何もしないのでは勿体無いように思える時間です。取り敢えずコップを洗うべくキッチンへと向かうと、そこにはお母さんの姿がありました。どうやら、食卓で帳簿と睨めっこしているようです。

「お帰りなさい、お母さん」

「ただいま、なのは。恭也と美由希は何時も通り？」

声をかけると、お母さんは思案中であつた筈なものにも拘らず帳簿から目を離し、仕事疲れを感じさせない笑みで私を温かく迎えてくれました。

「うん。もう40分くらい前には出て行ったよ」

「そう。ところで今日、〃なのは〃は何をしていたのかしら？」

「えつとね、今日は——」

学校での事、そしてジュエルシード回収での事。それらの事を掻い摘んで話すと、お母さんは私の寝不足を心配したり、お兄ちゃんとお姉ちゃんの行動に呆れたりして、そして最後に「頑張ったのね。あまり無理をし過ぎちゃ駄目よ？」と締めくくって、私の頭を撫でてくれました。

これだけ、なのです。

家族旅行をする場合でもない限り、年中無休で喫茶『翠屋』を経営するお母さんとの会話は、朝食時や夜のこの時間帯でもない限り滅多にありません。休日だと昼食時に戻って来る時に会えますが、その短い時間で家事をこなしたり家計簿を見直したりするのであまり話せる事は無く、此処最近では私がジユエルシード回収で忙しい事もあり、話せる時間は益々減っています。

勿論、分かつてはいるのです。店を建てた時の借金、商店街の表通りという一等地の借地料、あとは調理機材やら各種設備の維持管理費、食材等の調達費、共に働くスタッフ達の給料となる人件費など本当に色々とお金が掛かる訳で、それをお母さんとお兄ちゃんが支え、今の暮らしが守られているという事も。

なので、お母さんが私の話を聞くことぐらいいしか出来ずとも、それだけで有り難いと思っっていますし、私も同年代の子達のような親と過ごす休日という物を諦め、こうした僅かな一時を大事にしています。

「イエス」

「ふ、ふっ……。『なのは』 だったら、ファイアッセみたいね」

それから歯を磨いて、ベッドにダイブし、そして翌朝。昨日よりはマシな気だるさと共に起床し、晶ちゃんとレンちゃん共闘して作った朝食（息が合っても仲は悪いので、喧嘩しながら作るのです）を食べ、何時ものように登校。すると何故か、校門に警察車

両が止まっていました。

嫌な予感がして、アリサちゃんも「さすが」ちゃんと共に人が集まっている方へ行つてみると、案の定と言うべきでしょうか。穴だらけとなつたグラウンドで、警察の人達が現場検証をしていました。そうです。昨日の惨劇の舞台となつたグラウンドの戦闘痕が、どうやら悪質な悪戯として通報されてしまった様なのです。

お兄ちゃん曰く、「御神の剣士の踏み込みは、地を穿つ」^{うが}だそうなので、多分その踏み込みが小さいクレーターとなり、そしてジュエルシードの異相体による抵抗もとい攻撃が、大きなクレーター等になっているのでしよう。昨日は暗くて分かりづらかつたのですが、最早ロードローラー等の工用車両が必要なのではと思う程にはデコボコになつていて、私は朝から良心の呵責^{かしゃく}に悩まされる事となりました。

そんな訳で午前中は憂鬱な気分でもごし、午後は社会見学の一環で町へと繰り出しつつ探索魔法でジュエルシードを探したりしましたが特に反応は無く、そして放課後。「で、今日の悩み事は何かしら?」

唐突に、アリサ尋問官からの鋭い追究が始まりました。勿論、「さすが」書記官も一緒です。

「最近、変な事件が多くて怖いなーっていう悩み事を少々」

「ダウト。声に感情が籠もってないわよ?」

如何やら、今日のアリサちゃんは一段と手強いようです。とはいえ、正直に伝えても心配させてしまうだけですし、アリサちゃんも「わずか」ちゃんには、何も知らず日常側を満喫して欲しいという勝手な願望もあって、あまり話したくはなかったりします。

そも、魔法とは私の日常に入って来た異物である事には変わりなく、使っていて楽しいとは思いますが、例外的にジュエルシードのような危険な物もあり、知らずに済むのならそれはそれで良いと思うのです。知ってしまったえば、きつと関わらずにはいられますから。

「うーんとね……。特に家庭問題とか、私の反抗期や倦怠期とか、実は色恋沙汰とか、学校の成績とか、将来の悩みとか、周囲への不満とか、そういったアリサちゃんや「わずか」ちゃんが想像するような事は、何にも無いよ」

「じゃあ、それ以外で何を困っているのよ？」

「危険物探し」

「そう、それは大変ね。……って、納得するだけでも？」

「かなり要約して端折っているけれど、残念ながら曲げようがない事実なのです」

「ふーん……。ところで「なのは」、今度の日曜日なんだけど——」

納得したのか諦めたのか、アリサちゃんの追究はそれで終わり、話題は御茶会へのお誘いへとシフトしました。ちなみに、アリサちゃんも「わずか」ちゃんも社長令嬢で、

私と同じように読書やゲーム等もするのですが、趣味の1つに御茶会というものがあり、基本的にアリサちゃんの家（大豪邸）・「わずか」ちゃんの家（大豪邸）・喫茶『翠屋』（比較対象外）の三箇所で行われていて、今回は「わずか」ちゃんの家で開かれるようです。

「あのね、＼なのは」ちゃん。今回も、ちよつと遅くなるかもだから……」

「うん。またお兄ちゃんに頼んでみるね」

「あ、ありがとう……」

そして何時ものように遣り取りをし、お互いに薄く笑みを交わし合いました。尚、真相を知っているアリサちゃんからの冷やややかな視線が少し痛かったです。尚、同志「わずか」との親交を深めたところで本日は解散となりました。私は家へ。アリサちゃんとは「わずか」ちゃんはバイオリンの御稽古へ。という訳で、送迎車に乗った二人を見送り、見えなくなるまで待ったところで、私は寄り道がたら危険物探しへと向かうのでした。

どうせなら、危険物よりも硬貨を見つけたところなのですが、はてさて……。

くく

Side：アリサ

「ねえ、アリサちゃん。本当にあれで良かったの？」

車が走り出してから数分後。平生よりも口数が少ない私に気を利かせたのか、
「さずか」が話を振ってくれたのを受け、先程の会話を思い出しつつ言葉にしてみる。

「“なのは”が変に強情なのは——」って言うのと、まるで駄洒落ね……。こら、そこ笑わないの。とにかく、まともに相談してくれないのは何時もの事だし、何より困っている理由で『危険物探し』って答えが返ってくるなんて、完っ全に予想外よ。あの場合は、戦略的に退かざるを得なかったわ」

と言うか、危険物探しで困っている親友にノータイムで的確な助言が出来る人など、この世に存在するのだろうか？ 等と言うツマラナイ思考は除外して、更に思考を巡らせていく。

“なのは”が嘘や冗談を好むような性格ではない事ぐらいは知っているの、「危険物とは何かの暗喩であり、理由があつてそれを探しているのかもしれない」とまでは想像出来ても、その深刻さまでは推し測れないし、何よりあの説明の仕方では「心配させたくはないけど、関わらないで欲しい」という迂遠な拒絶のようにも思えて、如何しても二の足を踏んでしまう。

「多分、核心へ踏み込もうが待っていようが、“なのは”なら教えてはくれるだろうけ

ど、そうじゃないのよ。変な言い方だけど、『危険物探しに付き合っ』なんて言ってくれるような、そういう気が置けない仲でありたい。……なーんて思っているんだけど、
“すずか”はどう思っているの？

「私も概ね同意なんだけど、“なのは”ちゃんとは出会ってまだ二年くらいだし、そう焦ることも無いんじゃないかな？」

「そんなものかしら……？」

“すずか”の言う通り、ワインのように歳月と共に深みを増していく付き合い方も有りなのだろう。実際、私の両親がそんな感じで、あんな関係を築ける間柄は羨ましいとも思ってしまう。しかし私は子供で、だからこそ甘いジュースが欲しいのだ。笑い合っ、楽しんで、手を取り合っ、そんな憂いの無い快活な青春とやらを私は謳歌したい。そう願って止まないのだ、この心が。

だって大人になれば、それはきつと飲めなくなってしまうのだから。

第4話：それは、如何しようも無かった出来事なの？

S i d e : なのは

結局、昨日はジュエルシードは見つからず、本日は待ちに待った土曜日の休日。何時も通りならゆつくりと過ごしたいのですが、未だに危険物が17個も何処かに転がっている訳でして、心置きなく過ごす事など出来そうにありません。

「という訳でスクライアさん。転移魔法のイロハを教えて頂きたいのですが……」

「イロハ……？ まあ、転移魔法を教えるのは構わないけど、急にどうしたんだい？」

「もし、スクライアさんと私が手分けをして探している最中に其方で見つけた場合、飛んで行くよりも転移した方が早そうかなって思っただけです」

「なるほど。それじゃあまず、転移魔法の仕組みから説明するけど——」

そんな感じで午前中は魔法講義に時間を費やし、昼食はキッチンで夕食の仕込みをしていたレンちゃんが出してくれた有り合わせを頂き、さて午後はと考えていたところで、短い揺れと共に嫌な魔力の波長を感じました。

「地震……？ にしては、ちよう短いよーな……？」

「レンちゃん。私、ちよつと出かけてくるね」

「ほーい。留守番なら任せとき〜」

自室に戻って「レイジングハート」を手に取り、スクライアさんと合流して再び階下へ。そして靴を履いて庭へと向かい、セットアップ。演算は「レイジングハート」に任せて現場付近の上空へと転移し、そこから飛行魔法で魔力の発生源へと向かいます。

「酷い……」

「多分、今回は人を取り込んだのかもしれないね……。過去の文献にも、似たような事例があつたよ」

先行させた探索魔法が映し出した光景は、そう形容せざるを得ない程の有様でした。市街地やビルなどの商業施設を含む一帯を巨大な樹木が囲むように多数出現しており、道路は寸断され、樹木の枝や根が建物を損壊させ、車や施設を貫いていました。これまでの比較にもならない大惨事に思わず目が眩みそうになりましたが、この事態を收拾出来るのは現状私だけなのです。

ならば、終わらせないといけません。

「何時も通り、封印すれば終わりなんですよね……？」

「それはそうなんだけど、これだけ魔力反応が多いと一体どれが本体なのやら……」

「……………全部、撃ち抜けば良い」

「えっ?」

空中で静止して、「レイジングハート」を砲撃形態へと変形。その場から見下ろすと、そこには異相体の本体候補となる樹木が7つ視界に入っており、互いが互いを結び合うように根で繋がっているのが見て取れます。どんな願いが、ああいう風に歪められてしまったのかは分かりません。興味がありません。ただただ平和を脅かす敵として、早く取り除かなくては…………。

「レイジングハート、お願い!」

「— Buster sphere. Stand by. —」

願い通り、「レイジングハート」は膨大な魔力を使つて魔法陣で組み上げられた球体を六基生成し、それぞれの樹木の直上に配置してくれました。そして私は、一番近い樹木に「レイジングハート」で直接狙いを付けて姿勢を固定し、惜しみなく魔力を注ぎ込みました。全てが終わるように。そう祈りを込めて。

「無茶だよ、なのは、さん! それよりも、サーチャーで本体を見つけた方がよっぽど…………」

「分かつてるよ。それが確実に、負担が少ないって事ぐらい。でもね、——」

「— 《 Divine halo 》 —」

七つの光が、樹木を貫く。

「——如何しても、許せなかったの」

それはとても呆気ない終わり方で、この惨状も嘘のように消えてくれれば良いのにと、そう思わずにはいられませんでした。

く

Side:レン

夕食の仕込みが終わってもーて、他にすることは縁側で悩んどると、桜色のいかにもーな魔法陣が出現し、呆けたまま見守っていると粒子が人の形を取り始め、やがて「なのは」ちゃんに成りました。これまで喋るフェレットや、魔力弾とかゆるーのも見せてもらうたけれども、未だに「なのは」ちゃんが魔法少女となった現実が非現実的過ぎて、どーもイマイチ実感が湧きませんな〜……。

「お帰りー、なのは」ちゃん」

「うん……。ただいま、レンちゃん……………」

あ、理由はよー分からんけど、これは放置したらアカン奴や。

「なのは」ちゃん、どないしたん？」

「えつとね……。覆水が盆ふくすい ぼんに返らないかなーって考えていたの」

「あー、なるほど。そーゆー事なんやね……。くよくよしてもしやーないし、取り敢えずお風呂入って、ゆっくりして、それから考えてもえーやないんかな？ 疲れきっていたら、良い考えなんて出てこないもんやで？」

「うん、それもそうだよね……。そうしてみる」

縁側で靴を脱いで、しっかりと玄關へ靴を収めに行く。『なのは』ちゃんの後ろ姿は一見平気そうに見えるものの、むしろ日常動作をなぞる事で心を落ち着かせているようにも見えて、本当はちよう心配なのですが此処はぐつと堪える事にしました。

「結局、自分で解決するんやろなあ……」

泣かず、甘えず。特に不安や不満、恐怖や悲しみといった事は誰にも打ち明けずに抱え込み、そうやって前に進んで行くのが私の知る『なのは』ちゃんという人物像で、子供らしくないし、もつと頼って欲しいなーとは思ったりもするんやけど、それがあの子の性分ならば、もうそれはそれと認めて付き合っ行って行くしか無いのかなと……。

とはいえ、何も出来ないもどかしさと、本当にこれで良いのかという自責の念で身悶えする辺り、私もまだ割り切れていなかったりするんですわ、これが。

「早う、御師匠や美由希ちゃんとか、帰って来てくれたらええんやけど……」

「ただいまー、って何を黄昏ているんだよレン。鍋でも焦がしたか？」

「お帰りー、晶。……って御呼びとちゃうわ、このお猿！」

「いきなりキレんなよ、この亀！ やんのか!？」

「やつとる場合ちやうねん！ えーから耳かっぽっじって、よー聞け」

気晴らしを兼ねて、口喧嘩を吹っかけながらも事情を説明。すると晶は、見るからに落ち着きを無くし始め、今頃は機械的に身体を洗っているであろう。『なのは』ちゃんの事が心配で心配で堪らないといった感じで、「居場所を教えたら、このまま風呂場へ突撃するんやろかこの不審者？」と囁く好奇心を抑え、そろそろ晶を正気に戻すべく剋を込めてデコピンを一打。

「痛っ?!」

「まあ、まずは落ち着かんかいお猿。あそこまで意気消沈した『なのは』ちゃんは今やけど、昔程やないし、きつと大丈夫やって。それよりも、そんな状態の『なのは』ちゃんに配慮させる方があかんちやうか?」

「それはそうなんだけだよ……。やつぱり何があつたかとか、それを知ってこそ何かしてやれるんじゃないかとか、レンだつてそう思うだろ?」

「不本意やけど、ちよう同意したるわ。せやけどな、普段の『なのは』ちゃんを思い出してみ? 不安や不満を誰かに相談しとる様子はあつたかいな? 少なくとも、私の記憶にはあらへんで」

普段から日常会話くらいはするし、勉強や料理などの知識や技術の教えを請われる事

はあつても、未だにお悩み相談をされた事などは一度たりとして無く。きつと、聞けば何かしら教えてはくれるんやろうけど、その程度の悩みは「なのは」ちゃん的には如何でもいい物でしかなく、余計な御世話として映るのは明白な様に思えた。

「多分、無いな……」

「せやろ。んで、そういう人を無遠慮につつくと、次からは更に隠すよーなるとか、そんな悪循環しか生じないと私はそう思うんやよ」

「じゃあ、一体どうするんだよ？」

「どーもせーへん。何時も通りや。気分が落ち込んでいても、食欲をそそるよーな上手いもん作って食わせて、身体から元気にさせる。心身とは不思議なもんで、どちらかが悪うなるともう片方も駄目になるように、どちらが良すぎるともう片方も釣られて良くなるもんや」

まあ、実際そんなのは本人次第やけど、「なのは」ちゃんと高町家の面々なら乗り越えて行けるやろうし、晶のアホにはこれくらいの説明で丁度ええやろ。

「なるほど。たまには良い事を言うな、亀」

「たまにはちやうで。私の言葉は全て金言や。ほな、さつさと聴講料を払わんかいお猿」
「誰が払うか。ちよつと褒めたからって調子に乗るんじゃねーぞー！」

「へー、亀」が褒め言葉なんてうち初耳やわ。やはりお猿に日本語は、ちよう難し過ぎ

たかもしれへんな〜」

売り言葉に買い言葉。そして何時もの様に、私達は自然と拳を交わし合うのでした。

〜

Side:なのは

御風呂呂に入って少しさっぱりしたあと、身体の水気を拭き取ってから服を着て、まだしつとりと濡れている髪をドライヤーでぱぱつと乾かします。長い髪は、それだけで女性のステータスと成り得ますが、それ相応の手間暇がかかる訳でして、更に此処最近の忙しさから時間節約を考えた結果、髪を切れば入浴時間も合わせて短くなるのではと、ふと入浴中に閃きました。

なので、晶ちゃん程のショートカットはともかく、レンちゃん並みのミディアムカットには挑戦してみたいなとは思いますが、そうなると何時もしているツインテール（厳密にはピッグテールという髪型なのだから）は諦めないといけません。

「そ〜そ〜気に入ってはいただけど、これも大人への一歩という事で……」

手で髪を隠し、鏡に映るミディアムカット風な自分を視覚情報と脳内補整を組み合わせせて想像してみますが、特徴的過ぎるツインテールと、それを結ぶためのリボンが失われた自分は何とも言えない地味さで、清楚と言えば聞こえは良いのですが、やはり背伸

びをするからには目線を誘導するための何かが欲しいところですよ。

「カチューシャだと『すすか』ちゃんと被つちやうし、ヘアピンとかチョーカー辺りが無難な感じかな？」

もしくは、耳たぶを挟むタイプのイヤリングや、伊達眼鏡など。——と、色々現実逃避を試してみましたが、何時までもどったんばつたんと争う音は途絶えそうにありません。きつと何時もの様に、レンちゃんと晶ちゃんが争っているのでしょうか。そう、何時もの様に”。

「なら、『何時もの様』に私が止めなきやだね……」

もう一度、鏡を見えます。平生なら天真爛漫と評される表情からは程遠いものの、どうにか怒ったふりくらいは出来そうで、仲裁したあとは表情筋も良い感じに解れているかもしれない。そう思える程度には大分マシになっているような気がして、私は知らずの内に苦笑を漏らしていました。

「ふ、ふっ、酷い顔……」

その後、笑わせてもらったお礼として二人を拘束魔法で縛り上げ、みつちりと注意しておきました。勿論、『何時もの様に』です。

第5話：新たな誓いな

S i d e : なのは

「頻り怒つてみせた後、私は少し晴れやかな気持ちで自室へと戻りましたが、すっかり失念していました。ジュエルシード許すまじ発言を聞いた発掘責任者であるスクライアさんが、どういう風に自責の念を感じるのかを。」

「申し訳ありません、なのは”さん。これまでのジュエルシードの暴走、そして今回の被害。本当に、本当に済みませんでした！」

「ええつと……」

フレットが直立状態から頭を下げるというシユールさと、あまりの言葉の重さにたじたじとなりましたが、私の中でその謝罪に対する思いが次々と溢れて来て、それを何とか言葉に纏めながら返事をする事にしました。

「確かに、スクライアさんがジュエルシードを見つけず、そして運ばなかったら今回のような事は起こらなかつたのかもしれませんが。けど、それはもう有り得ない未来でしかなくて、今はただ前へ進むしか無いんじゃないでしょうか？」

「でも……」

「それにね、スクライアさん。あと16個もあるんですよ？ そのどれか1つでもこの町を消し飛ばしたり、家族や知り合いに危害を加えたりしたら、私はスクライアさんを許せなくなるかもしれません。だから、その謝罪は受け取れませんし、受け取りたくありません。少なくとも、全てが無事に終わるまでは」

そう、まだ16個もあるのです。全て回収するまでは気が抜けませんし、其処までは如何にか歯を食いしばってでも、付いて来て頂きたいところです。

「分かったよ、なのは”さん……”」

それつきり会話は途切れ、何か深く考え込んでいるスクライアさんを部屋に残し、私は携帯電話を片手にリビングへと戻りました。先程まで床に正座させていた二人は何処かへ行ったようで、私は気兼ねなくテーブル上に置いてあったリモコンを独占し、テレビを点けてソファアへと座りました。

とはいえ、決して昼ドラやバラエティー番組を見たい訳ではなく、やっているであろう臨時ニュースを探してチャンネルを次々と飛ばし、それらしいところで手を止めました。

「――返し、御伝えします。先程から番組内容を変更して御伝えしている通り、本日の午後1時頃、海鳴市藤見町で広範囲に渡って住宅やビルの損壊を伴う原因不明の被害が発生し、道路も各所で亀裂や隆起が見られるなど、警察や消防からは『地殻変動やテロな

どのあらゆる可能性を視野に入れ、調査に当たる』との発表がなされており、また、被害の甚大さから自衛隊による派遣も検討され——」

何となく予想はしていましたが、事態は最悪な方へと向かいつつあるようです。その後も色々チャンネルを変えてみましたが、時間が経つと共に目撃証言や証拠写真、果てには証拠映像までもが流れ始め、市街地を飲み込むように高速で成長する樹木や、空から降り注ぐ桜色の光線などがバツチリと映っているのを確認したところで、私はテレビから視線を逸らしました。

それから意を決して携帯電話を開き、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃんと次々に電話をかけて安否を確認し、アリサちゃんとすずかちゃんは電話に出れない事が多いので、メールを送って返信を待ちます。

「……………やり方、変えなきゃだね」

二人共郊外に住んでいるし、休日は家でペットと触れ合う予定だと聞いていたので大丈夫と思うものの、やはり心配で。返信を待っている間に、気晴らしを兼ねてデュエルシードの対処法を見直すことにしました。

これまでは、封印状態のジュエルシードが発する微弱な魔力を頼りに探し回っていましたが、これだと反応が微弱過ぎて見落とす恐れや、探索に時間がかかってしまう事が難点でした。つまり、受動的では限界があるのです。

なので、これからは能動的な探索もやってみようと思います。音波を出して、その反応音で物の位置を感知するエコーロケーションのように、魔力を飛ばしてその反応を感知する探索方法へと変えるのです。但し、懸念事項が2つ程。魔力を飛ばすので消費魔力が激しいのと、その魔力でジュエルシードが発動する恐れがある事です。

前者は膨大であるらしい自身の保有魔力量で乗り切って、後者は予め結界を張ってからすれば問題は無いとは思いますが、不測であるからこそその不測事態を考えれば考える程に、果たして魔力や体力や気力が持つのだろうかと少し不安になります。

例えば、敵対勢力という不測事態。

以前、スクライアさんが一方的に念話で話してきた際に、輸送中の事故か襲撃で散らばったジュエルシードを追って来たと言明していましたが、よくよく考えてみれば「レイジングハート」などの機械を作れるような文明の輸送船が、そう易々と事故に遭った挙句大破するものなのかと。

そう考えてみると、やはり事故の線は薄いように思えます。

杞憂、なのかもしれませんが。きつと、あんな被害を初めて見たせいで気が動転して、それで心配性になって、悪い事しか考えられなくて、疲れていて、でも誰かに任せる訳

にもいかないから私が頑張るしかなくて、だからジュエルシードは全部集めないといけません。それが終わればきつと、元の生活に戻れるのです。今までのように、何時までも平穏な暮らしが――

「出来たら、良いなあ……」

テレビに視線を戻すと、映像は海鳴大学病院の入口付近の中継映像へと替わっており、救急車が引つ切り無しに負傷者を搬送している様子や、医者や看護師が慌しく対応している様子などを映し出していて、私はなんて酷い物と戦っているのだろうと、ぼんやりとそう思いました。

「でもまずは、全部終わらせないと駄目だよね……う？」

そうでなければ、望むことも始めることも儘ままならないのですから。

……

……

……

そしてその日の夜。私は一人で、海鳴市上空の高度三百メートル付近にて佇んでいました。これほどの高度ならば、人目を気にせず魔法を使って探索出来ますし、何よりも一人で居られるのです。空は静かで、星や月は明るく奇麗で、陳腐な表現ですがまるで別世界の様。お兄ちゃんとお姉ちゃんには悪いのですが、今度からはこうして探そうと

思いました。

「この方が効率的だし、バリアジャケットが無いお兄ちゃんとお姉ちゃんが、万が一にでも負傷する恐れも無くなって、まさに良い事尽くめだよね……。うん」

ただ、少しだけ暇なので独り言が増えてしまうのは難点ですが……。とはいえ、誰かと話したいかと言うとそうでも無かったりします。アリサちゃんと「すずか」ちゃんはお母さんは店を早目に閉めて帰って来るなど、皆が私のことを心配してくれました。

だから不安や心残りな事は無く、私はこうして空を飛んでいるのですが、やはりジュエルシードが見つからないと結界を張って探索、無ければ次のエリアへ移動といった作業の繰り返しとなるので、その合間に空中戦闘機動をやってみたり、誘導弾をぐねぐねと曲げて飛ばしてみたりしながら2時間程。

その結果、励起^{れいき}前のジュエルシードを1個見つける事が出来ました。今日だけで2個も集められたのは良い事なのですが、まだ15個も不発弾のように何処かへ転がっている訳です。気が抜けない日々は、まだまだ続きそうです。

「目標、自宅。転移」

取り敢えず、本日はこれまで。明日は、「すずか」ちゃん家で御茶会があるので7時に起床して、朝シャワーやら朝食を済ませ、おめかし等をして、更に同時並行してお兄

ちゃんにも準備してもらってエトセトラ。

正直、現状の危うさを考えるとそんな事をしている場合ではないのですが、深刻さを認知する以前の招待とはいえ今更断る訳にも行かないですし、折角なので実益を兼ねてその周辺一帯を探索してしまおうと思います。願わくば、何事もなく平和なままで終わりますように。

第6話：千客万来、月村邸なの

S i d e : なの

たとえ昨日に悲惨な事があっても、今日は「すずか」ちゃんの家で御茶会をする日です。十分な睡眠を取ったので目覚めは良く、朝シャワーをして、朝食を適量摂取して、身支度して、朝のニュースをチェックして、お兄ちゃんと一緒に家を出て、バスに乗って移動します。

ちなみに何故、同級生とのお茶会にお兄ちゃんが一緒なのかと言いますと、これには同志「すずか」の姉である忍さんの存在が深く関わっております……。要約すると、忍さんがお兄ちゃんに片思い中なので、その橋渡しをしているのです。しかしながら、私も善意だけでやっている訳ではありません。

お兄ちゃんは、身内鼻根を抜きに見ても眉目秀麗かつ人格者で、とにかく女性からモテるのですが、そろそろバレンタインデーに貰ってくるお菓子の量が笑えなくなるレベルとなつて来ており、お母さんが以前「結婚してくれば解決するんだけど、恭也つたら剣術一辺倒だし、はたして何時になるのやら……」と悩んでいたの、お兄ちゃんとも面識があつて、「すずか」ちゃんからの話で人柄を知っている忍さんがベストか

な、と思い立ったのが切っ掛けでした。

それからは、*“ずずか”* ちゃんと共謀して月村家と高町家の合同花見会をしたり、お祭りで鉢合わせするように計らったりと色々やったのが実を結び、かなり良い感じになりつつはあるのですが、如何してもあと一押しが足りないような……？　とも思ったりする今日この頃です。

とはいえ、そういった考えはこれまでも、そしてこれから先でも余計な御節介でしかない訳でして、私にとつてはこの辺りが引き際なのかもしれません。あとは、忍さんとお兄ちゃんに任せて見守るべきなのでしょうが、やはり来年のバレンタインデーまでには如何にかなつて欲しいのが正直な思いです。

「……なあ、*“なのは”*。無理はしていないか？」

「ふえつ？」

そして余計な考え事をしていた弊害でしょうか。お兄ちゃんからの唐突な話しかけにマルチタスクが追いつかず、意図しないエラーが音声として外部出力されてしまいました。その結果、お兄ちゃんはそれを悪い兆候と判断したらしく、心配そうにしながらも話を続けました。

「昨日の事件で、死傷者が出た事に負い目を感じているんじゃないかと思つてな」

「うーんとね……。最初は動揺したけど、今はそれ程でもないよ」

未然に防げたかもしれないし、防げなかったかもしれない。でも、それはもうとつくの昔に終わってしまった事で、今となつては如何しようもありません。一応、簡単な治療魔法ぐらいは使えるので負傷者を治療して回るのも有りなのですが、そうするぐらいなら次の被害を出さない方向へ努力すべきだと思つたのです。

「だからね。心配しなくても大丈夫だよ、お兄ちゃん」

それつきり、お兄ちゃんは気不味くなつてしまつたのか無言となり、私も語り尽くしてしまつたので同じく無言のまま目的のバス停で降車して、残すは徒歩7分の道程のみとなりました。然れども、そのまま黙つて歩いて行くのもまた気不味かつたので、気にしていない事を迂遠に伝えるべく手を繋ぐと、お兄ちゃんは照れくさそうにしながらもしつかりと握り返してくれて、私は自然と頬が緩むのを感じました。

しかしながら、この幸せは7分後に月村家筆頭メイドのノエルさんに分断された後、お兄ちゃんはノエルさんと共に忍さんの元へ。そして私は、*“すすか”* ちゃんの専属メイドであるフアリンさんに案内されるがまま、アリサちゃんと *“すすか”* ちゃんが待つ部屋へと足を踏み入れ——*“られませんでした。開き戸なので、ノブを回して押せば開くはずなのですが、何かにつつかつてゐるらしく上手く開かないのです。”*

「ぬおー」

この特徴的な声は確か……？

「ごめんねフェアリン、　“なのは”ちゃん。今、ドルジを退かせるからちよつと待つててね」

「かしこまりました、お嬢様」

「はい。了解なの」

そうそう、ドルジでした。メインクーンという猫の中でも一番大きくなる種類の子で、その体長は1メートルを優に超え、体重も堂々たる10キロ超え。そんな大人でも持ち上げるのに苦労する猫を、何故か“ずずか”ちゃんは軽々と持ち上げて動かすことが可能です。

本人曰く、重心をへそ辺りに密着させて、持ち上げる時は足と背中中の筋肉を使えば簡単だよ等と言っていますが、単純に“ずずか”ちゃんが力持ちで、コツが如何こうと言う次元では無いような気がします。

「お待たせく。いらつしやい、　“なのは”ちゃん」

「御邪魔します、　“ずずか”ちゃん」

その後、ようやく入室を果たし、私は“ずずか”ちゃんと奥で寛いでいたアリサちゃんにも挨拶して、さて今日は何をと女子トークに花を咲かせるのでした。無論、ついで目的であるジュエルシード探索も、マルチタスクでしつかりとこなしつつ。

……

……

…

「——それで今、私と『ずずか』の両親が大規模なテーマパークを作っているんだけど、水族館とかジェットコースターも設置して、3年後を目処に開園するんだって」
「それにね、VR技術を応用したライブ会場や、アトラクションとかも作るらしいの。楽しみだよね」

「へー、何だか面白そうだね」

アリスちゃんと『ずずか』ちゃんには空返事となつて申し訳ないのですが、3年後と
いう大分先のネタバレをされた側としては、わくわく感が目減りしてしまったのと、マ
ルチタスクで処理能力を割いている影響もあつて、如何しても返事が疎かになつてしま
いがちです。

ちなみに現在は、レースゲームで熱い攻防戦を繰り広げた室内から移動して、森が見
えるテラス（月村邸周辺の森も、私有地の一部分なのだとか）でアフタヌーン・ティーと
洒落込んでいます。

テーブル上に置かれたティースタンドに載っているサンドイッチやケーキは、お母さ
んが作る物と遜色（そんしよく）が無いほどに美味しく、このレベルの物を食べれる我が家の環境は、
『ずずか』ちゃん達とはまた別の意味で恵まれているのだなと実感したところで、空気

を読まないジュエルシードが検知されてしまいました。

無ければ無い方が良かったのですが、見つけてしまった物は仕方ありません。此処は花を摘みに行くと言つて2人から離れ、結界を発動させて隔離。それから確実に――

「あつ……」

「うん？ ねえ、『すずか』……。森から光の柱がドドーンつて出てるんだけど、あそこつて何か仕掛けているの？」

「えつと……。お姉ちゃんが変な実験とかしない限り、あそこには何も無いはずなんだけど……」

如何やら、遅過ぎたようです。そして程無くして、森から姿を現したのは巨大な猫ちゃんでした。その大きさをやドルジなんて比ではなく、全高は5メートル程、全長は13メートル程でしょうか。首輪をしているので、月村邸に住まう猫の内の一匹なのかもしれません。それにしても、ジュエルシードの暴走にしては随分と可愛らしいピフォーアフターで、私も少し戸惑っています。

「もしかして、アイなの？ なんて、そんなに大きくなって……」

「『すずか』、危ないっ！」

名前に反応したのか、小走りで『すずか』ちゃんの元へと駆け寄ってくる猫。しかし

大きさが大ききなので、その1歩1歩で詰めて来る距離が凄まじく、このまま飛び込んで来るにせよ、直前で止まってじゃれつくにせよ、危険である事には変わりありません。「封時結界」

なので、後々追究されてしまうかもしれないませんが結界で2人を外側へと弾き出しつつ、「レイジングハート」をセットアップ。そして残ったのは私と、御主人を見失って困惑している猫と、「展開中の結界へと侵入して来たアンノウンが1人だけでした。

額ひたいから頬ほおへと走る傷痕が特徴的で、無感情で、金髪で、黒衣で、斧状のデバイスをこちらへと向けていて、一見すると友好的には見えないアンノウン。ですが、僅かな期待を込めて挨拶を試みる事にしました。

「初めまして。どちら様でしょうか？」

「……バルディツシユ、行くよ」

「— Yes, sir. —」

こうして、何故か金髪魔法少女バルディツシユさん（仮名）との戦闘が唐突に始まり、私はコミュニケーションの難しさを改めて実感するのです。猫が月村邸の壁で爪とぎを始める前には終わらせて、それからジユエルシードを封印した後に御茶会を再開したいところですが、果たしてどうなる事やら……？

第7話：思いと砲撃は一方通行なの

S i d e : すずか

「アイ……?」

森の方から、随分と大きくなった猫のアイが現れたと思つたら、突然消えてしまつて……。私はただ、その現象に困惑する事しか出来ませんでした。何かが起こっている。それだけは確かなのですが、では具体的に如何すれば良いのでしょうか。まるで、星の導きを見失つた航海士のような気持ちです。

「“なのは”ちゃん……?」

そして、アイと共に消えてしまつた“なのは”ちゃん。あれから屋敷の周りを探しても、部屋を全て見回つても、一向に姿が見えません。アリサちゃんに手伝つて貰つても、フアリンに手伝つて貰つても、お姉ちゃんやノエル、恭也さんと総出で探してみても見つかりません。

やはり、これは神隠しか何かなのでしようか? そんな現象など、本の中だけの出来事だと思つていたのに、まさか本当に起こるなんて……。

荒唐無稽な事であるのは重々承知しています。それでも、“なのは”ちゃんが居ない

のは事実で、帰って来てくれるかも分からないのなら、やっぱり探しにいかないと見つけれられないような気がするのです。なので森の方も探そうとしましたが、それだけは皆に止められてしまいました。もう何度も屋敷中を探し回って、まだ探しきっていないのは外だけだというのに。

ねえ、"なのは"ちゃん。今、何処に居るの……？

くく

S i d e : なのは

ネオンのように輝く金の光。それに合わせて斧が縦横無尽に風を切り裂き、黒衣の少女とツインテールが舞い踊る。その光景は素人目から見ても大変美しいのですが、距離が近過ぎるといいうのも考えものです。例えばそう、手を伸ばせば届く距離など。

「あの、休戦にしませんか？ このままだと千日手ですし……」

「―《 Round shield 》―」

先程までの光景を焼き直すかのように円形の防御魔法を展開し、これまた同じように斧による一撃を防ぎます。正面から、横から、頭上から、背後から、真下から。ありとあらゆる方向と手段で繰り出される攻撃を防いでは対話を試みていますが、今のところ成果は芳しくありません。

「戦いたくないのなら、ジュエルシールドを渡して下さい。そして——」

「Form change. Halberd form.」

「——二度と、私の前に立たないで」

少女の意思に呼応したデバイスが変形し、背丈を越すほどに柄が延長され、斧頭だけだった部分に槍頭と鉤爪が追加されたその形状は、名前の通りハルベルトそのもので、それを遠心力や、更に重厚となった魔力刃で威力を上乗せして叩き付けてくるものですから、手数は減つても脅威度は確実に増していると云えます。

「ハルベルトっ！」

「Crusher.」

そして更に厄介なのが、この近接魔法です。それは堅牢な筈のシールドに亀裂を入れる程の高威力で、このまま耐えるだけでは遅かれ早かれ突破される恐れがありました。

なので私は、対話による平和的な解決は諦め、武力による決着へと切り替える事になりました。大きくなった猫だって、何時までも凶暴にならないという保障は無いので封印しなければなりませんし、無事に戻らないとアリサちゃんや「すずか」ちゃん達を更に心配させる事になります。ですから、やると決めたからには早く終わらせなくては……。

「其方の事情は、よく分かりませんが——」

シールドをわざと爆発させてお互いを吹き飛ばし、此方を見失っている少女をサーチャーで捕捉すると、まずは速度重視のバインドで少女を簡易拘束。そして本命である強度重視のバインドで縛り上げ、砲撃魔法のチャージへと移ります。

「取り敢えず、やられた分は返しますね？」

展開される4つの環状魔法陣と、その式に従い砲弾を形作る圧縮魔力。それを見た少女は、射線から逃れるべく必死に拘束魔法を解こうとしていましたが、私はすぐさまトリガーを引き、砲撃魔法を発射しました。もつと色々言いたい事や聞きたい事がありました。フルチャージまでに5秒と掛からない仕様だったので、何かをされる前にさつさと照射する事にしたのです。

ちなみに、初めて人に向けて撃った砲撃魔法はバリアジャケットへ奇麗に直撃し、そして物の見事に粉碎&撃墜しました。そう、私は過信をし過ぎたのです。少女の薄そうなバリアジャケットでも、これくらいなら耐えてみせるだろうと。

……

……

……

「――チェック終了。魔力ダメージにより気絶しているだけのようです――」

「有り難う。レイジングハート」

「Don't worry. My master.」

あの後、気絶して地面へと墜落する少女を無事にキャッチした私は、心配もそこそこにその場へと寝かし、罪無き子猫を串刺し刑（封印魔法の仕様です）に処してジュエルシードを手早く回収。それから気絶している子猫を抱えつつ、再び少女の元へと戻って「レイジングハート」に診断してもらったのですが、どうやら命に別状は無いようで一安心しました。

それにしてもこの少女。近くでよく見ると、満身創痕そういといつて良い程にボロボロです。バリアジャケットが解除されているので私服へと戻っていますが、全身に細長い傷や打撲痕が古傷の上から更に無数に走っていて、お兄ちゃんのように刀傷や銃創が重なり合った物とは、また別のような気がします。私と同じくらいの年頃なのに、一体何があったのでしょうか？

「結局、名前も聞けず仕舞いだったけど……」

本来なら敵である以上、興味を持つべきでは無いのかもしれませんが、一度でも意識してしまうとなかなか拭い去り難く、同じ金髪のアリサちゃんを何処となく彷彿させるのも、原因の1つであるような気がします。

「ごめんね。私、そろそろ戻らないといけないから」

そして私は、後ろ髪を引かれつつもその場を後にしたのでした。それからの事はあつ

と言う間で、結界の外へと出た私は『神隠し』をされた事になっており、
「すずか」ちゃんからの熱い抱擁で絞め潰されそうになったり、アリサちゃんに涙ぐまれたり、
大体を察していたお兄ちゃんからは、労わるような視線を送られたりと色々あつて……。

何故か、お泊りをする流れになりました。

あのね、「すずか」ちゃん。明日は平日で登校日で、つまり学校がある日なんだけど、
お泊りして最低でも2泊3日くらいじゃないと楽しめないと思うの。それにね、私はお
泊りセットなんて何1つ持って来て——あ、用意してくれたんだ。しかも下着類を
含め、アメニティーもばっちりなんだね。なるほどなの。でも、流石に私の通学用鞆と
かノートは……。ふむふむ。明日、お兄ちゃんがバス停で手渡してくれる手筈に？
ふーん。じゃあ、制服は「すずか」ちゃんから借りる事になるのかな？ え、盲点だつ
ただけ採用しちゃうの？ いやその、「すずか」ちゃんが気にしないって言うのなら、
私も気にしないけど……。

くく

Side: 忍

ノエルと共に月見酒をしていると、夜であるにも拘らずかわ軽快な三連ノックを響かせて部屋に入つて来たのは、「すずか」と「なのは」ちゃんの世話を任せていたはずのフアリンであつた。一段落したら報告するようにと伝えていた為、きつとその件なのだろうと予想し、視線を向ける。

「忍お嬢様、御報告に参りました！」

「御疲れ、フアリン。「すずか」は、もう寝た？」

「いいえ。「なのは」お嬢様と一緒にベッドへ入つたまま、ずっと御話しをしているみたいですよ？」

「ふーん。何だか妬いちやうなあ……」

今宵は満月。私達が、最も不安定になるその日に限つて起きた不思議な事件。それは、「すずか」の感情を揺さ振るには十分過ぎる事件だつたけれども、幸いな事に当事者だつた「なのは」ちゃんを滞在させる事で如何にか落ち着きを取り戻し、そして今度是不安から高揚の方へと切り替わつたとの事。

災い転じて福と為すとは、まさにこの事だろう。

今までは揺らぎを不快感として認識し、眠れぬ夜を過ごして来た「すずか」もよっや漸く此

方側となったのは喜ばしいものの、私はワインで気を紛らわしているのに、
「すずか」
は気心の知れた友と存分に語り合い、満ち足りた夜を過ごしている。

何なのだろう、この格差は。そしてこの敗北感は……。

私も、恭也を引き留めれば良かったような？ —— 等と、酔いや揺らぎがハーモ

ニクスした大胆な思考が飛び出すも、何故その勇気と勢いが昼間に飛び出なかつたのか
悔いたところで後の祭り。しかしそんな事よりも、今夜ばかりは可愛い妹の成長を素直
に祝おうではないか。

「興が乗ったわ。ノエル、ワインをもう一本取って来て。フェアリンは、おつまみを追加
で」

「^{かしこ}畏まりました。忍お嬢様」

「ラジャーです。忍お嬢様！」

そして願わくば、あの子に永久なる月の加護が在らん事を。……なーんてね？

第8話：束の間の安息なの

S i d e : なのは

明くる日。私は、「わずか」ちゃんと自身の寝相の良さに感謝しつつ起床すると、フアリンさんに手伝ってもらいながら身支度をし、「わずか」ちゃんと共に優雅な朝食を済ませた後は、手ぶらで普段とは違う通学路を歩み出しました。

ちなみに「わずか」ちゃんから借りた制服なのですが、身長がほぼ同じという事もあつて問題無く着ることが出来ました。ただ、使っている洗剤が高町家の物とは違うよううで、制服から微かに香るリッチそうな匂いに意識せざるを得ず、少しだけ浮き足立つてしまいます。——そんな感じでブルジョワ感に浸っていると、先程から何かを話そうとしては躊躇い、心の準備をしていたであろう「わずか」ちゃんが漸く話を切り出してくれました。

「あのね、なのは「ちゃん。今更だけど昨日はごめんね……。急にお泊りさせちゃったり、その……、色々とね？」

色々と思ひ出したのか、気不味そうにしながらも顔を赤らめる「わずか」ちゃん。確かに、色々とありました。力強い抱き締めをされて自分に強化魔法をかけようかなと

思ったり、御風呂で丹念に洗われたり洗ってあげたり、パジャマではなくネグリジェとベビードールの二択を迫られたり、驚異的な速度でトランプのスピードを試したり、ベッドの中で睦まじく語り合ったりなど。

「少しだけ、はっちゃけているような?——と、普段よりも赤みがかつた瞳を見ながらそう思っていました、如何やらその通りだったようです。」

「気にしなくて良いよ、『すずか』ちゃん。私も楽しかったから」

魔法を知って一週間も経っていないのですが、あの日からの日々はとても忙しく、そして危険で、取り返しの付かない惨事によって気持ちが悪く落ち込んだりもしましたが、月村邸での御茶会や予定外のお泊りイベントの御蔭で、私の荒んだ心(すざ)が幾分か癒(い)されたような気がします。なので感謝こそすれ、非難する気などこれっぽっちも有りません。

「ところで、ただけ……。この制服、本当にクリーニングに出さないと返しちやつても良いの?」

「うん。私の我が儘で引き止めちやつたし、本当なら御詫びつて事でプレゼントしたいんだけど、それだと『なのは』ちゃんが困っちゃうでしょ? だから、それでお相手つて事で」

結局、「急遽(きんぐ)決まったお泊りで、下着や翌日に着る制服はどうするの?」という些細な問題は、新品の下着上下のみならず靴下もプレゼントされ、更には『すずか』ちゃんの

予備制服と指定靴も貸してもらおう事で解決しましたが、肝心な返却方法については、放課後にフアリンさんが「ずずか」ちゃんと私を車で迎えに来るので、それに乗って高町家へ移動。そこで、私が昨日着ていた服及び靴と、私が今日着ている制服と靴を交換するというのが現状のプランだったりします。

確かに、物の貸し借りや、精神的に『貸している&借りている』といった状態や認識はトラブルの元なので、早めに解消するに越した事はありませんが、私も年頃の乙女な訳でして……。靴はともかく、半日着ていた制服を洗わずに返すというのは、少しばかり気恥ずかしく思うのです。なので、如何にかならぬかなーと思つて粘つてはいますが、こつとも善意を示されては、此方が先に折れざるを得ません。

「えつと……………。それじゃ、なるべく汚さないようにして返すね」

「ずずか」ちゃんの中では、如何いった理屈でお相手なのかよく分かりませんでした。が、こうして何気に神経を使う長い一日が始まったのでした。

……………

……………

……………

「へー……………。良いことを聞いたわ」

「アリサちゃん。白い制服にネームペンは、洒落にならないと思うの」

「あら、回したくなっただけよ?」

バス停でお兄ちゃんから通学鞆を受け取り、無事登校後。習い事のため、お泊りに参加出来なかったアリサちゃんから取り調べを受けていた私ですが、制服の件を話し終えると不機嫌だったアリサちゃんの表情が一変し、につこりと満面の笑みを浮かべたかと思うと、ペンケースからおもむろに取り出したネームペンを指の間に挟み、クルクルと器用に回し始めたのでした。

明らかに、意地悪な事をしてその反応を楽しもうとする意図が感じ取れますが、ペンの蓋を取っていないので方が一の事は起こり得ませんし、この行為も陰湿と言うよりはじゃれつくような物で、そう考えると微笑ましく思えて来ます。

「何かしら、その生温かい視線は……………」

「特に何でも。ただ、上手になってるなーって思ったただけだよ?」

「ふーん……。ま、ありがと」

何時も通りの、何気ないやりとり。家族が居て、友達が居て、話し合って、笑い合っていて、そんな楽しい生活を過ごせるだけで良かったのに……。なのに如何して、こんなにも近くに在るのに、遠いと感じる様になってしまったのでしょうか?

本当に、不思議なものです。

お父さんや、お兄ちゃんやお姉ちゃんの様に、望外とはいえ誰かを守れる力が手に

入ったのは喜ばしい事です。そしてその才能があった事も。しかし魔法は、兵器のように、剣術のように、『高機能性遺伝子障害病』の人達が使える超能力のようにには認知されていない。"力"で、一昨日の事件以降に拡散された動画や、写真に対する人々や世界の反応を見ても、混沌としているのが分かります。

知つてしまえば、知られてしまえば、その結果が如何なってしまうのかは想像も付きません。ただこれ以上、荒れ狂う水面に石を投じたくはありませんし、其処から生じた波や飛沫が誰かに掛かって欲しくもないのです。だからその気持ちを通すのであれば、私は日常と非日常の境界線となり、その盾とならねばなりません。

お父さんが、誰かを守る為にそうやっていた様に。お兄ちゃんやお姉ちゃんが、そうやってる様に。少しだけの間、日常の端へと遠退く。それだけで、たったそれだけの事なのです。それだけ、なのに……………。

あれから勝手に意気消沈してしまった私は、癖となりつつある広域探索魔法でジユエ

ルシードを探しながら授業を受け、気が付けば放課後になっていました。

勿論、その間に全校集会で一昨日の事件について先生方からの御話しがあつたり、昨日出遭つた少女がジュエルシードを収集しているのを感じしたり、アリサちゃんに悩み事の探りを入れられたりと色々ありました。が、マルチタスクをしている時の会話は未だに不慣れなものもあつて、どうも話した記憶が曖昧です。

「ねえ、＼なのは＼ちゃん。今は、御話しても大丈夫かな……？」

「大丈夫だけど、如何かしたの？」

ちなみに今は、校門でアリサちゃんと別れ、＼すずか＼ちゃんと一緒にフアリンさんが運転する送迎車に乗って高町家へと向かっています。

「うん。大丈夫みたいだね……。あのね、＼なのは＼ちゃんはアリサちゃんに悩んでないよつて言っていたけど、それなら何を考えているのか教えてくれないかな？ それとも、私達じゃ駄目なの……？」

そう言われてみると、確かにそう言ったような記憶が朧気にはありますが、如何答えたものか……。悩み所です。

「んー……。ごめんね、＼すずか＼ちゃん。ただ何時かは終わるから、それまで待つて欲しいの。私から教えられるのは、それだけ」

「うん。此方こそ、無理に聞いちゃつてごめんね……」

それつきり、何となくお互い無言のまま自宅へ着いてしまいました。我が家には狭い駐車場しか無いので、「すずか」ちゃんとファリンさんには玄関前で待ってもらって、私は自室で着替えた後、畳んだ制服を手近にあつた紙袋へと入れ、二人の元へと戻りました。

「お待たせ、すずか」ちゃん。パツと見た限りだけど、特に汚れてはいなかったよ」「うん。奇麗に使ってくれてありがとう、「なのは」ちゃん。それとこれ、勝手に奇麗にしちゃったけど、昨日「なのは」ちゃんが着ていた服と靴だよ」

そう言つて手渡されたのは、何故だか高級そうなスミレ色のラッピングが施された箱でした。車内にそれらしい物は無いし、トランクにでも仕舞つてあるのかなと思つていましたが、まさかこうやって返されるとは予想もしていませんでした。途端に、手渡してしまつた紙袋を申し訳なく思つてしまいますが、それはもう後の祭りです。

「それじゃ、また明日学校でね」

「あ、うん……。バイバイ、「すずか」ちゃん。ファリンさんも有り難う御座いました」「いえいえ、お気になさらず。また何処かでお会いしましょう、「なのは」御嬢様」

そして二人を見送つた後、私は自室へと戻り、何となくベッドへとダイブしました。気恥ずかしさと、気疲れと。とにかく色々な物が押し掛かつてきて、動きたくなくなつてしまつたのです。

「心なしか、羽も元気が無いような……？」

ついでに、魔力源であるリンカーコアの具合をチェックするために、余剰魔力の塊である羽を寝そべったまま展開してみますが、若干色褪せているように感じます。

それにしても、随分と大きくなつたなと沁々思います。初めてお兄ちゃん達に見せた頃は、まだ鴉の羽くらいの大きさでしたが、今では白鳥の羽よりも大きくなつてしまつて、むしろ邪魔とすら思える程です。

「分割つて出来るのかな、これ……」

何となくやり始めたこの羽は、「レイジングハート」に頼らず感覚だけで制御しているので、その限界が何処までなのかイマイチ分かりません。ただ、身体の一部のような物ではあるし、やはり何となく出来るだろうなという根拠の無い自信でやってみたところ、あっさり羽は二対となり、サイズも相応に小さくなりました。

「これで良しつと」

このままゆつくりとしたいのですが、ジュエルシード探しや宿題等やらなくてはならない事や、やりたい事は沢山あって、のんびりと過ごす事なんてとても出来そうにありません。それに、あの少女の動向も気になるところです。嗚呼、もつと頑張らないと……。

第9話：向き合う気持ちは本気なの

Side：美由希

幼い頃から刀を手に取り、振るい続けて来たこの人生。数奇な別れと出会いを繰り返して、数々の戦いを経て守りきれた未来を享受しつつも、私と恭ちゃんとはひたすら技を磨き、己を鍛え続けました。何時か襲い来るかもしれない脅威から、大切な人達を守るために。しかし流石に――

「魔法は門外漢だよ、私達」

「うむ」

テロで親を亡くしたり、銃弾の雨を掻い潜ったり、ボディーガード中に敵を切ったりもした私達ですが、私の妹はそれらに引けを取らない数奇な人生を歩もうとしていて、姉としてはかなり心配だったりします。既にジュエルシードという物のせいで死傷者が出ており、このまま手を拱こまねいていては被害がもつと拡大するかもしれません。

「という訳で、＼ユーノ・スクライア＼先生を特別講師として御呼びしました」
「へ……？　相談があるってそういう事だったんですかっ?!」

「まあ、そういう事だ。宜しく頼む」

なので私と恭ちゃんとは、事態解決に向けてどんな協力が出来るのかを知る為に、ユーノ君に助言を求める事にしました。幸いにも切れる事は分かっているので、あとはどう立ち回って行くか。そこを上手く詰められたらなと思っています。

「家族を独りで戦わず訳にはいかんからな」

「私も、恭ちゃんと同じく」

戦いとは無縁だったあの子が、あんなにも頑張っているのです。代わる事が出来ないのなら、せめて支えてあげたい。それが、私と恭ちゃんの偽らざる思いでした。

（（

S i d e : なのは

私が学校へ行っている間、ジュエルシードがありそうな候補地をスクライアさんが主体となって絞り込み、放課後はその候補地へと赴いてジュエルシードを探索&回収。最近では、この方法で成果を上げつつありましたが、今日は珍しいことに空振りばかりです。

と言うのもそれは、月村邸で出遭ったあの少女が日中に回収しているからであって、義務教育で学校に拘束されている私や、単独での封印に難があるスクライアさんでは、その後塵を拝することしか出来ないのは当然の帰結ではあります……。

さて。

ジュエルシードという地雷が放つ、微弱な固有魔力波を頼りに探するのが広域探索魔法で、地雷探知機のように特殊な魔力波を放出し、返って来た反応で場所を特定する私の魔法を探知魔法とするならば、ありそうな場所に魔力流を落として強制発動させる少女の凶行は、何と形容すれば良いのでしょうか？

火遊び？ それとも自分で発動させて封印するので、マッチポンプ？——どちらにせよ、安全性を考慮しない危険な方法だとは思いますが。

「取り敢えず、封時結界を……」

被害局限化のために結界を展開しつつ、そのついでに少女を外側へ弾こうとしましたが、難なく入られてしまいました。そして発動するジュエルシード。どうやら向こうは是が非でも回収する気のように、既に臨戦態勢です。

私としては無用な争いは避けたいところですし、悪用せずに地球から持ち去ってくれるのならスクライアさんには悪いのですが、それとなく手伝うのも吝かではありません。しかし悪用をしないという確証が無い今、この場には私と危険物と危険人物のみで、平和と安全のためにも看過する訳にはいきません。

とにかく、まずは危険物に対処すべく《Divine Buster》を照射。向こうも同様の選択をしたようで、お互いの封印砲が励起状態のジュエルシードへと突き刺さり、数秒とかならずあつかりと封印状態へと戻りました。あとは、危険人物が残るのみです。

「昨日振りですね」

「……また、私の邪魔をするんですか？」

「それは貴女次第、かな……？」

嫌悪、警戒、畏怖。どちらとも取れる返事でしたが、初めて出遭った時と比べてみると会話に応じてくれたのは良い兆候のように思えます。

「私は、ジュエルシードを回収して管理局へ預けたいという理由で動いているんだけど、貴女の行動は、その理由に沿うものなんですか？」

「……………いいえ。違います」

長い沈黙の後。やっと出て来たのは、か細い否定の声でした。それはつまり、警察と軍隊と裁判所を兼ね備えたような組織に反する、真つ当な理由ではないという自白に他なりません。

「そうなんだ……。じゃあ、邪魔させてもらうね」

一触即発の空気——ではありましたが、私は構えを解いてジュエルシードに被弾

防止の為の防御結界《Round guarder》を展開し、そして少女が呆気に取られている内に然り気無くバインドも仕掛けてみたところ、何故か緊急回避されてしまいました。勘付いたのか、それとも対策によって感知したのか。どちらにせよ、一筋縄ではいかなかったようです。

「―《Photon lancer》―」

「―《Divine shooter》―」

応戦と、それに対する応酬の数々。こうして、戦いは激化の一途を辿るのでした。

（（

Side: ■■■

”このままではジリ貧である”と思考は訴えるものの、空を埋め尽くすように設置された拘束魔法の層は厚く、幾ら何でもバインド破壊効果を付与した魔力刃だけで簡単に切り抜かれるとは思えないし、隙を見せればあの白い魔導師が直接バインドを仕掛けて来る始末。おそらく、バルディツシュにインストールしたばかりのバインド検知機能の警告音は、鳴り止むこと無く響き続けているのだらうと容易に想像することが出来た。

「全く、なんて恐ろしい子なんだい……」

思わず、ぼやいてしまう。これだけの圧を掛けているにも拘らず、未だに攻撃が一つ

も通らず、更には魔力消費による疲れすら見せない。その際限の無さを目の当たりにし、フェイトがどれほど「時間稼ぎ」が出来るのか、そして私はその時間で指示を成し遂げられるのか不安が過ぎるものの、もうこう為ってしまつては最善を尽くすのみで、あとはタイミングを見計らつて飛び出すしか――

く

Side：なのは

近距離戦を諦めたのか、それとも何かを企んでいるのか。バインドの機雷原を遠巻きにしつつ中距離戦へと切り替えた少女に対応すべく、私も拘束魔法から射撃魔法主体の戦い方へと切り替えることにしました。

用いる弾種は近接信管機能付きの炸裂誘導弾と、ただの誘導弾。それを上手く織り交ぜ、少女を目標としてひたすら追わせているのですが、巧みな空戦機動と精確な迎撃により決定打を欠き、早くも根競べの様相を呈ていしてきました。一応、近接信管機能による近距離炸裂でダメージを与えているはずなのですが、少女は尚も力強く飛び続け、何時でも高速移動魔法による強襲が可能な位置を取り続けています。

嫌らしくもあり、参考にもなり。これがゲームであれば感嘆するだけで済みますが、残念ながらこれは現実で、私は痛む良心を押し殺して冷徹に対処し続けるしかありません

んでした。

「もう、諦めたらどうですか？」

そして炸裂誘導弾と誘導弾だけでなく、高速散弾も射かけるようになってどれ程の間が経ったのでしょうか。彼の少女はよく避け、よく耐え、満身創痍だというのに未だに宙へと佇んでいる。その不退転の覚悟は立派ではありますが、ジュエルシードはまだ何処かに多数落ちていますし、此処にある一つに執着して疲労や負傷したりするのは如何いなものかと。——そう思ってしまうのです。

「—《Blitz action》—」

幾度目となる単調な強襲。高速移動魔法で死角へ飛び込んで来るものの、攻撃の瞬間には加速が途切れるので、その凶刃は実のところあまり速くはありません。

「—《Flash move》—」

こちらも同様に幾度目かの回避行動を取り、バインドを仕掛けるという作業を焼き直しのように行いますが、今までは高速移動魔法で回避され、更に切り込んで来るなり離脱するなりしていたのに、魔力が底を突き始めたのか飛行魔法だけで離脱しようとしていた為、今度はあつさりとと捕まえることが出来ました。簡単に抜け出せぬよう、十重二十重とバインドを重ねつつ、砲撃魔法のチャージへと移ります。

「降参か敗北か。どちらか選んで下さい」

「くっ……」

前者には慈悲を。後者には《Divine buster》を。そういった暗喩をしてみたのですが悲しいかな、上手く伝わらなかったようです。未だに抵抗の意思を見せるあたり、何がそこまで駆り立てるのか疑問ではありますが、考えるのは終わってからも遅くはないと判断し、躊躇いがちにトリガーを引こうとしたその瞬間、思わぬ横槍が入ってしまいました。

「フエイトを離せ！」

そう言つて襲い掛かつて来たのは、私と同じくらいの背格好をした赤毛の少女でした。言動から察するに、彼の少女ことフエイトさんの仲間だと思ふのですが、砲撃魔法のチャージ中に来られては、まともな対応など出来るはずがありません。ですので、回避がてら赤毛の少女をバインドで拘束し、二人が射線上へ重なるように移動した後、そのまま《Divine buster》で二枚抜きをさせてもらいました。

「これで終わり、なのかな……?」

辺りに響くのは、「レイジングハート」による圧縮魔力残滓の排出音のみで、魔力ダメージで気絶して墜落した二人をキャッチした音が微かに聞こえたような気もしましたが、それぐらい静かなものでした。一応、周囲をサーチャーで探ってみますが特にこれといった反応は無く、未知なるステルス魔法でも使われていない限り、脅威は排除さ

れたと見て良いように思えました。

「一先ずお疲れ様。レイジングハート」

「— No problem. My master. —」

そしてジュエルシードを回収し、これにて一件落着。しかしまだ、フェイトさんと赤毛の少女の処遇を決めるといふ問題が残っています。選択肢としては、対話か放置か監禁かのどちらかになるでしょうけれども、取り敢えずそれは休憩を挟んでから決めたいと思います。長時間に渡る魔力行使と、慣れぬ戦闘。それによつて肉体も精神も疲労しては、良い考えなど浮かばないでしょうから。

第10話：コミュニケーションは大事!なの

Side：フエイト

「――、目覚――な?」

あ……、れ? なんで私、寝ているんだろう……?

「うーん……。まだ、完全覚――はいかな――だね」

確か、白い魔導師と戦っていたら、あの子が……。アルフが私を助けるために飛び出してくれたんだけど、捕まっちゃって。それから――

「――、レイジン――。覚醒魔法とかあったり――?」

「―― Sorry. ―――」

それから、纏めて撃ち落とされてしまったんだ。

「ア……ルフ……。何処……。?」

「それはもしかして、このワンちゃんの事かな?」

くく

Side：なのは

初めに掛けるべき言葉は、「お早う御座います」か「こんばんは」か。話す切っ掛けとして、少しでも印象を良くしたいと思つてあれこれ考えていましたが徒労に終わり、何だかよく分からない方向へと転がっていききました。

ちなみに何故か、赤毛の少女が赤毛の子犬になつていたりしますが、〔レイジングハー ト〕曰く彼女は「使い魔」というモノらしく、元である動物形態と人間形態のどちらにでも変身可能との事で、如何やら向こうの世界では珍しくもないようです。今は魔力ダメージが深刻なので、治癒効果のある結界の中に入れて様子を見ていますが、未だに目覚める気配はありません。

「アルフ……痛っ……!」

「無理をしない方が良いと思います。貴女も、結構ボロボロですから」

我ながら、白々しい台詞だと思えます。そうしておきながら、フェイトさんには何ら手当てもしなかったのですから。しかし、回復させたが為に第二回戦開始という最悪な事態は回避出来るので、これはこれでお互いの為となります。

「あ、自己紹介がまだでしたよね。私の名前は「高町なのは」です。この国では姓が名の前に来るので、「高町さん」とでも呼んで下さい」

「……………」

「ちなみに無言を貫いた場合、仮称として「バルディッシュちゃん」と呼ぼうと思うの

ですが、如何でしょうか?」

「……………「フェイト」です。姓はありません」

「では、「フェイトさん」と呼ばせてもらいますね」

身体を起こすだけでも辛いはずのフェイトさんに視線を合わす為、1m程の距離を置いて私もぺたんとして座り込みました。ビルの屋上という決して奇麗では無い場所ですが、未だにバリアジャケットを着ているので汚れる心配はありません。

「少し、御話ししませんか?」

「敵に話すことなんてありません」

「話すことで、お互いに協力出来るかもしれないのですか?」

「えっ……………」

フェイトさんのジュエルシード回収方法には幾つか不満はありますが、「回収」地球からジュエルシードの脅威を排除する」という視点から見れば、私が一人でするよりはフェイトさんとの二人態勢が望ましいと思うのです。

それにフェイトさんの回収目的は不明ですが、悪用するにせよ、しないにせよ。締め上げてまで奪おうとは現時点では思えませんし、その辺りの交渉ないし実力行使は管理局にお任せするという算段を付けて、一時保留としています。

「実は私、この世界からジュエルシードを持ち去ってくれるのなら、それはフェイトさん

でも管理局でも構わないと思っっているんです」

ですが今のところ、どちらも信用ならないので半分ずつくらい持つてくると、保険という意味では有り難かったりします。

「……なら何故、私の邪魔をしたんですか？」

「それは勿論、フェイトさんが敵だからです」

そもそも昨日の出来事を鑑みて、一戦も交えずに事が進むとは到底思えなかったのです。魔法には非殺傷設定があるとはいえ、躊躇ちゆうちよ無く人へ切りかかれるフェイトさんの思考を常識的に推し量ることなど無理なので、今回は何かされる前に此方から一戦を仕掛けた。———というのが本当の経緯だったりします。結果としてはこれで良かったのかなとは思いますが、野蛮かつ性急過ぎたことは否めません。

「なので、もし良ければ一時休戦して手を結びませんか？ 多分、その方が集めるのは早いと思うんです」

「お断りします。私にも、目的がありますので」

嗚呼ああ、やはり。しかしながら、これでフェイトさんがジュエルシードを1個でも多く集めようとしているのは分かったので、今後とも何度か衝突が起こりそうだなーと思うと、憂うれき憂うれき〴〵してしまいます。

「分かりました。それでは、最後に1つだけ聞かせて下さい」

「何でしょうか……?」

「自己申告で構いませんので、ジュエルシードを幾つ回収したか教えて頂きますか?
ちなみに、私は8つです」

「……………4つ」

「なるほど……。情報提供、有り難う御座います」

フェイトさんの言葉を信じるならば、ジュエルシードは残り9個。それは朗報でもあり、悲報でもあり。回収作業は思ったよりも進んでいるようですが、最後の1個まで気が抜けない事には変わりなく、私の夜廻りはもう暫く続くみたいです。グッバイ安眠、ウエルカム寝不足。

「左様ならば、これにて——」

失礼します。と続けて自宅へ直帰しようとしたのですが、フェイトさんが何か言いたげでしたので待つ事に。

「……………ミス高町」

「えつと……。はい、何でしょうかフェイトさん?」

「ミス高町」という斬新な呼称のせいか、一瞬反応が遅れてしまいました。敬称の違いなどは、適当に「さん」付けとなるように和訳してしまえば良い気もしますが、「レイジングハート」がそんな風に自動翻訳するという事は、それなりに格式張った表現なの

かもしれません。

「次に会った時は、叩き切ってみせます」

その口から紡がれたのは、短くも固い決意の言葉。そして、敵意の籠もった視線を向けられた私は返事をする事無く、静かにその場を後にしました。だつてそうでもしなければ、堪えきれなかつたのです。ああ言つてみせたフェイトさんを前にして、笑みを浮かべてしまう”。

なんて事は流石に失礼だと思つたので、この様にただ去ることしか出来ませんでした。初めは、髪の色や体躯が似ているだけだと思つていたのに、敵として戦い、そんな眼差しを向けられてしまつては、如何しても想起せざるを得ません。

かつて、アリサちゃんと喧嘩した日の事を。

性格や言動などは全く似ていませんが、私を明確に敵視する雰囲気は何となく似ていて、私やアリサちゃんや”すずか”ちゃんは、その喧嘩が切つ掛けとなつて繋がる事が出来ました。だからフェイトさんとも、そういつた可能性が有るのではないか？ と言う妄想が止め処なく溢れて……。

しかしそれは、おそらく勘違いなのでしょう。もしかしなくても、思い上がりです。

喧嘩をして、それから仲良くなった過去があるからといって、戦闘をして友達になれる未来が有るのか如何かは分かりません。ただ、もつと話してみたいと思う気持ちは本物なので、フェイトさんには今後もアプローチをしていきたい所存です。

「それなら、もつと邪魔をしないとだね」

フェイトさん目線ではそうするしかないのが心苦しいのですが、なるべく嫌味にならないように気を付けなくてははいけません。脳裏にちらつく、『悪因悪果』の4文字。それだけは避けないと……。

（ ）

Side：アリサ

「む……。また圏外なの?」

海の上から山の奥まで電波が通じるこの御時勢、〃なのは〃の携帯電話に繋がらないとは如何いう事なのか。もしかしたら、また神隠しに遭って物理的に圏外というオチなのかもしれないけれど、残念ながら其れは笑えないジョークである。

「一体何をしているんだか……」

用が無くなった携帯電話をサイドテーブルに置き、ベッドの縁へと腰を下ろす。はあ……。何だか最近、変な事ばかりでうんざりしてしまう。

例えば、この町で変な事件が起きるようになってからは、“なのは”の様子も段々と変になって来て。そして昨日はトドメとばかりに、巨大になった猫と“なのは”の神隠し騒動。あまりにも非科学的で、非現実的なことは信じたくないけれども、何か接点でもあるのかと勘繰ってしまいそうになる。

別にそれは、“なのは”に裏があつて怪しいとかいう事ではなくて、何か得体の知れない事象にでも巻き込まれているんじゃないか？ という心配なんだけれども、昨日の平然としていた表情を思い出すと案外平気そうにも思えてきて、じゃあこの不安だか不満だか分からない感情を何処に投げつければ良いのやら。

「んー……………。寝よ」

話したい相手が電話に出ないなら解決の仕様が無いし、“すずか”や誰かに愚痴つても仕方が無く、かと言ってゲームや読書もする気分ではない。そういった経緯も有り、私は『ふて寝』を執行すべく、いそいそと準備に取り掛かるのであった。

第11話：変わる時なの

S i d e : なのは

激戦と対話を経て帰宅後。リビングを横切り、自室へ向かおうとした時の事です。何かそこではフェレットと男女が手を繋ぎ、ミステリーサークルを形成しているという摩訶不思議な光景が広がっていました。要するに、スクライアさんとお兄ちゃんとお姉ちゃんが円陣を組み、魔力を循環させているようでした。

気にはなりませんが、宿題と寝支度を手早く済ませたかったのと、邪魔をしては悪いと思ったのでスルーして翌日。朝食後にお兄ちゃんに訊ねたところ、ひよんな事から魔法を体感してみようという話になり、ああなつたのだとか。ちなみに結果は、お兄ちゃんもお姉ちゃんも魔法の才能はからつきしだったようです。

「まあ、しかし……。強化魔法とやらを掛けて貰えば、何とかかなりそうだ。とは踏んでいるがな」

「何とかって、ナニを？」

「今まで、＼なのは＼が学校へ行っている間は、ジュエルシードの回収が出来なかっただろう？」

「うん。そうだね」

だからこそ、その時間帯はフェイトさんに御願いで未探索地域で探索して貰いたかったのですが断られてしまいましたし、いざとなれば休学届けを出して探索かなーと考えていたところです。

「そこで、だ。俺と美由希とユーノ君でチームを組み、その時間帯での回収に当たろうと思っっているんだが……。許してくれるか、なのは？」

「許す、許さないで済む話であれば、本当は許したくありません。幾ら強くて速くても、バリアジャケットという防御機構の恩恵を受けられないお兄ちゃん達に万が一があつては、とても悲しくなつてしまいます。」

しかし、お兄ちゃん達が振るう剣——御神の剣は、誰かを守るための“力”である事も私はよく知っています。そしてその事に、どれだけ真摯なかも。きつと、年端も行かない私に危険な事を一任させたくはないのでしよう。もしかしたら、ある種の責任の発露なのかもしれません。なればこそ、互いの思いやりに折り合いを付けなくては……。

「1つだけ、約束してくれたら許しても良いよ？」

「聞こう」

「夕食までにはちゃんと帰って来る事」

“ちゃんと”に言外の意味を込めつつ視線を向けると、お兄ちゃんはしばらく言葉を詰まらせていましたが、「……努力はする」という前向きな回答を以って許してあげる事にしました。

「それじゃ、頑張つてね。お兄ちゃん」

「ああ」

そんな感じでシリアスチックな一時を過ごした後、本日の特製弁当（晶ちゃん作）を通学鞆に仕舞つていざ登校。そして何時ものように通学バスに乗り込みましたが、ここでは何故か御機嫌斜めなアリサちゃんが待ち構えており、私への電話が頻繁に繋がらないという指摘に始まり、溜め込んでいたであろう心配とも苦言とも付かない言葉を次々とぶつけて来ましたが、私はそれには反論せず、ただ甘んじて受け止め続けました。

アリサちゃんは此方の事情なんて知りようがありませんし、知つて欲しいとも思いませんので、此方の事情を知りもせず心配したり怒ったりしてもそれは仕方無く、私としては申し訳無く思うのが精一杯の対応となります。

「ねえ、黙つてばかりじゃなくて何か言い返しなさいよ！」

「言い返すも何も、心配してくれて有り難う。としか——」

「違う！ そうじゃなくて……」

珍しく見せた逡巡。しかしそれでも、ちゃんと言葉にして伝えてくれました。

「そんなに、教えたくない事なの……?」

ええ、はい。その通りです。だからこそ、それすらも答えたくありません。

「じゃあ教えたなら、アリサちゃんは私になつてくれるの?」

「それは——」

「私は、アリサちゃんになれるのかな? ねえ、*“なのは”*。そこんとこ、如何思う?」

見る見ると表情を暗くするアリサちゃん。世の中には、こんなにも良心が痛むことを平然とする人も居るらしいのですが、一体どれだけの罪業を重ねれば出来るのでしょうか。私は今直ぐにでも、自分の喉元を貫いてやりたい気分です。

「*“なのは”* ちゃん。止めようよ……」

そして珍しく*“すずか”* ちゃんに引き止められてしまった私は、相好を崩すことで誤魔化してみました。が、上手く笑えてなかったでしょう。結局、重苦しい空気のまま学校へと到着し、そのまま朝の会が開始される事態となつてしまいました。お陰で本日の教室は、水を打った様にとても静かです。

嫌な言い方をして、嫌な子になつて。少しばかりの後悔はあれど、きつとこれで良かったのだと思います。だって実状を知つてしまえば不安しか抱けない筈ですし、それは今まで、ボディガードの仕事で出掛けるお兄ちゃん達を見送つていた側として、ほぼ確信しています。

知らずに済むなら、それで良い。今まで通りで居てくれるなら、それが良い。

かつてお父さんが、身体中に付いている傷の説明を騙ったように、仕事について曖昧にぼかしたように。そのまま、そうあつて欲しい。———そう思う事が、守りた
いつて事なのかな？ と叙情的に思考を脱線させつつ、私は今日もまた並列思考を開始するのでした。

………

………

………

そして昼休み。捨てられた子犬の様にしょんぼりしているアリサちゃんを見かねた私は、これでもかとスキンシップ——俗に言う“わしゃわしゃ”——を敢行し、ついでに髪を乱した代わりに、私が髪留めに使っていたリボンでツイントールにしてみましたころ、フェイトさんの2Pカラーが思った以上の精度で出来てしまいました。

ただ結果として、アリサちゃんの機嫌は直ったものかなり恥ずかしかったようで、今度は頬を紅潮させたままOKANMURI状態へと移行。

そして放課後になってもそれは尾を引いており、そのままツイントールの状態で“すずか”ちゃんと一緒にバイオリンのレッスンへと行ってしまいました。要するに、借りパクというやつです。そんなこんなで、久々に髪を下ろした状態で通学バスに揺られ帰

宅した私ですが、玄関にある姿見に映った自分を見て、そういう髪を切るつもりだったなど、ふんわり思い出しました。

それから直ぐに、折角なので切ってしまったおもうと思い立ち、音がするキッチンの方へと向かう事にしました。勿論それは、キッチンを使っているであろうレンちゃんや晶ちゃんを理容師としてスカウトする為で、節約を美德とする我が高町家では、割と普通の御願いでもあつたりします。

「ただいまー、お姉ちゃん。晶ちゃん」

「お帰り、＼なのは＼。如何したの、髪なんか下ろして……？」

「お帰り、＼なのは＼ちゃん。何かあつたのか？」

予想は半分外れで、キッチンに居たのはお姉ちゃんと晶ちゃんの二人でした。そして後者は夕食の準備中なので、依頼は論外。となると、料理人としては戦力外のお姉ちゃんに頼むのが筋というモノです。

「えーと……。実は髪を切つて貰いたくて、お姉ちゃんに御願いしに来たの」
かなり前略したものの、嘘ではありません。

「おつけー。それじゃ、準備はしといてね」

「はい。……あつ、晶ちゃん。弁当美味しかったよ」

「へへっ、あたぼうよ！」

空の弁当箱を晶ちゃんに渡した後、自室に戻って荷物を置き、そして着替え一式を持って1階の洗面所へと移動し、セツトアップ。暫くしてお姉ちゃんがやって来ましたが、何時も以上にぎっくりと切る事を知った時の表情はまるで慈母の如しで、きつと変な方向に勘違いしているんだろうなーと無視しつつ、私はじつと鏡の中の私を見守り続けるのでした。

— — — — — カット — — — — —

さて。レンちゃん並みのミディアムまで髪を切り、洗髪がてら身体も洗って、拭いて、着て、乾かし。最終確認として細かい調整をして貰っていますが、見慣れたはずの湯上り後の髪型がこうも短くなると、新鮮さよりもまず違和感を感じてしまいます。目の前に居る少女は、一体何処の誰なのでしょう？ フーアユー？ フーアムアイ？

「二応、レンちゃんを参考にして切ってみましたけど、こんなもん……かな？」

「有り難う、お姉ちゃん」

「どう致しまして。髪質が違うから結構アレンジしたけど、〃なのは〃的にはどう？」

「似合っているとは思いますが、見慣れないせいかどうも違和感が……」

「だよね……。まあ、〃なのは〃は可愛いから、その内しつくり来るよ。きつと」

そんなよく分からないお墨付きを貰い、これにてカット終了。正直、かつて懸念したように特徴的なツインテールが無くなってしまったので地味な印象を受けますが、その代わりに中性的な格好良さが加わり——どうなるのでしょうか？　よく分かりません。

「じゃあ、片付けたらお披露目タイムといこっか」

「それはちよつと大仰のような……」

「でも、遅かれ早かれなんじゃないかな？」

「うん。まあ、そうなんだけどね」

諦観したのも束の間。この後、何故かリビングに家族全員が揃っていたのを見て、私はお姉ちゃんに謀たほかられた事を察するのです。今度機会があれば、お姉ちゃんの三つ編みをつインテールにしてあげようと思います。

第12話：来たる第三勢力なの

S i d e : なのは

「お兄ちゃん。私、そろそろ出掛けるね」

ただ髪を切るだけの筈が、お披露目からのプチ撮影会というよく分からないイベントを経た後に夕食を済ませ、時刻は19時半を過ぎた頃。

何故か戻って来ていたお母さんは、放り出して来た翌日の仕込みをするために『翠屋』へとトンボ帰りしちやいました。お兄ちゃんは御風呂の順番待ちをしているようでソファアに座って黄昏ておりました。ちなみに私はと言うと、何時ものように深夜徘徊へと出掛けるので、その旨を誰かに伝えようと彷徨っていたところでした。

「相分かった。大丈夫だとは思いますが、あまり無茶はするなよ?」

「はい。行つて来ます」

「ああ、行つてらっしゃい。なのは」

お兄ちゃんに送り出されつつバリアジャケットを身に纏い、庭先から目的地付近の上空まで転移魔法でひとつ跳び。それから飛行魔法で距離を詰めつつ――

「フォトンランサー!」

「ステインガールレイ！」

そして何故か、戦闘をしているフェイトさんと誰かさんからは距離を置いて、こつそりと探索を開始するのでした。

………

………

………

探索と観戦を始めて、10分程経った頃でしょうか。存在は感じ取っているのですが、相変わらずジュエルシードは見つかりませんし、戦闘も終わる様子を見せません。

尤も、魔法が乱発されている傍で微かな魔力反応を探るのは難しく、そして戦闘もフェイトさんが優勢とはいえ、相手も手堅く戦っているようなので決着の見通しは立たずといったところで、なればこそ戦闘を終了させた方が探索が捗るという事ぐらいは指摘されるまでもなく察しています。

しかし、分かっているにもかかわらず先してまでしたくはありません。

仲裁をしようにも、私は中立とも第三者とも言える立場ではないですし、肩入れをしようにもフェイトさんに対して否やはありませんが、謎の魔導師を敵に回して良いのか判断が付きかねます。もし仮に、噂に聞く管理局であるならば、長いものには巻かれる”と古来より日本では伝わっておりまして、それはもう決定的にフェイトさんと敵対す

る事になります。

なので私的には、さっさとジュエルシードを回収して何事も無かったかのようになりたいのですが、その肝心なジュエルシードが見つからないので、退くにも退けません。それでも根気良く探し、探して、飛び回り……。それから漸く見つけましたが一足遅く、フェイトさんと別行動をしていたであろうアルフさんによつて先に確保されてしまいました。

但し、今なら射線は通っているので、長距離砲撃で撃ち落とすという選択肢もありましたが、果たしてそこまでして得る物なのかと逡巡した結果、敢えて何もせず見送る事になりました。ついでにフェイトさんの離脱を見届けた後、此方も転移魔法でその場を離脱。結局、この日はお兄ちゃん達や私も成果ゼロという結果で、珍しく平穩(?)なままで一日を終えました。

そして翌朝。髪を切った事による一騒動が通学バス車内で勃発しかねましたが、何とか事態を收拾する事に成功した私は、今日も今日とて真面目に授業を受け、それと並行して魔法であれこれしていました。

例えば、「レイジングハート」のシミュレーター機能で戦闘訓練をやったり。はたまたは、スクライアさんと念話で遣り取りをし、ジュエルシードの探索状況やお兄ちゃんやお姉ちゃんの様子を聞いたりなど、とにかく色々です。

正直な話、清く正しく真面目とは言い難いこの並列思考の乱用っぷりではあります。が、ちゃんと授業内容は理解していますし、受け答えやノートへの書き写しも不足無く。更に自己弁護するならば、集中しなければどっち付かずとなるだけのなので、一応のところは真面目と言つても良いのでは？　と思考してみたりする次第でありますれば。

……あれ？　少し、記憶が飛んだような気も……？　いやいやまさか、そんな事は……。いえ、『然もありなん』なのでしようか？

「ねえ、＼なのは＼ちゃん。そろそろ屋上へ行かないと、アリサちゃん待ち草臥くたびれちゃうよ？」

「あつ……。ごめんね、＼すずか＼ちゃん。直ぐに準備するから」
「うん。待つてるね」

気付けば、時刻は正午。即ち、昼食とお昼休みの時間です。教科書と筆記用具を机の中に仕舞い込み、通学鞆からロッカーに移していた弁当を回収。その後、＼すずか＼ちゃんと一緒に屋上へと移動します。

ちなみに、屋上は見晴らしの良さから当然のように人気が高く、特に食事時となるとベンチの使用権を巡る何らかの駆け引きが発生しがちですが、アリサちゃんや＼すずか＼ちゃんに関しては例外的に大丈夫だったりします。

『バニングス』と『月村』。どちらもその名を冠した大企業が有名ですし、ただの同姓

だとしても「触らぬ神に祟り無し」を信条とする日本人が好んで触れる筈も無く……。結果として、この小学校内であれば自然と人波が割れ、転じて場所取りが容易なのです。有名税という言葉もありますが、こういう時は便利で羨ましいなと思います。

そして今回も予想通り、屋上へ上がるとアリサちゃんの座っているベンチの周辺だけがぼつかりと空いていて、私と「ずずか」ちゃんは其処へ相席すべくコンタクトを試みる事にしました。

「お待たせ、アリサちゃん」

「ふーん……………で？」

しかし待たせ過ぎたようで、アリサちゃんは大層ご立腹の様子。どうやら食事の前に、この立ち込める不機嫌オーラを霧散させないといけないみたいです。

「遅参の段、御免なれ」

「現代語訳」

「遅れて来て御免なさい」

「もう一押しね」

「えっ……？　もしかして、アリサちゃんの靴を舐めないと駄目なの……？」

「如何してそういう突飛な発想になるのよっ?!」

「何となく、最終的にそうして欲しいのかなと」

「そんなフェティシズムとか持つてないから！ あー、全くもう……。許してあげるから食事にしませよ。良いわね？」

このままでは、『高飛車サディスト御嬢様』のレットルが貼られると危惧したのか、会話は一旦打ち切りとなつてしまいました。——ずっと、こんな風に穏やかで楽しい日々を過ごせるだけで良かったのですが、我が身の如何なる宿運が魔法少女ならしめたのやら……。とてもかなり極めて不思議です。

それから恙^{つつが}無く午後を過ごし、時は放課後。

私は、帰りの会が終わるや否や最速で席を立ち、風のように教室を後にして屋上へと向かいました。身体強化をしたお陰か屋上にはまだ誰も訪れておらず、人目はありません。しかし念には念を入れて、結界を展開してから「レイジングハート」をセットアップ。バリアジャケツトを身に纏い、座標設定を行いつつ転移魔法を発動させます。

何故、こうも急いでいるのか？

その理由は、お兄ちゃん達が現在進行形でジュエルシードの異相体と交戦しており、今直ぐ向かえば支援が出来るかと踏んだからです。尤も、その配慮が無用であつた事を知るのも直ぐではありませんが。

「何となく察しは付いていたけど、鬼に金棒ってこういう事なのかな……?」

あまり鍛えていない私でも、身体強化の補助魔法を使えば一流の短距離走選手くらいの速度は軽々と出せます。つまり、その域を越えている御神の剣士を強化してしまうと、それは当然のように凄まじい事になってしまいます。

現に二対四刀の斬撃は音を置き去り、それを振るう様子や走る姿も全てが残像で、竜巻もスクやといった様子です。ただそれでも、御神流を最強たらしめる歩法——『神速』よりは遅く、更にその先にある奥義の『閃』に遠く及ばないあたり、人体の神秘を感じずにはいられません。

尚、お兄ちゃん達に同行していた筈のスクライアさんはと言うと、やや離れた場所から拘束魔法やら補助魔法で二人の戦闘を適宜支援しており、今のところ卒倒する気配は無いように見受けられました。

「今だユーノー！」

「はいっ! 『妙なる響き、光となれ——』」

そして解体が一段落したところでスクライアさんが封印処理をし、戦闘終了。終始羽ばたけずにいた鳥型異相体は、さぞや無念だった事でしょう。

それはさておき。お兄ちゃんとお姉ちゃん、スクライアさんは合流後に互いの健闘を称える等、意気軒昂けんこうにして士気上々といった感じで、一人だけ蚊帳の外の私としまして

は少々羨ましい光景です。基本的に妹として可愛がられる事はあっても、仲間として称え合うなんて事は日常の中では滅多に起こり得ないのですから、尚更そう思ってしまうます。

取り敢えず、このまま去るのも虚しいので、挨拶がてらジュエルシードを「レイジングハート」に格納し、それから帰ろうかなと思つた矢先に転移反応を感知。すぐさま砲撃態勢へと移行し、あとはトリガーを引くだけで何時でも直射砲を撃てるように準備します。お兄ちゃん達もそれぞれ臨戦態勢を取る中、転移して来たのはフェイトさんと戦っていたあの魔導師の少年でした。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウン」だ。君達を調査事案の関係者と見込んで、幾つか質問をさせてもらいたい。宜しいか？」

如何やら、昨日の予想は予想通りだったようです。これでフェイトさんとは、完全に敵対ルートとなつてしまいます。『時空管理局』——それは、ジュエルシードに対する問題解決の光明でもあり、喜ばしい訪れの筈なのに如何してこうも……。

第13話：淡紅色が照らすモノ【前編】

Side :なの

「何と言うか、君達は随分と無茶苦茶だな……」

互いの自己紹介と簡単な情報交換を幾つか経た後、クロノさんはその様に総括してくれました。確かに向こうからしてみれば、スクライアさんを除く初心者魔導師と非魔導師の3人が、超危険物であるジュエルシードを積極的に回収している光景は、さながら狂気の沙汰にしか見えないのでしょうか。私も正直そう思います。

「本当は未登録で魔導師をやったり、魔法が絡む戦闘に非魔導師が介入するのは宜しくないのだが……、事情が事情だ。そもそも君達は被害者でもあるのに、よくぞ行動してくれたと賞賛されるべき立場であって——」

「つまり？」

「お咎め無し、が妥当だと思われる」

その名裁きにはっとしたのも束の間、そもそも日本国が認知していない筈の武装勢力が振りかざす法など、有って無いような物なのでは？ という疑問が新たに浮かびましたが、私はそれを心の奥底へ沈める事にしました。続けるにせよ断つにせよ、関係は良

好でありたいですし、話をややこしくしたところで益も無し。なればこそ、クロノさんが言う様に「お咎め無し」が妥当だと思ふのです。

「有り難う御座います。ところで、私達はこれから如何すれば良いのでしょうか？」

未登録魔導師も非魔導師の介入もアウトであるならば、回収済みのジュエルシードを管理局に引き渡したら、其処でお役御免となりそうな物ですが……。

「それについては、艦長自ら説明をなさるとの事だ」

「> 初めまして皆様。時空管理局提督、そして次元巡航船『アースラ』の艦長、リ
ンデイ・ハラオウン」と申します。どうぞよしなに <

微細な魔力反応。それと共に空中表示された画面の中に映っていたのは、SFチックな制服を身に纏う妙齡の女性でした。クロノさんと同じ姓、という事は親族の方なのでしょうか？ 何処となく、私のお母さんと共通点が多そうなのですが、それだけに差異の部分の際立ってしまい、違和感が苦手意識へと変わるのに然程時間を要しませんでした。

「> さて、それでは手短かに……。本来、この様なロストログアの調査・回収については専門チームを立ち上げ、慎重に執り行うのが常ではありますが、本案件は緊急性が高いと判断し、即応対処をする事にしました。つきましては、本局から増援部隊が到着するまでの間、貴女方には調査及び回収への協力を要請します。勿論、タダでは言いま

せんし、何でしたら断つて頂いても構いません。く」

ビジネススライクな大人の対応。それはそれは、組織に勤める人として素晴らしいとは思いますが正直なところ、この世界における小学3年生に話す内容ではない気がします。能力主義で、就業可能年齢が低い向こう側ならではの視点のズレに対し、私はその差を埋めるべく年長者に助けを求める事にしました。

「お兄ちゃん、ヘルプ」

「ふむ……。しても良いが、〃なのは〃的には如何したいんだ？」

「お手伝いはしたいけど、指揮下に入るのはちよつと不安だなーと……」

いざこざは避けたいので、可能であれば自由行動権が欲しいのです。

「承知した」

そしてお兄ちゃんの交渉術と、リンディ提督の大幅な譲歩により、私達は協力の見返りに自由行動権と負傷した際の医療支援を受けられる事となりました。他にも、連絡手段等の細々とした決め事もしていました。私は只それを傍聴して頷くだけでした。

大人の会話。——それは許容範囲が開示されない中で、互いに落とし所を探るような奇妙な会話。探って欲しいのか、して欲しく無いのか。少なくとも、私にとっては面白みも興味も抱けない物だという事は大変勉強になりました。出来れば、未永く無縁でありたいものです。

「これで良いのか、＼なのは？」

「有り難う、お兄ちゃん。多分、それで十分かと」

「ふむ……。美由希やユーノは、如何思う？」

「私も、＼なのは」と同じく」

「おそらく、大丈夫だと思えます」

全会一致となり、それでは解散という雰囲気の中。今まで譲歩の姿勢を見せていたり、ンデイ提督が、初めて此方へと切り返して来ました。断り難い心境を知っていながら、無難な御願いを一つ通す。なるほど。これもまた大人の会話なんだ、と当事者である私はそうぼんやりと考えつつ、クロノさんの模擬戦に承諾するのです。

く

Side:クロノ

この世界に来てからは、本当に驚かされてばかりだ。血が滲むどころか、本当に血流すほどの努力に努力を重ねて勝ち取った、『執務官』の肩書き。それは師匠である悪魔——もとい、リーゼ姉妹に魂を売るが如く鍛えてもらったお陰でもあり、ようやく取得した際の魔導師ランクはAAA+へと到達していた。

このランク帯は管理局に所属する魔導師全体の5%にも満たず、また本気で戦えば街

が1つ消滅しかねないとも言われるランクであるのに、昨夜出遭った金髪の未登録魔導師は推定AAAランク。これは僕のランクの1つ下に当たるが、戦闘データを収集していけば上下する事も十分有り得る。その程度の誤差でしかない為、油断は元より樂觀視など出来もしなかった。

そして問題の少女、“高町なのは”の場合。

「^や己むを得ない事情があったとはいえ、彼女もまた未登録魔導師。と言う訳で、模擬戦がてら魔導師ランクの算出を試みたところ、まさかのS判定を叩き出してしまった。これは僕のランクよりも2つ上のランクに当たり、S<S<A<A<A+の関係となる。

尤も、この魔導師ランクというものは保有資質や魔力量への評価であり、魔導師としての戦闘力そのものを評価している訳ではないし、彼女の場合は余剰魔力を蓄積している羽も考慮されてのSランク。実質的には同等………なのかもしれないが、魔力量が多いことによる優位性は語るまでもなく、更にそれを実体験した身としては「認めざるを得ない」というのが正直な感想だった。

「しかし、艦長。本当に宜しかったのですか………？ 戦力になるとはいえ、指揮系統へ組み込まずに運用するのは些か危険なのでは？」

かつて起きた、“大規模次元震”という人災。幾つもの文明と隣接する次元世界を連鎖的に滅ぼしたそれは、初めは小さな次元震が原因だったとも言われている。そして今回の回収対象であるジュエルシードは、その次元震を容易に発生させる程のエネルギーを蓄えており、更には特異な事象を引き起こす不安定さを兼ね備えるなど、指定遺失物として第一級の警戒が為されるべき危険物である。

故に迅速に、且つ慎重に対処しなくてはならないものの、其処でぶつかるのが人手不足という壁だ。そもそも本艦は巡察任務中であり、次元震を探知しなければこんな辺境の管理外世界まで訪れたりはいないし、それ以前に艦長が先遣隊を買って出てまで進路を変更する事も無かった。

つまりこのアースラという艦は、人員・装備・支援態勢の観点からして不審船の拿捕^{だほ}や遭難者の救助くらいまでは想定していても、長期間に及ぶであろうロストロギアの回収や調査、断続的な戦闘は想定していないのである。そういった事情もあり、此方としては彼女達の協力は有り難い限りだが、もし勝手に行動をされて危険を招いてしまったら……。そんな不安が、如何しても脳裏を過ぎってしまう。

「ええ、そうね。確かに危険なのかもしれないわ」

「では何故？」

「言い方は悪いけれど、この世界は第97管理外世界——通称、「地球」。つまり、管理局

の法や権威が及んでいない世界なの。果たしてその世界の住人が、『はい。分かりました』と言つて素直に従つてくれるかどうか。こればかりは分からないでしょう?」

「だからと言つて、野放しにする訳には……」

そう苦言を呈すると、艦長はより一層笑みを深めながら、諭すように真意を語り出してくれた。相変わらず笑顔の裏で何を考えているのか、よく分からない人である。

「いいえ、クロノ。私はちゃんと手綱を取つているわ。行かせたい方向へそれとなく誘引し、自主的に歩かせる。これが手綱であり、信頼でもあるの。事件解決への姿勢で誠意を見せ、協力要請で弱みを見せ、逃げ道を提示する事で抵抗感を削ぎ落とし、条件の譲歩で懐の深さを見せる。そんな風に開示して行く事で親しくなり、されど一線を引く事で適度な距離を保ち、持ちつ持たれつ。そうやって手を繋いでいる間は、人は他人を思いやれるモノなのよ。不思議とね……。だから、きつと大丈夫よ。彼女達は裏切らないし、期待に応えてくれるわ。もし裏切るとしたら、それは彼女達の倫理観や常識が優先される状況であるから想定も容易だし、対処も可能。尤も、その辺はアドリブだから不安要素も無くは無いか……。まあ、その辺は何時も通りという事で宜しくね?」

経験則でのみ導かれた滅茶苦茶な根拠と、それに基いた説明と対処法。到底、論理的とは言えないものの、艦長が——母さんが提督足り得るのは、そういった直感的な思考が悉く英断だったからであり、つまり今回もまた、そういう事なのだろう。

「了解しました」

実際のところ、あまり納得はしていない。いや、するのが難しいと言うべきか。しかしそれでも、目を逸らしてはいけないのだ。そうでなくては上司と部下の関係として、家族として成り立ちはしないと、他ならぬ自身がそう思うが故に「尚の事」。

「頼りにしているわよ、クロノ」

取り敢えず、今はただ素直に受け止めておこう。一概に誤りとも言えない現状では、これが正しいという判断など有りはしないのだから。

第14話：淡紅色が照らすモノ【中編】

Side : ■

今度こそ、後悔したくはなかった。あの人の様に、あの子が信念に従って真つ直ぐ進むことになったとしても、何も知らず、関わず、蚊帳の外のまま終わってしまうことだけは如何してもしたくはなかった。煩わしく思われても、嫌われても良い。もう二度と、目を逸らすような事だけは絶対に――

くく

Side : フェイト

幾つも失くしてしまった、大切なモノ。それは色褪せても尚、大切に。温かみが残っていて。仮令、その瞬間に戻れなくとも手にしていたかつたモノ。だから頑張らなくちやいけない筈なのに、如何してだろう……？

私はまた、〃何かを失おうとしている〃。

欲しいのに、何かが抜け落ちそうになっていて、それがさっぱりと思ひ出せずに居る。分からない。何が分からないのか分からない。ぐるぐると思考が停滞し、マルチタスク

も絶不調。凶らずとも閉ざされてしまい、単一の、思考だけと、なってしまう……。一体、このぼつかりと空いた心は、何なのだろう。このフラフラとした気分は、黒に、冷たさに沈み行くような、この……。コレは……。何？

……………光を見たい。

暗いからこそ、きらきらと輝いて、明るくて、温かい、そんな色の光が見たい。……。そうだ。どうせなら、最近見たあの色が良い。可愛らしくて、華やかで、奇麗で、それでいて優しそうな、あの淡紅色を……。

「……っ?!」

ちよつと痛かつたけれども、ずっと見ていたいと、何となくそう思えたんだ。

「しっ——て、フェ——!!」

そう思えた。だけど、なんと行って、つたえたら——

「今、——室に——、だか——れよ——ト!」

……………

……

…

目が覚める。それはすつきりとした自然な覚醒ではなく、身体中に纏わり付いた熱に耐えかねてしまったが故の、嫌な目覚め……。疼きはするけれども、動けなくはなさそうだった。

「くっ……」

珍しくもない。偶たまにある事。それだけに、身体を起こすのも億劫おっくうに感じてしまう。鈍く、重く、錆付いてしまったかのように自由が利かない私の身体。包帯の下が酷く痺れ、更なる熱を持ち始めるも、寝惚けた思考を覚ますのには丁度良い痛みで、気分はともかくゆつくりとベッドから立ち上がる事は出来た。

身体を見回し、チェックしてみる。

何となく察してはいたけれど、全身が包帯だらけで、まさに満身創痍といった体ではあるものの同時にこれはアルフによる手当ての成果でもあり、見た目に反して治りが早いのは経験済みなので、心配は無さそうだと判断する。——これもまた、何時もの事。

そして何時も通りに御礼を言おうとして周囲へ視線を走らせると、手当てや治療魔法の行使で疲れ切ってしまったのか、アルフは人型のまま床へ横たわり静かに寝息を立て

ていた。これまで昼夜不規則なジュエルシード回収に付き合わせ、更には慣れぬ対魔導師戦に巻き込んでしまう等の無理が、積もりに積もってしまったのだろう。

本当に、申し訳無いと思う。しかしそれでも頼らざるを得ない私の弱さは、これからもアルフを苦しめるに違いなかった。

そう、だから……。そんな有り様だから、罰が当たるのだ。幾度となく無能の証を刻まれ、罪業は際限なく積み重なるばかり。されど足掻こうともしなければ、おそらく全てが駄目なまままで終わってしまう。

「頑張らなくちゃ……………」

ミス高町を打倒して、管理局を出し抜き、ジュエルシードを可能な限り集めなくては……。それが私の為すべきこと。私に託されたことなのだから、もつともつと頑張らな
いと――

きつと、リナスが悲しむんだ。

くく

Side:なのは

さて、大変な事になりました。クロノさんとの模擬戦を終えた後、お兄ちゃん達とはその場で別れて通学靴や外履きを取りに学校へと戻り、結界&転移でスニーキングを済ませて帰宅した際の時刻は、午後7時をとくに過ぎていました。

これから御風呂や歯磨き、宿題に睡眠等とすべき事は沢山あるのですが、如何やらその前に、出来上がっているお母さんの相手をしなければいけないみたいです。

「ねえ、＼なのは＼。お母さんね、ちゃんとお母さんやれていると思う？」
「んー……。うん、ちゃんとやれていると思うよ」

THE絡み酒。レンちゃんに体よく世話を押し付けられた晶ちゃん曰く、早上がりしで帰ってきたかと思えば、貴腐ワインを1時間もしない内に1本空けてこうなったのだとか。こんな事になるのなら魔力をけちらさず、先にお兄ちゃん達を自宅へ転移させた方が良かったのかもしれない。

「ほんとにー？」

「話で聞いた限りだけど、アリサちゃんや＼ずずか＼ちゃんの御両親よりは余程かなと」
比較対象がおかしいですが、多忙な大企業の社長をやっている親友の御母堂・御尊父方と比べれば、授業参観や運動会にもきちんと来てくれるお母さんは、ちゃんとお母さ

んをやれているような気がします。

そう思いつつ、御飯を咀嚼そしゃくして飲み込みます。ええ、そんなのです。酔っ払ったお母さんによる粹な計らいにより、食事と並行しての一家団欒（？）なのでして、逃げる事が出来ません。ちなみに、晶ちゃん洗濯物を畳むと言う大儀名分で戦線離脱をしており、暫くの間は孤軍奮闘の見込みです。

「ふーん……。ところで、＼なのは」。最近帰りが遅いみたいだけど、探し物は順調？無理はしてない？」

「うん、順調だよ。目処も付いて来たし、無理の方もしていない筈……です」

時速100キロ前後で空中戦闘機動を描き、ハルバードの刃や魔力弾が煌く戦闘にも慣れつつある。だから無理ではありません。ただ時折、なんで私が戦っているんだろうと振り返って見ては、不思議に思いますが。

「じゃあ……。辛いと思ったりは？」

それは……。如何でしょうか？ ほんの数日前は、ジュエルシードによる被害へ胸を痛めた事もありましたが、今となつてはジュエルシードを集めていけば被害も無くなり、フェイトさんにも会えるという一石二鳥のような甘い考えが、日に日に増しているのです。

なんと樂觀的で、都合が良いのでしょうか。

きつと、私は困惑しているんだと思います。おそらく夢でも見ているのかもしれない。だってそうでなくては、探索を行いつつも通学する等の非効率的な選択肢を、選び続ける筈が無いのですから。

つまり、現状の私は「少し変」なのかもと判断を下したところで、「お兄ちゃん達も手伝ってくれているから、それほどでも……」と無難な返事をおきました。嘘ではありません。しかし本当でもありません。それでも、私自身が前向きになれるのなら、お母さんが心配せずに微笑んでいてくれるのなら、誤魔化し甲斐も有るといえるものです。

「ところでね、お母さん。最近、気になる子が出来たの」

「なにに？ もしかして、男の子とか？」

「や、それはないです。フェイトって言う名前の女の子なんだけど、——」
関連性を持たせつつ、辛気臭い話題から話を遠ざけては逸らし続けて。こうして私は、お兄ちゃん達が帰って来るまでの間、楽しい一時を過ごす事が出来ました。

宿題という、最大の宿命すらも忘れて。

あれから、約10時間後でしょうか。睡眠時間としては正味5時間程で、寝たりないと訴える本能を無視して目を開き、携帯電話のアラーム機能を止めて起床します。体調

は微妙な感じですが、魔力に関しては好調のようで、昨日消費した分の回復は出来たように思えます。

部屋を出て、階下へと降りて、顔を洗い、短くなった髪を梳すいて、匂いに釣られるようにリビングへと向かつて。なんだか、今日はやけに静かだなと思っていると、そこに居たのは晶ちゃんだけでした。

「おはよー、〴〵なのは〴〵ちゃん」

「おはよう、晶ちゃん。レンちゃんや、他の皆は？」

何時もは、カウンターキッチン越しにレンちゃんと〴〵突き合い〴〵をしている光景が見られるのですが、本日はその限りではないみたいです。

「レンのやつは、『今日は朝市があるから、あとは頼むでー』とか抜かしながら出て行って、桃子さんは仕込みの確認がてら早めに出勤。師匠や美由希ちゃん達は、何時も通り鍛錬にでも行っているんじゃないかな？ まだ、戻っては来ていないみたいだけど……」

なるほど。と一頻り納得した後、晶ちゃんと一緒に朝食を済ませ、自室で宿題を終わらせたり、「レイジングハート」のシミュレーター機能で遊んだりして時間を潰し、通学バスが来る時間帯に間に合うよう家を出て、一路バス停へ。

しかしながら、今日この日。私が学校へ辿り着くことは無かったのです。

・

第15話：淡紅色が照らすモノ【後編】

Side：アリサ

これは、何度目の『また』なのだろうか？ そう、『またしても』である。『なのは』に電話が繋がらない。——という事は、『また』何かが起きているのだろう。具体的には、『ずずか』の家で起こった神隠しのような何かが、『また』起こっているのかもしれない。

「繋がらないわね……。『ずずか』の方は、どう？」
「うん。こつちも駄目みたい……」

何時ものバス停で通学バスが止まっても、『なのは』は乗り込んで来ず。その時点で何かがあったのかと思ひ、防犯で持たされている筈の携帯電話に掛けてみたところ、例の如く音信不通となつてしまった。おそらく、意図的に電源を切つていたりとは考え難いので、やはり同じようなケースに巻き込まれているのだろうと推測してみたものの、結局のところは其れ止まりである。

不安になつても何ら解決の糸口は無く、『なのは』も何かを知っている筈なのに教えてはくれないので、何もかも分からない。どうせ、今回もひよつこり戻つて来るのか

もしれないけれど、ここ最近で起こっている不審な事象は危険度を増しつつあり、関連性が有るにせよ無いにせよ、無事に戻って来て欲しいとは心底思っている。

まったく……。この不安の落とし前は、一体如何してくれようか？

取り敢えず、次の御茶会は家で開くとして、ついでに1泊2日くらいは泊まらせるのも有りだろう。勿論、御風呂には一緒に入るし、ベッドは1つで同衾だ。すずかとは出来て、私とは出来ない道理などは無いのだから、此処までは押し通せる筈だ。それから、夜会用のドレスを着せまわったりして——

（ ）

S i d e : : なのは

古今東西、エネミーシンボルと鉢合わせをしたら即戦闘というのは、様式または典型例として有名なので、不本意ながらもそれに倣って戦闘エリアならぬ結界を張り、変身してバリアジャケットを纏ってみました。如何やらそれは私の早合点のようでした。

「待った。私は、あんたと戦いに来たんじゃない。話をしに来たんだ」

そう言つて、アルフさんは一瞬光に包まれたかと思うと子犬型から人型へと姿を変え、恐る恐るといった感じで話を続けました。

「あんた、以前フェイトに言つたそうじゃないか。ジュエルシードを持ち去つてくれる

のなら、それはフェイトでも管理局でも構わないって……。あれは、まだ有効なのかい？」

「ええ、有効ですよ。私からしてみれば、フェイトさんも管理局もどの様にジュエルシードを扱うかは預かり知らぬところなので、この世界や私の親類縁者に被害が及ばなければ構わないと思っています」

そもその話。私が管理局に不信感を持っているのが事の発端で、危険物もといロストロギアを封印して然るべき場所で管理をしているとは聞き及んでいますが、見方を変えればロストロギアを蒐集しているだけに過ぎず、果たして悪用をする事無く、その崇高な理念を守れているのか如何かまでは分かりません。

よって、それ故の保険と人手不足解消の為、フェイトさんの回収を黙認しているというのが正しい実状だったりしますが、敢えて注釈を入れずに見送ります。

「ならば……。今回のジュエルシードの回収は、私達に任せておくれよ」

そうアルフさんが言うや否や、遠方で——臨海公園からもそう遠くはない海上辺りで、幾つもの大規模魔力反応を感知しました。波長からして、おそらくはフェイトさんとジュエルシードによる物。

なるほど。つまりこれは、交渉と足止めなのでしょうか……。？ 手段としては悪くはないのですが、仕掛け方があまりにも御粗末な気がします。だって探す為とはいえ、魔

力流か何かを海に撃ち込んだのでしようけれども、ジュエルシードを7個も強制発動&暴走させてしまつては、被害ゼロを信じるのは無理があるというものです。なので、急ぎ現場へと向かわざるを得ません。

「> “なのは”、こちらクロノ。そちらでも感知していると思うが、緊急事態だ。どうか手伝つてくれないか? <」

そして掛かる支援要請の念話。これで大義名分はバッチリです。

「> したいのは山々ですが、現在足止めを食らつておりまして…… <」

「> それは承知済みだ。しかし、君なら突破も容易い筈だろう? 期待している <」

しれつと「モニターしているぞ」という暗示に呆然すること暫し。……さて、気を取り直して再考です。アルフさんを魔法で気絶させたり、振り切ること自体は確かに容易なのかもしれません。しかし、力量差を考慮したのでしょうか。 “話をしに来た” というアルフさんに対して、魔法で以って回答するのは少々ナンセンスのような気がします。「アルフさん。暴走中のジュエルシード7個、フェイトさんだけで封印出来ると思いますか?」

「それは……………」

「信じたい。でも、心配ですよね?」

「うっ……。そりゃ、そうなんだけさ……」

「なら、一緒に行きませんか？ 今直ぐに向かえば、きっと助けられると思うんです」

こうして不安を煽り、決断を迫ることで強引に同行の承諾を得た私は、短距離転移で現場上空へと移動をしたのですが……。吹き荒ぶ風、舞い上がる波飛沫、猛威を振るう7つの竜巻など、一目で見て近付きたく無いなと思えるくらいの状況でした。

……

……

……

「だから、フルチャージして撃つたんです。《デイベインバスター》を」

1つ1つの場面を思い返し、言葉にして。

「それで封印されたジュエルシードを僕とユーノ、フェイトとアルフが取り合っている間に、発射元不明の次元跳躍攻撃魔法により本艦のセンサー類が一時沈黙。続く第二撃目が現場へと落ち、結果として僕達が4個、フェイト達が3個のジュエルシードを確保した後には彼女達は現場から逃走し、戦闘は終了。概要は以上となります」

それをクロノさんが引き継いで、リンディ提督へと受け渡し——

「ふむ……。まあ、取り敢えず4個だけでも守れたのは喜ぶ事にしましょうか。では、30分の休憩を挟んでから再開とします」

このように纏められて、話は一段落しました。ええ、そうなのです。先程まで絶賛反省会もとい検証会の様なものをやっておりまして、丁度終わったところだったりします。戦闘終了から換算すると、あれから凡そ2時間経ちました。

文字通り、青天の霹靂へきれきのような第三者の攻撃魔法により戦闘が終わってしまった為、その戦闘詳細を作成する前の参考資料作りとして、「こうして反省会を開くのが、この艦の習わしなの」と自称アースラのお姉さん事、エイミイさんから教えて貰ったのですが、正直に言って場違い感がもの凄かったです。はい。しかし如何やら、ようやく一息が吐けそうで……。

「ちなみに、＼なのは＼さんとクロノは残るように」

訂正。どうやら、もう少しだけ続みたいです。

くく

Side:クロノ

艦長の人払いにより、会議室に残ったのは、僕と艦長と、＼なのは＼の3人のみ。艦内では3番目の序列にあたるエイミイを除いてまで、すわ何事かと思つたものの。始まったのは何とも穏やかな尋問風景——否、面談のような物だった。

フェイトについて。アルフについて。ジュエルシードについて。管理局について。

「なのは」の家族や友人について、
「なのは」自身は如何思っているのか？
そういった漠然とした質問を淡々と問いかけ、
淡々と返つて来た言葉を聞く。
たったそれだけの、5分にすら満たない短い遣り取りを経て、
艦長は彼女を退出させてしまった。

「では、今度はクロノ執務官とクロノに質問します。
今までの話や行動を聞いて見た上で、
「なのは」さんの事を如何思っているのかしら？」

いや、あれだけで如何と問われましても……。

「執務官の目線で言えば、戦力としては大変頼もしい限りなのですが、
現場に私情を挟みかねないのが懸念事項だと思っています。
そして個人的には、まあその……。良い子、
なのではないでしょうか？」

管理局ですら、ほんの一握りしかない貴重なSランク魔導師であり、
甘さは目立つが行動力と良識は兼ね備えている。故に彼女が望み、
努力さえすれば武装局員でも戦技教導官でも、
執務官にでもなれるに違いないだろう。

「そうね。とつても良い子だとは思うのだけれど、
此方側に心を開いていないのがネックなのよねー……」

「確かに言葉遣いは硬いとは思いますが、
それは艦長の職責を重んじているからこそ
配慮なのでは？」

そう伝えると、艦長は一瞬遠い目をして何事かを勘案していたようだったが、
何か面

白い事でも考えついたのだろう。満面の笑みを浮かべつつ、僕にこう告げたのだった。「ねえ、クロノ。貴方、ほとんど有給休暇を取って無かったわよね？ この事件が終わったら、＼なのは＼さんが通っている学校へ短期留学してみたらどうかしら？ きつと勉強になると思うわ」

「……………はい？」

一体、何が如何してそうなったのか。全く検討が付かないものの、知見を広める為ならばそれも存外悪くはない。——のかもしれなかった。尚、これが後に甘い考えだったと思ひ知らされるのは、また別の話である。

第16話：立ち込める暗雲なの

Side : ■■■

何と声を掛ければ良いのだろうか？ 如何切り出したら、話を聞いてくれるのだろうか……？ 何てことは無い。ただそのまま伝えれば良いし、きつと彼女は遺恨も私怨も挟まず淡々と話を聞いてくれて、社交辞令的に返事をしてくれる筈だ。そう信じているのに、僕は如何しようもなく彼女——高町なのは——に話し掛けることを躊躇ためらってしまっていた。

いや……。本当は、合わす顔が無いから向き合いたくも無いんだらう？

足が竦んで、息が詰まって、気が張って、尻尾を巻いて帰りたくて。そんな僕なんかよりも彼女はしつかりしていて、強くて、格好良くて、凜としていて。あまりにも惨めで、あまりにも輝いていて。手伝うつもりだった。頑張しよくさいるつもりだった。贖罪しよくさいのつもりだったんだ!!

でも君は、ずっと凄くて……。

きつと、僕が手伝わなくても全てを為し得たに違いないし、そもそも僕が馬鹿な事をしなければ、こんな事にはならなかった筈で……。分かっているさ。君が言ったように

「ただ前へ進むしかない」って事ぐらい身に沁みて分かっているとも。だからこそ、如何しても『タダ』では終わらせたくなかつたんだ……………」

（ ）

S i d e : なのは

「あの、＼なのは＼さん……………」

「もしかして、スクライアさんでしょうか……………」

声のする方へと視線を向けると、そこに居たのは枯れ草のような薄茶色の短髪に、深緑色の瞳を持つ若い年くらいの男の子でした。戦闘や会議の時にもさり気無く居ましたし、もしやと考えなくもなかつたのですが、スクライアさんの声を出しているので、これはもう確定的だと思えます。

「あ、うん。怪我も完治したから、もう良いかなと思って。…………えっと、実は恭也さんから伝言を預かっているんだけど……………」

そう前置きをして、律儀に一言一句も違えずといった感じでスクライアさんが諳んじてくれた伝言を纏めると、『学校の方には病氣と伝えているので、欠席の件は心配しなくても良い』といった内容でした。

思い返せば、時刻はとつくに10時を回っており、普通であれば登校しなかつた児童

の安否確認の電話の1つや2つは、保護者の元へ掛かるといふものです。それを意地の悪さに定評があるお兄ちゃんや、上手く対処してくれたのは本当に有難い限りで、これがお母さんなら如何なっていた事やら……？ 後で、御礼を言わなくてははいけません。

「——伝言は以上です」

「有り難う御座います。お陰で、憂いが1つ無くなりました」

「どう致しまして。それでその……………」

逡巡。そうやって、スクライアさんが何かを言い淀んでいる内にクロノさんが呼びに来て、会議の続きが始まる事になりました。一体、スクライアさんは何を伝えたかったのでしょうか？ 表情から察するに、少しばかり気後れしそうな内容である事は推考出来るのですが……。取り敢えず、それはさて置き。今は会議に集中しなければ。

「では、引き続き会議を進めましょうか。エイミイ、資料を」

「はい、艦長。今、皆さんの手元のモニターに送信したのは、アースラに対し攻撃魔法を仕掛けて来た犯人と思われる人物の情報です。名前は——」

——プレシア・テストアロッサ。16年前、開発中だった新型駆動炉の稼働実験に失敗し、中規模次元震が発生。その責を負い、地方へと異動したのを最後に足取りは不明。魔導師ランクは条件付きSSSランク。『電気』への魔力変換資質持ち。

……………

……

…

これだけ、でした。機密管理上、必要最小限の人に必要なだけの情報を与える『Need to know』の原則からしてみれば十二分過ぎる程でしたが、実際にやられてみると疎外感を抱かずにはいられません。おそらく、リンディ提督の元には完全なデータがある筈。ですが、まあ……。ただの現地協力者がどうこう思う事では無いかもですね。はい。

「それぞれの目的や理由は未だに不明確ですが、今後は『プレシア・テスタロッサ』、『フェイト』及び『アルフ』の3人が協力関係にある事も視野に入れて、行動をしていきたいと考えています。——ですが、ジュエルシードを全て回収してしまった以上、此方が取れる行動は少なく、後手に回らざるを得ない状況です。もしかすると、既に遠方の次元世界へと逃走している恐れもあります」

此方側で回収したジュエルシードは13個。そして、フェイトさん側（仮定）で回収されたジュエルシードは推定8個で、合計21個。果たして、フェイトさんが望んだ数に達したのか否かは分かりませんが、向こうの拠点を特定出来ない現状では、確かに此方からのアクションは難しいように思えます。

「ですので、確認をしてみましようか。ねっ、なのはさん？」

「……………ふえ？」

そして滔々と語られるそれは、とてもとても下策の中の奇策のように思えるモノで、『リンデイ提督Ⅱ賭博師』という図式が、私の中で誕生した瞬間でもありました。あの、クロノさんとエイミイさん。目を逸らさずに助けて頂きたいのですが……。

く

Side : フェイト

ツンとした錆の匂い。静電気が走っているような僅かな痺れと、身体の火照り。何となく御風呂に入っているような気がして、このまま嘘に溺れてしまいそうだった。

「この役立たずっ!! あれ程の好機を前にして、手に入れたのはたったの3つ。これでは通り付けるか如何か、分からないじゃないの!!」

「ごめん、……………なさい……………」

今日の躰は、随分と激しい。あの目は、期待を裏切られた目だ。この声は、心底失望してしまつた声だ。病魔に蝕まれて立っている事さえ辛いはずなのに、烈火の如き怒りが、ドクターの身体に熱を与えている。この鞭の一振りに、言葉の一句に、一体どれ程の熱が込められているのだろうか？

もう、その熱量が分からない程に浴びせられてしまつた私に計る術は無いけれど、

きつとドクターは冷え切っているに違いない。白い化粧と、紫色のリップで顔色が分かり辛いものの、何時も通りなら多分そう。……ほら、やつぱり。振るう度にドクターの汗が滝のように流れ落ち、声は乱れに乱れ、やがて「ぱたり」と止んでしまった。

激昂していたとはいえ、あまりにも早い終わり。また、以前よりも更に悪化しているのだろう。切羽詰っていて、時間も残されていないのに、私が不甲斐無いせいで無理をさせてしまつて、本当に申し訳ない限りだ。

謝りたい。

けれども、ドクターの熱を受けきつたこの身体はとても熱くて重くて。一言さえ、満足に伝えられそうになかった。ならば、すべき事は分かっている。意識を落として疲労を回復させ、それからまた頑張らなくては……。

ジュエルシードは、もう何処にも落ちてない。残りの13個は、ミス高町と管理局が持っている。なら、残された道は保管されていそうな巡航船への強襲？ それとも代替品を探すべき？ 成功の可能性ってどのくらいだろう……？ そして、ドクターがたおれるまでに、まにあう、……のかなあ………？

「フエイ——!? ——イト——!! ああ、——!」

ごめんね……、アルフ。ちよつと……だけ、やすませてほし——……

くく

Side:なのは

アースラの良心かもしれないナンバー2と3に見捨てられた私は、ナンバー1の語りよつて手詰まり感を打破するには有効な策かとも思わされた挙句、無意識に了承したところで会議は終了。それから、ナンバー1もといリンデイ提督を除く皆で食堂へと移動し、昼食を食べる事になりました。

『説得とは、扇動・洗脳いすの何れかである』

今回は、そんな教訓を囚らずとも得てしまいましたありさまが部外者の私ですらこの有様なら、常日頃リンデイ提督を支えるクロノさんとエイミイさんは、かなり凄い人なのかも知れません。主に精神的な意味で。——等と呆けた思考を振り払い、お弁当のおかずであるハムカツを一口含みます。んー……、流石はレンちゃんと晶ちゃんと合作のお弁当。正気に戻るのも止む無しの美味しさです。

「ふむ……。『なのは』の昼食は、手作り弁当なんだな」

「はい。今日は学校へ行くはずだったので、今食べないと駄目になっちゃうんです」

それを聞いて、申し訳無さそうな表情になるクロノさんでしたが、視線で私の顔と弁

当箱を行き来している内に覚悟でも決まったのでしょうか。やがて重々しく、非礼を詫びるようにお願いをしてきました。

「もし良ければなんだが……、おかずを1つ交換してくれないか？」

「別に構いませんけど、どれが良いですか？」

「あの、＼なのは＼ちゃん……。私の分も、お願いします！」

「勿論、エイミイさんもどうぞ。スクライアさんは如何しますか？」

「えーと……、僕は遠慮しておくよ。普段、家の方でご馳走になっていたし、これ以上交換したら＼なのは＼さんの分が無くなっちゃうだろうから……」

そんな感じでおかずを交換したり、航行中の食事が如何にローテーションされ、制限され、嗜好品に乏しく、食べ飽きてしまうのかをクロノさんとエイミイさんに力説されたり、食後に魔法や戦術について語り合ったりと楽しい一時を過ごした後は、明日の作戦に備えて一時帰宅をする事になりました。

ちなみに、明日は金曜日で当然のように登校日なのですが、作戦のため仮病を使わざるを得ず、更に言えば協力して貰うための説得は私自身がしなくてはなりません。この気持ち、何と形容すれば良いのでしょうか……？ 中間管理職の気持ち？ いえ、何か違うような気も——と並列思考を無駄に稼働させつつ、何時ものように庭へと転移。バリアジャケットを解除し、隠蔽用の結界を解いた瞬間の事でした。

突如として携帯電話が鳴り響き、通話とメールの不在着信が引つ切り無しに通知されていきました。堪たまらず消音設定にしましたが、バイブレーションが絶えず震動を続け、イルミネーションが点滅を繰り返すこと1分程。通知欄を確認すると、大半がアリサちゃんや「すすか」ちゃんによる物で、後はお母さんからのメールが幾つか。

取り敢えず……………。

庭に立ち尽くしていても仕方が無いので、玄関から入って「ただいま」と帰宅を告げようと思いましたが。現実逃避…………？ いいえ、これは戦うための準備です。例えるならばそう、剣士が一足一刀の間合いに入るようなものでして、決して不自然な事ではないのです。ええ、はい。

第17話：決闘は夜明け前になの

Side：アルフ

如何して、此処まで残酷になれるのだろうか。傷自体は浅くとも、全身に数十数百ともなれば血だらけになるし、衝撃も伝わるのだから全身打撲となってしまう。それが分かっていて、それでも尚フェイトを痛めつけながらも酷使するのなら、それはもう「人でなし」と言つて良い筈だ。少なくとも、優しいフェイトと同じ種族とは思いたくもなかった。

それなのに、フェイトは見限ろうとは思わない。

どんなに酷い仕打ちをされても、罵詈雑言を浴びせられても、フェイトはドクターの元から去ろうとはせず、命ぜられるがまま行動して、今もまた傷だらけであるにも拘らず出撃の準備をしている。

強引にでも止めるべきだ、とは思う……。

手当てでは尽くしたものの、ちよつとでも激しく動けば傷口なんて簡単に開いてしまうし、何より体力や魔力を回復させる為の休息時間がほとんど取れていない。だけどフェイトは「これが最後だから」と言つて、一向に考えを改めようとはしなかった。

ねえ、フェイト……。私は馬鹿だからさ、フェイトの考えている事がよく分からないよ。こんなに痛い思いをして、傷付けたくないのに誰かに刃を向けて、辛くて楽しくなくて苦しい事ばかりなのに、如何して逃げようとしないのかがさ……。

くく

Side : なのは

「はえ……」

メールと電話で親友に嘘を吐き、家族の皆に説明とお願いをし、夕食やら御風呂やらの日常行為を一通り済ませて時刻は21時。明日の博打もとい作戦に向けて、今日は少々早めのベッドインと相成りました。とはいえ、体力は余っているのでなかなか寝付けないのですが。

……………振り返ってみれば……。

たった1週間あまりの間に色々あって頑張つて、嫌な事もあったけれど、ようやく終わりを迎えられるそうで。なのに少しも嬉しくなくて、悲しくもなく、重く、けれども手放したいとは思えないこの複雑な気持ち、何と形容すれば良いのやら……？

誤魔化してはいけない。先送りにはいけない。一体何なのでしょう。この……、遣る瀬無い思いは。それとも、やり残したような焦燥感？ だとしたら私は何を惜し

み、何を悔いて、何を望んで……………。

——ミス高町……………。

「――Emergency!!」
「ふわっ?!」

深い眠りから「レイジングハート」の警告音に叩き起こされた私は、矢継ぎ早に飛んで来るクロノさん他多数からの念話と、次々に受信・表示される空間モニターから情報を収集しつつバリアジャケットを身に纏い、まだ薄暗い空を星のように翔けて行きました。

時刻は午前4時8分。

高度を上げれば水平線から朝日を拝めるかもしれませんが、生憎と空は暗雲と魔力流で満ち溢れ、その中心に臨戦態勢で佇むフェイトさんを見る限り、そんな余裕は無いように思えます。尚、フェイトさんからの要望により交渉役は私のみで、クロノさんやスライアさん等はバックアップとして現場付近に身を潜めているとの事。

えーと……………。如何に目が覚めていようとも、起き掛けで朝食前の低血圧&低血糖の脳の稼働率など高が知れていますが、それでも何とか「挨拶」という選択肢を導き出し、外部出力をしてみました。

「お早う御座います、フェイトさん」
「……………ミス高町。貴女に、決闘を申し込みます」

あまりにも唐突な申し出に、並列思考で聞き間違いの可能性を精査してみました。聴覚や記憶力は正常そのもの。そして、その後によく言葉もまた俄かには信じ難いものでした。「もし決闘に応じず、または決闘に妨害が入った場合、此方には市街地へ長距離砲撃をする用意があります」など、まさに脅迫そのもので、暫し呆氣に取られてしまいました。

らしくない。

今まで隠れるように行動してきたフェイトさん達が、この様な一転攻勢へと出る。つまり、それにはちゃんと意味があつて、向こうの状況が変わってしまった事が窺えます。

これがフェイトさんの独断行動か、または計画的な陽動なのかはさて置き。

取り敢えず、フェイトさんの方はやる気充分の様子なので、そろそろ此方も構える事にします。本当は、理由も真意も分からず無闇に戦いたくはありませんし、話し合いで解決して仲良く終われるのなら、それに越した事は無いと思います。

でも、ぶつかり合うのを避けていたら、きつと何時までも向き合えないとも思うから……。だからこれは、仲良くなる為の通過儀礼。私とフェイトさんが和解して、それから始める為に必要な1歩なんだ。——と自己暗示しつつ、「応じます」と返答しました。すると刹那に閃光が煌めき、続いて景色がゆっくりと流れ出して……。

「……………えっ?」

くく

Side : ■■■

あの子が、とても悲しそうに私を見つめている。

もしかして、気付いてしまったのだらうか?

ならば僥倖だ。そのまま憐れあわんで、侮あつてくれれば良い。

痛みなんて無い。重みなんて無い。寒くも無い。

ただ、魔力と意志だけが熱を持ち、私を突き動かしてくれる。

もつと速く、強く、激しく。

数多の斬撃を。幾重とも知れぬ魔法の雨を。

でなければ、私はあの子に到底及ばないのだから。

もつと、もつとだ……。

魔力が足りない。演算リソースが足りない。

酸素が足りない。腕が足りない。

目が足りない。思考が足りない。

私が足りない。

オーバードーズ。オーバークロック。

足りない。

まだ足りない。

ちつとも足りていない。

これじゃあ、まるで何もかもが足りて

く

Side:フエイト

浮き立つような、何処までも五感が研ぎ澄まされるような、痛みが熱へと変わるよう

な、魔力に底が無くなってしまうたかのような、私が私でないような感覚。怖いと思うと共に、何処となくまだ大丈夫だと過信することが出来た。実際のところは、目を背けているだけなのかもしれないけれど。

それにしても、汗が止まらない。

熱が蠢く。血潮と魔力が身体を突き破らんばかりに駆け巡り、害意を乗せた魔法は光となつて荒れ狂う。——だと言うのに、未だにミス高町を落とせない。手堅く、強く、先が読めず。一体、如何したらその守りを打ち破れるのだろうか？

嗚呼、足りない。届かない。壊せない。やはり肉薄して、一点突破するしか術が無い。きつとそうだ。やらなければ、討ち倒さなければ、損耗させなくては……。

「— Gale—form set up. —」

トライデント展開。……心を澄ませ。疾く、速く、鋭く切り込んで行け。痛みなんて無い。吐き気なんて無い。雑音なんて無い。傷口からの出血なんて、焼き塞いでしまえば良い。前へ!! 前へ!! もつと前へ!!

く

Side:なのは

速くて、重くて。その上、非殺傷設定も如何やら外れているようで。そんな風に狂つ

ているフェイトさんの攻撃が嵐のように襲い来るも、不思議な事に私はそれが怖いとは思いませんでした。

避けて、受け流して、弾いて、牽制して。

普段よりも人間味が薄いせい、心理的な作用が少なく淡々とスムーズに対処出来ています。プレッシャー。もしくは、気当たりと言う物は存外影響があるんだなと現実逃避を一段落させたところで、現状確認へと戻ります。

現状はやや優勢。

フェイトさんが夜明け前という時間帯を選び、用意周到に仕掛けてきたのは若干辛かったものの、事前に負っていた傷やら薬物の副作用と思われる症状によって精彩を欠きつつあり、このまま持久戦を強いれば勝利は目前です。

しかしながら、時間が経つに連れて彼女の全身に走る傷が新旧を問わず内出血、また出血していくにも拘らず攻勢を維持しようとする様には鬼気迫るものがあり、このまま壊れてしまう前に止めなくては、と私の良心が理性に訴えかけているのもまた事実。

持久戦で確実な勝利を得るか、フェイトさんを思いやって今直ぐにでも止めるのか。無論、後悔はしたくないので選ぶのは後者ですけれど、実のところ未だにノープランだったります。そもそも普段以上の苛烈さで攻め立てられ、動き回られては捕まえる事は元より、確実な一撃を当てる事すら儘なりません。

やはり、一撃くらいは敢えて受け止めて、無理矢理にでも拘束するしか手は無いのでしょうか？ バリアジャケットがあるとはいえ、リンカーコアへの魔力ダメージを多少なりとも我慢しなくてはなりません。時間切れになるよりは余程マシな選択なのではないかと勘案していると、向こうも勝負を決めに来たのでしよう。

バリアジャケットの形状が、全身に包帯が絡み付くようなデザインが付加された物へと変更され、「バルディッシュ」の形状が三叉槍を思わせる無骨なフォームへと変形しました。そしてフェイトさんはそれを両手で構え、黙すること数瞬……。

真つ直ぐに飛び込んで来て――

第18話：星が輝く時なの

Side：フエイト

数にして26発。恐らくそのどれもが誘導性能を持ち、たとえ直撃せずとも至近で炸裂するようにプログラムされた近接殺しの魔力弾。その全てが私を迎撃しようとして襲い来る光景は、恐怖よりも先に感動と尊敬の念を生じさせた。

前へ。

上下左右前後と来ようが、ひたすら前へと突き進む。直撃するよりも先に前へ。炸裂するよりも先に前へ。追いつかれるよりも先に前へ。【バルディツシュ】で道を切り開き、バリアジャケットに増設された反応装甲を頼りに、強引に突き破って進んで行く。もつと前へ。

反応が鈍い。相殺しきれず、被弾が増えて来ている。けれどあと少し、もう少しだけ前へ。もうちよつと、なんだ。何度も出来るとは思わない。何度も通用するとは思えない。だから全身全霊の一撃を、この一度に賭けよう。届け……、届いてっ!!

（ ）

Side：なのは

思わず、目を見張ってしまいました。速さのあまり制御が追い付かなかつたとはいえ、あの誘導炸裂弾の雨を正面突破して刃を突き立てて来るなんて、いやはや敵ながら天晴。好敵手とは斯くあるべし等と思いを逃避させている間に、左手の痛覚を遮断。補強した《Round shield dual》に【バルディッシュ】を噛ませつつ、穂先から勢いよく左手を引き抜きました。

溢れ出る鮮血。

シールドが威力を削いでくれた御陰で辛うじて切り落とされませんでした。甘く見積もつても全治一ヶ月クラスの重傷で、物凄く痛そうに見えます。……まあ、それはさて置き。間髪入れずに飛んで来る魔力弾を避けながら、距離を稼ぎます。

……………稼ごうと、思ったのです。

ですが、知らず知らずの内に追い込まれてしまったのでしょうか。まんまとトラップゾーンへ飛び込んでしまった私は、抵抗空しく幾重ものバインドで雁字搦めにされてしまいました。無論、それだけで終わる筈も無く、私を取り巻くように凄まじい勢いでスフィアが展開され、魔力がチャージされていきます。

その数、合計38基。

これだけの発射台を用意して1発だけの発射という事は無いでしょうから、1基あたり10発ずつと仮定すれば380発、20発ずつなら760発といったところですが、肝心な連射性能が未知数のため樂觀視は出来ません。ですので、念には念を入れて……。

「フォトンランサー・エクスキューションシフト!!」

「Fire.」

あ、この弾幕はちよつと……………。

くく

Side:フェイト

万感の思いを乗せ、最後の魔法を放つ。——刺し通すはずの一撃が左手を負傷させるだけに止まり、それでも諦めずに魔力を使い切るつもりで発動させたのは、奥の手の一つである《Photon lancer・Execution shift》。38基ものスフィアで包围し、毎秒7発、5秒間に渡る全力斉射で合計1330発の魔力弾を撃ち込んだ後、不要となった38基のスフィアで再構成した砲撃魔法《Spark end》を放ち、着弾地点付近に漂う魔力残滓ごと対象を爆破する。

この2つの魔法からなる一連の大技が、私が一度に放てる最大の火力だった。

煙は未だに晴れず。けれども、やりきったのだ。ひたすら撃ち込んで、吹き飛ばしてきつと跡形なんて何も無くて、これで終わりなんだと勝手にそう思い込んでしまっていた。否、そうあつて欲しいと願ったのだ。

けれども、彼女は存外平気そうに煙の向こうから現れて――

「――《Restric t lock》――」

「それじゃ、今度はこっちの番！」

そして気付けば、幾つもの軽い衝撃と共に四肢のみならず全身を満遍なく拘束され、身動きが取れなくなってしまった。しかも器用な事に、反応装甲が欠けている部分を選んでの拘束である。これでは、反応装甲を起爆させて強制解除する事など儘ならないし、そもそも魔力はブラックアウト寸前まで尽きてしまっている。為す術など、もう何も残されてはいなかった。

「集え、綺羅星」

そのコマンドと共に、圧縮魔力の残滓や大気中の魔力が粒となり、彼女の元へと集い始める。全てがキラキラと輝きながら流れを作り、編み込まれるように集束していく様

は、言葉に尽くせぬ程に幻想的な光景で……。私は何時しか疲労も痛みも忘れ、ただただ無心に、その様子を目に焼き付けようと見入ってしまった。

「全力全開、スターライト・ブレイカー……!!!」

「『Starlight breaker』」

光が満ちる。やがて世界は白へと色を変え——……………

くく

Side:クロノ

現地時間0415。 “なのは” とフェイトが交戦を始めて5分と少し。先日、 “プレシア・テスタロッサ” による物と思われる次元跳躍攻撃があった事や、フェイトの脅迫を鑑みてユーノと共に市街地の防衛へと回っているもの、実際のところその予兆は微塵も感じられないまま遊兵と化した僕達は、 “なのは” の奮闘を遠くから見守る事しか出来なかった。

「そんな、 “なのは” さんが押されているなんて……」

「いや、おそらくフェイトが普段以上に突っ込んで、*「なのは」*が引いているだけだろう。現に危うげは無いし、もしかしたら暖気運転も兼ねているのかもしれない」

士官学校時代では非常呼集で叩き起こされた挙句、仮想敵役の魔導師を高度3千メートルで迎撃するというシナリオをこなした身としては、今の*「なのは」*の心境は察せなくもなかった。

『きついのだ、この状況は。』

思いとは裏腹に身体が追い付かないというのは、かなりもどかしく感じてしまう。それでも、やらなくてはならないし、やり遂げたい思いが身体を衝き動かす。そして尚更、もどかしく思う。けれども、焦らずに身体を慣らそうとしている彼女を見る限り、そういった心配は杞憂というものだろう。

それよりも気になるのは、この後の事だ。

フェイトは魔力リソースとなる魔力流を準備した上で、夜襲同然の決闘を*「なのは」*に吹っ掛けている。つまり、勝ちに来ているのだろう。ではその陰で動いているであろうアルフやプレシアは、何を考え行動しているのか？ 未だにジュエルシードの収集目的が判明しない中、それだけが懸念事項だった。

現地時間0432。

*「なのは」*の調子が上がり、フェイトと付かず離れずの接戦を海上で繰り広げるよう

になった頃、それは静かに起きた。微かに、それでも異常だと分かる空間の揺れ。――

――次元震。ジュエルシードを回収しきった今、そう易々と発生しないはずの現象が起ころという事は、おそらく誰かがジュエルシードを発動させたのだろう。馬鹿げている……。次元震がもたらすのは破壊だけだというのに。

「エイミィ」

「> はいはい、クロノ君。只今震源地を絶賛割り出し中だよっ！ だから、もうちよっと待ってね？ <」

「了解。頼りにしてるよ」

空間モニターの向こう側ではエイミィが慌ただしくコンソールを操作し、艦長が指示を出す様子が伺える。やはり、この決闘は陽動なのだろうか？ だとすると、向こうは“なのは”を最大戦力と捉えている事になるんだが……。まあ、気にするまい。

「> 発震源特定！ 艦長！ <」

そう言って表示されたのは、次元空間を漂う巨大要塞の姿だった。それはモニター越しでも分かる程の威容を誇り、思わず「大物だな」と軽口を叩きそうなる。

「> エイミィ、待機中の武装局員に出勤命令を。クロノは一旦此方に戻って、二班と共に出勤する様に。ユーノさんは、引き続き現場待機をお願いします <」

「了解」

「分かりましたー！」

果たして、あれは震源地であると共にプレシア等の一味も潜んでいるのだろうか？
確証は無い。けれども居れば捕まえ、居なければ次の一手を打つだけである。憶することとは無い。気負うことは無い。現場では己を信じ、全力を尽くすのみだ。たつたの、それだけなんだ……。

「転移、アースラ」

そして転移後、5分と経たず僕を含む第二班の出動が速やかに行われた。『一班が強襲を受け、半数以上が戦闘不能』という凶報と共に。

：

……

……

少しだけ、現実逃避をしましょう。

……

……

：

“魔導師ランク”という制度がある。これは魔力量の多寡や保有資質によって決まるもので、僕の場合はAAA+というランクだが、実はこのランク帯の平均魔力量以下

の魔力量しか持ち合わせていない。つまるところ、運用技術や魔力変換といった保有資質の面で平均以上に優れていれば、僕のように差し引きプラスの分で上のランクを狙えたりするのだが……………。

「> ブリッジ、こちら二班長。負傷者及び魔力切れ多数！ この儘では空挺堡を維持できません！ <

「> 落ち着け二班長。一班再編完了！ これより戦線に復帰する！ <

「> こちら医療班。流れ弾が多く、重傷者の後送が出来ない。支援を！ <

こういう多勢に無勢という状況では何だかんだで魔力量が物を言うので、「ランク相応の魔力量が欲しい」と思わず無い物強請りをしたくなる。しかし悲しかな。此処数年、魔力量は伸びを見せず、ついでに武装局員の隊長クラスは平均Aランクで、その部下はBランクだ。

要するに、この場には「なのは」の砲撃魔法のように敵を一掃出来る者が居らず、僕は僕で「要塞の駆動炉を停めてね♪（意識）」という艦長の無茶なオーダーに応える為、先程から単独先行をしているので直接的な支援は不可能である。

ちなみに多勢とは、要塞内に突如湧いた人型魔導兵器の事で、推定100体以上。魔導師ランクで言えばA A Bランク相当とまちまちで、如何に知恵と連携で勝ろうとも物量と火力で勝る相手に持久戦を耐えるのは少々分が悪い。

よって、速やかにエネルギー供給源と思われる駆動炉を停止または破壊し、その余勢で次元震を止めたり、あわよくばプレシア等の事件関係者を捕縛しないといけないのだが、残念な事にこの身は一つ。出来れば、なのは、せめてユーノの手でも借りなければ、それらの達成はとても難しいように思えた。——主に、魔力と時間的な問題で。

「ふむ……。エイミイ、武装局員への指揮は私が預かります。貴女はクロノと、なのは、さんのナビを優先なさい」

「えーと、それってもしかして……？」

「現場で陣頭指揮って事ね。ちなみに、アースラの駆動炉からちよろつと魔力を拝借するから、エネルギーの再配分は任せたわよ？」

「デスヨネー。はいっ、精一杯頑張ります！」

何ともまあ、人手不足極まりりといった感じの状況になって来たな……。こうなっては一つの失敗が全体への致命的な負荷となりがちなので、此方もエイミイに負けじと頑張らなくては。それに、艦長——母さんが陣頭指揮を執るのだ。執務官として、息子として、惨めな姿など晒せるはずが無いじゃないか。

さて……。そろそろ現実を見据えろとしよう。

敵は推定AAAランクの人型魔導兵器が、残り3機。対して此方は、これまでの戦闘で疲労困憊こんぱいとなったAAAランクの執務官が1人。何とか駆動炉がある機関室まで辿り着いたものの手厚い歓迎を受けており、そろそろ次元空間の藻屑と消えるか、叩き切られて肉片となるかの二択が脳裏にチラつき始めている状況だ。

尤も、少し後方へと引いて魔力回復に努めれば突破も容易だろう。しかしそうすると今度は、時間が経つに連れて増す次元震を止められない可能性も出て来るのだ。此方を立てれば彼方が立たず、彼方を立てれば此方が立たず。単なる推測で自縄自縛する様は何とも滑稽ではあるものの、こればかりは無理を通さないと上手くいかない現場が悪いとボヤくしかない。——そう思っていたところに何とも心強く、涙がちよちよ切れそうな叱咤激励が飛び込んで来た。

「> クロノ、次元震と空挺堡は私が抑えます。だから貴方は無理をせず、けれども可及的速やかな対処を心掛けるように。良いですね? <」

「イエス、ママ」

無茶なオーダーの上に、更なる無理な要望が覆い被さって来る辺り、向こうの慌ただしさが目に浮かぶようだった。それから数秒と掛からず、次元震の振動が遠ざかるように小さくなっていく。これで時間は出来た。作ってもらった。なら次は、今度は此方がやり遂げる番だ。

「やしてと……」

そして僕は、脱兎の如くその場を後にした。戦闘において魔力切れを起こすという事は任務失敗のみならず、最悪の場合は殉職と特別勲章授与コースであり、『人的資源の損失回避及び全体士気の低下抑制の面から、そういった負の連鎖は断たねばならない』と戦闘教本にもきちんとして明記されている。

故に、これは敵前逃亡では無い。再突撃準備の為の後進であり、疑似潰走。即ち、戦略的撤退なのだ。恥じる事は無いし、惜しむ事も無い。ただ悔やむべきは、己の魔力不足と深刻な人手不足のみである。

「> もしもし、クロノ君。こちらブリッジ <」

「如何したエイミー？ 悪いが手短に頼む」

魔力は時間経過と共に自然回復していくが、精神を集中させてリンカーコアを活性化させた方が効率が良いので、あまり気を散らしたくは無かった。エイミーもその辺りを察してくれたのか、内容をかなり端折った上で口早に「助っ人送ったよ！ ではまた！」とだけ伝達し、返事を待たずに通信をぶつぷりと切ってくれた。

「……………いや、それじゃ誰が来るか分からないじゃないか？」

ついでに何時来るか、どう合流するかもだ。——等と思っていると、床下からやたら高密度の魔力反応を感知。急いで飛び退くと、先程まで立っていた所を掠めるよう

にピンク色の閃光が天井に向かって突き抜け、程無くして穴の中から見知った人物が飛び出して来た。

「えつと……、大丈夫ですかクロノさん？　一応、当たらないように撃つつもりなんですけど……」

「それは一般的に誤射と見做みなされる行為なんだが……。まあ、とにかくだ。君が来てくれて心強いよ、＼なのは」

何時か誤射ネタで、からかってやろう。そう心に刻みつつ、僕は労いと感謝の意味を込めてゆっくりと左手を差し出したのだった。

第19話：在りし日の追憶、揺蕩うモノ【前編】

Side：フエイト

私が最初に目を覚ました時、不思議と記憶らしい記憶は何も持っていないませんでした。辺りを見渡すと、其処には容姿が異なる人が二人立っていて、5分程で私の検査を終えると優しそうな人を残し、怖そうな人は部屋から出て行きました。

「もう動いても大丈夫ですよ。フエイト」

「フエイ、ト……?」

「ええ、それが貴女の名前です。そして、私の名前はリニスと申します。先程出て行ったプレシア……。ではなくて、ドクターの使い魔です」

「使い魔さん……?」

「はい。人間の様に見えますけど、元はちゃんとした山猫なんですよ?」

そう言つてリニスは、頭上へ乗せるように浅く被っていた帽子を脱ぎ、一瞬だけ大きな猫耳を出現させたかと思えば直ぐに消し去ってしまった。……勿体無い。似合っているのだから常に出していれば良いのにと、ぼんやりそう思いました。

これが、私の最初の記憶。

それからリニスは色々世話をしてくれて、食事も、お風呂も、睡眠も、勉強も、遊びでさえ、なるべく付き添ってくれました。たまに、ドクターの世話や研究の手伝いで居なくなる時もあったけれど、それでも一日の大半を割いてくれていた事には変わりなく、私はその幸せに溺れ、迷惑にならないように心掛けつつも可能な限り甘えました。

季節は巡る。

夏が来て、秋が来て、冬が来て、また春が来て。その間に、今住んでいる『時の庭園』の事、その周囲の事、更にその外の世界の事や、次元世界の成り立ちや社会常識、そして魔法といった数多くの事を学んだ私はある日、リニスに連れられ初めて外の世界を目の当たりにしました。

其処は片田舎の小さな村ではあったものの、リニスやドクター以外の他人であったり、私以外の大小異なる子供が存在して、同じように生活している。そんな風に、見たり聞いたりした事を知識と擦り合わせて裏付けをし、リニスに補足して貰ったり、携帯情報端末で調べたりしている内に陽が暮れて帰路に着く。そういつた生活が暫く続いて……。

それから買い物をしてみたり、公共交通機関に乗ってみたりと段階的にコミュニケー

シヨンや処世術と言う物を学び、慣れて来ると都市部へ連れて行つてくれたりと、本當に楽しい一時でした。やがて月日は流れ、リニスとのピクニック中に保護した狼をアルフと名付け、更には使い魔として受け入れたその年の秋。ある転機が訪れます。

「ねえ、リニス。私に見せたい物つて何なの？」

「ふふっ。もうちよつとしたら分かりますよ、フエイト」

「ねえねえ、それつて食べれる物お〜？」

「そうですね……。とつても硬いのは確かです」

そう言つて私とアルフの質問をはぐらかしつつ、リニスが案内した先は工房か何かの部屋のように、滅多に踏み入らない区画にその部屋がありました。色々と見慣れない物ばかりでしたが、取り分けて目を惹くのは作業台に置いてある黒い斧で、よく見るとそれはデバイスのようでした。

「これつて、もしかしてデバイス……？ リニスが作ったの？」

「はい、その通りです。正確にはインテリジェントデバイスで、名は『バルディツシュ』と名付けました。何か、話し掛けてみて下さい」

「えつと……。始めまして、バルディツシュ。私の名前はフエイトつて言います」

「―― Set up …………… complete. Good morning
i r. ―」

「音声証証良し。これでこの子は、フェイト専用のデバイスとなりました」

驚く私に、リニスは「バルディッシュ」を手に取ると、此方が落とさぬように配慮しつつ手渡してくれました。持てなくは無いのですが、やはり相応に重く、これが武器である事を何となく実感する事が出来ました。

「これは貴女の道を切り開き、思いを貫き通すための刃です。そして、闇夜を照らす閃光でもあります。どうか共に成長し、良好な関係を築いていける事を願っています」

その言葉に対して、あの日の私は何と答えたのだろうか……？ 微笑んでいるのに、何処か憂いを帯びたりニスの表情だけは目に焼き付いている。けれども、それから後のことは余り思い出したくはありませんでした。厳しさを増す訓練。少し怖いリニス。そんな日々が続いたある日、唐突に終わりを告げられたのです。

…

…

…

「よく聞いて下さいフェイト、アルフ。貴女達は、とても良い生徒でした。教え甲斐があつて、覚えも早く、やる気にも才能にも満ちていて……。教師冥利に尽きる自慢の生徒でした」

……………嫌だ。

「そんな貴女達に、2つだけ御願いがありません」

……嫌だ。

「まず1つ目。どうか、ドクターを支えてあげて下さい。あの人は優しく聡明な方でしたが、それ故に——」

嫌だ嫌だ嫌だっ！

「——次の2つ目は、簡単な事です。これからもよく学び、よく鍛え、そして何時かは良き理解者を得て、幸せな人生を送って貰いたいのです」

行かないでリニス!!

「そう……。たとえば私が、居なくなつたとしても」

……

……

……

あの時ばかりは、信じたくありませんでした。リニスが嘘を吐いているんだと、私が悪夢を見ているだけなんだと信じたかった。そう思い込みたかった。けれどもそれは本当の事で、否定しようが無いくらいに現実の出来事で……。私は泣いて、泣き^{すが}縋^{すが}つて、やがて泣き疲れて眠ってしまつて。目を覚ますと、もう何処にもリニスは居ませんでした。

（ ）

Side : ■■■

ママの帰りは、今日もまた遅くなるようでした。朝早くに起きて御飯を作り、私とリニスを残して仕事へと出掛けた後、日付が変わるまで帰って来ない。そんな日々が、もう1ヶ月以上続いていました。これまでも度々あったのですが、今回ののはとても長くて……。

寂しい。

そんな思いを抱きながらリニスと一緒に留守番をして、たまに家政婦さんに連れられて公園で運動をしたり、家でテレビを眺めたり、作ってもらった昼食や夕食を食べて、お風呂に入つて、歯磨きをして、その後には仕上げ磨きをしてもらい、家政婦さんが帰った後は適当に時間を潰し、それからリニスと一緒に寝て朝を迎える。

こんな毎日が続いて、続いて、ある日の朝。

私は、ママに御願いをしました。「昔のように、連れて行って欲しいの」——と。ほんの2年前くらいまでは、ママに連れられて職場にお邪魔させて貰ったり、併設されている託児所へと預けられていたので出来るはずだと考えたのです。

もし連れて行ってくれるのなら、少なくとも出勤と退勤するまでの移動時間は一緒に

居られる。そう思い御願ひしてみたところ、その希望は2日後に叶えてくれました。但し、お仕事が午後6時までには終われないようなら、家政婦さんに連れて帰ってもらおうという条件付きで残念でしたが、久し振りにママと手を繋いで歩ける喜びは何物にも勝りました。

だから託児所に預けられても、私は平気でした。少しだけでも手を繋げた。少しだけでも話す事が出来た。少しだけでも一緒に居られた。嬉しくて、とても嬉しくて。それに今の仕事が終わったら、私の為に休暇を取ってくれと約束もしてくれたのです。

その時には何を話そう？ 何をしようか？ 何処へ行こうかな？

止め処無く溢れてくる思考は勢いを増して、空想は果てしなく広がっていききました。綺麗な花畑を見てみたい。公園や、海や、山や、水族館や、遊園地や、映画館にも行ってみたい。一緒に買い物もしてみたいし、一緒に料理をしたり、一緒にお風呂に入った時間だけでも良い。ママが居て、私が居て、出来れば其処にはリニスも居て、楽しい時間を過ごせたらなんて考えていると、視界の端で何かが光ったような気がしました。

不思議に思った私は立ち上がり、外がよく見えるように窓辺へと駆け寄りました。すると遠くの方で、雷のような音と共に金色の環が弾けたかと思うと、キーンと耳鳴りがして、視界が真っ暗に………

第20話：終焉。 崩れ行く思いなの

Side:ユーノ

《Starlight breaker》

そう名付けられた恐るべき星の一撃が、フェイトさんを飲み込んだ。——それはつまり、もしこれが物理破壊設定なら幾千幾万もの人命を都市ごと容易く平らげるであろう魔法が、“たった一人”の意志を撃ち砕くために放たれ、阻まれる事も無く、滅衰無しの最高火力を保った状態で直撃した事を意味する。

やり過ぎだと思った。そして同時に、羨ましくもあつた。あらゆる手を尽くして戦い続けたフェイトさんに、それを真正面から止めてみせた“なのは”さん。本当に自分勝手で無礼だと承知しているものの、この気持ちは偽り様のない本心だった。そう、僕は……。

彼女達に、憧れを抱いてしまっていた。

あんな風に成りたいと、あんな風に成れないからこそ、ああいう風に誰かとぶつかり合ってみたいものだと思し、烏漕おこがましくも羨望したのだ。彼女達の過去も知らず、其処にある思いを汲み取らず、まるで英雄譚を見ているかのような心持ちで。全く、なんて可笑しな話だろうか……。

これは現実だ。それは唾棄すべき冒瀆的思考だ。僕は当事者の一人で、これは今起きている出来事なんだ。傍観者で居られるものか。もつと関わるべきだ。問題を解決しよう。考えなくては！ 動かなくては！——けれども理性が幾らそう叫んだところで、この意識はなかなか拭えそうになかった。

「フエイト！ フエイト、しっかりっ!!」

切羽詰まった声に、意識が引き戻される。ふと視線を向けると、其処には撃墜されて海中から引き揚げられたフエイトさんが臨海公園の歩道上に寝かされており、何処からか駆け付けて来たアルフさんが必死に呼び掛けながら、フエイトさんのバイタルチェックを。そして「なのは」さんは、その傍らで自分の左手に間接圧迫止血を行いつつ、アースラへ連絡を取っているようだった。

未だに現場待機の指示が解かれていないものの、何か手伝えるかもしれないと思い、三人の元へと飛行魔法で近付く。

「嗚呼、これは……」

一目見て、予断を許さない状況である事が窺えた。痙攣^{けいれん}、吐血、異常な発汗、呼吸が浅く速く不定期で、唇の色からして体温低下も著しい。如何見ても魔力ダメージや魔力不足、または海水に浸かった事だけが原因とは思えなかった。そう考えていた所に、アースラからエイミイさんの通信が届いて――

Side:なのは

そして私はクロノさんへの支援要請に応えるべく、スクライアさんとアルフさんに救護を任せ、巨大要塞の奥へ奥へと突き進むのでした。

正直、フェイトさんの容態が気になって仕方がありませんが、簡単な外傷救護しか出来ない私が居たところで邪魔でしょうし、その鬱憤は人型魔導兵器へと晴らしつつ進んで、飛んで、シヨートカットを魔砲で作り、無事にクロノさんと合流した所までは比較的順調だったのです。

しかし、此処で思わぬ問題が。

此方へと差し出された、クロノさんの左手。即ちそれは、握手を求めているのでしよう。地球上でも珍しくないコミュニケーション方法の1つで、感謝や激励などの際に併用される極普通の行動です。ならば、此方も左手を差し出して握手するのが通例なので

すが、残念な事に先程フェイトさんに貫かれたばかりでして……。

ええ、当然のように血塗れです。

一応、バリアジャケットを調整して防御フィールド越しに出血箇所の圧迫止血を行っていますし、左手の痛覚も「レイジングハート」の補助によつて遮断しているので痛くは無いのですが、視界に入れて気持ちの良い物ではありません。しかしながら、誤魔化すのも無理があるので素直に握り返すと、やはり想定通りに指摘されました。

「なのは」、その傷……！」

「大丈夫です。応急処置は済ませてますので」

痛覚遮断により鈍くなつてしまった左手の触覚は、「レイジングハート」にエミューレートして貰う事で疑似的に再現出来ており、筋肉や骨が物理的に断たれて動かない指も防御フィールド越しでマニピレータのように操作中。そして念の為、鎮痛剤代わりの脳内麻薬を少々過剰に。なので、戦闘をする分には大丈夫な筈です。はい。

「……分かった。但し、帰還したら医療スタッフの手当を速やかに受けるように」

「ラジャーです」

「それと前衛は僕が受け持つので、君は無理しない程度に援護を頼む」

「委細承知しました」

その後、余剰魔力をクロノさんに譲渡した後、魔力に物を言わせた強襲で駆動炉を制

圧。更に、供給源と思われる高エネルギー結晶体を封印したところで、余剰魔力を溜め込んでいる翼が一对消失してしまいました。昨夜までは三対六枚の翼だったのですが、残すは一对二枚のみ。余裕が失われつつある事に、僅かながら不安を覚えてしまいます。

尤も、駆動炉からのエネルギー供給を断ちましたので、人型魔導兵器や要塞の防衛機能は停止しており、あとは容疑者とジュールシードの確保をすれば一段落なのもまた事実。きつと大丈夫。上手く行くはずだ。そう信じて私は、クロノさんの後に続いて最下層を目指して行きました。

くく

Side:リンディ

「> 艦長、此方クロノ。駆動炉制圧、引き続き任務を遂行します <」

「了解。それでは手筈通りに」

「> イエス、ママ <」

クロノからの通信を切り、意識を集中させる。空挺堡くうていほの防衛と、負傷者の後送は完了済み。そして駆動炉からのエネルギー供給が途絶えた次元震は、たつた今押さえ込めた。ならば……、あと此方が出来る支援は、言葉を用いた時間稼ぎぐらいであった。空

間モニター越しに、プレシアへ投降を呼び掛ける。

「此方、時空管理局提督「リンディ・ハラウン」です。プレシア・テストロッサ、次元巡航船への攻撃容疑で貴女を逮捕します」

「> それは勝利宣言のつもりかしら……？ だとしたら貴女、とても滑稽ね <」
「何が可笑しいのですか？」

まさか、此処から逃げる算段があるというのだろうか？ それとも、もう目的は果たされてしまったとでも？ あらゆる可能性を考慮し、各種センサー類や前線からの情報を精査していると、プレシアの背後にもう一人——医療用ポッドの中で浮かぶ、フエイトによく似た幼い少女が映り込んだ。

「もしかして、その子は……」

「> そうよ。あんな失敗作とは違う純粋なオリジナル。私が愛するたった一人の娘、アリシアよ <」

「プレシア……。貴女という人は、生命操作技術が禁忌だと知って尚求めたのですか？」
つまり今回の事件は、16年前の事故で死んだ娘を生き返らす為に人道を外れ、此処まで至ってしまったとでも……？ そうであるなら最早、正気の沙汰ではない。

「死者は蘇りません。たとえ複製したところで、その魂が娘さんの物では無いことぐらい貴女も気付いている筈です」

「> ええ、その通りよ！ それでも、継すがらずには居られなかった……。私は初め、
魂は記憶に基づく」という僅かな可能性を信じて研究を進めたわ。けれどこの方法で
は、意志を継がせる事しか出来なかった。分かるかしら？ あの失敗作には、アリシア
という過去しか宿らなかつたのよ！ 私が欲しいのはアリシアその物なのに、出来たの
はアリシアと思ひ込んだ人形でしかない。——だからこそ私は、計画を変える事に
した <

「それが、今回の事件の切っ掛けですか……」

如何して、アリシアを安らかに眠らせる事が出来なかつたのだろうか。進んだ科学技
術が、発達した魔法技術がプレシアに幻想を抱かせてしまった……。？ だとしても、魂
という神聖不可侵の領域を侵してしまえば人は死から目を背け、生を軽んじる様になっ
てしまう。私は法の番人として、それを赦す訳にはいかなかった。

「> けれど残念な事に、それもまた御破算となつてしまったわ……。ねえ、貴女。
【アルハザード】を御存知？ <

「御伽噺の範囲でなら、多少は」

異様に発達した技術を持ちながら、次元断層の狭間へと消えてしまった未知の世界。
それが【アルハザード】なのだと、遙か昔から真しやかに語り継がれている。尤もそれ
は、「次元災害で消えてしまった世界をモデルにした、空想上の産物だ」という説もまた

根強く、真偽は明らかになつていない。

「> なら説明は省けるわね。私は其処に眠る秘術を求め、……っ <」

溢れ出した血と、止まらぬ咳。画面の向こうで彼女が口元を押さえてよろめくも、何とか踏み止まった。吐血を伴う病気は何であれ命に関わる事が多く、顔色を注視してみるとメイクの濃さで分かり辛いものの、死相が浮かんでいるようにも見える。

「> 目指そうと、……した。でもあの役立たずは、鍵となるジユエルシードを14個すら集めきれず、計画は頓挫……。全く、最後の最期まで本当に“ツイて”なかつたわ………。」

「プレシア……。今すぐ武装を解除し、投降して下さい。貴女は適切な治療と、法の下の裁きを受けるべきです」

「> 残念ながら、もう手遅れよ…… <」

其処で少しだけ、言葉が途切れる。ただの時間稼ぎのつもりが、プレシアから有益な証言を引き出せてしまった。公人としては、それは喜ぶべき事なのでしょう。しかし私人として、一人の母親としては胸が引き裂かれる思いでした。執念と狂気と家族愛の果てがこの“ザマ”など、あまりにも報われないし救われない。

そう考え込んでいる内に、彼女が新たな魔法を発動させた。それはごく自然に見逃してしまうような所作で、呼び止める間も無く魔法陣が幾重にも展開され、床や壁、天井

にも新たな亀裂が走り、要塞の崩壊が加速度的に早まっていく。

「貴女、まさか……？」

「> ……さようなら、リンディ提督 <」

やがて大きな音を立てて床が崩れ、プレシアとアリシアは虚数空間へと落ちて行つたのでした。———こんな筈では無かった。こんな風に彼女を追い込むつもりなんて……。

しかし幾ら悔いたところで、反応ロストの判定が覆ることは無い。此処は非情に徹し、次の最悪を回避しなくてはならなかった。だから私は、思考を潰す。感情を削ぎ落とす。涙を堪え、呼吸を整える。そして努めて平淡に、撤退の指示を下したのだった。

くく

Side : なのは

こうして、今は名も無き事件が終わりを迎えました。結局の所、私とクロノさんは、プレシア・テスタロッサさんの元へと辿り着けないまま引き返し、彼女が持っていた8個のジュエルシードもまた、虚数空間の中へと消え失せてしまった様です。

尚、虚数空間とは次元震に伴って発生する吸引力が無いブラックホールの様な物で、落ちれば最後、記録上生還者ゼロ、魔法もキャンセルされてしまうので探しようが無い

のだとか。よって今回の件は容疑者「死亡」と見做して処理するのだと、クロノさんが独り言として呟いてくれました。

また、フェイトさんの容体やアルフさんの様子なども呟いてくれたりと結構だだ漏れで、時折愚痴が混じるのは御愛嬌。能力主義であるのは良い事だと思いますが、私より2〜3年ほど年上でしかない少年の青春時代が就労によって消費されているとは、何たる事でしょうか。思わず、同情にも熱が入ってしまいます。

閑話休題。

ちなみにフェイトさんは、違法薬物やら限度を超えた魔力運用などの後遺症が心配されましたが、スクライアさんとアルフさんによる応急手当てと、アースラ医療班への迅速な引き渡しに功を奏し、要観察ではあるものの今は回復へと向かっているようです。

「肉離れや全身の傷に関しては自然治癒を待つしかないが、意識は戻ったようだ。遠からず独房へと移して、それから次元空間が安定したら本局へと移送する」

ふむふむ。

「それと、＼なのは＼が希望しているフェイトとの面会に関しては、僕が立ち会うという条件付きだが艦長からの承認は得ている。予め、希望日時を伝えてくれると大変有難い」

ほうほう。

「……………なのほ”。もしかして、結構疲れているんじゃないか？」
「もしかしなくても、実は割と深刻に…………です」

左手の治療後にアースラで遅めの朝食を頂いた結果、緊張がほぐれてしまったのでしよう。満腹感と疲労感と寝不足と血液不足により、もうノックアウト寸前だったりします。

「それなら医務室のベッド…………は今頃満員だな。そうなるよ——」
あつ、此処の机と椅子で仮眠しますので、お構いなく。ではでは…………。

第21話：在りし日の追憶、揺蕩うモノ【後編】

Side：プレシア

最愛の娘、アリシアを喪つてからどれ程経つたのだろうか。涙は枯れた。怒りは冷めた。それでも私は、人形のように日々を生きていた。理由はただ一つ。アリシアを生き返らせる為。

既に脳死状態だと診断されて尚、生命維持装置に繋げて有りもしない奇跡を祈り、死という眠りから解き放つ方法を求め、正道の物だろうと邪道の物だろうと片つ端から調べ尽くす。希望なんて、まるで無い。ただ、それによつて時間と資金が浪費されるだけだとしても、私は決してアリシアの死を認めたくはなかった。

そんなある日の事。

稼ぎだけは良い非合法的な実験をこなす内に、自らを【無限アンリミテッド・デザイアの欲望】と形容する胡散臭い男と出会つてしまった。あらゆる技術や科学分野において、非常に優秀であると自負する彼は協力者を求めており、私の仮住まいへと押しかけて来たのもその一環なのだと宣のたまい、熱に浮かされたように話を続けた。

「生まれてこの方、ずっとボツチという奴でね。やりたい事は多々あれど、この身は1

つ。そこで、だ……。君に研究を1つ任せたいのだが、如何だろうか？　なあに、心配せずとも君が興味を持つ物さ。そして比較的容易でもある」

そう言つて無造作に渡して来た研究が、記憶転写型の人工生命体複製技術を現代へと蘇らせる計画——通称、『プロジェクトF・A・T・E』だった。専門外の分野ではあつたものの「これならば」と思つた事もあり、基礎研究のデータを読み解き、彼の助言や助力を得ることで次第に完成へと近付いて行つた。

しかし同時に、違和感も覚えた。何故、これ程の技術が失われていたのか？　もし次元世界ごと失われているのなら、その世界は何という名の世界なのか？　そしてその世界には、もっと有用な古代遺産が眠っているのではないか？

研究の傍らで調べる最中、抱いた疑問は憶測を呼び、推測へと至り、半信半疑へと変わつて、やがて妄信と化していった。失われし都、「アルハザード」。次元空間の狭間へと消えた神秘を求めてしまうくらいには、もう何も残されてはいないと感じてしまったからだ。

結局のところ、完成した『プロジェクトF・A・T・E』を応用しても、アリシアを取り戻すことは叶わなかつた。出来たのはアリシアの記憶を持つ他人でしかなく、やはりアリシアの魂は、アリシアの心は、アリシアの身体にしか存在しないのだと強く確信すると共に、新たな方法を模索しようと思ひ立つのだった。

次こそは必ず……。

そう願っていたけれども現実は無情で、何処までも理想を阻み続けてくれた。最早この思いは届かず、次を望める程に私の命は持ちそうにない。だから全てを諦め、終わらせようと決心してしまえば、もう何もかも気に掛ける必要は無かった。

嗚呼、それならば……。良い事を思い付いた。どうせ死んで居なくなるのだ。計画を邪魔してくれた管理局や、“高町なのは”に意趣返しをしてやろう。何が出来るのか。如何すれば上手く行くのか。幾つか試案し、切り詰めた上で、失敗作を呼び出すことにした。

……

……

……

そして今、目障りな者同士を潰し合わせて戦力を削ぎ、『時の庭園』を崩壊させる為の時間稼ぎにも成功した。あとはアリシアと共に、虚数空間へと身を投じれば全てが終わる。——だというのに、本当にこれで良いのかと少しばかり躊躇ってしまう。

弁を弄するつもりで言葉を交わしたのに、此方が乱されるとは何とも可笑しな話であ

る。思えば、怒りをぶつける相手は居ても、聞かせる相手はこれまで居なかった……。その事実が気付く「なるほど」と飲み下したところで、未練がまた一つ山を成す。けれども、もう如何しようもなかった。此処を墓場と定め、アリシアと共に沈み逝く。それしかない。それだけが、母親としてやれる最後の事なのだ。

「> 貴女、まさか……? <

迷いは一瞬だった。

「……さようなら、リンディ提督」

床が崩れ、虚数空間へと放り出される。そして私はアリシアと共に、何処までも何処までも落ちて行き、やがて思考はぶつつりと途切れ——……………

く

Side : ■■■

「気分は如何ですか、ドクター?」

「……………此処は……?」

「此処は医務室で、より正確にはベッドの上となります」

先程、意識が戻ったばかりのドクターに声を掛けてみると、未だに呆然としているようだった。無理もない。ようやく応急処置を済ませたばかりなのだ。薬の副作用で意

識が混濁していても、何ら不思議ではなかった。

「そう……。………迷惑を、かけたわね……」

「そう思うのなら、どうか御自愛して下さいませ」

精神リンクの乱れに気付き、ドクターを探していなければ今頃如何なっていた事やら……。見つけた時には既に倒れており、口元からは少なくない吐血。人造魂魄こんぱくの身ではあるものの、心臓が止まりそうな程の衝撃とは正にあの事だろう。

「時間が無いのよ……。貴女だって、知ってる……。…でしよう？」

「はい。存じております」

不治の病に侵され、余命はもう3年程だと診断データが示しています。されど、3年近く残っている寿命を削るように生きるのは、勿体無いと思うのです。死者蘇生の研究を諦められないのなら、捨て切れないのなら尚の事。長く、しぶとく、能率重視で命を使い切る方へと意識すべきではと、烏滸おこがましくも愚考する次第です。

「……。一体、……。何を……。…？」

「過労と不眠の問題を、一発で解決するお薬を投与しているんです。ちなみに、またの名を『睡眠導入剤』とも言います」

そう告げると恨めし気に睨まれてしまいました。数分と経たずドクターは眠りの淵へと誘われ、やがて規則正しい寝息を立てるようになりました。こうして寝顔を拝見し

てみますと、普段の険しい表情が嘘のような穏やかさで、「ずっとこのままで居て欲しい」という勝手な願いが脳裏を過ぎってしまいます。

しかし、叶う事はないでしょう。

きつと貴女は挑み続ける。依るべき記憶を持たず、言葉に「思い」という質量を乗せられない私の言葉では、とても引き止めきれれるとは思えません。ですから今の内に、少しでも休んで行って下さいませ。貴女が最後の最期まで、夢へと立ち向かって行けるように。そして何時か、この悪夢から目を覚ませるようにと祈っております。

「お休みなさい、プレシア……………」

第22話：訪れた平穏と痛みなの

Side：なのは

目を覚ますと、何故だか知らない天井を見上げる形となっていました。不思議に思っ
て周囲を見渡せば、アースラ内の隊員用個室と思われる場所のベッドで寝かされてお
り、「レイジングハート」に事情説明を求めたところクロノさんが寝易い様にと気を利か
し、魔法で空き部屋へ牽引してくれたとの事でした。

紳士的で大変有難いのですが、牽引される図が非常にシユールなので素直に背負って
欲しかったような、残念なような……？

まあ、何はともあれ。クロノさんに感謝をして、そろそろ自宅の方にも戻らないとい
けません。気配察知能力に長けた、お兄ちゃんやお姉ちゃんなら深夜（もしくは早朝）の
緊急出勤に気付いていると思います。お母さんやレンちゃん、晶ちゃんには予定とは
違って早めに且つ何も告げずに飛び出したので、今頃は心配している様子が目に浮かび
ます。

「> クロノさん、少し宜しいでしょうか？」 <

「> 如何したんだ、なのは？」 <

感度良好。念話に支障は無いようです。

「> その前に、まずは御礼の方を……。ベッドへ運んで頂き、有り難う御座いました。とてもよく眠れました <」

「> 嗚呼。如何致しまして <」

「> 次に御願いなのですが、一度帰宅しても構わないでしょうか? <」

「> ん……。? 濟まない。まだ伝えてなかったな……。 <」

クロノさん曰く、先の中規模次元震や虚数空間の影響で次元空間が歪んでおり、安定するまでは物質転送や次元間通信すら儘ままならないとの事。ちなみにアースラの観測班からは、あと2日は様子見すべきという進言もあったようです。

ええ、はい。早くも詰んでしまいました。

もしかしなくても、無断外泊となるので説教は免れないでしょうし、怪我もしてしまつた為、それはもう尚更なわさらに。あとは音信不通状態なので、アリサちゃんや「すずか」ちゃんの反応も気になるところです。はて? 何やら凄まじい既視感がするようない……。?

取り敢えず、暫くの間はフェイトさんと何時でも会えるという事で前向きに考え直して、雑念は思考の片隅へと追いやる事にしました。如何しようも出来ない事よりも、如何にか出来る事をやった方が有意義でしょうから。

「> 申し訳無いが、転送ポートが使える様になるまでは其の部屋で寝泊りして貰いたい。食事は食堂で、なるべく僕かエイミーが付き添うようにするつもりだ。それと、着替えに関してはエイミーが見繕うと言ってたから、あとで本人に聞いてみてくれ」
<

> 了解です <

それから折角なので、フエイトさんとの面会時間の都合を聞いてみると、仕事の切りが丁度良いという事でトントン拍子で話が進み、10分後にはクロノさんがスクライアさんを連れられた状態で迎えに来てくれました。

何故、スクライアさんものなのか？ 怪訝けげんに思ったのでクロノさんに尋ねてみたところ、暇そうだったので「アルフの話し相手にでもなったら如何だ？」と誘ってみたところ、事でした。

.....

.....

.....

そして訪れたのは隔離病室のような場所で、中央のベッドにはフエイトさんが横たわっており、アルフさんがその傍らの椅子に座っていました。今現在、監視役の女性隊員には席を外して貰っているのです、この部屋に居るのは関係者のみとなります。

「アルフさん。其処を代わって貰っても良いですか？」

「嗚呼、構わないよ」

こうして椅子を譲って貰い、私はフェイトさんの傍らへ。アルフさんは、クロノさんとスクライアさんの元へと向かいました。さて、まず初めは無難に体調でも聞いて、次に魔法に関する雑談とか、色々と話したい等と考えていますと、何時の日かの様に機先を制されてしまいました。

「ミス高町」

「はい。何でしょうか、フェイトさん？」

「また……、私の邪魔をしに来たんですか？」

くく

Side：フェイト

ミス高町が私に会い来るといふ事は、つまりはそういう事では無く、本当はもう邪魔される事など無いと知っていても、溢れ出る言葉は自然と辛辣な物となってしまう。彼女が為した事は正しく、私が為した事は間違っていて、正義が為されただけだと言うのに虚しくて堪らなかった。

リニスから託されていた『ドクターを支えて欲しい』という願いは果たせず、私は傷

が癒えれば直ちに独房へと移された挙句、本局へ移送された後は法廷で罪と刑期を言い渡され、刑務所で服役する日々を送る事になる。何も出来ず、何も残せないまま、そんな事にアルフも付き合わせてしまうなんて――

こんな筈じゃ、無かつたのに……。

ずっと寂しかった。幸せになりたかつた。叶うのならば、リニスとアルフと私の三人だけで生きて行けたら、どんなに良かった事だろう。たつたそれだけの、有り触れた幸せにすら手が届かないのに、私は何で生きているの………？

「うん。もう邪魔はしないから、思いっきり泣いちゃっても良いんじゃないかな？」

泣いちゃっても良い。如何やら彼女から見た私は、泣き出しそうに見えるようでした。あんなに悪い事をしたのに、そんな事を赦してくれるなんて……。思いもしなかつたその言葉は、刃物のように深く沈みこんで来ました。

鋭く。重く。痛みすら覚えるのにとても嬉しくて、苦しくて、受け入れて良いはずが無いのに。抑えていた嗚咽が漏れ出してから、もう如何しようもありませんでした。

「つ……………ああ……………」

思考が更に鈍って行く。今はただ、この熱に焼かれていたかつた。

くく

Side : なのは

辛そうだったから、ちよつと突ついてみたら決壊してしまつて。私は声を掛けられないまま、フエイトさんの頭を撫でてやる事しか出来ませんでした。本当は抱き締めたいのですが、その心境に至る一因を私が担っているかもしれない自責の念と、怪我に障ると申し訳無いので自重しておきました。

10分程経つて、落ち着いた頃。

視線で止めるのも疲れたので、フエイトさんに駆け寄りたがっている挙動不審なアルフさんからは目を逸らし、「それじゃ、またね」とフエイトさんに告げて部屋を後にしました。泣き止んだとはいえ、心情を安定させる為にも日を改めた方が良いと思つたのです。

「———なので、近日中の再面会をどうか宜しく御願います」

そして、一緒に廊下へと出て来たクロノさんに其の様な御願いをしてみたところ、条件付きの返答を頂きました。

「それなら近日と言わず、明日にでも面会が出来るように調整しておこう。……但し、なるべく努力はするが、今後も連日だったり数時間に渡るような面会は難しいという事は

承知して貰いたい」

「分かりました。有り難う御座います」

それからクロノさんは、職務へと復帰する為に小走りで行き、程無くしてスクライアさんが部屋から出て来ました。後の事は監視役の女性隊員が対処するとの事で、目的を無くした私達は、取り敢えずスクライアさんが寝泊りしている部屋へ立ち寄ることにしました。

「備え付けの物だけど、『飲み物』をどうぞ」

「有り難う御座います。………なるほど。これが『飲み物』……」

そうやって差し出された、『飲み物』と無難な翻訳が為された異世界ドリンクを一口飲んでみましたが、色は澄んだ茶色というか紅茶その物ですけど、後味が仄かにミルクティーといった感じで、個人的嗜好としてはミルクと砂糖を足したいところかなーと思いつつ半分程まで飲んだ頃。部屋へと誘って来たスクライアさんが、ようやく話を切り出してくれました。

「“なのは”さん、御願いがああるんです……。如何か、レイジングハートを貰って頂けないでしょうか？」

「………吝かではありませんが、それってスクライアさんの一存で決められる事なんですか？」

共に戦つて来た間柄なので、貰えるのなら欲しいとは思いますが。しかし、「レイジングハート」は武装隊の方々やクロノさんが持つデバイスとは明らかに一線を画するデバイスで、更にクロノさん曰く私は未登録魔導師です。つまり現状は、無資格で扱っている状態ですし、そもそも「レイジングハート」はスクライア一族の共有財産と聞いておりますので、そう簡単に了承が得られるとは思えません。

「確かに、問題は幾つかあります。なので将来的に解決された暁には、受け取つてくれるという確約が欲しいんです」

何故、其処までして受け取つて欲しいのでしょうか？ 他の人と比べてみて、魔導師として多少は優れているのではと思わない事ありませんが、それは戦闘スキルに限つた事だけですし、「レイジングハート」だつて性能的に戦闘を考慮されているだけの非軍事品で、本領は別の所にある筈です。

だからこそ、今は戦闘しか「能が無い」私にそんな特別な物を贈られても、宝の持ち腐れとなる事は明らかでした。

「……………分かりました。お約束致します」

しかし結局のところ、私はそれを受け入れる事にしました。熱心な申し出を断るほどの確たる理由は無く、丸く治める為にも此方が折れるべきだと思つたのです。

ところで……。

今後は一体、如何なるのでしょうか？ ふと気付けば何もかも知らない事ばかりで、フェイトさんの処遇や、魔導師として私は登録するべきか否か、それ以前に次元空間を隔てた交流が可能かも分からず、随分と間が抜けていたのだなと自覚しました。

取り敢えず、食事時にはクロノさんかエイミイさんが付き添ってくれるとの事なので、夕食の時にでも尋ねてみようと思います。

第23話：それぞれの思惑なの

S i d e : クロノ

「通常なら、次元干渉犯罪に関わった者は無期懲役となるんだが……」

「つまり、フェイトさんは例外になるのでしょうか？」

「詳細は話せないが、そうしてやりたいとは思っている」

夕食時。エイミイと共に、*「なのは」*とユーノを誘って食堂で喫食していると、*「なのは」*からフェイトの処遇を尋ねられたので、その様に言葉を濁しておいた。

言い方は悪いが、*「なのは」*は今回の事件における最大の功労者ではあるものの、幾ら配慮をしたところで彼女はあくまでも現地協力者。これ以上の事となれば内部機密の情報を含んで来るので、おいそれと話す訳にはいかなかった。

ただ、それでも彼女は納得してくれた様で、「地球からミッドチルダへ渡航が出来るのか？」だとか、「これまでの様に日常を送っても良いのか？」といった内容の質問へと話は変わり、僕はそれらに対して説明を挟みつつ *「可能ではある」*と答えて行く。

今後も定期航行が可能となるかは不明だが、彼女の功績を鑑みれば一度や二度くらいミッドに招待しても構わないだろうし、魔法文明が無いこの世界では、魔法をみだりに

使わない事を条件に、日々を過ごして行くという選択肢も当然ながら存在する。しかし、だ……。彼女の才能を思えば、それは勧め難い選択肢でもあった。

産まれ持った膨大な保有魔力と、万障ばんしょうを捻じ伏せる戦闘技能。

正に、希代の大魔導師としての資質を持ちながら、こんな次元世界の片隅で生きて行くなど「あまりにも惜しい」と感じてしまう。それは収監されているフェイトもまた同様で、彼女達ほもつと大きく羽ばたける筈なのだ。だからこそ、機会を得て知って欲しいと僕は願う。——こんな人生も、選んで行けるのだと。

（ ）

Side:なのは

一体、何がクロノさんの琴線に触れてしまったのでしょうか……？ ちよつとした質問のつもりでしたが、何時の間にか時空管理局の紹介へと話が拘すり替わっており、授業の様相を呈して来ました。

決して、興味が無い訳ではありません。

しかし日本人的な物の見方で語るのならば、ミッドチルダは未成年者を仕事に就かせる明らかなブラック世界ですし、『大人になる為の猶予期間』——所謂いわゆる、"モラトリウム"を経ずして社会人となる事には、大きな不安と抵抗感を覚えてしまいます。それ

に、お母さんの後を継ぐ夢を諦めている訳では無いので、魔導師として働くのは次点の候補止まりなのが現状です。

そんな感じで時間は過ぎてしまい……。結局のところ、私は魔導師として登録すべきか否かは尋ねる事が出来ませんでした。また日を改めて、確認したいと思います。

そして翌日。

気が遠くなるような夜を経て、私はクロノさんによる立ち会いの下、二度目となるフェイトさんとの面会に臨みました。今までの事、これからの事、伝えたい事、聞きたい事。思う事は多々あれど、やはり迷走しては進む事すら儘ならないので、まずは伝えようと意気込んでいたのですが……。

フェイトさんと向き合って早々、彼女から困惑と疑念の視線を向けられた私は、もしかして緊張を気取られてしまったのだろうかと思ひ当たり、心を抑え付けてから、努めて冷静に尋ねました。

「もしかして、迷惑だったかな……？」

「そうじゃなくて、その……」

長い沈黙。しかし急かす事は無く、唯々待ち続けました。

「如何して、私に気を遣ってくれるんですか……？ あんなに酷い事をして、敵だった筈なのに………」

それに関しては、お互い様のような……。確かに、左手を物理的に切り落とされかけましたが、此方は非殺傷設定とはいえ戦略兵器も斯くやと思われる魔法をぶつけましたし、これまでの撃墜数を鑑みれば、酷いのは此方ではないのでしょうか？

「ずつとね、フェイトさんとは仲良くなりたいと思っていたの」

まあ、それはさて置きました。本題へと移ります。

「えっ……？」

「ジュエルシードは災いではない。そう気付いてからは、協力し合って、迅速に回収してしまいたかった。——初めはそれだけが目的だったんだけど、戦っている内に会うのが楽しみになって、今は会話する機会が得られて凄く嬉しいと思っっている私が此処に居るの。だからもし、フェイトさんが許してくれるのなら……。私と、友達になつてくれませんか？」

やつと言えた……。

言い切つてしまいました。これでもう、後戻りは出来ません。本当は、直感的に惹かれていただけなのに。言葉になんて上手く出来る筈が無いのに。沢山の魔法と、少ない言葉を交わしただけの仲でしか無いにも拘らず、私は「離れるのが寂しい」から、こうして浅ましくも繋ぎ留めようとして、やったのです。

何と愚かな事でしょう。

我ながら幼稚で拙く、酷い方法だと思えます。尤もらしい虚飾を施した、不誠実な告白を考えて考えて考え抜いて、私は事此処に至りました。これが確実だと思つたのです。これがスマートだと妄信したのです。時間が無いのなら、機会が少ないのなら、せめて楔くさびだけでもと足掻いてしまつて――

「ミス……。ミス高町は……。……本当に、私なんかで……。……良いの……。？」

「うん。私は、フェイトさんが良いな」

「ありがとう……。ミス高町……。……」

その答えに、私は安堵感と罪悪感で胸が詰まり、張り裂けてしまいそうでした。

く

Side:クロノ

「> ううっ……。二人共、とっても良い子だねえ……。(;▽;) <」

「> 何故、エイミイの方が号泣しているんだ……。？ それと僕の感動を返してくれ
<」

「> クロノ。女の子は多感なんだから、そつとするかフォローしなきゃ駄目よ？
<」

「> ……艦長、それとこれは別問題だと思います <」

艦内であれば、秘匿状態で映像監視が可能である部屋は多々存在する。フェイトが収容されている集中治療室もまた同様で、先程の「なのは」とフェイトの会話風景を上位者権限で覗いていたエイミイと艦長が、何故か僕を巻き込む形でテキストチャット形式による感動の共有——という名目のガールズトークが為されていた。

テキスト入力自体は、低度なマルチタスクを用いて思考入力するだけではあるものの気が散ることは避けられず、先程の苦言へと至るといふ訳だ。しかし悲しかな。理論的な話ならともかく、感情的な話に関しては女性陣が秀でており、人数も1対2である。

形勢は不利。そして意地を張る必要も無し。これが、女性の華やかさの源なのだろうと現実逃避を済ませたところで、先程とは違って和気藹々と話し合う「なのは」とフェ

イトを見て微笑ましく感じると共に、同時に申し訳無くも思った。

幾ら言い繕^{つくろ}ったところで、フェイトは重罪人である。

無論、将来性や再犯性を考慮し、更には生来の不遇さを前面に押し出して減刑措置を求めつもりだが、保護観察処分、魔力封印、次元世界間の渡航禁止令、社会への無償奉仕、更生プログラムの受講等、多くの制限を受ける事になるだろう。

期間は短く見積もっても、5年から7年程……。艦長も各方面に働きかけるとの事なので、もう少し短くなるかもしれないが、それでも数年単位で彼女達の仲を引き裂かなくてはならないのだ。職務に私情を挟むべきではない。何時だつて誰だつて、思い通りに為らない事もある。そうと分かつてはいても、これは辛い現実であつた。

く

Side : 美由希

今日は「なのは」が早朝に家を飛び出してから、2日目となります。昨日は、空気が震えるような突風とは言い難い現象が海鳴市だけではなく世界中で長時間観測され、多少の混乱や被害が生じていましたが、それ以外は特に何事も無く。「なのは」が居ない

という異常を除いては、概ね平穩な日常風景が続いていました。

「ただいま、レンちゃん。『なのは』は帰って来てるかな？」

昨日から、家族の皆が待ち兼ねている『なのは』の帰宅。おそらく大丈夫だとは思いますが、心配である事には変わりません。だから皆が皆、家へ帰って来る度に誰かへと尋ねたり、『なのは』の部屋を覗いてみたりしています。

「おかえりー、美由希ちゃん。『なのは』ちゃんなら、まだ見てへんなあ……」

「そうなんだ……。御免ね、邪魔しちゃって」

「気にせんでもええよ。うちだつて、気になつてしゃーないですし……」

「今頃、何しているんだろうね……？」

「さあ？ 案外、宜しくやつてんちゃいますかー？」

うん。まあ、あの強さなら多分何とかなつてるような……。そう信じつつ、夕食のメニューやら御風呂の使用状況を聞いて、その場を後にしました。

まずはシャワーを浴びて、夕食を食べて、学業の予習と復習をして、そして夜は恭ちゃんと御神流の鍛錬をして、またシャワーで汗を流したら、身支度を済ませて眠りに就く。そういった一見変わる事の無い日常を送りつつも、その端々に可愛い妹である『なのは』が居ないという非日常は何処か寂しく。一日でも早く、且つ無事に帰って来ることを私は心から願うのでした。

第24話：そして日常への帰還なの

S i d e : なのは

楽しい時間はあっと言う間に過ぎてしまうもので、フェイトさんと話し込んでしまった私は、クロノさんに注意されるまで刻限が迫っている事に気付かせませんでした。

「それじゃ、またね。フェイトさん」

「うん。名残惜しいけどまた、だね……。ミス高町」

そして部屋を出て、充実感と共に緊張感から解放された私は、小さく安堵の息を吐きました。魔法談義や、お互いの出身世界を紹介し合ったり、好きな食べ物とか場所を聞いたりして、とにかく、〃当たり障りの無い〃部分だけを選んで話題にして来ました。が、何とか話のネタが尽きる事は無く、無事に終わる事が出来ました。

本当は、私の家族や友達も紹介したかったのですが、何と言いましようか……。やつと築けた関係を壊したくは無いが為に、フェイトさんの琴線に触れるような事はしたくなかったのです。

「プレシア・テスタロツサ」とフェイトさんの関係性、癒える間も無く増える傷に打撲、しかしそれでも盲従するフェイトさんの意志。——情報が開示されていないの

で、これは勝手な推測となりますがやはり、『プレシアはフェイトさんのお母さんか、親族なのかな?』と思う訳でして。虐待やら育児放棄等の不穏なワードがちらつく以上、人間関係の話題は控えるという選択肢の他有りませんでした。

「クロノさん、今日も有り難う御座いました」

「気にしないで良い。むしろ、此方が礼を言いたいくらいだ」

罪悪感があるにせよ。連日の面会により良い方へと天秤が傾いてくれたので、その感謝の意も込めて御礼を述べてみました。何故かその様に返されてしまいました。

「それはつまり、如何いった理由でしょうか……?」

「……………すまない。配慮に欠けた発言だった。うちの医療スタッフがカウンセリングするよりも、遥かに改善している様に見えるな」

嗚呼、なるほど。それでつい、口が滑ってしまったと……。正直なところ、あまり気にはなりません。むしろ、特に制限無く会える理由がそれとなく判明して、すつきりした位です。

「気にしないで下さい。私も、フェイトさんには元気になって欲しいですから」

なので、次回の面会日時相談をしたいと思います。会話の間隙を突くかのよう^{もたもた}に齎されたエイミーさんからの朗報により、敢え無く御破算と相成りました。その朗報とは、あと数日は掛かると予想されていた次元空間の正常化が思ったよりも早まって

いるとの事で、もう3時間程待てば地球への転送が可能になるといった内容でした。

それからの3時間は、待ち遠しいと思う間も無く流れて行きました。早めの昼食を食べ、事件解決の功績を称えた賞状を授与され、リンデイ提督と御茶会もとい面談をしたりとエトセトラ。最後はリンデイ提督とクロノさん、そしてエイミイさんに見送られながら、私達はアースラを後にしたのでした。

ええ、そう。『私達』です。

未だに地球からミッドチルダ間の次元航路が安定していないので、アースラが地球を離れる目途が立っておらず、それまであの艦船で箱詰めとは息苦しいだろうと思つた私は、アースラに残ると主張していたスクライアさんを説得し、連れ出すことに成功。そして今に至ります。

大規模な被害が出て、思わず厳しい言葉をぶつけたあの日から、何となく互いに余所余所しくなつて——いえ、そもそも私が他人行儀で接していましたし、あれから効率重視で動いていたので、和解する程の接点も有りませんでしたね……。ともあれ、好感度が低いからと冷遇するつもりは無いですし、これも何かの縁という事で大事にしたとは思うのです。

尤も、生まれて此の方、同年代の男の子と親しくなろうとは考えもしなかつたので、具体的な方策はほとんど思い付いておらず、八方塞がり感が否めませんけれども。

「スクライアさん。地球を離れる前に、何かしたい事つてありますか？」

転送終了後、私達は人目や監視カメラの心配も無い臨海公園の隅に立っていました。直接、高町家の庭へと出てでも良かったのですが、歩きながら話したいという思惑もあつて、この場所へと転送させて貰ったのです。

「もし、許してくれるのなら……。『なのは』さんと高町家の皆さんに、御礼と謝罪をしたいと思つているんだけど、如何かな？」

如何と聞かれましたも、返答に困つてしまいます。確かに以前、全てが終わるまで謝罪は受け取れないといった旨を伝えましたが……。

「御礼はともかく、私もスクライアさんも被害者なのに謝罪をするんですか？」

「それでも、僕がジュエルシードを発掘さえしなければ……」

「それも以前、お伝えした通りです。たればの可能性を持ち出されても、これまでも、これからも何一つとして変わる事は無いんですよ？」

「ごめん……。でも僕は、『なのは』さんみたいに割り切れないんだ……」

思い出さない様に目を逸らす事が、割り切つている事になるんでしょうか？

反論が喉元まで出かかりましたが、何とか堪え……。仕切り直すために何か別の話題

か、代案が無いかと模索したところ、一件だけピンと来る物がありました。うだうだと考えてしまうのなら、考えられないくらい忙しくしてしまえば良いのです。例えばそう、『翠屋』で社会実習をして貰うなんて事とか。

……

……

……

そんな風に案を煮詰めつつ、歩くこと10分少々。ようやく家の門を潜って、玄関へと到着する事が出来ました。鍵と携帯電話は、家を出る際に持ち出していたので抜かりは無く、「レイジングハート」の格納領域から鍵だけを取り出して開錠、中へと入ります。「ただいまー」

思い返せば、金曜の早朝に家を飛び出し、今は日曜の午後4時頃。であれば、約60時間ぶりの我が家という事になりました、何ともまあ……、感慨深いものがあります。ちなみに、パジャマ姿で街中を歩く度胸は無かったので、現在はバリアジャケットの意匠を変更して着込んでおります。

「お帰り、なのは」。意外と大丈夫………じゃなさそうだね、それ」

玄関へと迎えに出てくれたお姉ちゃんが、包帯でぐるぐる巻きにされた私の左手を見て、その様にコメントをしてくれました。一応、アースラの医療スタッフの方が砕けた

骨を組み治し、傷口を塞いでくれたので、割と悲惨な傷痕と神経がズタズタなのを気にしなければ大丈夫ではありません。

「でも嫌じゃないから、気にしないで。お姉ちゃん」

「そっか……。ところで、後ろのお連れ様は？」

後ろと言われて振り返ってみますが、其処には先程から沈黙を保っていたスクライアさんのみで……。嗚呼、なるほど。如何やら人間版の方を見たことが無かったので、気付けなかつたようです。斯く思う私も、声を聞かなければ分かりませんでした。

それから場所を居間へと移して、お姉ちゃんとスクライアさんが話している間に、私は服を着替えるべく自室へと戻りました。

すると何と言うことでしょう。

机の上に、見知らぬプリントが山を成しているではありませんか。おそらく、アリサちゃんや「すずか」ちゃんが持って来てくれた物で、お知らせと宿題が半々といったところだとは思いますが、金曜から日曜分の宿題を明日までにする必要がある訳です、とても休んでなんて居られません。

「多分、今日で終われる筈だけ……」

その前に下に降りて、コーヒーやら御菓子やらを調達してから挑みたいと思います。たとえ誤魔化し続けていても、疲労や眠気には限度と言う物がありますので。

くく

S i d e : リンディ

「手応えはまずまず、と言ったところかしら？」

空になってしまった湯呑を片付けつつ、独りごちる。先程まで、御茶会という名目で“なのは”さんの進路希望調査を試みたところ、魔導師という選択肢にも興味は有るとの事なので、関連する職種の詳細と活躍例を紹介し、布石を幾つか仕込むだけに留めておいたのだ。

実戦経験済みの暫定Sランク空戦魔導師。

万年人材不足の管理局からして見れば、“なのは”さんは直ぐにでも活躍して欲しい逸材ではあるものの、彼女には組織への愛着心や所属する事への憧憬しやうけいはまるで無く、あくまでも就職先候補の一つ止まり。そんな人物を入局させたところで、依願退職や事故や不祥事で辞めるか、もしくは大成せずに終わってしまう事だろう。

だから私は焦らず、されど興味と意欲を持てる様に仕掛けて行くことを選んだのだ。もっと大きく飛躍が出来る様に、そして如何なる困難へも立ち向かつて行ける様に。——これは御仕着せの願い。傍迷惑な妄想。そうと知りつつも私は、彼女が成人して道を決めるであろう9年後が楽しみで仕方が無かった。

「嗚呼……。やつぱり、娘も欲しかったわね……。」

そんな戯言が、ぽつりと零れた。

くく

Side : :なのは

宿題を終わらせた後は、夕食を食べながら家族と話をして。御風呂を済ませた後は、「すずか」ちゃんやアリサちゃんと電話で少々やり取りをして……。そうやって一日が終わりを迎え、私は少しだけ安堵していました。ようやく、遠退いていた日常が明日から戻って来るのです。

平和で、穏やかで、温かな時間。

だと言うのに、心がちつとも躍りません。あんなに大切にしていた物なのに、何故なのでしょう。そして今、私が楽しみにしている事とは……………。

「……………お休み、レイジングハート」

「 Good night master. 」

寝て。覚めて。それでもこの気持ちが変わらないのなら、きつと“本物”になるのだろう。何となくそんな気はしますが、昨夜から碌に寝かせていない脳味噌では、これ以上の思考は無理だと放棄する事にしました。

その上、アースラの医療スタッフから処方されていた鎮痛剤が良い感じに効き始め、左手の痛みは消え、副作用である睡眠誘発作用も相俟って、とても抗い難いのでして

……

第25話：重ねた心に芽生えるモノ

Side：なのは

携帯電話のアラームが鳴り響いている。それはつまり、朝の6時を告げているという事で、眠りから目覚めて学校へ行く準備をしなければいけません。何時も通りなら寝起きを渋っているところですが、左手が鎮痛剤を求めて疼くので素直にベッドから身体を起こし、部屋を出て階下へと降りました。

その後、家族への挨拶や洗顔や朝食や投薬や身支度を済ませ、『翠屋』の開店時間の都合で出発が早いお母さんとお兄ちゃんを見送り、お姉ちゃんと晶ちゃんは少し遅れて私立風芽丘学園へ、私とレンちゃんはその10分後に家を出ました。尤も、私の行き先は聖祥大学附属小学校で、レンちゃんは私立風芽丘学園なので、道中で別れてしまいますが……。

それから通学バスの停車場所で暫し待ち、やって来たバスへと乗り込んで最奥の席を見遣ると、何時もの様にアリサちゃんと「すずか」ちゃんが其処に座っていて、何故だか懐かしく感じてしまいました。

「お早う、アリサちゃん。すずかちゃん」

「おはよー、＼なのは」。……で、その怪我は如何したのよ？」

「お早う、＼なのは＼ちゃん。それ、大丈夫なの……？」

「えつと……」

取り敢えず、二人の間にある空席へと座ると、程無くしてバスが出発しました。さて、如何言い訳をしたものでしょうか？ 「電話で話して無かったけど、実は決闘を少々……」と正直に言ったところで現実味が薄いですし、根掘り葉掘り聞かれたくは無いで、火傷をしたと偽った後は徐々に話題をずらして行き、アリサちゃんや＼すずか＼ちゃんの休日の話を聞いたり、相槌を打ったりするのです。

何時も通りの日常。

私達が、守った物。何だか何時も通り過ぎて、戦っていた事の方が夢の様に思えてしまいます。でも、あの戦いは実際に起こった出来事で、この左手の傷や痛みが何よりの証なのです。嗚呼、本当に……。日常から遠い所へと来てしまったんだと、しみじみ思いました。

（（

S i d e : 桃子

本日も、喫茶『翠屋』は大盛況——ではありませんが、時間帯によつて客足も客層も変わるのとは当然の理で、お昼のピーク時を過ぎてしまえば空席もかなり目立つ様になつて来ます。尤も、一息を吐けると言つても午後5時以降は、帰宅中の学生や会社員、そして買い物客も訪れるので、その時間帯に向けてケーキやシュークリームの仕込み等、色々と準備が待つていますけれども。

「母さん、ちよつと良いか？」

「あら、如何かしたの恭也？」

「午後2時に、3名で予約しているハーヴェイ様なんですが……」

珍しく言い淀む、我が息子。ただの予約キャンセルなら、此処まで苦虫を噛んだような顔をする事は無い筈なのだけれど……。もしかして、苦情かしら？ とやきもきしている間に考えが纏まったようで、漸く口を開いてくれた。

「実は偽名で、〃なのは〃や俺達が協力していた時空管理局の艦長さんと、その部下なんだ」

えーと……。子供達やスクライアさんから話を聞いているので、大まかに何が起こつて、如何終つたのかは知つているけれども、それに関つた別世界の組織の方が何故、偽名を使つてまで此処に来たのか？ 確かに、判断に困るところよね。

「それに来ているのは二人だけで、最後の一人は母さんの為にと取ったらしくてだな……。如何する？ 何なら俺も立ち会うか、代理で対応しようと思うんだが？」

「そうねー……」

多分、大丈夫だとは思うけど、そうやって心配してくれるのなら無碍にする訳にも行かないので――

「私だけで大丈夫よ。その代わり、ホールの方を御願いしても良いかしら？」

其処なら、仕事をしながらでも予約席の方まで目が届くでしょうし、妥協案としては、まずまずだと思っただけだ。

「了解。任せられた」

「それと、水も三人分宜しくね？」

「承知」

そして私は、厨房のスタッフに30分くらい来客対応をする旨を伝えてから、予約席として押さえてある端のテーブル席へと向かったのです。

〃

Side:クロノ

1時間程前、唐突に「なのは」の御母堂へ挨拶と謝礼をしに行くから、護衛宜しくね

といった旨を艦長に告げられ、言われるが儘に付いて来たのだが……。実際のところ、その内容は想像とは程遠いモノであった。

まず定型的に挨拶を交わした後、艦長は事件解決に協力してくれた「なのは」達の功績を紹介しつつ感謝すると共に、負傷に対する治療と保障の約束、そして功績を鑑みた便宜を図る用意がある事も伝える等々。ただの挨拶や謝礼と言うよりは、負傷した局員もしくは殉職した局員家族の元へ上官が赴く、アフターケアと呼ばれる行為に近しいと思えてしまったのだ。

艦長。貴女は何をを考えて、その様な事をしたのですか？　そして何故、我々の不備や非を認めずに話を進めたのですか？　何故……？

「それは勿論、交流を深める為よ。そして私達は、当時の状況下において最善を尽くしており、不備や非と言った物は存在しないの。分かるかしら？」

分かる筈が無い。仮に、最善であつたとしても「なのは」は負傷しているし、彼女が住む世界に被害が出ているのは事実だ。それなのに、此方に一切の不備や非が無いなんて、そんな馬鹿な事が――

「では、もっと噛み砕いて説明をしましょうか……。この件に関して、私や部下達が招いた人災は一つとして無い。つまり私達は、不必要に下げるべき頭や、掛けるべき言葉すら持たない第三者的立場であり、決闘による「なのは」さんの負傷についても、彼女が

望んで得た単行動権により自己責任となる。そして何より、此処は97番目の管理外世界。故意でなければ損害を補償したり、復興を支援する義務も権利も許されてはいないの。法を知悉する執務官なら、これぐらいの事は思い付くのではなくて？」

だからって、何もしない訳には……。

「ええ。ですから、『プレシア・テスタロツサ』の悪行は歴史編纂委員会へんさんに働きかけて早急に犯罪史へ明記して貰いますし、事前に違法研究の罪で彼女を逮捕出来なかつた無能な広域捜査部と、ロストロギア輸送の手配が杜撰ずさんだった遺失物管理部に対しては、定例報告会で追究する予定です。——クロノ執務官。正義でありたいのなら、正しく悪を憎みなさい。そうでなくては、巨悪と戦う以前に心が折れてしまうわ」

違うんだよ、母さん。そんな風に割り切つて、悪を断罪するだけの冷たい正義なんて、まるで機械じゃないか……。平生の貴女らしくもない。

確かに、悪は憎むべきだと思う。けれど人々の思いや、被害を顧みない正義など最早ただの私闘でしかなく、其処に大義名分など有りはしないのだ。やはり貴女も、普通を装いながら変わり果ててしまったのですか……？

父さんが殉職した、あの日からずっと。

くく

S i d e : なのは

本日は、とても平穩に過ぎて行きました。登校し、朝の会を経て午前の授業を受け、お昼休みに会話で花を咲かせ、午後の授業が終われば帰りの会を経て、送迎バスへと乗り込み帰路へ着く。——そんな当たり前前の事に違和感を抱いた私は、きつと如何かしてしまつたのでしょうか。

奇跡も魔法も無い、人体の神秘だけが其処にある世界を生きていたのですから、それは当然なのかもしれませんが、魔法の無い非日常という物は白日夢の中を歩いているかの様で、浮世離れとはこの事かと錯覚しそうになります。

このまま、人目を憚はばらずに飛んで行つてしまおうか。

そんな事を思い浮かべつつも自重して、何事も無く帰宅しました。それから何時もの様に御風呂へ入つたり、宿題をしたり、レンちゃんと晶ちゃんが作った夕食を食べたり、日課となりつつある魔法の鍛錬でもしようかと思つた頃、『翠屋』の店仕舞いを済ませたお母さんが帰つて来ました。

「お帰りなさい、お母さん」

「ただいま、＼なのは」。ちよつと良いかしら？」

「うん。今は大丈夫だよ」

何か手伝つて欲しいのかと思ひ、居間にあるソファから立ち上がつて駆け寄りまし

たが特にそういう事では無いようで、売れ残り品が入っているであろう手提げ箱を此方へ渡しつつ、1つだけ質問をしました。

「実は今日、管理局のリンデイさんって言う方と御話をしたんだけどね。――」

要するに、リンデイ提督とクロノさん御一行が『翠屋』に電撃訪問をした挙句、私が治療内容の一部である「傷痕の整形手術を断った」という経緯をそれと無く説明したので、お母さんはその事に疑問を抱いてしまったらしいのです。

しかし何故と問われましたも、それに関してはお父さんを筆頭に、お兄ちゃんやお姉ちゃん達にも責任の一端が有りまして……。

「あのね、お母さん。こういう傷は、名誉の負傷って言うんだよ?」

鍛錬で付いてしまった傷。害意から、誰かを守って付いた傷。試合で避け損ねたり、受け損ねたりして付いた傷。そんな数々の傷を負って尚、直向きひたむに剣士として生きる家族の姿を見て育ったのですから、傷や傷痕に対する忌避感などは全く無く、むしろ敬意を払う対象でもありました。

そんな誇らしい傷が、自分にも付いている。故に、消したくはありませんでした。然れども、相応の痛手と激痛を受けましたので、『傷は増えないに限る』と思う今日この頃です。

「『なのは』だったら、其処は土郎さんに似ちゃったのね……。分かったわ。但し、あまり

無茶をすると、お母さん泣いちゃうからね？」

「はい」

その後、クロノさんへ熱烈なラブコール（問い質しただの念話）を掛けたのは語るまでもありません。ええ、全く。

それから、それから……………。

私は、平穏となった日常と非日常の狭間を行き交い、そんな日々を謳歌していました。平日は学業に専念し、双方の都合が良ければ手土産（『翠屋』のスーツ詰め合わせ）を片手にアースラへ出張して、クロノさんやフェイトさん、そしてアルフさんとも気晴らしの為の模擬戦をしたり、雑談をしたり、時にはエイミィさんやリンディ提督と御茶会をし、またある時はスクライアさんから魔法を教わったり、逆に社会実習がてら『翠屋』での働き方を教えたり等々。

しかしながら、そんな楽しい日々も長くは続かず、遂に別れの日になってしまいました。4月20日、早朝4時半、臨海公園の外周にて。それが、別れの挨拶に指定された

日時と場所の為、頑張つて3時半には起床して準備し、お兄ちゃんとお姉ちゃん、そしてスクライアさんと一緒に家を出て、指定時間の10分前くらいには到着する事が出来ました。

それから2分も経たない内に魔法陣が出現し、クロノさんとフェイトさん、そしてアルフさんの3人が転移して来ました。尚、その際にクロノさんから苦言が一言。

「君ら、少し早過ぎやしないか？」

「その辺りは国民性ですので、如何か悪しからず……」

「なるほど……。理解した」

そんなこんなで予定より早く始まりましたが、開始早々にフェイトさんと私の二人だけとなり、他の人達はやや離れた場所へと離れて行きました。如何やら気を遣つてくれたようです。とはいえ……、別れの言葉を告げるというのは実のところ「初めて」の事として、何から話せば良いのか戸惑つてしまいます。

「ねえ、フェイトさん。向こうへ行つたら、暫くは裁判で忙しくなるんだよね？」

「うん。それから先は分からないけど……、当分会えないと思う」

「そっか……。寂しくなっちゃうね……」

一応、手紙やビデオメール等をアースラ経由で送るつもりですし、3ヶ月後にはミツドチルダへ観光がてら、フェイトさんの元へ会いに行く予定ではありますが、どちらも

リンディ提督の裁量次第なので胸三寸に納めておきます。

「……………ミス高町。君に2つだけ、御願いがあんだ」

「私に出来る事なら、何なりと」

そう答えると、フェイトさんは髪を結わえている細い黒のリボンを2つ解き、此方へと差し出しました。これはひよつとしたら、ひよつとするのでしようか？

「このリボンは、とても大切な人から貰った物なんだけれども……………。預かっててくれな
いかな？」

「それは責任重大だね……………。了解なの」

「ありがとう、ミス高町。必ず取りに行くから……………」

両手で丁寧に受け取り、纏め、ポケットの奥へと仕舞い込んだところで、フェイトさんは2つ目の願いを告げる前に1つだけ、不穏な前置きをして行きました。

「2つ目は、断ってくれても構わないけれど……………」

「うん。取り敢えず、言ってみてよ」

無理なら素直に断り、無茶で済むのなら応相談となりますが。

「君の、ファミリーネームを貸して欲しい」

……………如何やら、応相談の案件みたいです。

「えつと……………。詳しく御願います」

「私には戸籍が無くて、更に言うところファーストネームしか無いんだ……。だから、裁判に合せて戸籍も作る事になったんだけど、名乗るべきファミリーネームはドクターのしか無くて……。それはちよつと、嫌だから……………」

なので、どうせ名乗るのなら「高町」の姓が良いと。此方で名乗るのなら問題かもしれませんが、向こうの世界で勝手に名乗る分には影響無いでしょうし、おそらく大丈夫のような気がします。——多分、きつと。メイビー。

「使つても良いけど……」

「けど……?」

「私からも、2つだけ御願いしても良いかな?」

折角なので流れに便乗して、此方からの要望も通す事にしました。尤も、無理難題を吹っ掛ける訳でも無く、預かったリボンの代わりに私物のリボンを貸すので其れを代用して貰いたい事と、呼び方を変えて欲しいという至つて素朴な願いです。

「『ミス高町』じゃなくて、例えば『なのは』とか『なのはちゃん』とか……」

「それじゃ……、『なのは』で」

「有り難う、フェイトちゃん」

「『なのは』も、私の呼び方を変えるの……?」

「お友達なら、やつぱり『フェイトちゃん』って呼んだ方がしつくり来るから、こつちに

しよやかなって」

そも、私にとつての“くさん”は、適切な距離を保ちたい時に使う敬称の1つなので、そろそろ切り替えたいなと思つていたのです。……まあ、些細な自分ルールでしかありませんが。

「ねえ、“なのは”……」

「如何したの、フェイトちゃん？」

「私も、“なのは”ちゃんつて呼んだ方が良いのかな？」

「フェイトちゃんは、むしろ“なのは”だけで良いと思うよ」

その方が多分、カツコカワイイような気がしますし。それから私は、物質転送魔法で自宅から白いリボンを2本取り寄せ、フェイトちゃんの髪を結つてあげました。かつて、私がしていた物よりも髪の量が多く、且つ長いので大変でしたが、その甲斐有つて見事なツインテールが出来たところで、別れ時が迫つて来てしまいました。

一度集合し、クロノさんの提案で写真を幾つか撮つた後、私は名残を惜しみつつスクライアさんに「レイジングハート」を返却しました。2週間足らずの戦いを共にしただけの仲とはいえ、「レイジングハート」は唯一無二の愛機と思える程には頼もしいデバイスでありました。

「今まで有り難う、レイジングハート。一緒に戦えて嬉しかったよ」

「Me too. Thank you so much.」

「それじゃ、なのは”さん。長老との交渉が成立したら、届けに行くよ」

果たして「レイジングハート」が、スクライア一族の元で魔導師の育成や作業用に使われるのと、私の様な優れた魔導資質しか持たない子供に使われるという選択肢の内、どちらが最善なのかは分かりませんが、其処は運命の女神——ではなく、スクライアさんに委ねてみたいと思います。

「うん……。ただ、そうじゃなくても偶には来て下さいね、ユーノさん。お兄ちゃんや、お姉ちゃんが寂しがると思いますので」

武人ではありますが、その辺りの感性は人並みですから。

「今、僕の名前を………」

「はて、何の事でしょうか？」

呆然としているユーノさんは、さて置き……。お次は、クロノさんの元へと向かいます。短い間ですが、共闘したり色々と手配してくれたり、良くして貰った御恩があります。尤も、向こうはそれすらも職務の1つとして割り切るでしょうし、私もあまり気に掛けない様になっているつもりです。

「クロノさんには、御健勝と御多幸を御祈りしておきますね」

「他部署に飛ばされそうな挨拶は、勘弁願いたいんだが……」

「ですが、別れの挨拶って大凡その様な内容では……う？」

離れていても健康には気を付けてとか、頑張つて下さい等々。

「まあ、良いだろう。其方にも、御健勝と御多幸があらんことを。話は変わるが……。艦長から魔法の訓練用や、万が一の護身用にとレイジングハートの代替機となるデバイスを預かっているんだ。如何か、それを受け取つて貰いたい」

そう言つて手渡されたのは、カード状の待機形態をしているデバイス。名を「ルーンライター」と言うインテリジェントデバイスらしいのですが、提督クラスとなると予備のデバイスの1つや2つは無駄に支給されるそうで、これもその消耗品の内の1つなのだそうです。

「ちなみにこれ、その方が一の事態で壊してしまつた場合は大丈夫でしょうか？」

「故意でなければ、な。尤も、その場合は君が大丈夫じゃなさそうだが……」

「私も、そうならない事を祈っています。宜しくね、ルーンライター」

「— Nice to meet you. Boss. —」

思つてもみなかつた贈り物を頂いてしまいました。気を取り直して次はアルフさんの元へ。しかしながら、それ程の深い仲ではありませんし、フェイトちゃんの個人的な友達といった感じの他人（使い魔さん）なので、淡々と済ませて行きます。

「アルフさん、向こうでもお元気で」

「ああ、そつちもね。それと、色々と有り難う。あんたには、感謝してもしきれないよ」
「如何致しまして」

そして最後は、フェイトちゃんと向き合いました。別れの挨拶というよりは、再会を祈念する言葉の方が良いかもしれないと思いつつも、やはり寂しさが込み上がってしまつて……。言葉にし難い代わりに、何となく抱き着いてみました。

「如何したの、＼なのは＼……？」

「んー……。フェイトちゃん、温かそうだなつて」

もうすぐ5月ですが、早朝は冷え冷えとしていますし、何より此処は海風が吹き付けて来ます。不意に人肌が恋しくなつたとしても、何ら不思議ではありません。そんな誤魔化しを知つてか知らずか、フェイトちゃんは優しく抱き返してくれました。

「それなら、＼なのは＼の方が温かいよ」

「そうかな……？」

「うん、そうだよ。＼なのは＼の方が、とつても温かい……」

「ねえ……。フェイトちゃん。今度会つたら沢山話をして、沢山遊ぼうよ。何処かに行つたり、美味しい物を食べたり、ゲームや模擬戦とか色々」と

「良いね、それ。楽しみにしてる……」

思い付きの行動から、ずっとこうしていたい程の幸福感に満たされてしまいました

が、時間が時間なので仕方無く誘惑を断ち切り、フェイトちゃんをやりわりと引き剥がした後は、見送る為に少しだけ距離を置きました。お兄ちゃんとお姉ちゃんは、既にユーノさん達との別れを済ませたようで、如何やら私が最後のようでした。

「あ、クロノさん。リンディ提督やエイミイさんにも、有り難う御座いましたと伝えてくれませんか？」

「伝えるまでも無く、多分見ていると思うんだが……」

そう言うや否や、2つの空間モニターが空中へと出現しました。

「> あら、分かっているじゃないクロノ。それじゃ、なのは”さん。また何時か、ね？ <」

「> ”なのは”ちゃん。何時か休暇取って『翠屋』へスイーツ食べに行くから、その時は宜しく <」

「はい。御待ちしております」

空間モニター越しの別れも済ませたところで、フェイトちゃん達の足元で転移魔法が展開され、空色の魔力光がきらきらと輝き出しました。これで、本当に離れ離れとなってしまう……。そう思うと、涙腺が緩んできてしまつて自制するのが大変でした。やはり見送るのなら、笑顔のままで見送りたいものですから。

「さようなら、”なのは”。きつと何時か、君に会いに行くよ」

「うん。さようなら、フエイトちゃん。――」

【幕間編】

第26話：欠け行く非日常なの

S i d e : 恭也

「それじゃ、ユーノ。達者でな」

「ユーノ君、向こうでも元気だね」

「はい。恭也さん、美由希さん。今まで有り難う御座いました」

そうやって、ユーノ達を見送って暫し。当事者であった「なのは」は、共に戦い、友誼を交わした多くの仲間達を見送ったので、感慨も一入ひとしおとは思うものの……。これ以上此処に留まると、登校や出勤の準備にも支障を来してしまう。そんな時間となつてしまつていた。

「そろそろ帰ろうか、＼なのは」

「うん。そうだね……」

「……………あのく、恭ちゃん。私は？」

「お前は勝手に付いて来るだろう？」

「うう……。私も妹なのに……」

妹以前に弟子だからな。優しくすると直ぐにツケ上がるようでは、そう簡単にしてやれる物では無い。それにしても、〃なのは〃の様子も気になるが、仲裁役が不在である我が家も大丈夫だろうか？ レンと晶が、派手に喧嘩していないと良いんだが……。

〃

Side:なのは

悲しいとまでは行かずとも、寂しい別れから始まった朝は何だか時間や概念が狂っているかのようで、朝食は何時も以上に静かでしたし、あの晶ちゃんとレンちゃんが口喧嘩すらせず、並んで登校して行くという幻影を見てしまったような気がします。

そんな変わった朝を経て、ふと気付けば通学バスへと乗り込んでいた私は、当然の様にアリサ捜査官に咎められてしまいました。勿論、その傍らには〃すすか〃補佐官も一緒です。

「それで、また何か有ったの?」

「実は今日、レンちゃんと晶ちゃんが仲良く登校してて……」

「あの二人が? 確かに驚きだけど、其処まで呆然とする程かしら……?」

「身近だからこそ、じゃないのかな? アリサちゃんだって、私が猫嫌いになったら驚くでしょ?」

「なるほど。それは事件ね」

偶にはありますが、アリサちゃんや「ずずか」ちゃんが自宅に訪れる事も有りまして、高町家の日常風景でもあるレンちゃんや晶ちゃんの喧嘩は、既に何度か見られてしまっています。『喧嘩する程、仲が良い』——そんな次元を超越した技の応酬は、某格闘映画の如く凄まじく、アリサちゃんや「ずずか」ちゃんがそれを初見した際に、ドン引きしていたのは懐かしい記憶です。

そんなこんなで幾分か平静さを取り戻した私は、授業の傍ら並列思考でルーンライターの取り扱い説明書を熟読し、お昼休みは何時もの面子で過ごして、午後の授業を普通に受けたところで、待ちに待った放課後が訪れました。

「バイバイ、＼なのは＼ちゃん」

「それじゃ、＼なのは＼。また来週ね？」

「うん。バイバイ、＼ずずか＼ちゃん。アリサちゃん」

二人に別れを告げた後、私は通学バスには乗らず、人が無い路地裏へと入ったところで結界を張り、バリアジャケットを纏いました。

意匠に関しては、個人差ならぬデバイス差でも有るのでしょうか？ レイジングハートの時は、元となった学生服の面影が色濃く残っていました。ルーンライターの場合は手甲を始めとした装甲部分が多数追加されており、ゲーム等でよく見かける板金鎧と

洋服の中間のような装いとなりました。

「これ格好良いね、ルーンライター」

「Thank you.」

それとも、イメージする際にレイジングハートの物が被った結果、より洗練されてしまったのか……。真相は不明ですが、安全性が増す事には賛成なので、結果オーライという事にしておきます。

「それじゃ、試験飛行しよっか」

そして私は、帰宅がてらの試験飛行を実施するのでした。垂直上昇、水平飛行、急旋回、急加速、急降下に急停止。たまにクルビットとも呼ばれる宙返りや、180度フックから後方を向いたままの飛行など慣性制御で遊んでみましたが、デバイスによる差は無きに等しいと思いました。

あとは魔法の多重並行処理による負荷や、魔力の圧縮速度や充填可能容量を体感しておきたいのですが、もう間も無く自宅へ到着するので、残りのチェック項目は夕食等を済ませてからと為りそうです。

〃

S i d e : 美由希

学校からの帰り道。慌ただしかった日々は既に遠くへと過ぎ去り、身近だった危機も今では無くなつてしまいました。だからこうして、心穏やかに帰宅する事が出来るのですが、1つだけ以前とは変わってしまった事があります。

「良いですか、二人共？ 必殺技や絶招は、喧嘩で使っちゃいけません。仮令たとえ、その場のノリで使いたくなつたとしてもです」

それは、"なのは"への思いです。

「いや、だつてレンの奴が、俺の限定焦がしプリンを勝手に捨てやがつたから……」

「いやいや、あれは消費期限が切れとつたやる。むしろ、うちの気遣いに感謝せーや」

「あん？ たつた2日くらい良いじゃねーか！」

「2日"も"やる！ 衛生的に宜しゆうないわ、このすかぼんたん！」

《《フープバインド》》

「いだだだだっ?!」

「あ痛たたたっ?!」

可愛い妹で、守るべき家族であつた"なのは"が、ある日を境に魔法という力を得て、守る側へとなつてしまいました。そして今回の事件を経て得られた自信は、今後もきつと、あの子を深みへと衝き動かしてしまふ。……何となく、そんな気がするのです。

「あ、の、"なのは"ちゃん……。お猿の頭に緊箍きんこくじ児なら分かるんやけど、何でうちも嵌

められとるの……?」

「たつた今、口喧嘩をしたからです」

「なるほどな……。御免なさい。とても反省しています」

「……………俺も悪かった。御免なさい」

空を自由自在に飛行し、結界や転移に拘束、射撃や防衛も卒無くこなせる。そんな凄い力を手にして平生のままに居られるとは思えません、優しく聡明な「なのは」なら、この先も道を誤ることは無いと信じています。

「それでは最後に、再発防止策を話し合ってください」

「次からは、消費期限内にプリンを食べる」

「次からは、消費期限内にプリンを食わす」

「おい、てめーは俺の母さんかよ? ぐああああ、頭がああああ?!」

「ほんま、お猿は学……。あー、なのは「ちゃん。うち、何も言うておらんよ?」

「それじゃ、レンちゃんは先に解散で」

「あつ、一人だけ狡いぞ亀!」

「さーてさて、誰かさんの分まで夕食の仕込みをせなな」

「無視すんなゴリア!!」

しかし更なる力を求めたり、助けを求められた時は、躊躇いなく踏み込んで行ってし

もう危うさを何処かに秘めているようで、それが未恐ろしいと思ってしまったのです。果たして、それは私の杞憂なのか、若しくは普段から無意識に感じ取っている危険なのか……。取り敢えず、これまで以上に見守って行こうと決意しつつ、気を取り直すべく大きな声で帰宅を告げるのでした。

「ただいまー！　って、うわ……。晶ちゃん、何しているの？」

〃

S i d e : なのは

あれから、少々の御話しと宿題を始めとした諸々を済ませ、万全を期して再開したルーンライターの機能試験ですが……。

レイジングハートを基準とした場合、ルーンライターは其の7割程度にも満たない性能で、特に魔法の多重並行処理を任せた際の負荷がとても大きく、現状ではフェイトちゃんとの戦闘で多用した「高速誘導弾と炸裂誘導弾の混合弾幕」といった質と量の暴力は、ほぼほぼ不可能に近い。そう判断したところで、私はようやく諦める事が出来ました。

これまで時間が無かったのも事実ですが、私は今までレイジングハートの性能に活かされて来たのです。その現実を受け入れてしまえば、これから為すべき事の方向性は何

となく分かった様な気がします。

“並列思考の効率化と多層化”、そして“魔法の記憶化”。その3つを優先しつつ、ルーンライターとも人馬ならぬ『人機一体』を目指して頑張ろうと思ったのです。

……

……

……

さて、そんな決意から約46時間が経った現在。私は今、誕生日会に参加していました。尤も、私は祝う側の立場であり、主席はレンちゃん和晶ちゃんの二人という組み合わせです。ええ、はい。実はこの二人、普段あれだけ仲が悪いのに誕生日が一緒で、何となく運命を感じてしまいます。ちなみに、年齢に関しては晶ちゃんの方が1歳だけ年上となっております、その差が仲違いを宿命付けているのかもしれない。

まあ、こんな詰まらない考察は無辺世界にでも捨て置きまして、誕生日の定番曲でレンちゃんと晶ちゃんを祝い、蠟燭の火を吹き消して貰った後はプレゼントを手渡し、御馳走とケーキに舌鼓を打つ。それはそれは例年通りで、とても楽しい誕生日会でした。

本当は、色々と考えてはみたのです。

魔法を使った文字通りのマジックショーやら、『全国何処でも往復券』なる物を発行して、行きたいところへ転移魔法で送迎する等々。しかし、出会った当初のユーノさんが、「魔法文明の無い世界で、魔法を不特定多数の人に教えるのはちよつと……」といった旨の発言をしていたような思い出し、考え直してみました。だつてそれは、魔法という神秘を明らかにした結果、これまで何かしらの問題があつたと読み取ることが出来るからです。

魔法による技術革新や迫害、人体実験や選民思想エトセトラ。

苦渋を味わつた先人達の経験が、教訓として息衝いている。その可能性を考えると、如何しても無闇に使う事は出来ませんでした。そもそもこの地球は、『高機能力性遺伝子障害』という先天性の病がもたらした副次的な“力”——“超能力”を巡って、今まさに身近な前例が築かれつつありますので、明日は我が身である事をひしひしと感じられます。

ですから私も、秘匿する道を選んだのでした。とはいえ、結界を張つて魔法の練習もしますし、何かを守る為なら公での行使も辞さないつもりですけれども。

第27話：傷痕は、何時か癒えるモノなの？

S i d e : なのは

4月24日、火曜日。10時頃の事です。ふと、何かやり残しているような違和感を覚えてしまった私は、授業の合間に空転気味な並列思考に仕事を与え、その正体を探ってみたところ……。今年はまだ、花見をしていない事に気付きました。

そもそも桜の見頃である4月上旬から、私はジュエルシード回収とフェイトちゃんとの戦闘で大層忙しく、家族もその事に理解と協力をしてくれたので敢えて話題にはしなかつたのでしょうか。けれど、仕事の次にイベント事が大好きなお母さんの心情を思うと、心苦しくなつてしまいます。

しかしながら、今から花見をするにしても葉桜が目立ってしまう頃ですし、今週末から来週末まではゴールデンウィーク期間という事もあり、宿泊施設やキャンプ場の予約は既に一杯な筈で、外泊は困難。更にお母さんの慰労を目的とした場合、楽しくても疲れてしまう遊園地や水族館は避けた方が良いような気がします。

そんな風に、あれやこれやと考えていましたが、お昼休みの時間に「すずかちゃん」が話してくれた朗報もとい秘密の漏洩により、端無くも解決したのでした。

話を要約すると、『“すずか”ちゃんのお姉さん——忍さんが、お兄ちゃんを誘ってデートをしようと画策していたのですが、何時の間にか高町家と月村家の合同慰安旅行へと計画を変更しており、近い内に招待するかも？』という内容で、忍さんの恋の相談役である“すずか”ちゃんが話を受け、それとなく助言をしたら何故か其処へ落ち着いてしまったとの事。

そういった経緯と、意図せぬ暗躍もありまして……。

待ちに待った週末。私達は、“万能”と名高い月村家筆頭メイド長ことノエルさんが運転するマイクロバスに乗り込み、温泉旅館『山の宿』へと向かいました。メンバーは高町家と月村家の面々に、お姉ちゃんと忍さんの友人である那美さんと、言わずと知れたアリサちゃんを含めた総勢12名。予定としましては、一泊二日のプチ旅行となります。

本音を言うならば、久しく会っていないファイアツセお姉ちゃんや、那美さんの相方(?)でもある狐の久遠も来て欲しかったのですが、前者はイギリスに住んでいるので地理的要因に、後者は“ペット持ち込み禁止”という旅館側の規則に阻まれ、残念ながら参加する事は出来ませんでした。

他には、お兄ちゃんの友達で高町家とも交流が深い勇吾さんも先約が有るため参加を見送っており、全員集合はまたの機会となりそうです。

まあ、取り敢えず……。何時までも気持ちを引き摺ってでは旅を楽しめないので、移動中の手慰みとして持ち込んだ折り畳み式の将棋に集中しつつ、アリサちゃんを相手に2連勝を決め、〃すずか〃ちゃんと接戦を繰り広げていたところで目的地に到着。

それから恙無くチエツクインをした後、広い御座敷がある部屋へと通された私達は荷物を置いたところで、一時解散と相成りました。とはいえ、単独行動ではトラブルに巻き込まれる恐れがあるので、ある程度の人数で固まって行動するようにと周知されており、皆それを守って集団行動をしているようでした。

あ、ちなみに私は、即温泉派の集団に含まれています。

この派閥は、アリサちゃんと〃すずか〃ちゃん、お姉ちゃんと那美さん、晶ちゃんにレンちゃん、〃すずか〃ちゃんの従者であるフアリンさんも在籍する一大派閥で、とても賑やかなのが特徴です。

その為、これから先を思うと少しばかり気が滅入りそうになるのですが、どのみち6月頃に始まるプールの授業では晒す事になるので、今を避けても益は無し。なので視点

を変えて、試験的に見せてみようと思いました。

この左手の傷を私自身が受け入れたところで、他人が同様に受け入れてくれるか如何かなんて、まるで分からないのですから。

〃

Side：すずか

「告白って、どのタイミングですれば良いと思う？」——事の始まりは、忍お姉ちゃんの恋愛相談から始まりました。

私と姉とでは歳が十も離れており、更にどちらも恋愛初心者なので確たる答えなど持っていない事は承知の筈ですが、それでも頼ってくれたのは嬉しかったので、私は参考になりそうな小説や漫画、ドラマや映画の内容を思い出しつつ、「それならデートへ誘って、日が落ちた頃にでも告白しちやたら如何かな……？」と至って無難な助言をしたところ、何故か団体温泉ツアーが企画されてしまったのでした。

恐らく、恭也さんが好みそうな事とか、自身が持ち得る私財や伝手を勘案した結果が“これ”なのかもしれません、これだけの人数を誘った意図がよく分かりません。二人つきりだと気恥ずかしいので、ならば大勢でという判断なのでしょうか？

もしそうなら、お姉ちゃんの趣味である機械工学やゲームの他に、少女漫画や恋愛小

説といった趣味を追加させなくてはいけませんけれども、それはまあ後々聞いてから決めるとして……。今は目一杯、温泉を楽しもうと思いました。

フェアリンに手伝って貰いながら脱衣所で服を脱ぎ、何も持たないまま浴場へ足を踏み入れると、仄かに硫黄臭がしました。ミルクを吸った雑巾や、腐った卵にも例えられがちな硫黄の香りですが、あまり温泉には含まれていないのか鼻を衝く程では無く、むしろ特別な場所に来たという実感を湧かせてくれて、思わず心が弾んでしまいます。

しかし温泉へと浸かる前に、まずは身体を洗わなくてはいけませんので逸る気持ちを抑え、フェアリンが用意してくれた木目調の椅子に座って洗髪を任せていると、少し遅れて入って来た「なのは」ちゃんが私の右隣へとやって来ました。

「お待ちせー。『すずか』ちゃん、隣座っても良い？」

「うん、良いよ。……………あの、『なのは』ちゃん。その傷って……」

ふと、視界の端に入った「なのは」ちゃんの左手。火傷をしたとは聞いていたものの、予想よりも酷く痛々しい傷痕が出来ていて、思わず目を疑ってしまいました。

それは普段、包帯の下に隠されているので目にする機会はありませんでしたが、こうして実際に見てみると言葉が詰まってしまう程の凄惨さで、手の甲だけかと思いきや、手の平にも同様の傷痕が走っており、まるで赤熱した包丁か何かが突き刺さった痕の様にも見えます。

しかしながら、幸いな事に傷口自体は完全に塞がっており、皮膚の薄くなっている部分が破けるといった心配は無さそうなので、その点では安堵しました。ですが、如何いった経緯でこんな大怪我をしたのか、どの様な方法でこれ程の傷を短期間で塞げたのか、そんな疑問が汲めども尽きそうにありませんけれど、きつとこれに関しても口を噤むのでしよう。

何となく、そんな確信めいた予感がして……。私は拒絶を恐れ、
「なのは」ちゃんに問い質すことが出来ませんでした。

「やっぱりコレ、気になっちゃうかな……？」

「当然だよ……。だって『なのは』ちゃんは、大切な友達なんだから」

「……………有り難う、『すずか』ちゃん」

言葉はそれつきりで、『なのは』ちゃんはその後黙々と髪を洗い始めました。ちなみに、先程から私の左隣で沈黙を貫いていたアリサちゃんですが、自身の髪を手早く洗い終わるや否や、『なのは』ちゃんの元へと赴き、「あんた、随分とやんちゃをしたのね……」等、そこそこ辛辣なツツコミを入れながら背中を洗ってあげたりと、何時もより随分と優しいアプローチを仕掛けていて感心したのも束の間。

唐突に、バストチェックという名目のセクハラを『なのは』ちゃんにし始めたので、私は上げた好感度を僅かに下方修正しつつ、手元にあった洗面器の縁を右手で握り締

め、呼吸を一つ。そして意を決した後は、未だに戯れているアリサちゃんの後頭部を目掛け、大きく振りかぶったのでした。

〃

Side:なのは

そして私達は、身体を洗い終わった順に湯舟へと浸かったり、露天風呂の方にも行ってみたりして楽しんだ後は、長風呂を希望するお姉ちゃんと那美さんを残して、脱衣所へと戻りました。それから身体を拭き、着慣れない浴衣に袖を通して、御風呂上がりの瓶牛乳に舌鼓みを打つという御約束を完遂したところで、脱いだ服等の荷物を置きに一路部屋へ。

「それじゃ、次は旅館内を探検しに行くわよっ！」

「……ねえ、〃ずずか〃ちゃん。今のアリサちゃん、やけにテンション高いよね？」
 「うん。もしかして、私が強く叩いちゃった所為で………」

例の凶器はプラスチック製の洗面器であるにも拘らず、^{かわ}〃ずずか〃ちゃんの妙技によつて鈍器じみた打撃音を響かせてしましたし、これはひよつとしたら、ひよつとするのかもしれない。

「こら、其処の二人。私を勝手に可哀想な人にしないでよねっ！ 大体、今回の旅行は楽

しみにしていたんだから、少しぐらい羽目を外したって良いじゃない……」

「はいはい。ツンデレ乙なの」

「ごめんね、アリサちゃん。次は優しくするから」

「あんな達ねえ……。人の話、聞くつもり無いでしょ？」

そんな感じで意趣返しも程々に、レンちゃんと晶ちゃんとは部屋で別れ、私とアリサちゃん、*“すずか”*ちゃんとファリンさんの4人で旅館内を探検する事になりました。嗚呼、ちなみに……。左手の傷痕をそれと無く見せびらかした結果ですが、お姉ちゃん以外は程度の差こそあれ眉をひそめたので、今はちゃんと包帯を巻き直しています。

目にする事で気になってしまふのなら、隠しておいた方が両者にとつて*“ため”*になる。——これは、そう判断した故の対応です。

尤も、これは旅行中だけの対応予定でして、今後は徐々に晒して行こうと思いましたが。どのみち、包帯で隠そうが隠さまいが目立つことは避けられませんし、一生モノかもしれない傷痕を一生隠すよりは、一生晒した方が気楽ではありませんか。

それに、この傷は特別なのです。これは絆。これは証。若しくは楔くわ。フェイトちゃんが如何思っているのかは分かりかねますが、この傷痕には『思い出深い過去』が刻まれている。だから晒しても如何と言うことは無く、むしろ過去を何度でも思い起こしてくれるので、敢えて見える様にしておきたいという思惑も含んでいます。

さて……、こんな重たい思考をつらつらと連ねるよりも、今は折角の探検パートなので、すから楽しんでしまなくては損と言う物です。此処はアリサちゃんを見做つて、私も少し羽目を外してみようかな？ と気を緩めてしまったのは失敗だったのかもしれない。

歩き回つて、はしゃいで、御馳走を食べて、トランプで大富豪とかして遊んで、久し振りにお母さんとも取り留めの無い話を沢山して。そんな風に充実していたからこそ、些細なミスを犯してしまいました。

鎮痛剤の飲み忘れ。

たったそれだけの事ですが、薬の効果が切れると左手が異様な熱と痛みを持ち始め、まるで何かに焼かれているかの様に疼くのです。アースラの医療スタッフの話によると、神経の修復による痛みやら心因性の体感幻覚も合わさっているとの事ですが、ともあれ鎮痛剤を飲み忘れて眠りに就いた場合、当然の如く激痛による目覚めが待ち受けております。

「やらかしちやつたなあ……」

起き掛けの鈍い思考に、無遠慮な痛覚、そして止まらない冷や汗という三連コンボには悪態の1つも吐きたくなる程で、ゆっくりと布団から這い出た後、自分のリュック

サツクから鎮痛剤を手探りで回収、そして静かに部屋を出るといふ一連の行動さえ、億劫おっくうに感じられます。

それでも身体を引き摺るようにして歩き続け、廊下に設置してある冷水器で喉を潤しつつ薬を摂取したところで思考が完全起動を果たし、ようやく平静さを取り戻すことが出来ました。しかし直ぐに薬が効くはずも無く、むしろ明確に認知したことで更に痛みが悪化した様にも感じますが、さりとて非常時でも無いのに痛覚遮断を試みるなんて事は、魔法の乱用に他なりません。

ならば気晴らしに、夜間飛行でもと考えていたところ……。暗闇から、白い小袖こそでと緋袴ひばかまを纏った誰かが近付いて来ました。

『深夜の温泉旅館に、巫女衣装の人物』。字面だけでは和風ホラーな展開ですけれども、見知った衣装ということで既に察しは付いており、その予想は読み通りでした。とは言え、如何して浴衣から巫女衣装に着替えたのかは、皆目見当も付きませんが。

「こんばんは、那美さん」

「あつ……。こんばんは、＼なのは＼ちゃん」

「こんな所で何をしているんですか？」

「私はその……。ちよつと、見回りをね……」

副業は学生、そして本業が巫女である那美さんが其の恰好で見回りをするという事

は、もしや幽霊探しもしていたのでしようか？　気にはなりますが、私も魔法少女である事を秘匿している立場ですし、内実については特に深入りしようとは思いません。藪から棒が飛び出すだけで済むならまだしも、蛇が出て来ては困ってしまいますから。

「『なのは』ちゃんこそ、こんな時間に如何したの？」

「鎮痛剤が効くまで、ちよつと夜風に当たろうかなーと思ひまして」

「あー、そういう事なんですな。なるほど……」

左手を少し上げて見せると納得してくれましたが、今度は何かしらを言い淀んでいるらしく、反応を待つこと暫し。3分と経たずに覚悟は決まった様で、平生からの柔和な表情も心做こころなしか凜々しく見えます。

「あの、もし宜しければ……。御呪いを掛けてみても良いかな？」

「御呪い、ですか……？」

「うん、御呪い。『なのは』ちゃんが嫌じゃなければ、だけどね……」

巫女による「御呪いおまじな」。それはそれは、大いに興味を惹かれる響きでしたので気軽に承諾したところ、那美さんは私の左手を両手で包み込み、それから集中したので目を閉じて欲しいと頼まれ、閉じること十数秒。何かが流れ込んで来る感覚と共に、焼け爛れるような激痛が徐々に緩和され、やがて痛みは微かに痺れる程度にまで落ち着きました。

魔法とは似て非なる神秘。

それは実に不思議な体験でしたが、素直に御礼を述べた後は那美さんと共に部屋へ戻り、二度寝を敢行。そして翌朝、包帯を解いて傷痕の様子を確認してみたところ……。外見その物は、R15指定からR12指定へと格下げ出来そうなくらいには治っており、痛みに関しては鎮痛剤の薬効が抜けないと判断し難いものの、此方もかなり良くなっている様でした。

本当なら、喜ぶべき事なのでしょう。どうせ何時かは、癒え行くモノ。しかし、こんなにも早く薄れてしまうとは想定外の事で、何とも言えぬ遣る瀬無さが胸中を駆け巡り、やがて寂寥感となつて心へと根差しました。そして嘔くのです。糾弾すべき相手は何処かと。

実際のところ、理性ではちゃんと理解しています。最早、済んでしまった事は如何する事も出来ませんし、あの時の那美さんの善意も、それを受け取った私の意思も決して悪い判断では無く、人として当然の範疇でした。ただ私が、傷痕や痛みすら大切にしてきたのが仇となつただけで、強いて責めるのなら『自分の心』が妥当のように思えます。それでも、全てを諦めてしまうには収まりが付かず、ならば痛みだけでも考えた末に、私は其の日以降、鎮痛剤の服用をぱたりと止めてしまいました。

ちなみに。旅行2日目となる本日ですが、朝から傷心をした為、皆のテンションに付いて行く事が出来ませんでした。また機会があれば、全力で楽しみ尽くそうと思えます。

第28話：予期せぬ終わりと始まり

Side : ■■■

雨、雨、雨。今年もまた、そんな季節がやって来ました。気温は少し肌寒く、本が湿気り、洗濯物は部屋干し不可避に、遠出は困難且つ、近場での買い物すら億劫に感じます。そして何より問題なのは、そういったストレスが積もりに積もって、あらゆる意欲を削いでしまう事でした。

「あかん。なんもする気が起こらへん……。もう、今日の夕食は宅配ピザでもえーやろか……?」

基本的に自炊をする様には心掛けているものの、やはり美味しそうに食べてくれる相手が居なくては虚しさと煩わしさが募るだけで、それに両足が不自由という理由もあつて外食にせよ食材調達にせよ、雨天外出は如何しても躊躇いが生じるのです。とゆるわけて、録り溜めしていたドラマを見つつ宅配ピザと野菜ジュースで寂しい夕食を済ませた後は、御風呂で気分転換を図ります。

幸いなことに此の家は、遠戚に当たるロマンス・グレーでダンディな叔父様の手配によつて改修工事が完了しており、お風呂は一人でも入浴可能ですし、台所は車椅子でも

届く高さで、玄関の段差問題も解消済み。勿論、それ以外の設備においても今のところ不満を感じた事はありません。

只やはり、入浴介助者ぐらゐは居て欲しい気もするのですが、独りでやれる事は独りでせなな—という拙い自立心の下、叔父様に頼ることはせず今に至ります。そんな故も有り、えつちらおつちらと身体を洗って拭いて、そしてまた時間を掛けて寝間着を纏い、ついでに歯磨き等をした挙句、ようやく自室のベッドへと辿り着いたのは約3時間後の事でした。

その頃には、流石に私も疲労気味で“しんどい”の四文字が脳裏を過ぎるも、本を読むぐらゐの体力と時間は残っていたので、そのままベッドで横になりつつ読書を開始。

本のジャンルはファンタジー小説で、内容自体は不治の病に侵された妹を献身的に支える主人公が魔法の本を見つけ、その本に纏わる伝承を頼りに各地を巡って魔物退治をする御話です。話が進むに連れて個性的な仲間と出会い、世界の謎が徐々に明らかにされて、そして最後に仲間の一人が犠牲となり、妹が魔王に攫われた場面でページが尽きてしまいました。

一見すると、これは只のバッドエンドです。しかし、続編を匂わせる終わり方だったので期待は大なのですが、初版発行日を見てみますと極最近の物で、このポリユームの続編が出るとするなら早くて1年は掛かりそうな気がします。

「いや無理やろ……。こんなん、先が気になって発狂してまうわ……。……」

仲間の尊い犠牲と、主人公の精神的な支えになっていた妹との別離。胸が張り裂けそうな思いとは正にこの事で、一頻り涙を流した後、両親を亡くした自分の境遇とも被っているようにも感じて……。また新しい涙が、頬を伝っては落ちて行きました。

家族が居なくなるのは、悪夢その物です。

一番身近な存在で、話を聞いてくれたり、甘えを許してくれて、時には諭してくれる人が居ないと心にぽっかりと穴が開いているような気がしますし、仮令たとえそれを何かで塞いだとしても、傷付いた事実は変わる事なく残り続けます。この主人公は、如何なってしまうのでしょうか？ 私のように立ち止まったりはせずに、自ら進んで行けるのでしょうか？

きつと、そうであって欲しい。もつともつと強くなつて、魔王へと立ち向かつて欲しいと願いつつ涙を拭き、何気なく卓上時計を見てみますと、時刻は午前零時近く。

感情的にも、外の雨音的にも全然寝れる気はせーへんのですが、これ以上は身体に障りそうなので、寝る前に御手洗いと水分補給でもと思い車椅子に乗り込んだところ、前触れも無く本棚に置いていた一冊の本が紫色の光を放ち始め、その異様な光景に思わず動きが止まってしまいました。

元々その本は、書店を経営していた両親が古書を仕入れた際に混じっていた物で、タ

イトルらしい文章は明記されておらず、その上やけに硬い鎖で固定されて開く事も出来ない禁書じみた本でした。しかし、当時3歳だった私は何故かそれを甚くいた気に入りに入り、私物にしてしまったとの事。

そういつた経緯も有り、最近では本棚の隙間埋めとして使っていたところ今の現象に至る訳なのですが、まさか本物の魔導書的な代物だとは露とも思わず、これが彼の有名な『ナコト写本』やら『ネクロノミコン』だったら如何しようという不安で思考が埋め尽くされる中、事態はどんどん進んで行き、気付けば部屋の中に3人の女性と1人の男性が出現しており、最早、常識が通用しない事を何となく察しました。

さよなら日常。ようこそ非日常。

こうして、私—— “八神はやて” は無事に人生の転換期を迎え、再出発をする事になりました。御年9歳。不安要素しか有りませんが、どーにかこーにかで頑張つて行く所存です。

第29話：とある少女と騎士達的一幕

Side：はやて

「ほーん……。つまり、この【闇の書】とかゆー魔導書に選ばれた私は、666ページ分の魔力蒐集をしたら正式な主として認められて、その御手伝いを『守護騎士』の皆がしてくれるんやな？」

「はい、我等が主。その通りで御座います」

「ふむふむ……………」

あの未曾有の混乱から場所をリビングに移し、何かと片膝を着いて「騎士の礼」をしたがる彼等を椅子に座らせ、話し込むこと1時間程。そして現在の時刻もまた、午前1時を指そうとしていました。正直、睡魔が忍び寄りつつあるので凄く眠いのですが、話を聞けば聞くほどに重要な情報が出て来るものですから、何処で区切ろうか悩んでしまします。

例えば、 “666” という数字。

これは「獣の数字」として有名な3桁の数字で、此方の世界では不吉や邪悪の象徴として様々な媒体で用いられており、元々は聖書由来の数字やけれども、仮令これが偶然の合致だとしても気味が悪く、樂觀視をしては何時か足元を掬われるかもしれまん。嗚呼、ちなみに。互いの自己紹介は済ませていて――

皆を纏める凜々しい女性が、「シグナム」。

荒んだ目をしている女の子が、「ヴィータ」。

優しそうなお姉さんが、「ジャマル」。

筋骨隆々としたお兄さん（犬耳&尻尾付き）が、「ザフィーラ」。

———この4人が私の配下となる『守護騎士』達で、騎士団としての名は『ヴォルケンリッター雲の騎士団』。魔法によって作り出された仮初めの生命体で、主要任務は私の御手伝い

をしたり、脅威を排除する事らしいのですが、その脅威とは何ぞやと尋ねてみたところ、

「主や我らを脅かし、妨げとなる全てが対象」との事で、ちゃんと手綱を握らなな一と思いました。

理由としましては、こういった物言いをする方達は人を殺すのが禁忌では無く、あくまでも手段の1つとして割り切っているのが相場で、それから何だかんだで暴走したり改心して行く様式は、夢小説と揶揄される小説体系においては然程珍しくありません。

とは言え、虚構の知識が現実の参考になるかは正直なところ未知数ですが、頼れるモ

ノは己の知識と叔父様だけで、即応可能なのは前者のみ。だから間違っていたとしても、今暫くは突き進む所存です。

「ところでな、シグナム。また幾つか質問したいんやけど、その魔力蒐集とやらには期限とか有るんやろか？」

「私を知る限り、無いと記憶しております」

「じゃあ、まだ私に説明していない機能とか付いていたりせーへん？」

そう問い掛けてみると、「少し長くなりますが……」と前置きをされ、延々と語つてくれました。主を選定する機能、旅をする機能、破損個所を復元する機能、蒐集したデータを再現・改変する機能、貯蓄した魔力を運用する機能、盗難防止に関する機能、等々。エトセトラ

取り分け興味深かったのは『管制人格』を魔法生命体として生成する機能で、これは魔力蒐集によって400ページを超えた場合に解除される機能であるらしく、666ページに至らずとも限定的な運用が可能になり、更に全機能を熟知している事から【闇の書】の運用効率が格段に良くなるのだとか。——要するに、頼もしい仲間を増やせるっちゅー事やね。分かります。

しかし実際のところ、機械の如く【闇の書】の制御下に置かれているであろう彼等から聞きたかったのは、万が一の誤作動や機能不全を起こした際の強制終了やら再起動を可能にする方法だったのですが、面と向かって不躰な質問をする勇氣など有るはずも無

く、終つひぞ語られる事はありませんでした。

尤も、仮に語っていたとしても私が其れに気付かず、さらつと聞き流している可能性が無きにしても非ずですが。

その後、取り敢えず寝ようという本能に従つて皆に解散令を出し、シグナムとシャマルには両親が使っていた2階の部屋を宛がい、ヴィータは小さいので一先ず私の部屋で同居をさせ、そしてザファイラには大変申し訳無いのですが、リビングのソファアで一夜を過ごして貰う事になりました。

そうやって、遅蒔きながら眠りに就いた其の日の夜。何とも不思議な夢を見た……よ
うな気がします。銀髪ロングの女性が私の前で片膝を着き、何か大切な事を話していた
のですが残念ながら明晰夢の類では無く、何処までも不鮮明かつ朧気で、とても夢らし
い夢でした。

それでも悲しみを堪える様な、壊れてしまいそうな表情だけは微かに覚えており、起
床後は暫し、アレは何やったのやろかと悩んでいましたが、今日は朝から5人分の食事
を作り、服を見繕い、時間になったらリハビリをしに病院へ行つてと予定が目白押しで、
ゆつくりしている暇など有りません。

「そーいえば、圧倒的に食材不足のよーな……………」

基本的に1人分しか作らないので冷蔵庫の中身は少なく、今朝は食パンを食べる予定だったので炊飯器は空ですし、更に食パンの枚数は残り3枚のみ。結局この日の朝食は、備蓄していた即席麺に乾燥ワカメやら卵を追加した手抜き料理で、何とか其の場を凌ぎました。

昼食の準備は、予定的に無理そうなのでコンビニ飯で済ますとして……。夕食では、ちゃんとした料理を皆に出してあげたいなと思います。

（ ）

Side：シグナム

今回の旅路は、些か調子が狂ってしまいそうになる。いや……。最早そう思う時点で、私は既に狂っているのだろう。魔法文明の欠片も感じぬ世界に、貧困と戦乱から程遠い生活環境、そして極め付けが純真無垢とすら思える温厚な主。これでは到底、戦働き等は望めそうに無かった。

我等の存在意義は、主が歩み行く王道へと付き従い、その障害を排除する為だけの道具でしかないのに、その“力”を求められずにいるのだ。有り体に言ってしまうば異常事態なのだが、主が“平穩”を求めるのなら、その願いを叶えるのもまた我等の在り方

である。

人を殺めず、無闇に原住生物を狩らず、森や町を焼き尽くさず。屍の山と、血の海とは無縁の生活。それはまるで『善良なる人』のようで、酷く滑稽な状況にも思えてしまう。我が身の罪業と宿命を以てして、今更ながら人並みの生活を送れるとは望外の事態でしか無く、本当に望みさえしなかつたのだ。

まあしかし、我等は永遠の旅人であり、現在すらも刹那の一部。これもまた一興として応じるのも、吝かでは無いのかもしれない……。

「……………あの、我等が主。出来れば其処の、ジーンズなる物を穿いても宜しいでしょうか?」

「どーしたん、シグナム? そのワンピース、肩幅でも合わんかったんかいな?」

ちなみに現在、この世界での活動に相応しい衣服を貸与されているところなのだが、私には何故か可愛らしい衣服ばかりが手渡され、人形の如く着せ替えられていた。実に不思議だ。こういった衣服は、シャマルが着こなしてしまえるのに敢えて試されるとは、如何なる意図が有るのだろうか?

「いえ、幅も丈も問題有りません。ただ有事の際には破いてしまうかもしれないので、生地耐久性が高そうな其方をと考慮しました」

「心配し過ぎやっつて。それにこれ穿いたら、普通に格好良くなるだけやろ?」

「格好良いかは分かりませんが、いざと言う時には動き易いと思います」

「あんな、シグナム……。古今東西、『ギャップ萌え』は正義なんやで？」

「成程……。御教示、感謝致します」

如何やらこの世界では、意外性を追求する気風があるようだ。——その後も様々な衣服へと着せ替えられ、最終的に私とシヤマルは主の亡き御母堂の衣服を。ヴィータは、主が普段使いしている衣服の一部を貸与され、ザフィーラは体格に合う衣服が皆無だったので、守護獣としての本来の姿である獣形態となる事で解決を図ったものの、今度はそれによって別問題が発生した。

主曰く、大型犬という区分に該当するであろうザフィーラの獣形態は、首輪と手綱と同伴者無しの状態を外を出歩いた場合、野生動物と見做されて治安維持組織へと通報される恐れがあるらしく、そして主の拠点には首輪と手綱の類は無いとの事。

故にそれらを手入するまでの間、ザフィーラには拠点防御を任せ、主が外出する際には残る3人で護衛に当たる事を決めるや否や、早速ではあるがザフィーラを除いた我々と主は、共に拠点を後にしたのであった。

：

……

……

尚、行き先は『海鳴大学病院』という大型医療施設で、今日は其処で再び歩ける様になる為の訓練をするのだと主は出発前から意気込んでいたが、訓練中の様子を見させて頂いた感想としては、その夢が叶うのは当分先の事である様に思えてしまう。

現在の主の身体能力では、両手で手摺りを掴み、その場に数十秒でも立つだけで精一杯なのだ。この調子で回復するとして、まともに歩ける様になるまであと何年掛かるのだろうか？ いや、そもそも単独歩行が可能になる日は来るのだろうか……？

この感情は、「歯痒い」な……………。

主が“力”を求め、我等を使つて頂ければ遠くない内に“真の主”としての覚醒を果たし、飛行魔法や身体強化魔法で如何とでもなる事なのに、自力での解決に囚われているのだから忠言すべきか悩んだものの、仮に断られた場合を憂慮すると、とてもではないが容易には言い出せない。

他力を良しとせぬ、生き方。その志は崇高なれど、幼少の砌みぎりからそれを為すのは無謀であり、自ら進んで行うのは蛮勇とも言える。もし、その決意を固めてしまう様な事態になつてしまつたら……。そんな愚考が纏わり付いて、離れそうになかつた。

……………

……

…

〃

S i d e : ザファイラ

「——以上が、該当する記憶だ」

「ふむ……。事の仔細は理解した」

あれから約3時間。現在、我を除く騎士達と主の一同は予定を済ませ、昼食の為に拠点への帰還を果たしていたが何処か雰囲気が高く、理由を確かめずにはいられなかつた。その為、主とヴィータが話している合間にシャルやシグナムから記憶情報を提供して貰い、時系列毎に再構成を行っていたのが先程の事となる。

「ザファイラ。御前から見て、我等が主は如何映る?」

「努力家。そして気負っている様にも見えるが……、何かは分からぬ」

「そうか……。私も同様の意見だ」

そして、これ以上の言葉は無用だと判断したのか、話が途切れてしまった。我は元より、シグナムもまた饒舌とは程遠い武骨者で、同じ内容の会話が続くこと自体が稀である。然れど、話題を切り替えやすいという点では有り難く、此度もまた質問がてら話を

替えていった。

「ところで、シグナム。シャマルの記憶に拠れば、明日にでも全員で出掛ける予定を主殿が立てている様だが、拠点警護の方は如何するつもりだ？」

「シャマルの陣で対応する。余程の事が無い限りは、それで大丈夫な筈だ」

成程。拠点に魔法陣を敷いて陣地化するのであれば、確かに無人であつても問題は無いが……。1つだけ、懸念が残る。

「しかし、魔法を使えば管理局が気付くのではないか？」

数代前の主に仕えていた頃から、幾度もの戦^{せん}戈^かを交えて来た敵対組織『時空管理局』。

それは、主と我等の王道を阻む障害の1つであり、彼等は代を経るに連れてより強大さを増し、今や我等の戦力を凌駕し得る“力”を持っていた。

故に我等は、此方の戦力が整うまでは弱者の策を採らざるを得ず、魔法の痕跡を辿られぬ様に隠蔽もしくは偽装を施し、様々な次元世界へと散らばっては魔力蒐集を行う等、何時しか騎士らしからぬ行動が当たり前となつてしまつたが、これは決して堪え難い事では無い。

主の喪失、または【闇の書】の破壊という最悪の事態を防げるのであれば、我等は如何なる手段も厭^{いと}わぬ覚悟をしている。だからこそ、危険を冒そうとするシグナムの案には懸念を抱くも、それについてはシャマルが補足してくれた。

「ええ、なので隠密性を優先した最低限の陣地化となりますが、防犯目的なら十分な性能となる事は保障します」

「了解した。それならば、憂い無く護衛に努めよう」

ちなみに記憶を共有した御蔭で、我が獣形態で出掛ける際に必要となる首輪と手綱の入手時期は、『夕食の調達がてら購入する』という予定を知った為、最早尋ねたい事は何も無く、またしても三者の間には沈黙が訪れようとしていた。しかしそれは、主からの問い掛けにより状況は打開へと至る。

「あんなー、ザフィーラ。これから色々と買い出しに行くんやけど、何か食べたい物とか有ったりせーへん？」

「我は……いや、私はこの世界の食べ物には疎く、強いて挙げるならば肉料理となりませう」

今までの経験上、そのオーダーで不味い物が出た例は極少数なので恐らく大丈夫だとは思いますが、はてさて……。

「それやったら夕食で、牛肉のソテーと温野菜の付け合わせ、豚汁、唐揚げ辺りを出して無難に様子見やろーか……？ ハンバーグという選択肢も捨て難いんやけど、食感で賛否が別れると聞いた事も有るよーな、無いよーな……。取り敢えず、今回は見送りやね……」

如何やら、主の中では献立がお決まりになった様だ。一体、どんな食べ物を出して頂けるのかは想像が付かないものの、少しばかり楽しみであった。

第30話：ハレのち曇りなの

Side：アリサ

昨夜、「なのは」と電話で話した時の印象は至って普通だったのに、これは一体如何
いう事なのだろうか……？

今朝の「なのは」は、通学バスへと乗り込んで来た時点で目元には薄っすらと隈が出
来ており、夜更かしをしていたのは明らかである。しかしながら、気怠そうな素振り
は全く無く、どちらかと言えば上の空状態なのに普通を装っている様にも見えて、何だか
嫌な予兆だと感じてしまう。

さかのぼ遡ること、一ヶ月ほど前。今日のような何らかの隠し事と、不思議な出来事が続いた
かと思えば突発的な体調不良で学校を休んだ挙句、その翌週には利き手である左手に大
怪我（治療済み）を負っているにも拘らず、かかわ何食わぬ顔で登校して来たという前歴が有
るのだ、此奴は。

それ故に嫌な方向へと思考が飛躍するものの、この状態の「なのは」を問い詰めよう
としても曖昧にされてしまうし、最終的には棘のある言い回しで遠ざけようとする為、
其処は触れて欲しくない領域なのだろう。ただ真実を知りたいのであれば、何処までも

踏み込めば良い。しかし親友で在りたいのなら、相手が望む距離を保たなければならぬ。

それを知って、思い知らされて……。

だからもう、心配だけをする事にした。＼なのは＼が知らない私の一面が有るように、私が知らない＼なのは＼の一面も確かに有る。たつたそれだけの事なのだ。そして誰だつて、人に見せたいのは望ましい自分の姿である。理想的で個性的な、自分らしい自分を見て欲しいと他ならぬ私自身が願うのだから、恐らく＼なのは＼も『そう』なのだろう。

いや……。『そう』だと思わなくては、私はまた遠からず＼なのは＼とぶつかり合つて、そしてまた嫌な思いをさせてしまうのだ。きつと。

衝突なんて、するもんじやない。大切な親友だからこそ、すべき時は有るのかもしれないけれど判断を下すには時期尚早で、何よりも二度と間違いを犯したくは無いと考えた末に私は、もやもやとした気持ちを抑えつつも呆れ顔をして見せて、「あんだ、また夜更かしでもしたの？」と挨拶がてら言つてやったのであつた。

（ ）

Side:すずか

今朝の「なのは」ちゃんは、寝不足の理由として夢見の悪さを挙げていたのですが、本当のところは如何なんだろうと心配になり、少しばかり考え込んでしまいました。

思い当たる節は色々と有って、例えば私達が通う聖祥大学付属小学校は、上質な教育と環境を与えてくれる反面それなりの学力を示さなくてはならず、その為の筆記テストが結構な頻度で設けられています。

尤もそれは、あくまでも個々人の学力を先生達が確認する為に行われるので、得点順位や名前を掲示板へ張り出すといった事は有りませんが、採点が終われば生徒の元へテスト用紙が返される為、誰が何点であったのかは当人の口や人伝の噂から知る事が出来ますし、最低得点と最高得点も話のネタとしては流れ易く、其処から大凡の平均点を求める事も可能です。

それで、なのですが……。最近、同級生と比較しても実に平均的であった「なのは」ちゃんのテスト点数が格段に良くなっており、その勢いを維持する為に無茶な勉強をしているのではないかと？ という不安を抱いてしまったが故に、如何しても思考が止まらうとはしませんでした。

訊いてしまえば、解決するかもしれない。

『そう』と分かっている、何かしらの言葉を返してくれると信じていながらも、杞憂で余計な御世話で、的外れな掛けにならないだろうかと怖じ気付いてしまった私は、結局聞けず仕舞いのまま何時も通りの日常を過ごし、そして何事も無く終わらせようと思っていました。

「“わずか”ちゃん。次は理科の授業だから、そろそろ移動しなきゃだよ？」

「そう、だったね……。ありがとう、“なのは”ちゃん」

「大丈夫？ 私以上に、ぼーっとしているみたいだけれど……」

そのつもり、だったのです。

「……あのね、“なのは”ちゃん」

「うん。如何かしたの？」

しかし何時からか、時折感じていた高揚感が最近では無視できない程に強くなつていて、それが“なのは”ちゃんと一緒に居る時が一番強いと分かってからは、自制する事が難しくなりました。どんな恐怖に対しても足が竦んでしまうのに、未知に対しては何

処までも歩み寄りたくなる。そんな私の性分が、理性へと嘯きます。

怖い事なんて、しない方が良いに決まっている。それよりも好ましい事を優先すべきなんじゃないかな？ この選択肢は間違っていない。きつと大丈夫。『なのは』ちゃんなら、許してくれる筈だよ……？ だから、手を——

「手を……」

「手を……？」

—— 繋いでも良い？

「繋いでも良い……かな？」

「………良いよ。『わずか』ちゃんなら」

「ありがとう、『なのは』ちゃん」

繋いだ手と手。其処から伝わる『何か』が身体中を駆け巡り、瞬く間に心を多幸感で満たして行きます。嬉しくて嬉しくて嬉しくて、嬉しくも愛おしい。嗚呼、何と革新的な体験なんでしょう？ この不思議で素敵な熱は、決して冷める事は無いように思えました。少なくとも、その様な錯覚を懐いてしまえる程には可笑しな気分になれたのです。

ありがとう。

他に何と御礼を言えば良いのか分からないけれど、こんなにも素晴らしい温もりを分

けてくれて、本当に本当に嬉しいの……。ありがとう、なのは「ちゃん。 ■■■■

（ ）

S i d e : なのは

優れた魔導資質に恵まれ、それによって助けられた場面は色々と有るのですが……。正直なところ、睡眠中でも怪しい魔力波を感知する事が可能な資質なんて、特に欲しいとは思ってもいませんでした。恐らく、ジュエルシードの件で過敏になっただけだと信じたのですが、感知してしまったからには見過ごす訳には行かず、起床を選択。強引に意識を浮上させて、覚醒します。

「うう……。ルーンライター……」

「— Good evening, Boss. —」

「異常報告」

「— There is no abnormality. —」

「そうなんだ……。有り難う」

取り敢えず、ルーンライターでは検知出来ない程の微細な魔力波か、私が勘違いしているだけという事は分かりました。枕元の携帯電話を開いて時間を確認してみますと、時刻は深夜零時を過ぎたばかりで、日付は6月4日。ちなみに平日でもあり、朝になれ

ば学校へ登校しなくてははいけません。

「直ぐに、見つかるの良いんだけど……」

そう思いつつも、現在地が露見しかねない探索魔法は使わずに、魔力残滓から発生源を特定する探知魔法とでも言うべき魔法で地道に調べて行きます。

ちなみにこれは余談なのですが、どうも私が使っているミッドチルダ式の魔法は、何かを探す魔法に対して《Divine buster》のような魔法発動に関するコマンドトリガーは特に設けてはおらず、ざつくりと探索魔法や探知魔法といった名称で呼び分けているだけで、唯一の例外は目の代わりとなる小型^{サーチャイ}端末を魔力から生成し、遠隔操作による視認探索を可能とする《Area search》という魔法ぐらいでしょうか？ 他は寡聞にして存じません。

まあ、兎にも角にも……。長い夜になりそうだなと諦め半分、並列思考の暖機運転が終わった事を確認した後は意識を切り替え、探知魔法の行使に没頭するのですた。

……

……

……

そして案の定、秘匿性を重視した探知魔法では魔力波を発した対象を見付ける事が出来ず、そのまま夜明けを迎えたので眠気と戦いながらも登校を果たし、今は「さすが」

ちゃんと手を繋いだ状態で理科室へ向かっている所だったりします。

はて、如何して『こう』為ったのやら……？

会話内容は、ちゃんと覚えていきます。返事をした後、“すずか”ちゃんの不安そうな表情が明るい物へと変わった事も全て記憶しているにも拘らず、何故あの様な事を願ったのか見当も付かないのです。平生の“すずか”ちゃんは引つ込み思案な性格で、その上かなりの恥ずかしがり屋さんでもある為、多少なりとも衆目を集めてしまう様なスキャンシッブは控えめな子。——そう思っていました。

尤も、女子で仲の良い友達同士なら手を繋いでいる子達は結構居ますし、それらに感化されたとしても何ら不思議では有りませんが……。ともあれ、気分転換にはなりません。

不審な魔力波について相談しようにも、お兄ちゃん達は魔力源の探索に関しては門外漢で、ユーノ君は居ませんし、フェイトちゃんは言わずもがな。クロノさん達は、定期的に次元世界間の巡回がてら私とフェイトちゃんの文通やビデオメッセージの橋渡しをしてくれるのですが、実は数週間程前に地球を去ったばかりで、次の来航は7月未の予定との事。

つまるところ、魔法に関して頼れるのは己のみと気を張っていた折に現状のイベントが発生し、それによって緊張を好い具合に弛緩させてくれたのが“すずか”ちゃんとい

う訳でして、未だに行動理由は不明ですが感謝の気持ちに翳^{かげ}りはありません。

地に足が着いて。目が覚めて。然れども画期的な打開策は未だに思い付きませんが、一先ず出来る事はやってみよう等と前向きに覚悟を完了した私は、軽い足取りで「さすが」ちゃんをエスコートしたまま理科室へとINしました。……ええ、はい。そうなのです。迂闊にも入ってしまったのです。

ちなみに今は一緒に居ないアリサちゃんですが、交友関係が広い事もあって別の友達と共に理科室へと先行しており、やけに到着が遅い私と「さすが」ちゃんを今か今かと待ち侘^{いさち}びている最中、其処へ私達が仲睦まじく手を繋いで入場したものですから、色々な閾^{いさち}値が限界を越えたのかもしれない。

暴君が君臨しました。

しかも性質が悪い事に、表面上では何でも無いように装いながらも、言動の端々に不満気な心情を滲^{にじ}ませるものですから非常に厄介で、授業中も休み時間も御機嫌斜めの状態は継続し、改善する兆しが無いまま下校時間を迎えたので気にはなりつつも帰宅を選択^あ。

その後、携帯電話のメール機能を使って何通か遣り取りをして分かった事は、実際の

ところ怒ってはいないらしく、察せないなら知らなくて良いとの回答を得た私の脳裏には『女心と秋の空』という諺ことわざが脳裏を飛び交っていました。や、私も女の子ですけれども……。分らない物は分らないのです。

尚それから、メールでの会話が流れに流れ、特に決めていなかった週末の予定がバニングス邸でのお泊り会（一泊二日）と相成りましたので、お母さんが仕事から帰って来たら、向こうへ持つて行く菓子折りについて相談と御願いをしたいと思います。

第31話：独りぼっちの牙城なの

Side：なのは

「それじゃ、行つて来ます」

「おー、氣い付けてな」

「行つてらっしゃい、なのはちゃん」

週末。空は生憎あいにくの曇り空で、小雨がぼつぼつと降っていました。予定に変わりは無く、今日からアリサちゃんの家で一泊二日の御泊りです。お母さんは何時ものように仕事で居らず、お兄ちゃんとお姉ちゃんは離れ家の道場で切り合っている頃でしょうか。リビングに居たレンちゃんと晶ちゃんのみ声を掛けて出発します。

嗚呼ちなみに、月曜日の午前零時に感じた不審な魔力波について、この5日間で調べられるだけ調べ尽くしてみました。残念ながら空振りとなっていました。恐らく、あの日に感じた物は勘違いで、きつと寝惚けていたのでしょう。或いは、自身で貯蓄している余剰魔力が何らかの要因で乱れ、それを誤認した可能性が有るのかもしれない。

故に私は、余剰魔力の有効的な無駄使いとバス代の節約を兼ねた転移魔法により、ア

リサちゃんの家へと向かう事にしました。

周囲を確認してから結界を敷き、ルーンライターに記録されている転移魔法を複写展開しつつ座標設定と魔力充填を行い、そして最後にコマンドトリガーとして「転移」と呟けば、それから先は為されるが儘です。粒子変換後に転移先で再構成か、若しくは座標置換か。その辺の仕様はよく分かりませんが、魔法の利便性がよく分かる魔法だと思います。

さて……。そうこう考えている内に転移が完了したので、容姿の乱れと荷物の無事を確かめつつ、周辺に誰も居ない事を把握した後に結界を解き、事前に調べた経路を思い浮かべつつ道を歩くこと約3分。漸く、アリサちゃん家の正門前に到着です。

ええ、はい。実のところ、転移魔法で直行した方が早いという事は分かっています。しかしながら、アリサちゃんの家は「すずか」ちゃんの家にも劣らぬ豪邸でして、当然の如く防犯カメラが四方八方に備わっており、結界から出る瞬間を録画されない様にする為には、人気の無い場所へと転移して其処から歩くのが無難だと考えた結果、この様な方法になりました。少しだけ遠回りですが、結果としてはバスを利用するよりも1時間程の時短にはなっていますし、些末事に気を遣るのは野暮という物でしょう。

それよりも、これから先はアリサちゃんと他愛の無い話をして笑ったり、一緒にゲームをして遊んだり、一時的とはいえ寢食を共にするのです。きつと楽しい筈だ。それだ

けの筈だ。他の感情が介在する余地なんて、これっぽっちも無い筈だ。

この時の私は、そんな期待を無邪気にしていたのでした。

く

Side：アリサ

“なのは”と“すずか”は、私の大切な親友である。現在は、そう断言する事が出来る間柄ではあるものの最初はぎこちなかったし、むしろ不仲になる可能性の方が高かった。

アレは、そう……。私が小学1年生になり、段々と慣れてきた頃の出来事だ。朝食の際に、パパから「実は、アリサと同じ学年に月村家のお子さんが居ると小耳に挟んでね。これも何かの縁だし、挨拶くらいはしておきなさい」と勧められた私は登校するや否や、まず下調べから始めた。

不慣れな新入生が迷わぬ様に、各教室の出入口に掲示されている座席表から“つきむら すずか”の名前を探し当て、更に同姓が居ない事を確認しつつクラスと席の位置を記憶する。その後は、授業を受けながら挨拶の内容や仕方を熟慮し、実際の行動に移したのは昼休みになってからであった。

今にして思えば、その合間で冷静になるべきだったのだろう。

パパが言わんとしていた事は、「顔見知りくらいには為っておきなさい」という程度の意味合いだった筈なのに、何故か私はそれを深読みして「見極めて来なさい」と解釈し、行動へと移っていたのだから、当然の如く歪みが生じた。

私は「アリサ・バニングス」で、相手は「月村すずか」。どちらの両親も、其の姓を冠した大企業の重役を務めており、活躍している分野が多少なりとも被っていた事から、私は「すずか」に「商売敵の娘」というレッテルを張り、向こうの子がどんな人物なのか？ 格下に見られたりはしないか？ 私の敵に成り得るか？ そんな事ばかりを思い描いては期待していたからこそ、裏切られた時の失望感は凄まじかった。

有り体あてに言ってしまうと、かつての「すずか」は人見知りが激しく、今よりも遥かに臆病な性格だった事もあり、私の堂々とした……いや、もしかしたら威圧的とも思える挨拶に戸惑ったのか、小さな声で何事かを言った後に目を逸らし、やがて顔すらも俯かせてしまったのだ。

人と話す時は、目を見て話す。

それが礼儀であると教えられていた私にとって、目を逸らすような行為は大変理解し難く、初めの内は失礼だと指摘して遺憾の意を示すも、「すずか」は委縮するばかり。それに痺れを切らした私は、こうすれば嫌でも視線は上がる筈だと彼女が身に着けてい

た白いヘアバンドを奪い取る暴挙へ出てしまい、その後はもう散々だった。

「たまたま『すずか』と同じクラスで、騒動の仲裁をすべく声を掛けて来た『なのは』の行為に対して私は苛立ち、衝動的に平手打ちを浴びせてしまったのだが、御返しとばかりに此方の頬へ裏拳を叩き込まれ、視界が暗転。気絶から目を覚ました時には、保健室のベッドに寝かされていた。」

……

……

……

「こうして、私達は最悪な出会い方をしたけれども、互いの非を認めて謝罪を交わし、気拙さも有って距離を置こうとする私を『なのは』が引き留め、『すずか』との仲立ちをしてくれたからこそ今の関係へと繋がっているのだ。」

「其の恩を思えば、対戦中の格闘ゲームで完膚無きまでフルボッコにされた程度で、そう易々とキレル訳には……………いや、やっぱりキレよう。幾ら何でも、コマンド入力とタイミングが難しい特殊カウンターの壁敵め+打ち上げ空中コンボ+超必殺技」

「ああ、もうっ！ 少しくらい手加減しなさいよねっ!？」

「えー…………。最初から初心者狩りした人が、それを言っちゃおうの?！」

「そりや、惨敗したら言いたくもなるわよ。全く、何でこんなに強いのかしら……」

2週間前に発売されたばかりのゲームで、私は予約購入してから合計8時間程プレイしていたのに対し、“なのは”は今日が初プレイ。しかも、まだ30分程しか遊んでいないのにこの上達っぷりなのだから、ちよつとぐらい愚痴を零すのは許して欲しい。まあ元々、反射神経や動体視力が重要なシューティングゲームや格闘ゲームが得意な事は知ってたし、やがて私が負け始める事も少なからず予期していた。

ただ、これ程までボロ負けするとは想定外の事態で、このまま続けても一方的に狩られるだけだと察した私は対戦モードを中断し、“なのは”にストーリーモードを最高難易度でプレイさせ、それを私が観賞するというストレスフリーな遊びへ切り替えてみたところ、“なのは”は危な気無く最終ステージまで到達したばかりか、初見である筈のボスを相手に三本先取で三連勝し、見事エンドロールを迎えてしまった。

喉^{けしか}けた私ですら、最高難易度でのプレイは途中で投げ出した程の苦行だったのに、まさか一発でクリアするとは……。

ともあれ、これ程の差が有ると勝負にすら成らないので、今後は協力プレイが出来るゲームや運要素の強いパーティーゲームを取り揃えようと決意しつつ、ふと気になって時計を確認すると、何時の間にか8時を過ぎていた。つまり、私の勘違いでなければ現在のは夜の8時過ぎで、そろそろ御風呂に入ったり寝る準備をする時間帯だ。

しかし正直、物足りなさを感じてしまう。

もつと色々やりたかったのに、梅雨時の晴れ間なんて滅多に訪れる筈も無く、結局ゲーム三昧の一日となつてしまった。他にやった事と言えば、室内飼いをしている家の犬達を「なのは」と共にモフったり、昼食や夕食を一緒にしたぐらいで、未だに元気が有り余っている。

まあ、これはこれで楽しかったし、私の我情で「なのは」を振り回すのも気が引ける。だから、今回は此処までにすべきだ。そう判断を下して、されど名残惜しく。やはりと思ひ、考え直す。そもそも今回の御泊り会で「なのは」だけを招待した事には、私的ない図が絡んでいた。

「すずか」への意趣返し。大雑把に纏めると其の一言に尽きる。

今まで私達は、機会や都合や遠慮などの要素によって、私や「すずか」の家に集まりこすすれ宿泊すること無く過ごして来たものの、ざつと二ヶ月程前——「すずか」の家に「なのは」が泊まった日の翌日。やけに上機嫌な「すずか」から、お互いの時間を共有し合い、一緒に過ごす充実感や喜びを延々と学校で聞かされ、そんなに良いモノなんだと羨ましく思う反面、僅かな妬みを抱いてしまった事が起因になっており、それ

らが私を現状へと至らせたのである。

さて、そんな内情と幼稚さを秘めつつ「なのは」を招いた時点で、これ以上を躊躇うべきだろうか……？ それこそ、今更な話でしょうに。賽は投げられた。ならば、些事も投げ捨てて楽しまなくては、この鬱屈した思いは晴れそうになかった。

「ねえ、「なのは」。折角だし、一緒に御風呂へ入らない？」

（ ）

Side:なのは

御風呂に入ってサツパリ気分になったところで、肅々と寝支度に取り掛かります。歯を磨いたり、御手洗いに行ったり、その他にも細々と。

ちなみに、「ずずか」ちゃんと同様にアリサちゃんもダブルサイズと思われる大きなベッドを普段使っているらしく、子供二人で寝ても十分な広さが有るため、私は此方でも一緒に寝る事になりました。……や、否やは有りませんが、少しばかり寝相が気になつてしまうのです。仮令、「ずずか」ちゃんから「大丈夫だったよ」と太鼓判を押されていても尚。

まあ、寝相が原因で何方かがベッドから落ちたとしても、それはそれで笑い話になりますし、あまり気にしない様にすべきなのでしょう。

それにしても、今日は楽しい一日でした。

古今東西のアナログゲームのみならず、初めてのデジタルゲームも幾つかやらせて貰えましたし、並列思考によるフレーム単位の動作解析やら、アリサちゃんが操作するキャラの行動予測をしたり等、色々と遊ぶことが出来ました。勿論、最近有った面白い話や、噂話といった取り留めの無い会話や情報交換も楽しかったのですが、それは平日の学校でも沢山やれるので、あくまでも二の次です。

主目的は、一緒に遊ぶ事。——そんな風に限られた休日を満喫し、適度に遊び疲れ、心身共に充実したならば、「また学校でね」なんて言って別れるのが今まで通りでした。しかし今回は御泊りで、しかも「さすが」ちゃんと同様にアリサちゃんも夜更かしは得意な方という事もあり、ベッドインしたまま夜会話をする事になりました。

そもそも最初から、そのつもりだったのだと思います。人や犬とのコミュニケーションを生き甲斐としている節さえ有るアリサちゃんが、御風呂から上がった辺りから極端に口数を減らし、就寝する直前なのに神妙な面持ちをしていたのですから、察せない訳がありません。

「あのさ、変な御願いをするんだけど……」

「うん。改まって如何したの……?」

おっと、いきなり深刻そうです。

「三週間くらい、家でホームステイしない?」

「……………それって、寂しいから?」

こくり。と無言で頷かれ、少しばかり育児怠慢ネグレクトの気配が漂うバニングス家の家庭環境に同情しつつも、羨ましいなと思いました。今日聞いた愚痴の中では確か、アリサちゃんの両親はイギリスにある『バニングス建設』の本社の方へ出張中らしく、仕事の関係で帰って来るのは一ヶ月くらい先だとか。

実際にそうだとしても、大凡おおよその居場所が分かっているなら十分な気もしますし、隣部屋にはアリサちゃんの身辺警護や執事を長年務めている鮫島さんという方が寝泊りしているの、決して放置されている訳でも無いのです。しかし、私がアリサちゃんではない様にアリサちゃんも私ではない為、寂しいと思うのならきつとそうなのでしょう。

「でも、週二で御泊りするならともかく、三週間はちよつとね……」

流石に、食事やら個室を三週間も提供し続けて貰うのはアリサちゃんの御両親に悪いですし、それに今度は私のお母さんが寂しがると思うので、長期間の同居生活となれば少しばかり気が引けてしまいます。

「ところで、『すずか』ちゃんと呼ばないの?」

「『すずか』は、その……。何時もは頼られる方だし、頼るのは何て言うか……」

「じゃあ、映画観賞会や読書会を主催して、それに招くっていうのは如何かな？」

「ふむ……。前向きに考えとく」

その後も30分程、途切れ途切れに相談やら愚痴が続いたものの、やはり私の方が睡魔に耐え切れず意識が遠退いて行きました。

一応、やろうと思えば身体操作魔法の応用で意識を覚醒させる事も可能でしたが、無理をする為の魔法は使わないに越した事はありません。それは何故かと考えますと、無理をするのにも限界が有るのです。私はそれを経験し、理解しました。であるからして、本当に無理をしたい時に無理が出来るように、大切に取って置きの——眠りましょう。寝ます。

……

……

……

そして翌朝。特に何事も無く起床して、身支度を済ませ、鮫島さんが用意してくれた朝食を食べ、忘れ物が無いかを確認し、いざ帰宅しようと気持ちを切り替えた所でアリスちゃんに足止めされるといふ出来事イベントが有りましたが、やんわりと説き伏せてバニングス邸を後にしました。

本音としては、とても嬉しかったです。何故なら魔法少女ではなく、アリサちゃんを知る平凡な少女である。『高町なのは』を頼ってくれたのですから、一緒に遊んで、寝食を共にしたぐらいですけど、こんな私でも役に立てたようで何よりだと感じています。しかし変わらぬに、遅々として成長せずに留まっていたら、何時かは手を引つ張られることも無く置いて行かれるのでしょうか。

「それは嫌だなあ……」

善き親友としての大成を。その為には、もつともつと精進しなくては……。

そうだよね、
■■■■
？

第32話：群青色に染まれども【本編】

Side：ウィータ

この日本という国の夏は、暑くて湿気もジメジメしていて、人に成り済ます為の疑似生体機能を起動した場合は熱気が肌に纏わり付き、エアコンやら扇風機という機械が無いと汗が止まらない事を理解した。そして、そんな時に食べる冷たいアイスクリームは格別に美味しいという事も知ってしまった、先々週辺りから3日に1つくらいは食べる様になつてしまった。

他の将達からは呆れた目で見られているものの、シグナムだつて煎餅なら即行で一袋空にするし、シャマルは私よりも頻度は少ないけどケーキ等を食べる時は終始笑顔で、ザフィーラも干し肉ジャーキーを味わっている時は尻尾や耳が微妙に動いている。嗜好は違えど、何かしら気に入っている点では同類だと思っただけだな……。

それでもつて、私達の主——“はやて”の手料理は既製品以上にギガ美味しい。

これは皆、同意見である。尤も、私達の感情や五感なんてモノは人らしく設定されているだけで、それが本当に本物の感じ方なのかは分かんねーけど、私達の反応を見て“はやて”が喜んでくれるのなら、まがい紛い物だろうと何ら問題は無かった。主の喜びは私達

の喜びで、主の望みは私達が為すべき事。

故に、私達の『家族ごっこ』は一月以上も続いていた。

別に否やは無いし、両親を亡くした幼い主の願いを無下にする程、私達は戦闘狂ではない。そもそも、戦闘なんて歴代の主へ仕えていた際に幾度と無くやったし、この生活が数ヶ月や数年続いた所で戦闘技術は錆びずに維持される為、気晴らしで模擬戦さえ出ればそれで十分だ。ただ、まあ……。初めての平穏らしい平穏を前にして、さて如何したものかと悩みつつはあった。

……

……

……

そんな風に考え始めた7月下旬のある日、“はやて”が珍しい提案をしてきた。これまでは、病院や商店街や市立図書館といった生活や趣味に関する場所だけを訪れていたのに、唐突に「なあ、皆。今度の日曜、公園に行かへん？」と切り出されたら、賛同す

るよりも先に疑問が浮かんでしまうのは仕方の無い事だと言えるだろう。

「うん？ もしかして、ピクニックでもすんのか？」

足が悪くても公園に行くのは自由だし、そう願うのなら可能な範囲で叶えたいとは思
う。だが、近隣でなかったりバス停等から遠いと移動が大変なので、ある程度の下調べ
や計画は必要になってくるため当て推量で訊ねてみたところ、あっさりとは否定されてし
まった。

「ちやうちやう。正確には、臨海公園でやつとる大会が目当てなんよ。ほな、これ」

そう言つて渡されたチラシを見ると、海鳴臨海公園という場所で昼頃から祭りがあ
らしく、その一環として『スポーツチャンバラ』なる競技の大会も開かれるとの事。飛
び入り参加が可能で、非殺傷性の柔らかい剣を用いて戦い、3位以内に入れば豪華賞品
が貰える等と色々書かれており……。嗚呼、なるほど。

「で、どれが欲しいんだよ？」

「んー……。2位のブランド米も欲しいんやけど、やつぱり1位の商品券やね！」

「けどこれって、15歳以上が対象なんだろ？ なら……」

「ふむ、私の役目だな」

任せる。とても言いたげにシグナムは微笑むが、あれは恐らく苦笑も混じってるな
……。容姿の問題で、私が女兒の様にしか見えない事についてはもう諦めている。

しかし、この小柄な体型が有つてこそ愛機の「グラーファイゼン」を最大限に活かせるし、今回の旅路に限つては外見年齢が近い。『はやて』とは親しくさせて貰つてゐるのだから悪い事ばかりではない。とはいへ、それは多分ほぼ確実に1つ下くらいの妹に對するような感情だとは思ふけれども、何れにせよ守護騎士の中で明らかに特別扱いされているのは私である。

だからこそ、『はやて』から目を掛けられる事が少ないシグナムに機会を譲りたくもあつたし、そもそも私の得物は剣ではなく金槌の為、やはり万全を期すならシグナムの方が適していると考えていた折に、自ら申し出てくれたのは非常に有り難かつた。

「そや。折角やし、勝負服ならぬ勝負浴衣を買いに行こか」
「分かりました。出掛ける準備を致します」

それにしても、スポーツチャンバラね……。危険性を徹底的に排除して切り結ぶとか、兇戯以下だろうに。魔法文明が無く、飛び道具の発達によつて廃れた近接武器の末路など大体こんなものかもしれないが、少しだけ憐憫の情を抱いてしまう。ついでに、シグナムの對戦相手にもな。

劍聖と名高い原型から受け継いだ剛劍の術理に、これまでの旅路で得た幾千もの戦闘経験。——それらの集大成が、今のシグナムを形作つてゐるのだ。魔法を秘匿し、着慣れぬ浴衣姿で、木劍ですらない武器を使おうとも、平和呆けた連中からして見れ

ば正に悪魔のような強さだろう。然れど、シグナムだつて「はやて」にドン引きされな
い程度には手を抜くはずなので、其処は安心して犠牲になつて欲しい。

但し、火が着いた場合は知らねーけどな……………。

（ ）

S i d e : 恭也

7月下旬。例年通りなら、24時間鍛錬尽くしの山籠もりやら、各地にある武術館や
道場巡り等の準備に取り掛かっているとこだが、今年に限つては叔母である美沙斗みさとさ
んの伝手で『香港国際警防部隊』の方々と手合わせする事になっている。その為、野宿
の準備や宿泊場所の手配が不要となり、香港への出発日まで若干の暇を持て余してい
た。

だからこそ、なのか。普段は興味の欠片も無い地域の祭りを見物がたら、「なのは」
辺りが食べそうな色付き綿飴でも買おうと思ひ立ち、家を後にする。

会場となつてゐる臨海公園は家からも近く、10分と掛からずに着いてしまうものの
敷地が横長で、其処に立ち並ぶ出店から至高の綿飴を見つけ出すには更に20分程掛か
りそうな混み具合だったが、通勤ラッシュ時の海鳴駅を思えば苦では無い。そう思いつ
つ人波に紛れて歩いていると、何故だか違和感を覚えた。祭りの陽気に、剣？な空気が

交ざっているのだ。こうも際立っていると、その発生源が気になってしまう。

菖蒲色の浴衣に、紅の髪。

嗚呼もしや、あの女性か……？ 不躰にならない程度に観察してみると、自然体で在りながら何処から切り込んでも切り返してくれそうな武威を微かに感じる。そして足の運びに、視線の配り方。小さい誰かと歩調を合わせている様だが、目だけは周囲を警戒しており、此方の視線と何度か交差した事から向こうも気付いているのだろう。

だが、これ以上関わるつもりは無かった。悪意を秘めている様には感じないし、仮に何かしらの任務を遂行しているのなら、徒に注意を引くのは邪魔になる。そう思い、さり気なく進路を変えようとした矢先に、彼女が『スポーツチャンバラ大会受付所』と書かれた看板がある場所で参加申請しているのを見て、少しだけ欲が出ってしまった。

(仮に「誘い」であれ、元から参加する予定であれ、これは好機かもしれんな……)

妹の美由希を鍛え上げ、自らも完成された御神の剣士へ至るべく努力を重ねてはいるが、元が暗殺剣なのもあって気軽に切り合える相手は数少ない。親友の赤星は剣道家として多忙になってからは疎遠気味だし、美沙斗さんは香港在住なので機会が乏しく、美由希との戦闘は互いに手の内が知れている事から、最近ではカウンター合戦の様相を呈

していた。

詰まるところ、此処最近の自分は他の好敵手を欲しており、更なる成長と進化を求めているのだった。そういう意味では、“なのは”を通じて魔法という未知に出会えたのは良い経験となったものの、やはり剣と剣を交えたい気持ちに播るぎは無い。

尤も、スポーツチャンバラで使う武器とも呼べぬ玩具は、刀身に当たる部分が空気を入れて膨らませる作りなので撓る上に柔らかく、重量も軽いので真剣みたいな打ち合いは無理だが、それでも構わなかった。実力の一端でも垣間見えれば十分だし、此方も示せば真つ当な武器での再戦を願える可能性もある。

果たして、鬼が出るか蛇が出るか……。実に楽しみだ。

くく

Side：シャマル

潮騒と歓声を掻き消すように、風切り音と打撃音が絶えず鳴り響く。シグナムは長剣型の模造剣を鞭の如く振るい、見知らぬ男性は短剣型を二本用いる珍しい双剣使いでしたが、間合いによる不利を感じさせない立ち回りを魅せており、どちらも攻め倦ねている様子が窺えます。

初めの内は、激化していく戦闘に“はやて”ちゃんが怖がるのではと懸念したけれど

も、ろ興味深そうに見守っているのを見て、直ぐに杞憂であつたと安堵しました。

こんな平和な国の生活圏付近に、あの様な下手人とも成り得る手練れが居たとは意外ではあるものの、根は善人寄りなのでしょう。楽しそうに剣を交わし、周囲に仲間らしき人物が存在しない事から察するに、この邂逅と切り合いは偶然の産物——だとしたら、今回の旅路は少しばかり末恐ろしいですね……。

仮に、もし次が有るならば、其れは最悪で想定外の「何か」かもしれないと考え出したらキリが無いとは分かつていても、こういった巡り合わせを軽視すれば何事かの前兆さえも見落とすに違いない。そんな漠然とした不安が、如何しても拭えません。

「はえ………。あれも青春やね、シヤマル」

しかし、予期せぬ事を予測するなんて事は希少技能レアスキルを以てしても困難に等しく、それよりも有意義な思考の使い方をすべきでは？ ええ、全く以てその通りですね。一先ず、警鐘を打ち鳴らす並列思考群を隔離し、努めて無難そうな返事を抽出しましょうか。

………

………

………

「青春なのかは分かりかねますが、遊んでいるのは確かかと」

「うん？ かなり激しく打ち合つとるのに、まだ全力やないの？」

「はい。本気のシグナムなら、既に切り捨てていきますよ」

デバイスや魔法が有りで、徒手格闘も交えるのなら、シグナムが圧倒的に勝つのは疑うまでもない確定事項である。されどルールを順守し、魔法生命体としての性能のみで挑む場合、よく鍛えられた成人女性程度の筋力しかないシグナムでは、凄腕の男性剣士が相手だと如何しても手古摺ってしまいます。

只それ以前に、昨今では中距離主体のミッドチルダ式魔法が主流となり、近距離主体のベルカ式が衰退している最中、凄腕さなかの男性剣士と戦う機会など無きに等しく、非魔導師とはいえ貴重な相手に巡り会えたシグナムの心境を思えば、あんな風に戯れたくなるのも何となく分かる様な気がして……。なので私は、静観する事を選んだのでした。

まあ、要するに黙認です。

因みにヴィータちゃんとザフィーラは、試合が長引くのを感じ取ったのか興味が失せたらしく、今は「はやて」ちゃんの身边警護を全うすべく周囲を警戒しています。尤もつとも、この国の治安であったり、管理局の管轄外である事を考慮すると私だけでも十分ですが、無意味に散開したり時間を浪費する理由は有りませんからね。

それ故に、本物の家族らしく無いんでしようけれど……。こればかりは私達の間人

しさを追求せねば改善しないので、そこは気長に学習と調整をして行けばそれっぽくなると思います。

「ええなー。うちも足が良うなつたら、あんな風に動けるんやろか？」

「きつと叶いますよ。〃はやて〃ちゃん有望むなら、遠からず叶えてみせます」

「……………いや、それって【闇の書】が完成せなやれへん裏技の事やろーけど、他人様に迷惑なんて掛けとう無いんよ。そもそも、そーゆーのは自力でやってこそだとシヤマルは思わへんの？」

「結果が同じであれば、過程は短い方が宜しいのでは？」

「ほーん…………。だからシヤマルの調理スキルは、あーなんやね…………」

何かを悟った様子で言い淀み、再び観戦へと集中する。〃はやて〃ちゃんでしたが、あまりこの話を続けたくないのか少し不満顔なので、今回は此処までにしておきます。けれども私達が得意とするのは魔法で、難題を手っ取り早く解決させるのも魔法が一番の近道である事は、どうか心に留め置いて下さいね？

私達は文字通り、正しく『人で無し』です。

主の為であるならば、最悪を回避する為であるならば、あらゆる最善を尽くしてみせましょう。仮令、^{たとえ}その過程で数多の犠牲と代償が生じようとも、最後に【闇の書】と主さえ居れば何度だって……………。

.....
最後？

第32. 7話：群青色に染まれども【閑話】

S i d e : はやて

「お帰り、シグナム。少し遅かったよーやけど、何か有ったん？」

「済みません、主〃はやて〃。実は先程まで、彼の青年と語り合っていました」

「おおっ！ それはつまり、あの双剣使いの御兄さんの事やな!？」

結局あの戦いは、素人目では分からない事ばかりでしたが解説役のシヤマルによると、千日手だったので御兄さんが態と負けてくれたらしく、最終的にシグナムが1位を取り、2位は運良く上がってきたチャラそうな男性で、3位が例の御兄さんという順でした。

「それで、茶でも誘われたんか？」

「いえ。そんな華やかな物では無く、再戦の約束をした程度です」

「うーん……。それならまあ、ある意味では健全な付き合いやね……………」

そもそも、乙女回路どころか現代倫理が備わっているかも怪しいシグナムに、恋愛小説的な展開を期待する方が間違いだっただよーな……。それ以前に、私の脳内が御花畑なだけである可能性が無きにしても非ですが、巡回と護衛以外にやりたい事が増えるな

ら、家長としては快く背中を押してあげたいと思います。

多分、本人達にとつては苦痛じゃないんやろうけど、折角の人型で知性も在るんだから趣味を見つけて遊んだり、楽しんでくれたらなーと密かに願っております、この流れでヴィータやシャルマルやザフィーラにも何か影響が有ればと期待してみますが、はてさて……。

「健全も何も、彼は男である前に剣士です。ならば、切りたくなるのは当然かと」

「ふむふむ。理屈が謎やけど、納得してるならそれでもええよ」

取り敢えず、再戦の日には御兄さんに渡す菓子折りと、シグナムの弁当を準備せなあかん事は理解しました。あとは、動きやすくて可愛い服を用意するのも追加で。

「あー、せや。再戦するのは何時頃なん？」

「翌日の午後1時に合流する予定です。……ところで、何か問題でも？」

「いやいやいや、大問題ですよって。」

「あんなあ、シグナム……。もしや、ジャージ姿で行こうなーんて考えとらん？」

「そのつもりでしたが、変えた方が宜しいのでしょうか？」

「その方がええよ。何てったって、服は鎧やからな」

「服は鎧……。その心は？」

「つまり、他人にダサイ恰好を見せたら騎士やなくて、ニート侍としか思われへんよ？」

「……………成程。心に刻みます」

納得して貰ったところで、次は優先順位を付けます。菓子折りは最悪無くても良いから後回し、弁当の献立については多分どこにかなる。となれば、最初にすべき事はトレーニングウェアとインナーの購入やな。幸いな事に、シグナムが勝ち取った商品券も有る事やし、ちと勿体無いけど使ったろ。靴に関しては、有る物で問題無い筈やから…………。ま、一先ずはこの方針で行こか？

くく

Side : 美由希

「喜べ美由希。手合わせの相手が見つかったぞ」

「えっ…………？ ああ、えーと…………。何か、良い事でも有ったの？」

本日の予定は特に無し。という訳で、リビングのソファで寛くわぎながら読書をしていたら、脈絡も無しに其の様な言葉が降り掛かって来ました。美しい文学とは真逆である粗野な表現。この場合、「寒暖差で風邪を引きそう」といった形容は適切や否や？

ともあれ、遠慮もせず本の世界から現実へと私を連れ戻した挙句、何故だか闘争心を

頭わにしている恭ちゃんの外出先で何をして来たのやら……。そう呆れつつも好意的に許せてしまう辺り、まだ振り切れて無いなーと感じます。もう既に終わってしまった事だから、この未練も捨ててしまえば楽なただけだね。まあ、それはさて置きましょうか。

「ひよんな事から素晴らしい剣士と出会ってな、意気投合をして今に至る」

「成程。ところで、その人って女性だったりするのかな？」

「その通りだが、性別なんて二分の一の確率だろう？ 特に重要では無いと思うぞ？」

その二分の一で女性の知人ばかりを増やしている人は、何処の誰なんだか……。なのは、曰く、恭ちゃんは生粋の「フラグメイカー」らしいけれども、この片寄り具合は神掛かっているなど他人事の様にあります。これで件の女性剣士が同年代の綺麗な人なら、恋人である忍さんの心労がマツハになるのは確定です。

「ねえ、恭ちゃん。その人の年齢ってどれ位？ あと、手合わせする日は何時なの？」

「恐らく20代前後。手合わせは明日の13時に集まって、山の方でする予定だ」

「……それさ、忍さんにも話した方が良いと思うよ？」

「別に、逢引き等では無いんだがな……」

因みに、念の為に容姿や印象も聞き出してみると、「ポニーテールをした美沙斗さんが、普通の大学生をしているイメージに近い」という返答だったので、凛々しくて優し

い雰囲気がある美人さんなんだろうなーと察しました。うん、思いつきりアウトだよ
ちゃん。

「まあ、何だ……。一応、忍には話しておく」

そして翌日。案の定と言いますか、忍さんと従者のノエルさんが見守る最中、想像以
上に美人剣士であるシグナムさんに対して、私と恭ちゃんで交代しつつ竹刀で打ち合う
事になったのでした。どっとはらい。

第33話：露草色に染まるる夏なの【前編】

Side：なのは

私の親愛なる友、フエイトちゃんへ。……つて挨拶は、ちよつと堅苦しいかな？ と
言う訳で、撮り直しがてら編集機能をちよちよいつと。

「TAKE2」

久し振りだね、フエイトちゃん。前回のビデオレターで言つてた、「楽しかった事を教えて欲しい」という要望に御応えする為に、今回も色々張り切っちゃいました。

因みに見ての通りですが、クロノ君がミッドチルダ製の機材を借してくれた御蔭で、今回から画質やら音質が跳ね上がったりしています。そつちでは当たり前かもしれないけれど、30分程度の映像データが500ギガバイト超えとか、それなら激変も止む無しかなーと……。尚此方の世界では、漸く1ギガバイトの小型記憶媒体が販売された程度ですから、後はまあ察して頂けると有り難いです。

「やっ。」

早速、楽しかった事の映像を流しているもの、これだけじゃ何が何だかよく分からないだろうから説明するね？ 一緒に映っている大人の女性が私の御母さんで、青髪の子が晶ちゃん、そして緑髪の子がレンちゃん、この時は4人で御菓子作りをしていました。パウンドケーキに始まり、シュークリームやショートケーキも作って腕が疲れちゃったけれども、それが美味しさへと繋がるので妥協する事は出来ません。

ところでパウンドケーキの「パウンド」って、4つの材料を1ポンド、つまり1パウンドずつ使って作るからパウンドケーキと名付けられたそうだけど、日本で主に使われている質量単位のキログラムに換算した場合、1ポンドは約0.453キログラムとなるのですが……。うん、すつごく微妙でしょ？ だからこそ、ヤード・ポンド法は滅びて欲しいなーと思いました。

「閑 言舌 イ木 是頁」

時に、何で本格的な御菓子作りをする事になったのかと言うと、御姉ちゃんからの電話が切っ掛けになりました——

…

…

…

「はい、もしもし?」

「昨日振りだね、”なのは”。ちよつと、時間有る?」

「うん。大丈夫だよ?」

「多分、そつちに忘れ物が有ると思うんだけど——」

要するに、御姉ちゃんが美沙斗さんに見せようと思つていた写真を自室に忘れられたらしく、それを国際郵便で香港まで送つて欲しいという内容でした。

通常の手段なら時間も運送料も掛かつてしまいますが、魔法少女である私が代行すれば今直ぐにでも持つて行けますし、消費魔力は余剰分を使うだけなので負担は少なく、御財布と環境にも優しい。であるならば、活用しない手は有りません。勿論、魔法は最大限に秘匿するつもりですけど。

そんな感じの事を御母さんに力説して、ついでにファイアツセ御姉ちゃんが居るイギリスにも行つてみたいと御願ひしてみた結果、御土産用の御菓子作りを手伝う&なるべく御兄ちゃん達と一緒に行動するという約束をした上で、あつさり許可を貰えました。

御母さん曰く、「可愛い娘には旅をさせよ。つて言うじゃない?」等と、とてもフワフ

ワした理由で承認したらしいのですが、御菓子作りに関しては何ガチガチの講師っぷりを發揮し、レシピによる予習から器具や材料の準備のみならず、生地の掻き混ぜ方や温度管理等、様々な事を教わりながら楽しくも難しい御菓子作りは佳境を乗り越え、今は使用した調理器具を洗っている最中です。

事、此処に至るまで約22時間。

要するに、昨日の昼以降からは御菓子作りの予習と準備、それから一夜明けてぶっつけ本番という流れは大変だったものの、料理初心者としては頑張った方だと思います。尤も、御母さんと晶ちゃんとレンちゃんの助けが有ってこそその成功と完成度ですから、慢心や満足するつもりは有りません。

「それじゃ、次は昼食用にサンドウィッチでも作りましょうか♪」
「あつ、桃子さん。俺が材料を出して来ます」

それにしても……、彼此3時間近く御菓子作りをしつつ小休憩を挟んだりもしましたが、如何して御母さんと晶ちゃんが未だに元気なのか不思議です。元から体力の無いレンちゃんが慢性的な疲労状態へと陥っており、私も魔法で身体強化をしていなければとつづくの昔に戦線離脱をしている頃合いなので、大人や体力お化けさんでは色々違う

んでしようね、きつと。

「レンちゃん、大丈夫？」

「そやなー……。多分、昼寝したら何とかなるやろ」

うん。これは経験上、何とかならない気がします。

「なら、レンちゃんは引き続き休憩で」

「あつはい。……。ちゅー訳やから御猿、うちの分も頼むわ」

「は？　なら、片付けは亀が全部やれよ？」

「あん？　空手とかで不在気味な御猿の分、うちが色々やつとるんやけど？」

「それを持ち出すなら、帰宅部の亀が悪いだろ。だから、なよっちいんだよ」

「へー。でもそんなのに連戦連敗しとる御猿って、なかなか惨めやね？」

「よし、表に出ろ。今度こそ勝ってやる」

「まーた直ぐ喧嘩しようとする……。《リングバインド》」

……

……

……

そうそう。余談なんだけど、最近では喧嘩の仲裁用で使った拘束魔法の回数が、3桁目前になってしまいました。その甲斐有って拘束魔法の練度がメキメキと上がったけ

れども、もう少し仲良くして欲しいな」と妹分としては思うのですよ。それでえーと……。昼食を作つて食べた後は、「ルーンライター」へ荷物を量子格納↓からの御兄ちゃんに連絡をし、香港という外国の都市へ転移魔法で移動します。

一応、緯度と経度で適当な座標を決めて、高度は3万3千フィート。つまり、上空約1万メートル付近にしてみました。これには人目が付かないという利点の他に、無意味な自由落下を楽しめるといった私欲が多分に含まれております。フェイトちゃんは、そういう変わった楽しみ方をした事は有る？ もし有るのなら、こそつと教えて欲しいです。

くく

S i d e : 恭也

一般人が出来ない事を出来る様になると、問題にならない範疇はんちゆうで使いたくなる。その気持ちにはまあ、分からなくも無い。例えば自分の場合、周囲の気配を探つて不審者が居ないか確認したり、忍に声を掛けようとする不埒者へ殺気をぶつけて退かしたり、爪楊枝や竹串を投げてGを処理した事も何度か。

ならば、魔法という超常の力を手にしたマイシスターが空から降つて来るなんて事は、本人にとっては当たり前前に出来て、使い方としては無難な部類なのだろう。

「恭ちゃん、空から女の子が！」

「違どうぞ美由希。それは『なのは』を受け止めてから言うべき台詞だ」セリフ

「あれ、そうだったっけ……？」

美由希の曖昧なネタに訂正を入れつつ、再び空を見上げる。バベルの塔の如く円筒形の結界魔法が部外者を遮断し、俺と美由希と落下中の『なのは』しか存在しない空間とは、何とも魔訶不思議な気分である。此処はビルの屋上で、下の階層には美沙斗さんを始めとした『香港国際警防部隊』の猛者達が居る筈なのに、その気配が全く無いのだ。

完璧な隔離空間。

応用しようと思えば捕獲や奇襲にも使えそうな魔法だが、果たして『なのは』がそういう荒っぽい事をする職業を選ぶか如何かは………、まだ分からんな。才能に関して父さん寄りっぽい節は有るし、人は正義という大義名分が有れば己を切り変える事が出来てしまう。だから『なのは』も、望めば成れるとは思っている。

そんな下らぬ事を考えている内に『なのは』がゆっくりと着地を果たし、変身を解除して私服姿へと早変わりする。飛び散る桜色の魔力光。その光が背中の翼に吸収され、やがて翼自体も消えて行く光景は何度見ても美しいと感じてしまう。

「こんにちは、『翠屋デリバリー』です。御注文の品を御届けに参りました〜」
「感謝する。それと済まん、うちの愚妹が迷惑を掛けて」

「うう、御免ね『なのは』……。はい、これ御駄賃」

「えつと……。これは、御母さんに渡せば良いの？」

「いや、それは運んでくれた感謝代だ。『なのは』の小遣いにでもすると良い」

実際に、国際郵便でも早くて3日は掛かる写真を24時間以内で持つて来てくれたのだ。その価値を金額に換算すれば、一体幾らが適正なのやら……。取り敢えず、細やかにながら俺と美由希で出し合つて、遠慮されないであろうと判断した2千円を『なのは』に受け取らせておく。

こういつた経験を徐々に積ませる事で、『荷電粒子砲』と見紛う様な砲撃をせずとも社会貢献は可能である事を知つて欲しい。——そんな老婆心からの迂遠なアプローチではあるものの、果たして将来的に影響するかは不明だ。

「ところで『なのは』、休憩は必要か？」

「うん。何時でも飛べるよ？」

「成程……。因みに、転移先はくれぐれも地上で頼む」

「合点承知」

その後、2分程の座標確認やら転移先の周辺確認を済ませた『なのは』が転移魔法を発動させ、視界が歪んだかと思えば日差しが暑い香港から、朝の涼しさが残るロンドン近郊の公園へと降り立っていた。通常の場合、香港とロンドンの時差は8時間だが、日

差しの有効活用を目的としたサマータイム制度が有るので、実際のところ香港よりは7時間遅い。

何となく御得感はあるが、人が眠気を感じない活動時間なんて高が知れている為、あまり長居するのは時差呆けの観点からも宜しくはないし、“なのは”は日本から来たので更に1時間プラスで8時間の時差だ。故に帰宅する時間を考えれば、英国標準時の午後1時ぐらいが限度だろう。

「異常無し、だな。美由希と“なのは”は如何だ？」

「上に同じく」

「魔力が減って少し怠いけど、これぐらいなら大丈夫です」

「なら予定通り、観光と洒落込むか」

ファイアッセが指定した時間まで、まだ3時間以上の余裕がある。これなら軽食を摂ってから、異国情緒が溢れるロンドンを散策するだけでも良い時間潰しになる筈だ。ただ懸念事項が1つ有って、東京と比べた場合の犯罪発生率が極めて高く、特に観光客に対してのスリや置き引き等の強盗は百倍を優に超えている。避け難いとは思うものの、何も起こらなければ良いのだが……。

第33. 5話：露草色に染まるる夏なの【後編】

Side :なの

初めてのロンドン！　と言う事もあって、時間は少ないですがブリティッシュパイを食べたり、観光名所のビッグベンやキングスクロス駅の9と3／4番線で写真を撮ったりしました。その際、何度かひったくりの現場を見掛けたので犯人を不可視のバインドで転倒させたりした事以外は至って順調で、監視カメラが其処彼処に有るのにやる人はやるんだなど社会学習をしつつも一路『CSS』へ。

因みに、『CSS』は『クリステラ・ソング・スクール』の略称で、日本人的には音楽学校かなと連想しがちですが音楽を主体に教える私塾の様な場所らしく、以前はフィアッセ御姉ちゃんの御母さん——テイオレさんが運営していました。

しかし昨年頃に急病で亡くなってしまつて、今はフィアッセ御姉ちゃんが後を引き継いでいます。まあ元々、フィアッセ御姉ちゃんが日本で暮らしていたのは療養目的でしたし、治ったからにはイギリスへ帰国する日も遠からずといった感じでしたから、あの日々は貴重だったな—と思えます。無論、魔法少女となつた現在も貴重では在りませんが……。

「ねえ、御兄ちゃん。『CSS』って私塾なんだよね？」

「その様には聞いている」

「一面の御花畑の中に、立派な洋館が建ってるんだけど……」

「この程度なら、海外では珍しくも無いぞ」

「そんな物なのかな……？」

「そも私有地面積なら、山林を含めた月村邸の方がまだ広い」

「や、その基準は可笑しいと思います」

気を取り直して敷地へ入り、受付で用件を伝えるとファイアツセ御姉ちゃんの秘書さんが迎えに来て、案内をしてくれました。途中、綺麗な中庭に有る噴水を見たり、何処かの教室から漏れて来る合唱の声に感心したりしていると着いた様で、久々の対面となりました。

見た目は、至って健康そうです。

茶色に近いブロンドのロングヘアは艶やかですし、雰囲気は御姉さん度が増しているくらいで気になる箇所は有りません。最後に見た時は、焦燥して痛々しい様子だったので少し不安でしたが、何とか立ち直っている様で安心しました。さて、これで唯一の懸念事項は消えましたから、挨拶もそこそこに本題へと移りませう。

「それにしても、恭也と美由希と『なのは』も来るなんて、急に如何したの？」

「『なのは』の提案でな。当時、部外者だったフィアツセを関係者にしたいらしい」

そう言つて、御兄ちゃんが上手い具合に話の流れを作ってくれたので、まずは信じて貰い易くする為に余剰魔力の塊である四対八枚の翼を顕現させると、フィアツセ御姉ちゃんの珍しい驚き顔を見ることが出来ました。何だか、初めて見せた時の家族の反応とそっくりで、懐かしい様に思えてもまだ3ヶ月少々……。ええ、はい。懐古するには早いですね。もうちよつと漬けておきます。

「まさか……、『高機能性遺伝子障害』？」

「一応、分類的には魔法だそうです」

もしかしたら根源では繋がっているのかもしれませんが、その説明はやる気と倫理観に満ち溢れた研究者へ任せるとして、フィアツセ御姉ちゃんに色々有った出来事を掻い摘んで話しました。魔法と出会い、カードではなく石をキャプターしつつ戦つて戦つて決闘したり、その末に事件を終息させ、新たな友情も紡いだりしてエトセトラ。いやはや、次元断層すら容易に生み出す特級危険物の回収や、寝不足状態での命の遣り取りは金輪際したくないものですよ……。

でも恐らく、この手が届くのなら私は解決を試みるでしょう。

だって、曲がりなりにも出来てしまったのです。だからこそ、問題が起きれば見て見ぬフリをする事なんて出来ませんし、やらない事で後悔するのは忌避感すら覚えます。より良い未来を。憂い無き明日を。楽しくも平和な日常を。

只それだけを願って止まないものの、此処最近の私は「トラブルバスター」とでも言うのでしょうか？ 御兄ちゃんの「フラグメイカー」染みた様々な良縁&善果を引き寄せる体質みたいな何かが励起してて、良縁の他に凄まじい厄事も憑いて来ている気がするんですよねー……。帰国後、祓はらい落とせるか那美さんに聞いてみようと思います。

（ ）

Side:ファイアツセ

“なのは”の話が一段落し、何も無い空間から取り出された『翠屋』のスィーツセツトに再度感嘆しつつ受け取ったり、それぞれ近況を語り終えると一瞬の間が生じる。その隙に、折角来たのだからと施設見学を勧めてみたところ “なのは” は戸惑いながらも頷き、美由希と秘書のイリアと一緒に校長室を後にした。

恭也は、女性ばかりの施設を職員同伴とはいえ歩き回るのを遠慮して残ってくれたけれども、別室に控えていたイリア以外は気を遣ってくれたのだろう。高町家の面々は機微さとに聴きくても、表情を繕うのは苦手である。そして私もそういう性質たちなので、率直に尋

ねる方法を選んだのだった。

「……恭也」

「うん？」

「『なのは』、かなり無茶したんじゃないかな……う？」

父親である士郎さんの——不破の血筋を受け継いでいるとはいえ、『なのは』は桃子さんに似て優しい子だ。喧嘩ばかりしているレンや晶や、暗殺剣を鍛錬や実戦で昇華させている恭也や美由希とも違う守られる側の子。それが、私の知っている『なのは』だ。

けれども、潜在的な資質を開花させて大活躍？

そんなに上手く行く筈が無い。まだ9歳なのに、願いを歪いびつに叶えるという高エネルギー結晶体を制圧しながら回収し、同年代の子と交戦や決闘をして最終的には友達になった等、あまりにも無茶苦茶である。きつと何処かで怪我をしたり、慣れぬ事で苦勞した筈なのに、先程の話ではそんな事など終ついぞ出なかった。その不自然さが、推測を半ば確信させるに至っている。

「俺と美由希も手伝いはしたが……。理由は如何であれ、『なのは』の負担が重くなったのは事実だし、大怪我もさせてしまった。左手の傷には気付いたか？ あれは掌から甲にかけて槍状の武器で貫かれ、更に火傷も負ってな。今は大分癒えたとはいえ、あの

痛みも運命も、何一つ代わってやれない己の身を恨むばかりだ」

「それは……………。恭也は、悪くないよ……………」

「だとしてもだ。反省して、精進すべき余地は多々有る」

「そうかな…………？ 私がHGSで使える《サイコキネシス思念操作》や《アポルト取り寄せ》とは違って大幅に

応用が利きそうな魔法に対し、身体能力だけで何とか出来るとは思えないのだけれど

…………。

「あまり、無茶はしないでね？」

「嗚呼。分かっている」

「心配だから、指切りもしよっか」

「子供か俺は？ 案ずるな。其処まで馬鹿じゃない」

過去に無茶して、二度も膝を壊した人がそれを言ってもね…………。如何か、世の中が平穩無事で在りますように。皆が傷付かず、笑顔で居れますように。そんな事を祈るばかりです。

くく

Side:なの

残念な事に時間は有限でして、英国標準時の午後1時は日本だと午後9時に相当し、

御兄ちゃん達を香港に送ってから日本へ帰り、シャワーを浴びればもう就寝時間に成ってしまいます。今回は、ほとんど私の話だけで終わりましたが、気軽に往復可能なので別に構わない……筈だよな？ 多分きつと。

「今日は有り難う、＼なのは」。久し振りに皆と会えて、嬉しかったよ」

「此方こそ、嬉しかったです」

「んー……。以前みたく、もつと碎けても良いのに……」

「それについては……。こう、成長したという事で」

私の精神年齢もそうですが、昔よりもフィアッセ御姉ちゃんの御姉さん指数が増しているの、気軽に「あのね、フィアッセ」とか女児っぽく言うのは躊躇ためらってしまいます。

「あーあ。向こうに帰ったら夜なんだよねー……」

「それが時差というものだ。序ついでに、明日からは訓練も控えているぞ？」

「うう……。名残惜しや……」

「えつと……。それじゃ、またねフィアッセ御姉ちゃん」

「息災でな」

「ばいばい、フィアッセ」

「うん。またね、皆」

その遣り取りを最後に香港へと転移し、短いイギリス旅行が終わりを告げました。後日、この時期ならオーストラリアや軽井沢で滞在した際に撮った写真をアリサちゃんに「すすずか」ちゃんから見せられ、「楽しめたのなら良かったね」的な感想を返すのが恒例だったものの、今回は意図せず参加する事が出来ました。

海外だと違法渡航せざるを得ないのが難点ですけれども、夏休みの話題作りをする分には国内旅行も有りかもしれません。等と楽しく考えていたのも束の間、その考えを改める事件が起こったのでした。あれはそう……、帰国してから2日後の出来事だったと思います。あの一件以来、海鳴市からの遠出は成る可く控えようと心に刻みましたね。

嗚呼、何とも儘ままなりませぬ。

第34話：あざみし風に憂いを乗せて

S i d e : クロノ

フエイトの裁判や処遇に関する手続きが粗方終わり、後は細々とした申請を行うのみ。全く、随分と時間を費やしてしまったな……。通常の事件なら一月も掛からず処理されるのに、稀に見る重大事件だった事や、フエイトが事件中にやらかした行為によって無罪判決が遠退きそうになるとは、少しばかり肝が冷えた。

取り分け、『違法薬物による身体強化』と『非殺傷設定を解除しての決闘』については問題視されたが、倫理観と道徳心を養う機会の欠如により仕方が無かったという論調で弁護しながらも、嘱託魔導師として一定期間の無償奉仕、行動記録の提供及び監督者との共同生活、更に将来の就職先を管理局関連組織とする減刑策を講じつつ、あまりしたくは無かったが暫定魔導師ランクS+の“なのは”と懇意であるⅡ共に入局する可能性を仄めかす事で如何にか無罪を勝ち取り、今に至る。

一応、“なのは”に関する情報開示は本人から事前の了承を得ているし、この展開を見越した上で嘱託魔導師の登録も済ませていた。つまり何ら問題は無いものの、こうした情報はそれなりの立場の人間ならば閲覧可能な為、要らぬ駆け引きを誘発させる恐れ

が有った。

Sランク越えの魔導師は、非常に貴重だ。

昔ならば英雄として、若しくは王として君臨する程の逸材だが、広大な次元世界の秩序と安寧を守る時空管理局にとつては何人居ても足りないぐらいに世界は脅威で満ちている。フェイト自身も、将来有望な魔導師でSランク越えは手堅いだろうけれども、現時点でS+に到達している「なのは」は歴代最強の魔導師へと至るかもしれない。

そうでなくとも、オーバーSランクである。模範的な時空管理局職員ならば、困り込んだり接点を持ちたいと考えるのが道理だろう。と言うか実際に、リンディ提督もとい母さんが非常に乗り気だし、其れも有つて「なのは」とフェイトの文通やビデオレターの頻繁な遣り取りを手助けしたり、ミッドチルダ製の映像機器及び編集機材一式を貸し出す等、現在進行形で恩を売りまくっている。

これを何時もの様に狡猾だと思えたら、どれ程良かった事か……。真相としては、保護観察中のフェイトを甚く気に入ったらしい母さんの愛情が暴走しており、その片鱗が「なのは」にも降り掛かっているだけで困り込みは二の次だ。

女性代表のエイミー曰く、フェイトの様な無垢に等しい可愛い子を預かったら「守護まもも

らねば!!」と母性本能が活性化するのは当然の事だと力説しており、紆余曲折を経て可愛げなく育った息子としては少々罪悪感を抱くも、あの対象が自分じやなくて良かったとも思えてしまう。あんな風に愛されていたら、きつと別の誰かへ成り果てたに違いない。

だが劇薬とすら感じる程の愛も、長らく欠けて枯渇していたフェイトにとつては良薬らしく、段々と表情や態度が解ほぐれて来たのは喜ばしい事である。そんな吉報を携えて、なのはの元へ訪れると、挨拶もそこそこに要領を得ない質問を投げ掛けられた。

「ところでクロノさん。ミッドチルダでは、運の善し悪しって分かるんですか?」

「唐突だな。【希少技能】^{レアスキル}による未来予知なら有るとは聞くが……。何でそんな事を?」

「実はその……。最近、またしても危険な事件に遭遇したので、そういう運命なのかなと」

「ふむ……。時間は有るから、その発端から顛末までを詳細に話して欲しい」

やはり管理外世界でも、文明や技術がそこそこ発達しているなら問題は付き物だな。内容次第では調査隊を組んで調べるが……。さて、どんな事件なのだろうか?

く

Side : なのは

暑さも和らぎ、秋めいた日差しに照らされた喫茶『翠屋』のテラス席。其処でクロノさんと会合している訳ですが、愚痴に付き合わせて申し訳無いと思う反面、魔法を用いた戦闘を行ったので報告がてら一部始終を話す事にしました。

あれは確か、8月15日の正午過ぎの事でした。那美さんと言う方に御祓いが可能なのかを相談する為、八束神社^{やつか}へと向かったのです。

何故かって？

ジュエルシードを回収したり、決闘したり、その直後にロボットと戦ったり、謎の魔力反応を感じたり、治安が宜しくない場所だったとはいえ窃盗犯の逮捕に協力したりとか、偶然で片付けるにはあまりにも厄い^{やぐ}年だなーと思ひまして、取り敢えず東洋神祕の一端を知るであろう巫女の那美さんに尋ねようとしたのですが……。

不思議な事に、普段は清閑な八束神社で雷撃やら衝撃波が飛び交う戦闘が行われているので止むを得ず参戦しました。因みに、戦っていたのは怨念に取り憑かれた【祟り狐】

と、那美さんを含む退魔師の方々に、近い内に封印が解ける前兆が有ったので再封印をする予定だったそうです。

まあ結果としては、魔法が通用したので拘束後に《Divine buste r》で弱らせて、退魔師の方々による浄化で怨念だけを完全消滅させました。これにて目出度^{めでた}し目出度^たし。

「……で、最終的に御祓いはしたのか？」

「破邪^{はしや}の光とやらで清めてから、御守りを貰いました」

「そうか……。しかし、これ程までに災難続きだと末が恐ろしいな……」

「あの一、特大フラグを立てるのは勘弁して欲しいのですが……」

「旗^{フラグ}が立つと如何なるんだ？」

「実現する可能性が高まるかもしれませんが」

「成程。勉強になった」

その後、フェイトちゃんの現状や将来的な見通しについて聞いたり、貸し出した機材やデバイスの調子は如何だと聞かれたりして、それから何時もの手紙とビデオレターを

渡され御開きとなりました。そもそもこの会合は大事の前の小事で、管理局地球支部の候補地選びや金策など色々有って結構多忙なのだとか。

なら、怪しまれない様に御注意を。

諜報とかスパイと呼ばれる活動は、日本の場合だと古来より「忍者」と呼ばれる人達が担当しております、情報収集や変装のみならず戦闘も熟こなすらしいですよ？——
 そうフラグを立てながら伝えると、クロノさんは懸念事項が増えたせいか溜め息を吐いた後「それは御互い様だろうに」とだけ返して去って行きました。

何とも見事なカウンターです。あまりにも強烈だったのでモフモフな物で癒やそうと考えたものの、身近な動物で一番仲の良かった「くーちゃん」こと久遠くおんが例の「崇り狐」だった事も有り、今は嫌われちゃったんですよね……。正確には、《Divine buster》によるトラウマが原因ですけど、こればかりは記憶の風化を待つしか有りません。

悲しかな。然れども、あの武力介入によって犠牲が出ずに済みましたし、この程度の代償で済むなら安い物です。ところで《Divine buster》でトラウマなら、十倍以上の火力である《Starlight breaker》を叩き込まれたフェイトちゃんは大丈夫でしょうか？ 返事が少し怖いですが、次回の手紙で聞いてみようと思います。

（ ）

S i d e : シグナム

「シャマル、 “はやて” の容態は？」

「今は気絶だけで済んでいるけど、これが二度三度と続けば如何なるかはちよつと……」

「ならば、早急に対処しなくてはな……」

「ええ、そうね……」

それは信じ難い出来事であった。古代ベルカの叡智を集結させ、有りと有らゆる安全機能や修復機能を備えている筈の【闇の書】が主を害する等、一端末に過ぎない我々では事前を知る由も無く、その時は訪れた。

我々はその異常に気付けたのは、“はやて” のリンカーコアを対象とした魔力蒐集が自動的に為され、それが原因で “はやて” が倒れてからである。最初は、まさかと思つた。次に、何故このような異常が共有記録として残されていないのか疑問を抱くも、全てを知るであろう管制人格へ尋ねるには魔力蒐集で【闇の書】の頁を埋めなければ限定起動も儘ならない。

最低でも400頁。

全666頁の、約6割の白紙を埋めるだけの魔力を魔導師や魔法生物から蒐集せねば

問題点も解決策も分からず、最悪の場合は「はやて」が衰弱死する恐れがあると判断した我々は、迅速に方針を固めて行動へと移した。

猶予期間ゆうよは不明。出来る限り早く、空白の400頁を埋めるべく後方支援のシャマルを除いた三人で蒐集を行う。但し、時空管理局に拠点を早期特定される事態は避けたい為、近場の巨大な魔力反応からの蒐集は最終段階にて実施する。

「何故だ【闇の書】？ 何が起因となり、我等の主を脅かす……う？」

懊惱おうのうするも、立ち止まる訳には行かない。此処で諦め、挫くじかれてしまえば「はやて」の命が終わる。それは騎士であり八神家の一員でもある私にとって、如何しても切り伏せたい未来であった。

【A, S編】

第35話：フィンブルヴェトの訪れ

S i d e : なのは

11月29日。少し早いものの、商店街や街路樹にイルミネーションが飾り付けられ、デパートや『翠屋』にもクリスマスツリーが設置される様な時期となりました。

つまり、私がクリスマスという繁忙期に臨時店員として駆り出されるまで一月を切った訳ですが、今年からは身体強化魔法が使えるので気楽かなー？と考えながら夜間飛行をしていた折に、見たことの無い結界に引き込まれたかと思うと、普段は静かな「ルーライター」が異常事態である旨を伝えてくれた為、取り敢えず帰宅コースを外れて、自宅や市街地から距離を稼ぎます。

全く、何が目的なのやら？

此処最近は大人数しくしていましたし、フェイトちゃんからの朗報により気分上々な日々を送っていただけに、風雲急を告げるとはこの事でしょうか。ところで風雲ではなく誘導弾が飛んで来た場合は、どの様に解釈をすれば良いのか困ってしまいます。

一先ず《Round shield》で受け止めるも、直ぐに後悔しました。フェ

イトちゃんやクロノさんの誘導弾を弓矢とするなら、こっちは投げ槍みたいな感じで結構重いのです。まあ、よく見ると誘導弾の外観が鉄球その物なので然もあらんと納得しつつシューターでの破壊を考えた刹那、更に追加となる誘導弾8発と大型誘導弾1発を検知。

仕方無いので奥の手を使って落としましたが、何故だか遠くに居るゴスロリ↑ハンマーさん（仮称）の不機嫌さが増している様に感じます。や、キレたいのは此方の方ですよ……。と思うも我慢して、念話による事情聴取を試みました。

「> 随分な挨拶ですね。御用件は何でしょうか？」 <

「> はっ、騎士に《ヴァイン・デス・リタートウ・エンス騎士殺しの風》を使つといてそれかよ。てめえ、潰されてーのか？」 <

「> そんな異名は初めて知りましたし、潰されたくもありません。それで御用件は？」 <

「> ……黙って叩かれて伸びてろ。あとは勝手にやる」 <

「> じゃあ此方は、その短気さを撃ち伸ばして差し上げます」 <

んー、まあこうなるのも予想の範疇はんちゆうです。魔導師と言ひ、自称『騎士』と言ひ、魔法に自信が有る人達は交戦しないと聞く耳を持たない傾向が有るのかもしれないねー。そんな訳で、レッツファイトです。

今度は此方が先制して《Divine shooter》を16発射出し、相手の出方を窺います。すると、先の一戦で中距離戦は不利だと悟ったのでしよう。防御魔法を張りつつ突っ込んで来ました。得物がハンマーですから、破壊力に關してはフェイトちゃんが大斧形態の「バルディツシュ」を振り回す攻撃と同等か、若しくはそれ以上。無論、そんな攻撃は当てられたくはない為、後ろ向きで飛びながら相手の後方や側方を誘導弾で脅かし、設置型バインドや流し撃ちが可能な《Short buster》で最短経路を塞ぐように迎撃を開始。時には、慣性制御による鋭角なV字ターンや真横へのスライドで振り切つて、翻弄する事も忘れません。

「せこい戦い方をしやがって！ これだから、魔導師は気に食わねえんだよー！」

「不意討ちした人が、それを言っちゃうんですか？」

「うつせえ！ カツ飛ばすぞ、アイゼン!!」

「―《Raketenhammer》―」

「うわあ……。逆ギレつて理不尽だね、ルーンライター」

「―Be careful. Master―」

何かが弾けた後、敵のデバイスが凄まじい変形を遂げました。先端にはドリル、後端にはロケットブースターが出現し、人機一体となり不規則な軌道を描いて此方へと突撃して来ます。只それでも、ステータスを速度に振つた状態のフェイトちゃんと変わらぬ

速さですし、この状態だと瞬間移動魔法や射撃魔法も使えないらしく先程よりは逃げやすい様な？

別に撃ち落としても良いんですけど、あの速さに当てるのは一苦労なので暫くは回避に専念&様子見しようと思います。意外と、魔力消費による疲労で血の気が落ち付いて、御話し出来るかもしれません……。でもこの人、何となく覚悟完了みたいな鬼気迫る熱意を感じるので、多分望みは薄いです。

「さつさと、食らい……やがれっ！」

「それは御免被ります。なの」

「—《Flash move》—」

瞬間移動魔法で距離を稼ぐ。その最中、敵デバイスのハンマーと柄の接続部付近にある回転式弾倉らしき物の動作を確認しました。恐らくあの装置が、爆発的な魔力を生じさせているんでしょうね。ところで、装填数を6発と推定した場合まだ3発程は残っている筈なのですが、それを考慮するならあと2分くらい逃げる必要が有ります。ふうむ……。それなら弾幕を浴びせて、中断させる方が手っ取り早いのもかもしれません。

気は乗らなくとも、怪我をせず、無事に帰れるように真剣で最適な行動を。これは私を心配してくれる家族の為、友達の為、知人の為にも最善を。———では改めて、戦闘行動を開始します。

（ ）

S i d e : シグナム

ウィータが先陣を切り、3分と経たずに撃ち合いが50合を越えた。魔力反応からある程度の予想はしていたが、リンカーコアの蒐集対象である魔導師は非常に手強く、相性の悪さも加わり次第に形勢不利となっていた。中距離以上の射程は完全に魔導師の独壇場で、カートリッジシステムの爆発的な魔力供給を用いた肉迫も、バインドや誘導弾に阻まれてしまう。

そして何よりも厄介なのは、貯蔵魔力を活かした出鱈目な軌道の飛行魔法である。恐らく、足元に推進力を発生させる通常の魔力消費量が少ない飛び方とは違い、進みたい方向へ引つ張る様に飛んでいるのだろう。後方や背面に付いても優位とならず、延々と退き撃ちや置き撃ちをされれば攻め倦^{あぐ}ねるのも当然だ。仮に私が先鋒を務めたとしても、戦況の大差は無いと思われる。

しかし、これは「決闘」ではなく「狩り」なのだ。このままウィータに任せただけの場合、相打ち上等で叩き込めれば辛勝するにせよ代償は大きくなる。今後、短期間だが魔力蒐集を行う予定である為、余力は可能な限り残しておきたい。

「>」 行動解析は粗方済んだ。ウィータ、ザフィーラと連携して魔導師を追い込め

く

「了解、任せろっ！ く

く 承知した く

控えていたザフィーラが参戦すると、僅かながら形勢は逆転した。通常なら2対1では簡単に優勢へと傾く筈なのに、魔導師による驚異的な抵抗がその予想を否定する。より速く、より正確に、より苛烈に。古代ベルカ魔法技術の結晶たる我々を上回ろうとする可能性は、敵ながら見事。叶うならば、正々堂々と倒したい相手であった。

「済まない。名も知らぬ魔導師よ」

カートリッジを消費し、弓状となつた「レヴァンティン」の弦に矢を番つがえて引き絞る。

……我等には目的が有る。騎士の誇りを捨てようとも、成し遂げたい目的が有るのだ。故にこそ、冷徹に役目を果たそう。

「我が無念と共に……。翔けよ、隼！」

「—《 Sturm fal ken 》—」

如何なる手練れであれ、複数人を相手取るなら無理が生じやすい。その間隙を射貫く一矢は、吸い込まれるように魔導師へと届いた。だが、寸前で張られた防御魔法を徹とおしたせいで威力は殺そがれている。あれでは気絶させるどころか、手負いの獣と成るに違ちがい。

「やはり、殺さずに仕留めるのは難しいものだな……」

くく

S i d e : なのは

敵の増援で全身鎧の拳闘士が来たかと思えば、更に3人目からの狙撃を貰ってしまいました。不覚以前に無理ゲーなのですが、私は如何どうしてこうも寄って集たかってポコられているんでせうか？ もしかしたら前世が極悪人だったり、占いで言う大殺界という時期にでも突入したのかもしれませんが、「諦めたらそこで試合終了ですよ？」と某監督も言ってます。大切ですね、不屈の心。

痛覚は遮断して、身体強化魔法の出力を最大限に。貫通してきた弓矢型実体弾を咄嗟に掴んで受け流した左手は、またもや無残な感じになっているので簡易的な止血処置を実施。他にも、実体弾が爆散した影響により全身が痛みますが、まだ戦えなくもないです。

「蒐集開始」

「うっ……………、あ……………」

訂正。未知の魔法…によって、私のリンカーコアから敵が持つ本「デバイスへと魔力を吸い上げられている為、戦闘継続が」になりました。少しでも並列思考が乱れる

と、意識が痛みに…持つて行かれそうな気がします。いやはや、実在しない……臓器みたいな物から激痛を感じる…」は、これ如何いかに？

「ほう、まだ耐えるか」

「何故……、こんな事を？」

「ある目的の為、とだけ言っておく」

「おい、シグナム。敵に態々むづむづ教えんなよ」

「抵抗されるよりはマシだ。それに、私は彼女の奮闘に敬意を表したい」

「……あつそ。じゃ、あとは任せた」

突然現れ…たポニーテールの剣士さんを含め、待ち——ていたのは3人。この調子では、他に…何人か居たとして「不思議ではありませんね。それと抵抗しようにも、魔法による痛覚——が出来ずに内心では悶もたえている……」ので過大評価かと。

「これから御前は、魔力を吸収されて気絶する。殺しはしないが、もし再び我等の前に現れるようなら……。腕の一本くらいは覚悟するが良い」

「また、誰かから……奪うん…ですか？」

「必要があれば、そうするだろうな」

では…、頑張つて立ち塞がるのみですよ。3日後には、リンデイ——がどんな裏技を使ったのかは怖くて聞けません…けどフェイトちゃんが出来日しますし、流刑地よろしく

数年間は此処で暮らしてい——との事。確かに、魔法や科学が優れているミッドチルダと比べたら、地球の日本なんて不便な……ド田舎でしょうね。でも……児童労働が当たり前なブラック世界よりは、豊かな人生——験が出来ると思います。

それはさ——置き、フェイトちゃんが1対3で襲われ……かねないのならば、アルフさんと私を加えて3対3、出来ればク——さんや武装局員の方々の……支援も受けたいところ。因みに、ユーノ……さんは考古学者が本業なので戦闘要員には含め——せん。手伝ってくれるのなら、それはそれで……り難しいですけど。

「良い目付きだ……。私は『ヴォルケンリッター守護騎士』の将、シグナム。御前の名は？」

「つ……。囑託……魔導師、高町なのは……です」

嗚呼もう。これ以上は……並列思考——解け……、

「成程。道理で——」

第36話：気を取り直して行きましょう。なの

Side：なのは

冷たいし、暗いし、動けない……。

ぼんやりとそう感じます。

熱は無く、光は見えず、血もそこそこ流れたのでしよう。

正直、思考する事さえ「しんどい」のですが、二度寝したら次は起きれない恐れがあるので頑張ります。取り敢えず、魔法でサクッと解決を試みるも無反応。不思議に思い調べてみると、何故だかリンカーコアが酷く損耗しており、これでは魔力運用は難しいなと感じました。じゃあ、ドーにかして直さねば……。

祈ってみます。温かい記憶を込めてみます。生存願望も投じてみたものの、これでは生命力と言うか体力の方が先に尽きてしまいそうです。やはり、肉体に血が通うようにリンカーコアには魔力が必要なのかなーと考えていたら、外部から少量の魔力が流れ込

んで来ました。これは有り難いですね。半分は修復に当て、もう半分は周囲から魔力を集める為に使います。

はい、当然の如く供給不足に陥りました。ならば、もつと遠くて高くて深い場所からも集めないと早期修復は望めません。体感限度の此岸しがんを越えて、更に更に彼方よりも果て先にある魔力を私の元へ……………。

焦げた臭い。冷たい空気。痛みと熱を持つ全身。リンカーコアからは、溢れんばかりの圧縮魔力が出口を求め彷徨さまよっております。それなら何時もの様にと、翼に形成して貯蔵魔力へ回すも一向に減る気がせず、当分先の予定だった光輪を三重にして後頭部付近へ配置。取り敢えず、これで《Divine buster》を無駄撃ちしなくて済みそうです。

落ち着いたところで身体チェックをしてみますが、左手の傷は塞がりこそすれ血を含んでいるので赤黒く、また包帯を巻くか手袋で隠さないと不特定多数の人が体調不良になるかもですね。他にも打ち身や擦過傷、急制動による筋肉痛といった細かい異常は有れども、安静にしていれば遠からず完治するかと。そんな事より、もつと深刻なのは

「ルーンライター」の方でして……。外装の殆どが吹き飛び、内部基盤も融解や破損具合から修復不可能のように思えます。

「……ごめんね。有り難う」

多分、無我夢中で引つ張って来た魔力が逆流してショートしたのか、それとも私の安全の為に魔力の一部を逃がしてくれた影響なのか。どちらにせよ、私の所為で壊れた事には変わりません。

理不尽は突然やって来る。

そんな事を6年前から知っていて、つい8ヶ月程前には脅かされたにも関わらず、平穏を享受していたが故に斯様な結末へと至ったのです。私も、御兄ちゃんや御姉ちゃんみたいに日頃から鍛えていれば、この事態は避けられたのでしょうか？ これから先も、頑張れば対抗できるのでしょうか？

分かりません。けれど、万全では有りませんでした。もう後悔したくないなら、諦めたくないなら、甘えを捨てて強くならなくては……。

くく

Side: フェイト

「という感じで、フルボッコにされたのでした。ちゃんちゃん」

「済まない。僕達が、もう少し早く来れば……」

「気にしないで下さい、クロノさん。悪いのは敵と、私の弱さなんですから」

12月1日。私とアルフ、クロノ、リンディ提督、エイミイを含む次元巡航船『アースラ』が地球に着いた時点で、最悪は過ぎ去っていた。

時空管理局としては、魔導師襲撃事件の多発を把握していたにも拘らず情報共有が遅れ、私達はその情報を知ったのは昨日の出発前の事。その後、念の為にと次元空間を通常航行中に「ルーンライター」を介した通信を試みるも反応が無く、直ちに長距離転移で急行したものの既に「なのは」が襲撃されてから36時間以上が経過しており、救済すら出来なかった事を悔やむばかりである。

「……誰だつて、オーバーAAAランクが3人も襲つて来たら厳しいと思うんだが？」

「それでも私は勝利して、平穏な日常を送りたかつたんです」

「残念ながら、単純に勝てば解決する様な相手ではなくてな……。エイミイ」

「はいはい。【闇の書】の情報で良いよね？」

「いや、その前に『なのは』へ機密情報限定閲覧権を付与したい」

「ふーん、なるほろなるほろ……。それだと5分くらい掛かるので、宜しく候」そうろう

「却下。3分で処理しろ」

「唐突な理不尽?!」

「言い回しがイラつとした」

「一理有るけど、それって横暴だと思ふなあ!」

「なら、もう少し真面目な言動を心掛ける様に。将来的に、異動先で困るのは君だからな?」

「えっ? 私、クロノ君の専属執務官補佐なだけけど?」

「は? 人事規則上、有り得ないと断言しておく」

けれど、時間の経過は悪い事ばかりじゃない。『なのは』を襲った犯人達は、第一級搜索指定ロストログア【闇の書】に付属する防衛機構の1つ『守護騎士』である事が判明し、その対策本部を地球に置く事が決定された。

過去30年程、時空管理局は二度も【闇の書】を捕捉したのに破壊や封印すら通用せず失敗を重ねているものの、個人的に用が有るのは『守護騎士』だけだ。全身全霊を懸けて贖あがなわせる。それさえ出来れば、【闇の書】自体は序ついでで処理できれば十分だと思えてしまう程に、心が荒れ狂って静まらない。

「フエイトちゃん」

「うん。如何したの『なのは』？」

「……あまり、私よりも怒らないでね」

何故……？

「『なのは』は、友達が襲われても我慢して欲しいの？」

「フェイトちゃんは、友達が殴り返した相手でも追い打ちするの？」

因みに、フルチャージした《Divine buster》を直撃させる程度には遣り返します。——そう言われると、言葉に詰まる。アレは凄く重い砲撃で、防御魔法越しでも受け止めたくない魔法の1つだ。そんな物をフルチャージで当てた手に追撃など、下手をすれば致命傷になってしまう。

「なら抑えるけど……。その代わり、手加減無しだよ？」

「ラジャーです」

でも、今後は『なのは』だけが戦うなんて事は滅多に無いだろうし、隙を見て《Halberd crusher》とかを撃墜前に叩き込む分には大丈夫な筈……。

取り敢えず、あの憎い騎士達をやつつけて、【闇の書】も壊してしまえば平穩になる事が分かっている。それから先は分からないけど、幸せな日々を『なのは』やアルフト、

そしてクロノ達とも過ごせたら嬉しいなど思っているからこそ、この怒りとその元凶を切り捨てたくて心が疼く。

不快だ。不快で不快で、あらゆる幸せが陰りを帯びる。

こんな物を抱えながら過ごすなんて嫌だ。私はドクター・プレシアみたいに醜くて、怖くて、壊れた人になるのは嫌だ。楽しい時間を過ごしても、心の底から喜びに浸れないのは嫌だ。気持ちが悪い。許せない……。私達を不幸にする敵が許せない。

そして私は、そんな私が大嫌いで仕方が無かった。

くく

Side：なの

あれから1時間ほど情報共有や談話をした後、約束の時間が迫って来たので『アースラ』の転移ポータルを経由して移動する事になりました。

目的地は、時空管理局本局の技術部装備課。其処でユーノさんから預かった「レイジ

ングハート」と、フェイトちゃんの「バルディッシュ」に強化改修を施すので、その方向性を打ち合わせするのです。相手だけカートリッジシステムという魔力ブースターが付いていては、1対1だろうと苦戦しますからね。技術で補える不利は、補うのが吉ですよ。

因みに残念ながら、「ルーンライター」は修復不可能という事でデータ取りをした後の破棄が決定していて、元からユーノさんが「レイジングハート」の所有権をスクライア一族から譲り受けて私に譲渡するまでの繋ぎでしたが、愛着は確かに宿っていました。とても、申し訳無い気持ちで一杯です。なので復讐とまでは意気込みませんが、再戦での勝利と事件解決を以って報いたいと思います。

「そう言えば、レイジングハート。ユーノさんは今、如何しているの?」

「Currently he works in the library.」

「へー、今は司書さんをやってるんだ?」

「Yeah.」

何が起因となったかはさて置き、古代遺跡やら旧文明の探索に明け暮れるよりは平和で収入も安定しているでしょうし、心配事も1つ減った……のかもしれない。機会があれば、「レイジングハート」を託してくれた御礼と転職祝いをしなくては。そう心に留

め置きつつ目的地へ到達すると、白衣を着た眼鏡の御姉さんが待つていました。

「御待ちしておりました。改修担当の『マリエル・アテンザ』と申します」

「本日は御世話になります。『高町なのは』です」

「『高町フェイト』です。宜しく御願います」

あ……。以前、見送りの際に名字を貸した（あげた？）ままでしたね……。別に返して貰うつもりは有りませんが、行く先々で姉妹や親戚と思われるのも考え様です。まあ、仮に勘違いされたとしても被害は無い筈なので、聞かれない限りスルーする事にしませう。

「じゃあ、僕達は別の用件を済ませて来るから、其方が先に終わったら連絡をして欲しい」

「はい、分かりました」

そう言ってクロノさんとエイミーさんとは別れたものの、結果的に連絡をする事は有りませんでした。やはりと言うべきか、マリエルさんは『マッドサイエンティスト』ならぬ『マッドエンジニア』で、作業着や制服だけで十分なのに白衣を着ている人は次元が違つてもそんな感じなんだと妙な確信を得ましたが、そんな物を得たところでマッドが止まる訳も無く、改修案が次から次へと出て来ます。

「いやー、本当に何度見ても素晴らしいですね。彼等を作った技術者は、拡張性や演算

能力の大切さを実によく分かってらっしゃる。特にレイジングハートなんて、この試作カートリッジシステム『ウルカヌス』に、予備弾装とフレームを大量に積んでも格納領域が67%も余ってしまう。これなら、自律機動防壁や砲撃支援子機のみならず、対空多連装榴弾砲や仮想可変噴進翼や小型魔力炉の搭載だって夢では——」

あの、「力」は欲しくても戦争をしたい訳ではないんですよ。

「えーと……。流石にそれは、過剰戦力だと思うのですが……」

「おっと失礼。最高峰のデバイスと魔導師に出会えて、甚く感激してしまいました。これだけの性能と魔導資質と予算が有るなら、色々と出来ちゃうので」

「では、色々と問題にならない程度で御願います」

一先ず「レイジングハート」の最終兵器化は防げましたが、カートリッジシステムの中では一般的とされる「マガジン」や「リボルバー」や「チューブ」式ではなく、これでも控え目にしたらしい装填数65発の「特注ドラムマガジン」が採用され、序でとばかりにカートリッジの連続消費による魔導師要らずを目指した魔力運用システム『ウルカヌス』とやらの搭載も確定してしまいました。

尚、「バルディッシュ」本体にはリボルバー式の物を組み込むだけという簡素な改修のみでしたが、バリアジャケットの各所に次世代型電磁カートリッジシステム『ヘラウスフォルデルング』を装着させるなど抜かりは無く、また全体的な強化調整は別枠との事。

凄く、嫌な予感がします。

オーバークロックやらリミッター解除さえも霞む、「こんな事も有ろうかと」といった配慮が生み出す「ナニカ」が仕込まれる様な、そんな気がするのです。今でさえ非殺傷設定が機能しているだけで、威力的には都市の痕跡すら残さない戦略兵器じみた魔法が撃てるのに、更に+αされるのは避けたい所……。

「嗚呼^{ああ}それから、助手を紹介しておきますね。シャーリー、何時までも恥ずかしがってないで挨拶ぐらいはしたら如何？」

そう言われて、物陰からおずおずと出て来たのは同い年ぐらいの眼鏡を掛けた少女で、長い髪と顔付きから御姉ちゃんを幼くした様な印象を受けます。これで何処か恍惚^{こうこつ}とした笑顔を浮かべたり、白衣さえ纏っていないければ普通に仲良くなりたいと思いません。けれど、取り敢えず様子見を継続です。

「は、初めまして……。『シャリオ・フィニーノ』です。精一杯、頑張ります！」

「……この子、『なの』は『さんの戦闘映像記録を見てからファンになったみたいで、今朝

からずつとこんな調子なんですよ。でも腕は良いですし、仕事も120%ぐらいの勢いで処理していますから御安心を。能力は保障します」

それってファンじゃなくて、心的外傷で精神が不安定なだけなのでは……？ あの殺意が高かった頃の怖いフェイトちゃん、私の血とか焼けた肉が映っているR18G相当の映像記録を見たら、少しくらい自我が揺らいでも可笑しくは無いかと。しかし、仮にそうであれマリエルさんの抑制装置に為れそうなのは彼女だけです。頑張って貰うしかありません。

「初めまして、『高町なのは』です。早速だけど、シヤリオちゃんに1つ御願ひ事が有りまして……。もし、マリエルさんが突貫からの保身無き零距離射撃とか、近接用サブアームに、跳弾する魔力弾や、数秒先の未来を演算予測するシステム等々、そういった堅実とは言い難い魔法や、無くても困らない物を実装しようとしたら阻止してくれませんか？」

余計な物なんて要りません。変な装備や魔法の習熟に時間を割くぐらいなら、得意とする高精度・高速度・中距離の戦闘技術を磨いてクソゲーを押し付けた方が強いと思いますし、戦闘はスポーツではないので同じ土俵で戦う必要も無し。あと、技術的に可能っぽい気がする演算予測機能は並列思考の邪魔になりそうなので、念入りに釘を刺しておきます。

「分かりました。その様な物は、全力全開で防ぎますね！」

「や、そこは冷静沈着な判断で御願います」

「了解です。……あつ、それからサインを頂けないでしょうか？」

「サインって、確認用じゃない方かな？」

「はい、宜しければ此方の色紙に——」

はてさて、如何なる事やら……。色々な意味で、完成の日が待ち遠しいです。

第37話：テンコート・テンキ

S i d e : すすずか

良くない事が起こっている。——唐突に“なのは”ちゃんが学校を休んで、音信不通になった前回はそうだった。だからこそ、状況が同様である今回もそうなんだろうなと推察して、ある程度の覚悟と諦観をしていたつもりでしたが、やはり悪い変化があると心苦しく感じます。

「お早う “すすずか” ちゃん、アリサちゃん」

珍しく、通学バスを利用せず早めに登校したらしい “なのは” ちゃんは教室で私達を待っていた様で、見慣れない白手袋を着けていました。

「お早う、 “なのは” ちゃん」

「お早う、 “なのは”。10日振りだけど、また怪我でもしたの?」
「うん。でも、地獄先生よりはマシだから」

そう言いつつ白手袋から左手を抜いて見せてくれましたが、手の中心を貫く縦線の古傷とは別に、手の平を彫刻刀で抉ったにも拘らず、新しい皮膚で覆われているとでも形容すべき傷痕が万遍無く走っていて、筋肉と骨が直に見える『鬼の手』と比較されても

甲乙付け難い惨状です。

「あんたね……。その調子で怪我したら、左腕が遠からず『機械鎧』オートメイルになるわよ？」

「流石に、これ以上は無いと思いたいなあ……」

それから「なのは」ちゃんは、利き手じゃない右手でやる宿題や食事の大変さに、先生方への説明で一々傷を見せる面倒さを滔々とうとうと語りましたが、怪我をした経緯については終ついぞ触れませんでした。

やがて先生が教室へと訪れ、出欠確認と朝の会が始まって何時も通りの日常が再開するかと思いきや、珍しい事に転校生が居るとの事。その紹介をすべく、先生は黒板に「高町フェイト」と書いた後、廊下で待機していた子を教室へと招き入れます。雰囲気から察するに……。冷淡な性格なのかもしれません。

アリスちゃんよりも色合いが明るい金色の髪、綺麗だけど無機質さを感じる表情ひたひたと額から左頬へ流れる傷痕が特徴的な彼女は、教室全体を一瞥いちべつすると最低限の自己紹介をしました。

「高町フェイト」です。短い間ですが、宜しく御願います」

馴れ合うつもりは無い。そんな無言の主張すら滲じみ出てるのに「なのは」ちゃんは平然と拍手をして、釣られるように私達も拍手して彼女を迎え入れたのですが、若もしかして従姉妹なんでしょうか？ 差し支えが無ければ、休み時間に訊いてみたいと思いま

す。

く

Side:なのは

実のところ、9月頃の文通では明らかになっていたのですが、フェイトちゃんは条件付き無罪な訳でして、その条件には島流しもとい「地球で5年間は滞在する事」という条件も含まれていました。

ならば、友達の近くが良いという理由で海鳴市に住むことが確定し、日本の法律的に義務教育も有るので、じゃあ友達と同じ「聖祥大学附属小学校」に編入すると決まりましたが例の襲撃で予定が狂い、デバイス改修に機能確認がてら訓練したりで4日間。フェイトちゃんへ日本人的常識やら、校内における暗黙ロイカル・ルールの了解を教えて更に1日。尤も、私が教えた日は日曜日なのでノーカンですけど、12月2日からの登校予定が7日に摩すれたのは事実です。さて。

数ヶ月前からクロノさんが手続きや学習用具等の準備を済ませ、エイミィさんによる情報収集と事前教育が為なされた御蔭でフェイトちゃんは無事に学校デビューを果たしたものの、魔導師らしい取捨選択と見切りの速さによって現在進行形で孤立化が進んで

おります。

私に通う【聖祥大学附属小学校】は私立校なので、普通の小学校の生徒と比べれば同級生達の知性や品性も高いとは思いますが、自立精神が旺盛おうせいなミッドチルダの方々よりは子供っぽさが否めず、何よりも直球で個人情報おんじょうを訊いてくるのが気になるらしく、困惑しているみたいです。……只、今のところ念話で救援要請は来ていないので、意外と大丈夫かもしれません。

「ねえ、＼なのは＼ちゃん。フェイトちゃんは親戚の子なの？」

「親戚で友達だよ。仲良くなったのは割りと最近だけだ」

人類皆兄妹という観点で見れば、従姉妹と言えなくなっても無いかと。

「へ〜……。＼なのは＼も、普通に友達を作れるのね」

「や、結構な紆余曲折がありました」

「Understood. ……何時かセツティングしてあげるから、普通の交際もしてみなさいな」

「アリサちゃん。友達を作るんじゃないかと、為るものだと思うよ？」

「それは親友や知己でしょ。友達って、もつと簡単な関係で良いんじゃないかしら？」

「まあまあ、二人共その辺りで……」

アリサちゃんと「ずずか」ちゃんは、容姿やファミリーネームで注目されるので人が

集まりやすく、広く浅い交友関係が必然的に多いです。とは言え、そんな浅い関係の人まで友達に含めていたら、身体と時間が足りなくて付き合いきれない様な……。いえ、別に私が気にする事ではありませんね。それを良しとするなら、それはそれで良い事なのです。

時に、無造作に千切っては投げるかの如く塩対応をしていたフェイトちゃんは無事に質問攻めを突破したらしく、同級生達の壁はさつぱりと無くなっていました。休み時間は残り僅かですけど、折角なので声を掛けておきます。

「お疲れ、フェイトちゃん」

「うん……。転校生って大変なんだね……。ところで、其方の二人は？」

「『アリサ・バニングス』。『なのは』の親友よ」

「『月村すずか』です。私も、『なのは』ちゃんの親友です」

ひゅー。何故、此処で謎の対抗意識を出したのでせうか。そして『すずか』ちゃんは袖を掴まないで下さい。フェイトちゃんの視線がとても痛いです。

「……そうですか。因みに親友であっても、戦友ではないんですね？」

「はあ？ それってゲームか何かの話かしら？」

「部外者には答えられません」

「ふーん……。まっ、仲良くやりましょ。『なのは』の為に」

あのその……。三者共に親友である為、友達の友達と仲良くなれるかは別として喧嘩せずに済めば良いなど願っていましたが、こんな相互不可侵条約もどきの締結は何とも……。けれどコレ、火元が口を挟める事では有りませんよね。沈黙は金なり。

そして訪れた放課後。体育の授業で、フエイトちゃんと「わずか」ちゃんが風切り音がするくらいの速度でドッジボールを投げ合っていた事以外は至極平和でした。何だかんだ、遠からず馴染めるのでは？

尚、日常における不安要素は解決の兆しが見えて参りましたが、非日常サイドたる魔導師襲撃事件の進展は宜しくありません。回復に努め、準備したところで『ヴォルケンリッター守護騎士』の方達やら【闇の書】の所有者を捕捉できなければ、実働組は待機するのみ。個人的な希望としましては、憂い無くクリスマスと年末年始を迎えたいのですが果たして……………。早めに折りたいですね、このフラグ。

そんな風に、内心では憂うき憂うきしながらフエイトちゃんと帰路を歩いている最中、会話イベントが発生しました。

「『なのは』、今日は如何するの?」

此処のところ、と言うかデバイスの改修後から私達は毎日1〜2時間程の戦闘訓練を続けており、復讐鬼と形容するには温い（ぬる）ですけど最近のフェイトちゃんは冷たく、そして悔やんでいるようにも見えます。一応、「悪いのは外敵と運だけ」とは伝えていますが、心にまで響いているかは分かりません。

それはさて置き、管理局が保有する過去の交戦記録によるとベルカ騎士は近距離戦が得意との事。じゃあ、付かず離れずの中距離戦で頑張るしかないですねーと鍛えて候（そつち）ども、偶には変化による刺激も欲しくなるのが人情というモノです。実際に、私は欲しくなりました。

「連日の中距離戦は飽きてきただろうし、近距離戦でもしようかなと」

「それって……、私が『なのは』を追い立てれば良いのかな？」

「うん。フェイトちゃんも追い立てられる側だよ」

具体的には、御兄ちゃんor御姉ちゃんに。メイン武器は小太刀という短めの日本刀を二振り使っていますが、武器なら一通り使えるらしいので今頃は模造刀で切り合つてウォーミングアップをしているのではないでしょうか？

いや……、念の為に経験を積んだ方が良くと考慮したからこそ御願（ごんげん）いするに至つたものの、近接戦闘への拘り（こわ）がない私にとつては学べる喜びよりも苦手意識の方が強いです。誰だつて手首から先を切り落とされかけたり、爆破されそうになればアウトレン

ジ・アウトキル、若しくはワンサイド・ゲームを好むようになるのは当然至極の経緯で、今日の訓練は主にフェイトちゃんの近接戦闘技術の向上が目的です。

「……よく分からないけど、楽しみにしておくね」

そうクールに決めたフェイトちゃんでしたが、1時間後には我が家の道場で熱心に斧を振るうフェイトちゃん、使い慣れない筈の長刀で苛烈に攻める御兄ちゃんの姿が其処に在りました。攻防が目紛めまぐるしく入れ替わる様は凄まじく、近接戦闘では回避や防御ばかりの私とは違つて楽しそうに見えます。これが日常の延長線上なら、本当に最高の高でしたけれども……。

カツトカツト。

先ずは、この訓練を専念して終わらせましょう。もう怪我は勘弁ですからね。その次は御風呂で、またその次は夕食。そうやって淡々と終わらせて行けば、何時かは事件も終わります。反省や反動なんて、最後の次で構いませんよ。

「よし、此処まで」

「ふう………。有り難う……、御座いました」

「それじゃ、〃なのは〃。またやろつか?」

「……宜しく御願います」

フェイトちゃんとお兄ちゃんやんが端に寄り、私とお姉ちゃん中央に出て第3ラウンドが開始されました。因みに今日の訓練は、私とフェイトちゃんでお交代しながらあと3試合、つまり計6試合やるとの事。是非とも欲しいですね、無尽蔵の体力。

そんな暢気のんきなことを思う並列思考とは別に、現実ではお姉ちゃんのお勢は途切れずに繋がり続け、攻勢一点張りの恐ろしい斬撃が次々と繰り出されます。私自身としましては、フェイトちゃんみたいな足捌きでの回避は自信が無いので、魔法でホバリングして滑るように避けたり「レイジングハート」代替りの棍こんで防いだりしてますが、やはり近距離戦では勝てる気がしません。

強引に突き飛ばしたり、拘束魔法で足止めすれば中距離戦へと移行できるんでしょうけど、記録映像や交戦経験から察するに『ヴォルケンリッター守護騎士』の方達って普通に中距離戦が出来る感じなんですよね……。只、勝率1割以下が5割ぐらいの見込みになるのは差が大きいので、仕切り直しの練習は大事です。

「『なのは』、下がるだけじゃなくて前にも出てみる。初速を殺された剣は、切れ味が良い棒ではない」

要するに、防御魔法で良い感じにシールドバッシュするなり減速させれば脅威度は下がると。参考になります。そして空気を読んだのか、お姉ちゃんが大上段から長刀を振

り下ろしてくれたので、透かさず突撃。……ふむ。確かに受け止めた時の衝撃は減りましたが、魔力による補助が無ければ筋力差で体勢を崩されかねないので、実戦では組み合い厳禁ですねこれは。

そうやって学びを得ながらも今日は過ぎ行き、平和な一日となりました。いやー、明日以降は筋肉痛に悩まされるでしょうから、もしドンパチするなら明々後日から先を期待したいところですが、如何なる事やら……。まあ、一番良い解決方法は『絶対幸福型終幕装置』さんが出て来て、さくつと解決してくれる事なのは言うまでもありません。

第38話：新たなる辰星と極光なの【前編】

side:なのは

嘗て、私が襲撃された時には前兆や予感もフラグも無かった（かもしれない）様に、彼
ヴォルケンリッター
 等——『守護騎士』との再会もまた突発的な事態となりました。

12月20日、時刻1925。海鳴市上空300m付近。

夕食も御風呂も済ませ、黙々と宿題を処理している最中に緊急出動要請が掛かり、ドライブ・イグニツション。某技師による過剰なまでの火力信仰によって再誕した「レイジングハート・ヴァルカノーネ」を起動し、転移魔法で現場まで跳んだ頃には管理局による人払いと包囲が完了しており、あとは《強装結界》の内部へ閉じ込めた『守護騎士』を拘束または消滅させれば帰宅可能といった状況です。

それにしても、随分と待ちました……。次元世界各地で発生していた類似の襲撃事件情報から割り出した彼等の行動範囲は広すぎる為、【闇の書】に蒐集されていない&保有魔力がそこそこ多い魔導師を餌にして数箇所を網を張っていたのですが、再び此方側へ来てくれるとは好都合と思わざるを得ません。

まあ別に、復讐したくてウズウズしていた訳ではなく、さくつと仕事を終わらせて帰

るなら近い方が良いという人類共通の願いが主でして、襲撃された怨みとか「ルーンラ イター」が壊れた一因に報復したい気持ちなど、ほんの少しのみですよ。そんな私情はさて置き、念話でクロノさんを呼び出して作戦を確認します。

「> クロノさん、プランAの応用で良いんですね? <」

「> その通りだ。咄嗟の判断は任せる <」

「> ラジャーです <」

プランA。要するに、フェイトちゃんやクロノさんといった餌で『守護騎士』が釣れて、包囲できた場合の作戦です。

フェイトちゃんがシグナムさんを、アルフさんがザフィーラさんを、そして私がヴィータさんを相手する事になっており、相性的に撃破しやすいであろうヴィータさんを落としてから枚数差で優位に立つ。そんな感じの作戦でして、まだ見ぬ後方支援型のシヤマルさんという方の相手はクロノさんがするとの事。——しかし、今回はヴィータさんとザフィーラさんの二人しか居ないので、フェイトちゃんとクロノさんは増援対処要員として一時待機となります。

いやはや、なんと愚直で綱渡りな作戦でしょうか。

仮令^{たとえ}この現状が異例尽くしで、『守護騎士』が一般的な魔導師と比較にならないくらい強く、無茶だろうと主戦力に含める予定だった一般的な武装局員の人達を補助戦力に回せるだけマシだとしても、決してCOOLな作戦とは認め難く……。

けれど仕方が無いのです。これは管理局の自業自得でもありますが、広大な次元世界における治安維持を担っているので人材は常に払底し、優秀であれば保護観察処分のフェイトちゃんを更生活動がてら実行部隊に組み込んだり、現地協力者でしかない魔導師を主力に据える他無く、正直なところ数と質の暴力が出来ない組織なんて規模縮小&再編すべきなのでは？ はい、余計な思考はカット／カットですね。

「けっ……。あんだだけボコったのに、また戦場に出て来たのかよ？」

おっと。唐突にヴィータさんから舌戦を吹っ掛けられました。つまり今が前哨戦で、戦意十分という覚悟の表れなのかもしれません。そもそも、一度勝っている相手から降伏勧告されても鼻で笑うような気風が感じ取れるので、此処は素直に応じます。

「ええ。奮闘空しく、一対三で負けた恥を偲^{しの}んで参りました」

「あ？ なら今回は一対^サ一で潰してやつから、今の内に俳句でも考えとくんだな」

「……………ヴィータ。それを言うなら『辞世の句』だ」

「あんた、其処は聞き流してやりなよ……」

ザフィーラさんとアルフさんの強烈な『ツツコミ』により舌戦が中断されたものの、

半実体弾がハンマーで叩かれた事によって開戦のゴングが鳴りました。始まって早々、私とアルフさんは散開して距離を稼ぎます。流れ弾とか怖いですからね。当然の措置です。

「取り敢えず、最初は驚かそっか？」

「All right. Axels shooter : Barrage」
 惜しみなくカートリッジを6発消費。《Divine shooter》よりも貫徹力が強化された魔力弾を24発生成し、追尾して来る半実体弾を迎撃しつつヴィータさんへと思考誘導します。幾つも撃ち落とされ、防がれたとしてもカートリッジを消費して次弾を生成。暫く、行動観察がてらエンドレスの予定です。

尚、カートリッジの弾数にしましては近距離戦を捨てた代わりに得られたバレルマガジンによって装填数は驚異の65発、そして予備弾倉が19個なので総弾数は1300発。因みに予備フレームも3組ほど積んでいるので、撃ち過ぎによるフレーム破損が発生しても大丈夫だったりします。

強いて問題点を挙げるとすれば、過剰な火力ぐらいかと。うんうん。これが対人用で戦略兵器じゃないって宣うのなら、管理局が認める本物の戦略兵器とは何なんでしょうね？ 全く末恐ろしいですよ……。

さて。

並列思考は穏やかに。対して戦況は凄まじいのですが、思ったよりも苦戦しておりません。と言うのも、ヴィータさんが制限装置みたいな物を解除しているらしくて、高速回避機動での息切れとか魔力消費による疲労といった隙を一切出さないので。最初の何発かは近接炸裂設定で魔力ダメージを与えられましたけど、全身を覆うバリア系の防御魔法を展開されてからは嫌がらせ程度にしかなっていません。

なればこそ、強烈な魔力砲撃を。あの日に討ち勝てなかった僅かな後悔と、束の間心安寧に甘えていた幼稚性を吹き飛ばす、とても御機嫌な祝砲を。嗚呼、聖なるかな。

「ディバイン」

「―《buster .:Sanction》―」

4秒足らずの初期チャージを終えた後、「レイジングハートVC」の先端に展開された魔法陣からは《Divine buster》が光の奔流となって溢れ出し、断続的なスライド開閉によりカートリッジが絶えず消費されます。そして抽出された純粹魔力と私の保有魔力が交ざり合い、新たな光に成るのです。

途切れぬ照射。

通常ならば、直線状を突き進むだけの砲撃で敵をなぞる。それは距離が開く程に凶悪さを増し、数百メートル先の敵がどれだけ逃げてても手元で数センチ動かせば追い付けません。けれど、敵も然る者。堅固な防御魔法と乱数回避で耐えながら降下し、ビル陰へ

と飛び込みました。

流石に、封時結界の外側にあれども内在するビルを非殺傷設定の魔法で貫ける筈も無く、砲撃を中断して強化魔力弾による直撃狙いの追い込みと、天頂からの遠隔砲撃へシフトしようとしたところで巨大な魔力反応を感知。

「轟天爆碎！」

威勢の良い声と共にビルを飛び越え、姿を見せたヴィータさんの手には打撃部位が何十倍にも巨大化したハンマーが握られており、おまけに柄を伸ばしながら此方へと振り下ろして来ました。いやー、古代ベルカの技術力って凄いですね。あの質量がスカスカになりそうな体積で、如何やって破壊力を稼いでいるのか疑問を抱いてしまいます。

「ギガント・シユラークっ!!!」

「ー《Flash move》ー」

しかしバインドで拘束されおらず、見た目的にも必殺技じみた攻撃なんて態々受け止めたくはないので高速移動魔法を使って避けてしまったのですが……。時に、戦闘のプロフェッショナルである『守護騎士』が無意味な攻撃なぞ繰り出すでしょうか？ 答えは悩むまでもなくNOです。

慣性のままに舗装路へ叩き付けられたハンマーが解除され、大量の魔力残滓になったせいで姿どころか魔力反応すらもロストし、その間隙を突くように外部から飛んで来た

高魔力貫通弾が《強装結界》を破壊。その結果、戦力の合流を許してしまいました。「苦戦しているようだな、ヴィータ。此処からは私が変わろう」

緋色の騎士、シグナム。その傍らに居る翡翠の騎士は、恐らく「シャマル」。これで『守護騎士』が勢揃いした訳ですね。特に嬉しくは無いものの、強いて挙げるなら見えないうも一人を警戒するよりは気楽かなーと前向きに捉えております。

「邪魔すんなよシグナム。まだ負けた訳じゃねえ！」

「大局を見ろ。これは決闘ではなく狩りだ。勝ったところで価値は無い」

「……………それもそうだな。この勝負は預けるぞ、高町ナントカ」

「や、高町なのは」です」

「ふむ…………。少々締まらぬが、仕切り直しと行こう」

そして展開された《Gef・ngnis der Magie》、またの名を《封鎖領域》。魔導師の捕獲に特化したその檻は、先程まで《強装結界》の外側に居たフェイトちゃんやクロノさんだけでなく、結界の維持をしていた武装局員12名をも呑み込みました。おやおやおや、この流れは宜しくありません。「ただ供物と成れ、管理局よ。我等の悲願を果たさんが為に」

side：アルフ

「全く、あんたどれだけタフなんだい?! まるでターミオーターじゃないか!」

「あの様な我楽多ガラクダと、一緒にするなっ!!」

主人を思う気持ちで負けるつもりは無いけれど、『使い魔』になってから3年少々の私
が歴戦の戦闘経験者であるザフィーラを相手するのは分が悪い。初めからそれは覚悟
していたし、最新のデバイス&「負けなければ良い」という言質をリンディ提督から貰っ
ていたので何とか戦えてはいる。

正確には、「手加減されているだけ」なんだろうけどねえ……。

オート・プロテクション機能を始めたとした各種アシスト機能で補助されても、一打一
蹴の全てが重く速く、どれだけ攻撃しようと怯まない鋼のような肉体と精神と技量を備
えた相手と戦うなんて、高町姉妹を思い出して涙が浮かびそうになる。確かに強くなり
たいと御願ひしたけどさ……、人知を超えて武神へ至らんとするような凄まじい鍛錬や
組手をやるなんて想定外だったの。

「押し潰す!」

「— J a w o h l . —」

「痛つく……。この筋肉ゴリラ! 詐欺狼!」

「口よりも先に、手足を動かさせ小娘」

「その発言、そつちにも刺さっていると思うんだけど？」

「フツ……。貴様と違って、それだけ余裕が有る証左だ。問題は無い」

「なら、私の攻撃もノーガードで受けておくれよっ！」

「—《 Impact rush 》—」

ともあれ、そんな格上とも言える相手に対して時間稼ぎが出来たところで、戦況は悪化の一途を辿りつつある。そりゃそうだ。フェイト達は別として、私と武装局員が足を引っ張っているのだから。

ザフィーラは、私を相手する片手間に対象を貫いて拘束する攻性バインドや防御魔法で何度か支援しているし、シャマルという騎士が召喚した触手だらけの竜は強敵らしく、既に何人かの武装局員は戦闘不能。彼等を指揮しているクロノはシャマルを相手に梃子摺てこずっている様で、あれじゃ援護は困難だろう。

フェイトはヴィータと、“なのは”はシグナムと戦っていて忙しく、《封鎖領域》を破壊するにはAAA+ランク並みの高火力を叩き込まないといけないので、撤退も儘ままならず。そうこうしている内に、一人二人と武装局員が落とされては魔力蒐集でリンカーコアが侵蝕される。

どう仕様も無い。

少なくとも私に状況を変えるだけの戦力は無いのだから、仲間を信じて耐えるのみ。

フエイトでも、なのは、でも、クロノやリンディ提督でも良い。誰かが何とかしてくれる事を祈りつつ、この堅物野郎を引き付けるべく再び《口撃》を仕掛けるのだった。

第39話：新たなる辰星と極光なの【後編】

side:なのは

「なかなかやるではないかつ！ 高町なのは！」

「御褒めに預かり、恐悦至極です」

如何してこう……、私の敵になる人達は近接寄りなんでせうか？ まともに戦った魔

法使いはシグナムさんで4人目となりますけど、この偏向ぶりは将来に不安を覚えてしまいます。私はガンナーで、魔砲使いです。然らば、やはり一番心が躍るおどのは弾幕戦な訳でして、こんな無限に伸びそうな連結刃を振り回す相手よりかは、適度に撃ち合ってくれるフェイトちゃんの方が好感度は高いです。

まあそもそも、敵は敵なので楽しんでる暇はありませんよね。かと言って、サクッと勝てるような気軽な相手でもありませんが……。

「飛竜一閃!!」

「――《Distortion field》――」

「ほう……、この技を正面から逸らすとはな。それでこそ、倒し甲斐が有る」

「や、これは魔法が優秀なだけですので」

次元巡航船『アースラ』でも採用されている防御魔法《Distortions field》の応用でして、魔力消費量が凄まじい代わりに強力な歪曲場を発生させ、あらゆる物理・魔法攻撃を逸らせるらしいのですが誘導弾に対して使ってもUターンされるだけで打ち消せませんし、大体の攻撃は一方だけを防ぐウォール系の防御魔法やら回避や迎撃で何とかなりますから、正直それでは何ともならない魔力変換資質による炎熱効果付与十広域高速斬撃をしてくる方がヤバイと思います。

「抜かせ。此処まで戦える魔導師など、そうそう居らんよ。その実力は誇るべきだ」
「如何致しまして。ところで……、これって勝負だったりしますか？」

「さて、何の事やら？ 狩りとは何も、冷酷に仕留めることが全てではない」
「ソーデスネ。S O かもしれない」

彼等の目的は魔力蒐集ですから、蒐集済みの私は邪魔者でしかなく足止めが必要。だから狩る必要は無い……。なるほど、理に適った行動です。

「しかし、遊びと思われるのも心外ではある。……故に、奥の手を見せてやろう」

そう宣言するや否や、シグナムさんはカートリッジ・ロードして剣の握りと鞘を近付けると古代ベルカ式不思議機構が発動して融合し、鞘が剣へと変わって両頭片刃剣になりました。両頭両刃剣ならメーネという武器が地球にも有りますけど、それに似ていますね。剣が二倍。何故か剣身の長さも二倍。おまけに、連結刃となつて伸びたりする事

も想定すれば脅威も二倍。ならば私も幾つか、切り札を使わねばなりませんまい。

「《A. C. S》起動」

「All right. 《Advanced—Cross over—System》, ignition! —」

デバイス側に思考を読み取ってもらうのではなく、思考を共有する。そんな人機一体とも言えるシステムの起動と、余剰魔力の塊である羽と光輪からの供給量を増やしてみました。やはり前者の方は慣れませんね……。でもこの戦いで、会得したいと思いません。

（（

side:フエイト

怒りが有った。怨みが有った。〃なのは〃を墜とした挙句に苦しめた『守護騎士』の全てが憎かった。——でも、そんな余計な重みを背負ったままで戦える程、このプログラム共は弱くなかった。その現実もまた、苛立ちへと拍車を掛ける。

「おらつ、さつさと潰れろ!!」

「そつちこそ、直ぐにバラしてあげる!」

「—《Rake^ラten^{ケイ}hammer^テ—》—」

「—《Halberd crusher》—」

互いの攻撃部位であるヘッドを避けつつデバイスを振るい、その結果として柄と柄がぶつかって組み合う。行動を読まれているというよりも、近接戦ではよくある事だ。これが剣同士なら罅^{つぼせ}迫り合いをしている様なもの。そして此処は空中であるが故に、足場なんて関係無い。

わざと体勢を崩し、地上へ押し込みたくなるように誘導する。敵がそう意気込んだところで慣性制御魔法を併用し、ハルベルト形態の長柄でハンマーの柄を滑らせながら真下に投げ出してやった。

僅かな秒数と、距離を稼ぐ。

敵は、直ぐに前転する事で此方へと向きを変えたがもう遅い。速度が打ち消されたその瞬間を狙って、砲撃魔法を発動させる。

「撃ち抜け!!」

「—《Plasma smasher》—」

着弾は一瞬。魔力残滓が白煙となって拡散するも、油断せずに高度を上げる。直撃にせよ防がれたにせよ、高がAAA+ランクの魔導師で狩れるような相手なら、【闇の書】なんて第一級搜索指定遺失物として認定される筈がない。仮にも「なのは」を相手に戦えているような敵が、これしきの攻撃でくたばるなんて有り得ないのだ。

「おいおい、帽子が焼けちまつたじゃねーか……。てめー、死んで詫びろよ？」

「死ぬのは御前だ、不良品。狂い果てて爆散するが良い」

「―《《^{ティ}Tie^フroter^{ター} flie^フgen^ン》》―」

「―《《Gale^フform^フ》, set up. ―」

カートリッジ・ロード。敵の機動性が増して多少の変則機動が出来るようになったよ
うだが、それが如何した？ 慣性制御魔法で速度を維持しながら直角に上昇したり、バ
レルロールしながら背後を向いて射撃する。なのは。と比較するまでもない。恐れる
な……。速さだけなら、私の方が優位に立てる。

試製電磁カートリッジ最大出力。

身体強化完了。余剰演算領域確保。

【バルディッシュ】の形状をトライデントに更新。

《《Blast raid : Tempest》》を選択。

ネガトロン・カタパルト生成。

断続加速跳躍、開始。

それから先の攻防は、一方的なものだった。私が空中を跳ねるように加速しながら切

り付け、敵が防ぐ。何度も何度も切り込んで、防御魔法を破つてからは騎士甲冑を切り割り、そして薄っぺらい肌色のテクスチャーすらも傷付けていく。

ほら、やっぱり人じゃない。非殺傷設定でも簡単に傷付き、血が流れず、肉も無い。その身に詰まっているのは、魔力と古代ベルカ時代の神秘だけだ。壊してやる。御前のような、“なのは”を襲う不良品なんて解体して潰して焼き捨ててやる。壊れる、壊れる、壊れるっ！ この、**■■■■**がっ!!

「えっ……?」

「てめー、迷ったな? そーゆーのは命取りになるぜ?」

一瞬、思考が飛んだ隙に腕を掴まれてしまった。

「う……………、はな……せ……」

「蒐集開始」

「ぐっ……………ああっ……………!」

私は何を、戸惑ってしまったのだろうか……………? 思考が纏まらない。直前の事なのに思い出せない。それはきつと、この胸を貫く細腕のせいなのだろう。私のリンカーコアから魔力が吸い上げられ、どんどん弱まっていくのを感じ取れる。

ごめんね、“なのは”。

貴女は私を助けてくれたのに、私は貴女の助けになるどころかまた邪魔になってしま

うなんて……。だからせめてもの償いとして、此奴は道連れにするから……………。

「フオトン、……バースト」

「— OK, Boss. —」

「は？ 正気かよっ?!」

ほんとうに、ごめんなさい。

（（

side:なのは

優勢とは断言できなくとも、将棋のように一手一手と王手に向かって近付いている。シグナムを手負いにさえすれば、『守護騎士』は退いてくれる筈。……そう思っていました。如何やら悠長な考えだったようです。

フェイトちゃんの魔力反応が消失しました。続いて、動揺したアルフさんが視界内で落とされました。クロノさんは疲労困憊で、残っている武装局員はたった二人のみ。何時も遅い、間に合わない、そのくせ後悔する。またしても繰り返ししてしまう。信頼は甘えなんのでしょうか？ 余力を残して、不慮の事態に備えておく事は手抜きなんのでしょうか？ それとも戦況を読めない私が悪い……？

いいえ、敵が悪いのです。悪が卑劣なのです。敵さえ居なければ、誰も戦わず傷付く

ことはありません。だからこそ、今直ぐ消えて欲しいと願っております。

「『Sacred punisher』」

聖罰あれかし。「レイジングハート」が其の意思に沿うべく、即座に魔法を組み上げ発動しました。敵性存在5体を捕捉した後、対象の周囲だけに光の砲弾を全自動&無制限に天頂方面から降らし続ける。そんな殲滅魔法です。無論、魔力が尽きれば終わる筈です。けど、不思議なことに尽きる気がしません。恐らく意思の限り、若しくは敵を撃ち落とすまでは絶対に。

30秒経過、1分経過、2分経過。

デカイ標的だった召喚竜を消滅させ、味方の元へ行かないように敵の進路を誘導し、時折飛んで来る鉄球やら弓矢みたいな魔力弾を防いだり落したり等々。短い根競べの末、不利だと悟ったでしょう。徐々に遠ざかり、撤退して行きました。

「Flame purge. ……Refit complete.」

「御疲れ様、「レイジングハート」」

「Don't worry. My master.」

いや……、正確には見逃して貰ったのかもしれませんが。フェイトちゃんはヴィータさ

んに、アルフさんはザフィーラさんに落とされて戦力外でしたし、クロノさんは武装局員のカバーもしてて撃墜寸前でしたから、私の方に敵意が向いていなければクロノさんも魔力蒐集されていた可能性がありました。

ええ、はい。

戦っている側で魔力蒐集していたんですよ、【闇の書】が。あの本型デバイス、自律稼働して気絶中の武装局員とかアルフさんから魔力を吸い上げてて、フェイトちゃんも……如何なんでしょうか？ 戦闘中は分かりませんが、「レイジングハート」の映像記録を見る限り、蒐集し終わる前にフェイトちゃんの自爆で中断された様にも見えません。

因みにフェイトちゃん含む負傷者の皆様は、一足先に『アースラ』へ転送されました。《封鎖領域》さえ無ければ、そういった手厚いサポートをしてくれるんですけどねー。まあ、不思議なことに結界系は便利過ぎるので、色々難しいのかもしれないませぬ。ところで、そろそろ転送ポートって空きます……？

12月の寒空にポツンと浮かんでいるなんて、まるで物憂げなヒロインの如しですよ。こんな右目が疼きそうな事よりも、お見舞いとデブリーフィングと宿題をしたいのですが……。序ついでに、シャワーを浴びて夜食も追加で。それから、御兄ちゃんと御姉ちゃんにも質問をしなくては。

シグナムさんの剣筋、御兄ちゃん達が真似しただけとは思いますが、何となく似ていました。それはつまり何処かで見た事がある訳でして、御兄ちゃんの女性遍歴から察するに知り合いなのかなと憶測する次第。

まあ、もう半ば確信していますけどね。御兄ちゃんの事ですし。

「> 待たせて御免ね、なのは”ちゃん。転送ポート空いたよ！<」

「> 了解です。今、戻ります<」

エイミイさんからの通信を切り、転移魔法を発動。取り敢えず、今日は短時間で様々なことが有りましたから、答え合わせは明日のイベントに取って置きます。それよりも、フエイトちゃんの容態が気になるところ……。嗚呼、今更ながら不安になって参りました。早く会いに行きませう。

第40話：収束派生のジャンクシヨン

side:なのは

「御兄ちゃんに質問です。シグナムさんって、知り合いなの？」

「互いに刃を交わした仲だが……。若しや、今回の敵はそうだったりするののか？」

「イエス、ドンピシャ」

あの激戦から一夜明け、今朝になってから御兄ちゃんへ気掛かりだった質問をしてみました。やはり当たっていました。

剣を連結刃として伸ばす前の——所謂、通常形態で何度か切られ掛けた際に剣筋が似ているなど思っていたものの、よもやよもや。……まあ、今回の事件は「ジユエルシード」の時とは違い、御兄ちゃん達に手伝って貰うことは少なさそうだなーと情報共有を怠っていたので、判明しただけでも吉としませう。

「彼女と出会ったのは7月末頃、臨海公園でやっていたチャンバラ大会での事だ」

「ふむふむ」

「その時は浴衣で、後日に手合わせをした時はトレーニングウェアだった」

「という事は、つまり？」

「案外、海鳴市周辺に拠点があるかもしれないな」

普通なら、そこまで都合が良い事なんて重なりはしませんけど……。此処まで来ると有り得そうなのが怖いですね。

「ところで、如何して“なのは”はシグナムと戦う事になったんだ？」

「えーと……。成り行きだけでも、世界を守るために……。かな？」

【闇の書】が完成すれば、壊れた『防衛機能』が本格的に稼働してあらゆる脅威対象を排除し、惑星すらも魔力に変換して取り込んでしまふとかとか。因みに、その惑星に住まう生命体も例外ではありません。いやはや、使用者に依存しない自律性が高い人工物ってロマンの塊ですが、こういうSF的ありがたいがちな暴走とか考えなかつたのでしょうか？

壊れたにせよ、何者かの改悪にせよ、人手に負えないヤバイ物を作るのは控えて欲しいところです。……。いえ、だからこそ挑み甲斐があるのかもしれないですね。ギークでルナティックな、自制無き探求者にとっては。

「よく分からんが理解した。それと、シグナム以外にも敵は居るのか？ 画像や写真が有るなら、序いでいに探いしていおくいぞ？」

「じゃあ、メールで画像を送信するので宜しく御願います」

「うむ。微力を尽くそう」

そう言うと御兄ちゃんは、鍛錬で掻いた汗を流すべく風呂場へ去って行きました。尚、一日の大半を家業である『翠屋』の手伝いやら鍛錬に費やせる御兄ちゃんとは違い、義務教育が課せられている私はこれから学校です。

漫画やアニメの主人公ではありませんが、学業と魔法少女としてのアレコレを何とか両立していた「さくら」ちゃんや「どれみ」ちゃんは、御都合主義を除いても凄いなーと感じます。あれをリアルに、時として血塗れになったり苦痛を堪えてえんやこら。んー、私だけ難易度が高くないですか？

異世界召喚させられたのに救助対象がラスボスへと変貌したり、最終兵器に魔改造されて戦う運命を定められるパターンよりは良いんでしょうけど……。それでも、元一般人としては荷が重いと感じます。

「「なのは」ちゃん。これ、今日の弁当やで」

「有り難う、レンちゃん。ところで晶ちゃんは？」

「あの猿うなら、サッカーの朝練とかで今日は手伝っておらへんよ」

「合点です」

日々は過ぎ行く。されど平穩では非ず。しかし手掛かりは得ましたし、御兄ちゃんが動いてくれるのなら、案外早く見つかるかもしれない。ただ見つけて倒せたとこで、【闇の書】とか『管制人格』なる最後の騎士（？）に対してどの様に対処するのか、

まだ素案すら聞いてないのでしてー。

取り敢えず、エイミイさんに報告がてら尋ねてみなくては……。ええ、それが良いですとも。多分きつと。

（ ）

side：恭也

以前、「ジュエルシード」という危険物を巡る事件では助力する事が出来た。そもそも幼い「なのは」に戦って欲しくは無いが、これも不破の血に連なる宿命なのかもしれないな……。

妄想はさて置き、またしても事件に巻き込まれてしまった妹に対し、何か手伝えなかと悩んではいた。近距離戦の指南などではなく、事件解決を早められるような手伝いをしてほしいと願っていたものの、まさか知り合いが敵の一味とは思わなんだ。理由は如何あれ、優先すべきは家族の安全と幸福である。此処はさくつと見つけて、妹の日常回帰に貢献したいところだが……。さて、何処から探す？

先程まで管理局のエイミイさんと話し合った結果、サーチャーや魔導師の反応が察知されては不味いので、魔力を持たない局員達で海鳴市周辺を搜索するらしいが、あまりにも非効率的だ。かと言ってシグナムとは連絡先を交換しておらず、約束をした時以外

で見掛けた事が無いという点から自分や美由希、 “なのは” の行動圏内に被らない範囲を挙げたところでキリが無い。

一応、「闇の書」の所有者が人間という事で、誰かしらの護衛付きで行動している。利用者が多いデパートや商店街、若しくは公園やゲームセンター等を探せば見つかると思われるが、最終的には運任せになるだろう。

「そうだな……」

1 : 人通りの激しさなら、海鳴駅周辺

2 : たまには、病院へ行ってみる

3 : 普段行かない場所とさええば、やはり図書館

4 : 何となく隣町で探す

「……2にしておくか」

最後に病院を訪れ、整体を受けたのは『香港国際警防部隊』と訓練をした8月以来だ。更に、何処を探しても見つかる可能性が低いと言える現状なら、実益を兼ねつつ探した方が御得感はある。そういう訳で——

——— 実にあっさり、病院のエントランスホールで見つけてしまった。……奇遇だ。そして運命的でもある。相手はシャマルという見知らぬ敵で、驚いた事にレンとよく似た顔立ちの少女を車椅子に乗せて運んでいた。世の中、顔が似ている人物が2人や3人は居るらしいが、意外と居るものなんだな。身近な例で言えば、フィアッセとリンデイ提督がそうだった。

しかし発見したところで、見送るのが精々だ。

何せ、見つければ御の字程度で探していた為、無策かつ非武装。追跡しても良いが、魔法という未知の手段を持つ相手にぶっつけ本番で試したくはない。捕まれば拷問や洗脳、または交換条件を引き出すための捕虜として使われる可能性を考慮すれば、これ以上の欲を出さずとも成果は得ている。故にこそ、此処は素直に諦めるのが吉と言えよう。

そう判断を下し、待合室で待つこと10分。担当医であるフィリスが施術室へと戻つて来た。最近、任される仕事が増えたのだろうか？ 少しばかり疲労感が窺^{うかが}える。

「Hi、恭也。久し振りだね。今日は独りなの？」

「久し振りだな、フィリス。美由希は、大学の講義が有るから置いて来てしまった」

「それじゃ今日は、時間を掛けて念入りに調整しよっか♪」

誰なんだろうな、あの時に2番目の選択肢を選んだ奴は……。痛みには慣れていますが、骨や関節の歪みを直す激痛に関しては別枠だ。アレだけは何度やっても慣れそうにない。

「……御手柔らかに頼む」

施術後。美由希の予定を電話で聞き出し、スペシャル整体コースで予約してやったのは完全なる余談である。

くく

side:なのは

「例の件だが、病院で目撃したぞ」

「もつとkwsk」

「シヤマルらしき人物と、車椅子に乗った茶髪のレンみたいな女の子を見掛けた」

「……………御兄ちゃん、女性絡みだと何時も凄いな？」

「……………不思議な事に、男性絡みが少ないだけだと主張しておく」

学校から帰宅すると、居間で待ち構えていた御兄ちゃんから報告を受けましたが、先にエイミイさんの方から御兄ちゃんの成果を聞いているんですね。一応、本人からも

聞いた方が伝言ゲームのような齟齬そごは発生しませんけど。

「他に、何か手伝える事は有るか？」

「うーん……。アルフさんを鍛えるぐらい……。かな？」

手足を出しても有効打にならず、終始劣勢で落とされたのが悔しかったらしく、『変身魔法』による『大人フォーム』を極めるしかないと意気込んでおりました。如何やら、その魔法は等身を伸ばして大人になったり、逆に縮めて子供になったりと出来るように、普段はフェイトちゃんから供給される魔力を節約する為に小さくなっていたのだとか。

道理で、フェイトちゃんの保有魔力量が少ない訳ですよ。常に2割だか3割の魔力をアルフさん用に取っているのですから、バリアジャケットの防御力や射撃魔法をケチらないと直ぐに魔力が尽きてしまいます。けれども今は、カートリッジ・システムが有ります故……。色々に見直してみます。

尚、フェイトちゃん。本人でも覚えていないトラウマが発動した挙句、動きが鈍ったところをハートキャッチされたらしく、それを修正するために少々“御話し”を行いました。

と言つても、只の精神論ですよ？

『戦闘時に勝つ方法以外を考えない』とか、『誰かの笑顔を守るために戦うべし』とか、『何なら祈つてどうぞ』等々。因みに私が祈るのは、

戦場の女神とも言われる砲兵部隊や爆撃機部隊の擬神化存在です。またの名を火力信仰とも言います。

「それなら任せろ。御神の剣士でなくとも、《神速》を使えるぐらいには鍛えるつもりだ」

私はそれを聞いて、アルフさんの遠い将来を思いながら心の中で十字を切りました。肉体のリミッターを外しても壊れない身体を作り、剣林弾雨すらも潜り抜けるための動体視力と判断力を神経に焼き付ける。——其処までやって初めて使えるらしいので、道は果てしなく険しいと思われます。どうか、彼女に武運のあらんことを。

A f t e r t h a t .

宿題をきつちりと終わらせてから夕食や御風呂が済めば、自室にて日課となりつつある魔力操作を行います。平時なら気分でやったりやらなかつたりですけど、今は戦時ですからね。やりたいゲームとか、読みたい本が積もって行きますが仕方無し。

半日足らずで余剰魔力が再充填された羽と光輪を顕現させ、自分の内側へと埋没しつつも外側への干渉も開始します。理想は息をするかの如く、無意識下のコントロールです。前回の戦闘では、脳内分泌物の御蔭で何となく使えていたんですよ。ベルカ風に言

えば《ヴァイン・デス・リタートゥーエンス騎士殺しの風》、ミッド風に言えば《Anti Magic—link Field》の上位互換みたいな魔法を。

「レイジングハート」曰く、この未知なる魔法には一切関与していないとの事で、感覚を思い出しながら試行錯誤を重ねるしかありません。結構、魔法は科学的に解明・制御されているのかと思っていたんですけどねー。やはり神秘は神秘。奥が深いです。「囁きささや、祈り、詠唱、念じろ……」

桜吹雪に流星群。集めて早し、魔力流。巡り巡りて、天をも回めぐらさん——

）

side：クロノ

高町の姓を冠する人物は、何かしら恵まれているのだろうか？ そう思えてしまうくらいには色々と凄まじい。＼なのは＼の保有魔力量は言うまでもなく、魔力蒐集されて寝込んでいたフェイトとアルフに余剰魔力を流し込んで勤による《カマド炉心干渉》とやらで即退院させ、同じく衰弱なり疲弊していた武装局員24名も現場復帰させた。

尤も、現場と言っても『ミッドチルダ地上本部』での勤務なんだがな……。

昨日の戦闘では、召喚されたAA+ランク程度の竜に苦戦し、高ランク魔導師を含む多人数戦闘であることを差し引いても被撃墜数が多過ぎた。要するに彼等では、最早着

いて来れない領域なのだ。その為、少数精鋭へと方針が変更され、地上本部に頭を下げた派遣して貰った高ランク魔導師と引き換えに、半年ほど地上勤務を頑張つて頂くことになったのだった。

そもその話、管理局ですらAAAランク以上の魔導師なんて全体の5%ぐらいしか居らず、Aランクでも優秀と言われるのに全員が推定AAAランク以上で構成された『守護騎士』が可笑しいのである。

……可笑しいと言えば、〃なのは〃の兄にあたる恭也さんも同様だ。偶然、事件前にシグナムと知り合つて、今度はシャマルと「闇の書」の主であろう少女も搜索開始から1時間少々で見付けている。他にも、身体能力と歩法による瞬間移動や、師匠のリーゼロッテすら敵わないと感じてしまう程の近接戦闘能力も備えているなど、訳が分からない。い。

「クロノ執務官。貴殿は、現場へ出て何年目になる？」

「今年で3年目になります」

「なるほど……。宇宙の方も、人材不足が深刻なのだな……」

「耳が痛い話です」

「気にしなくて良い。困った時は御互い様だ」

そんな彼等に対して、地上本部から派遣された〃ゼスト・グランガイツ〃2等陸尉は

常識的で、叩き上げの空戦S＋ランクという事もあり親近感が抱ける。弛まず努力すれば、届くかもしれない。そう思わせてくれる頼もしさが、“なのは”やフェイトから感じられる才気によって崩れかけた自尊心を癒してくれた。

「それにしても、『駆除作戦』と被るとは運が悪い」

「仕方ありません。アレは、全力で当たらねば危険ですから」

ゼスト2尉が、地上のエースとして名が上がるように、宇宙こと次元航空部隊にもエースが何人かは居る。だが残念な事に今回は、とある次元世界で【蟲】の大群が出現したらしく出払っているとの事。てか、何なんだあの【蟲】は……。単独で次元航行して、重力圏内でも飛行可能、おまけに高出力粒子砲も撃てる攻撃的な大型生物とか直ちに絶滅して欲しい。ただ歌って回遊するだけの美しい【銀河クジラ】を見做え。

「だが、此方も重要だ。放っておけば、何時かはミッドチルダも食われかねん」

「同感です」

「……………本当に、時間稼ぎは2人だけで行うつもりなのか？」

「本命は『管制人格』が取り込まれた後ですから、多少厳しくても余力は残した方が宜しいかと」

「歯痒いな……。幾ら強くても、幼い現地協力者に負担を強いるとは……………」

「はい。なので今回限りで、終わらせたいと思います」

その為の戦術デバイスや、戦略魔導砲《アルカンシエル》《搭載艦も2隻用意した。1隻はリンデイ提督が乗艦する『アースラ』。もう1隻は、1年前の【闇の書】事件でも関わっていたグレアム提督が乗艦する同型艦『ケストレル』。そしてグレアム提督の使い魔であり、僕の師匠でもあるリーゼ姉妹も遺憾いかんながら付いて来た。

あとは……、決定打とは言えないがユーノも参加する予定だ。今の前線メンバーは攻撃面に特化しているので、彼には支援要員としての活躍が期待されている。一応、リンデイ提督も支援魔法を得意とするが、今回は多段階作戦を統制すべく前線メンバーには含まれていない。まあむしろ、【ジュエルシード】の際に前線で陣頭指揮を執っていた状況が異例なのだから、戦力として数えないのが基本である。

さて。

やるだけの準備はやれたと思う。惜しむらくは、恭也さんが見掛けたシヤマルや【闇の書】の主らしき少女を非魔法探索で再発見できなかった事ぐらいだが、【闇の書】が暴走状態に入れば何処だろうと探知できる。

其処から先は、【闇の書】が本格的に稼働するまで時間を稼ぎ、『管制人格』が取り込まれた後に出現する【アンストツッパブル・デイスラフター止まらぬ破壊機構】の体積を短期決戦で削り、凍結魔法による封

印が成功した場合は管理施設へ移送し、失敗したら《アルカンシエル》で消滅させる。出来るのなら、【闇の書】の主を保護したいものの……。これまでの主は例外なく取り込まれている為、恐らくそれは叶うまい。

ともあれ最善を尽くそう。それが、父さんへの弔いにも為るなだろうから。

第41話：薄氷の上より、水底を望む。

side：アリサ

“なのは”の交友範囲は深く狭い。それは2年間の付き合いで分かっていたし、私や“すずか”が他の子と仲良くなる事は有つても、“なのは”が学友の誰かと親しげに話す光景なんて見た事が無かつた。

だから、親戚にあたる“高町フェイト”なる転校生と仲が良いのは意外だったけど、これは喜ばしい変化である。……そう思いたいのには、「こいつは爪と牙を隠しているがライバルだ」等と直感が訴えており、フェイトへの敵愾心てきがしんが拭えずにいる。色味が少し違うだけで、私と同様の長い金髪。私には無い“なのは”との秘密の接点。そして何より、目と目だけで以心伝心しているのが解せぬ。

特に昼食時が顕著で、私や“すずか”が“なのは”と話している最中、相槌を打つべきではない箇所が無意識に首を揺らしたり傾げる動作が度々見られ、その時の目線が少しばかり“なのは”の方へと流れているのだ。“なのは”も、それに応じるかの様な動作をする事から通じてはいるらしい。

若しかして、テレパシー少女なのだろうか？

忍者も居れば、退魔師も居る浮世である為、超能力者が実在したところで不思議ではないけれども……。そんな不思議ちゃん、一体何処でエンカウントしたのやら。やはり、左手を怪我した頃なのかなと予想してみるが、其処まで至る経緯がさっぱり思い付かない。

てか、また最近休んでいたけどまさか……。ねえ？

よくある一期では敵で、二期になつて味方として強敵に協同対処するようなハリウッド的胸熱ロマンなんて、早々起り得ないからフィクションなのだ。それと誰よりも平穩や調和を愛する“なのは”に、陰謀だの邪悪への戦いに身を投じるような転機が有るなら、もう少し活発だったり強気な性格になつていそうなものだが、振れ幅こそあれ変化としての成長は見受けられない……。ようないやがする。

「そう言えば“なのは”、今年のクリスマスも御店を手伝うの？」

12月24日はクリスマスケーキの売れ時だ。そして“なのは”の御母さんは喫茶店『翠屋』の店長且つ、デザート作りを得意とする。要するに？忙期で、去年から“なのは”が手伝っている事情も有つて、クリスマスパーティーを共にしたのは一昨年のみである。

子供なのだから、別に働かなくても良いはずなのに何と親孝行な。それはそれとして、私達にも優しくして欲しい。

「そーしたいんだけどね〜……。今回は別件があるから、多分無理かと」

「りよーかい。フエイトは如何過ごすの？」

「……私も、別件があるから忙しいと思う」

「はいい？」

思わず、警視庁特命係の警部補みたいな声が出た。それはつまり、〃なのは〃とフエイトが共に別件をするために聖夜を過ごすという訳で、二人で秘密の共同作業を……？

「あ、ごめんね勿体振って。単なる雪中行進だよ？」

「ねえ、待つて。小3がやるべき内容ではないと思うんだけどツ!!」

アグレッシブにも程がある。思い直せ。リメンバー・八甲田山。——されど、説得はのらりくらりと躲かわされて昼休みが終わってしまった。きつと恐らく、天体観測をするための登山で保護者同伴だとは予想するけれども、大丈夫なのだろうか？ 平穩無事に、五体満足での帰還を祈るばかりである。

くく

side: すすか

親友は一人だけとは決まっていなしい、その中で一番は移ろうモノ。それは当然で仕方が無いことだ。……そう割り切り切りたいのに、心が苦しい。

趣味の合う友達ができた。

私よりも、可哀想で寂しい境遇の子。

物怖じしない良い子だと思う。

頼ってくれて、とても嬉しく感じる。

私だけを見てくれる。

彼女が、私の親友になってくれたら喜ばしい。

見事なまでに、とても不純である。これじやまるで、捨て猫を愛するかの様ではないか。あの子は、“はやて”ちゃんは庇護されるほど弱々しい存在ではないにも拘らず、何かしてあげたいと思ってしまう。

この感情は多分、普段から何かをして貰っている側だからこそその反動なのかな……？
家ではメイドのフアリンが色々と手伝ってくれるし、学校では“なのは”ちゃんやアリサちゃんが主導して引っ張ってくれる。なら、本人へ恩返しすれば良いのだけれど、渡した分以上にまた貰っているように感じて積もるばかりだった。

そんな時に出会ったのが、車椅子に乗った“はやて”ちゃんである。

度々利用している市立図書館で見掛けて、高所の本が取れなかった所を見かねて手助

けたのがファースト・コンタクト。正確には、話しかける切っ掛けとして「これ幸い」と思いながら近寄り、目的を果たしたとも言える。過程はともかく、結果的には打算的な行動。けど、叶わぬ願いよりもずっと良い。少しばかりの後ろめたさは、時が経てばすっかりと飲み干せてしまう。

書物によれば、背徳感とはそういうモノ……らしい。

然しながら、想定外の変化が1つだけ有った。同好の士という関係性は非常に心地好く、揺らいでしまったのだ。別に「なのは」ちゃんは気にしないだろうし、「なのは」ちゃんの方が先にフェイトちゃんという新しい子と仲良くしている為、交友範囲を広げたところで負い目を感じる必要はない。

……ちよつと、違うかな？

この感情を肯定したい訳ではなかった。目を逸らしているだけの、もつと単純な事。——例えば三人組なら、二人が話している時でも交互に待てる。でも四人なら、何だかんだで二人ずつに分かれてしまう。ベンチに座る時だって、端同士が話し合うのも難しい。四角形のありふれたテーブル席なら、対角線上だと遠過ぎる。

貴女が居なければ、「なのは」ちゃんの隣はアリサちゃんと私だけで平穩だったのに。「はやて」ちゃんとの交友が、逃避的妥協なのではと悩みもしなかった筈なのに……。

嗚呼、悪魔が囁る。私達が想い合つた3年間に割り込んできた貴女は、一体何を為したのか？ あんなに甘えて許されて、羨ましくも恨めしい。しかし邪険な対応をする程、幼稚ではありません。それにフェイトちゃんも、私の友達になつてくれる可能性が有るのだから、良い所を探した方が有意義な気がします。

「あの、フェイトちゃん。猫ちゃんは……好き？」

「……好きですけど、悲しくなるので見たくないです」

「そうなんだ……。ごめんね……」

「でも、ウルフドッグなら飼っています」

「それって珍しい犬種じゃないの！ あんた写真持つてる!？」

唐突に、愛犬家のアリサちゃんから横槍が入り、射角45度でシリアスさんは吹き飛びました。錐揉み回転、スピンスピンスピン。あれは致命傷ですね。因果の交差路でまた会いましょう。

ふう……………。

少し冷静になれました。よくよく考えてみれば、友達グループなんて4人や5人以上も珍しくないですし、これぐらいは我慢して慣れるべきなのでしょう。何せ、このグ

ループは“なのは”ちゃんが中心なんですから、“なのは”ちゃんが望むのならそうでなくては。それに、一番という発想が間違っているのです。“なのは”ちゃんは特別。“はやて”ちゃんも特別。これらの特別は量子力学的に両立し得るため、悩む必要なんてありません。

勿論、アリサちゃんも特別ですよ? 『腐れ縁で、生活水準が近い理解者』としてですけれども、特別に特別となっております。だってアリサちゃんは犬派で、本来ならば猫派の私とは相容れぬ関係故に、特別な特別という訳です。

く

side: はやて

「何やこれ? ラブコメ染みた波動……でええんやろか?」

冬の寒気による錯覚か、それとも魔法に馴染んできた影響なのか。謎の電波みたいな物を受信してもうたけど、未だに念話すら使えへん身としては判断しかねますNA。そんな事より、明後日はクリスマス・イヴ。うちの子達にとつては初めての冬やから、献立は豪華にしたいところ。

ケーキは注文した。丸焼きハーブチキンも、3羽分を調理する体力&時間が無いので泣く泣く注文した。むむむ……。鍋は最近やったので除外するとして、シチューだと簡

単過ぎる。宜しい、ほんならポットパイや。そんでバゲットサンドと、何となく飲みたいでカボチャスープも追加やな。あとは、サラダの盛り合わせとかフライドポテトも添えるさかいに、多分腹は満ちる筈。

尤も、一緒に食べられるかは未知数やけども……。

あれはよく冷える日の夕刻。鍋パしとうなつて準備したんよ。具材を切るだけじゃ手抜き過ぎやから、水と昆布と醤油と味噌だの愛情だのをブレンドしたスープも作ったのに、シグナム達の帰りが自棄に遅い。せやから携帯電話を持つとるシャマルに電話を掛けたのに、圏外or電源切れを告げる自動音声流れるのみで音信不通。「何が、鍋パーティーじゃあい！」とまでは行かずとも「すずかちゃんに愚痴電しとつたら御屋敷に招いてくれて、何だかんだで楽しく温かい一時やったなあ……。がつ、それはそれ。別に家族だろうと隠し事や自由行動は構わへんけど、首を長くくくくして待つとる身にもなつて欲しい。拗らせたら落ちるで？ うちの心が暗黒面に。」

「あー、そや。【闇の書】はん、残りどんくらいになつとるん？」

魔導書なのに、ちよくちよく転移しては帰つて来る奇行が気になつて管理者権限(仮)で各種ファイルだの行動履歴をちよいちよい確認しとつたら、気付いてしもうたんよ。

空白だった666頁が埋まりつつある事に。それはつまり、「やらんでええよ」という要望を無視してまでせなかん事情がある訳で、その事情については心当たりがあった。

8月中旬頃、心筋梗塞でもないのに全身が軋むような激痛で倒れた。——可笑しな話やろ？ 足の神経以外は健康的だし、持病もあらへんのに。只、あれ以降に激痛や体調不良といった異常は皆無やった為、恐らくあの後からシグナム達が魔力蒐集とやらで頁を埋めてくれた御蔭だろうと推測している。

そして今日も確認してみれば、新たに7頁分の白紙が埋まっていた。残りは36頁やけど、主を苦しめる仕様または不具合がある魔導書が完成してしもうたら、さて如何なる事やら……。おお、怖や怖や。

「直せる物なら、直したいんやけどね……」

どれだけ調べても、ヘルプ機能を使うても、最終的に（仮）が取れへんと無理っぽいという結論に行き詰まる。これを作った人達は、飛行機を飛ばしながら電子機器の調整をするような離れ業とか出来たんやろか？ どちらにせよ、ユーザーに優しくない辺り開発者側の怠慢と傲慢さが透けて見える。

「うちの閲覧履歴を削除。何時も通り、他言無用で宜しゅうな」

【闇の書】が上下に首肯するような動作をして、テーブルの上へと鎮座する。正直、異世界の技術結晶体にパソコン的な指示が通じるかは謎やけど、反応からして大丈夫……

と思いたい。

取り敢えず、80頁くらい増えるような大物狩りが無ければクリスマスは普通にやれそうやね。その後はまあ、今生きているのだからってポーナスタイムみたいな物やから、管理者になろうと駄目なら駄目で諦めは着く。最悪の場合、絶命しても構わないとすら考えている。勿論、シグナム達が家族になつてくれはったのは嬉しいけれども、やっぱそんな中に両親が居らんのは寂しいんよ。

いやでも……、友達に「すずか」ちゃん居るし、続編が出てない小説も有るしで、あと3年くらいは必要やろか？ 死ぬにはちと惜しい気がするものの、兎にも角にも【闇の書】が完成せな目途も立たん。

「まっ、Dデイ次第やね」

春は遠く、冬は深まる。一寸先すらも見通せぬ闇夜を前に、何となくほろ苦いカフエモ力が恋しくなつてしまった。

第42話：禍福は糾（あざな）える縄の如し

side：シグナム

夜空を彩る天体は皓々こうそうと輝き、カラフルに電飾された街並みもまた煌びやかだ。集合場所である高層ビルの屋上から見渡せる景色は、疑似人格プログラムによる瞞まやしだとしても美しいと感じられるが、ここ一ヶ月近くも同じような光景が続けば日常風景になる。——されど、これが見納めかもしれないと思えば不思議なモノで、感慨深いと錯覚してしまう。

12月24日。

我々と主「はやて」が住まう日本国において、今日は異国由来のクリスマス・イヴなる祝祭日であり、我等『ヴォルケンリッター守護騎士』にとっては決行日でもあった。

「早いなヴィータ。主は、もう御休みになられたのか？」

ベッド数の都合上、という建前により主「はやて」の抱き枕にされているヴィータが予想よりも早く合流してきた。基本的に、就寝前の主「はやて」は気分によって読書を

したり、ヴィータと会話したりなど寝付くまで時間が掛かったりするのだが……。

「おうよ。まっ、何時も以上にはしゃいでたし、その分だけ疲れたんだろ」

「ふむ……。挨拶をし損ねたのが悔やまれるな……」

「別にこれが最後って訳でもねーし、気にすんなよ。どーせ怒られるなら後が良い」

「確かに」

「そうだな」

「ですね。終わってから、皆で叱られましょうか」

【闇の書】の完成。——それ自体は、20日にやり合った大規模戦闘の翌日にでも実行するのは可能だったが、主はクリスマス・パーティーという催し物を熱望しており、管理局の動向や【闇の書】の暴走条件を考慮しても余裕があると判断し、日時をずらした。主曰く、年末年始には年越し蕎麦を食べたり、初日の出を見たりと暫くイベントが続くらしいものの、流石に其処まで延ばせるかは未知数だ。故にこそ、今日この時なのである。

『管制人格』。我等を還元した後、主への説明と護衛を頼む」

「——ああ、任された——」

『管制人格』曰く、【闇の書】の防衛機能が壊れているとの事。修復するには【闇の書】を完成させ、主“はやて”が真の主として認められる必要がある。【闇の書】を完成させ

るには、魔力蒐集で666頁を埋めなくてはならぬ。それを短期間で確実に成功させる為には、我等『守護騎士』の魔力還元による最後の一押しが望ましい。

そういつた説明と助言に基き、我等は魔力還元により大願を成就させ、真の主となつた“はやて”の元で再構築されるのだ。唯一の懸念は成功率だが、管理局に頼つたところで封印されるのがオチだろう。それならばまだ、此方に賭けた方が信頼できる。

「……………おい、『管制人格』」

「― 何だ？ 鉄槌の騎士 ―」

「ちゃんと、“はやて”を守れよ？」

「― 全力全開で、事に当たると約束しよう ―」

その言葉を最後に魔法が発動し、魔力で構成された我々の体躯や記録すらも【闇の書】へと還元されて行く。これで良い。これが最善だ。そう願ひ、そう信じて、

私は、

私達は……、

（（

side:なのは

12月24日。一年の中でも今日この日は、クリスマスケーキの販売を手伝ってへとへとなる日なんです。今回は事件対応中の為に御休みしたので残念ながら元気だったりします。いやはや、代理で入ってくれた那美さんへの恩返しは手厚くせねば……。

尚、待機していた甲斐が有ってか、時刻2217にホット・スクランブルが掛かりました。詰まるところ、緊急出動というやつですね。大型魔力反応を感じつつ海鳴市外縁付近の上空へ現地集合しますと、初対面ではありますが映像記録等で見慣れた『管制人格』さんが其処で待っていました。

特徴的な白銀の長髪、2対4枚の黒翼、左腕に装備されている対人用バイブルガン銃射砲。

この状態という事は、既に『守護騎士』や主すらも取り込まれたのでしよう。只々、全ての潜在的脅威を駆逐し、焦土と為った惑星を飲み干す暴走体の第一形態らしいのです。が不思議と静かです。これは若しかして、嵐の前の予兆みたいなモノなんでせうか？

「管理局に要請する。どうか、この躯体を破壊して欲しい」

「> ……それは一体、如何いう心積もりだ？ <」

前線指揮官であるクロノさんが空間モニター越しに尋ねると、『管制人格』さんは自分の身体に封印魔法を重ねながら淡々と答えました。

「我等にとつても、狂った自動防衛運用システムは切除したい対象だ。しかしそれには我が主の尽力と、そちらの協力が必要になる。また準備が整うまで、私はあらゆる脅威

の排除命令を拒めない為、あと1分も待たずに行動へと移すだろう」

「なるほど……。信用するかはさて置き、過去の状況と異なる事は理解した。ステラ1、ステラ2、交戦準備を」

「何時でもやれる」

「上に同じく」

グランガイツさんが槍型のアームドデバイスを構え、私もそれに倣って『管制人格』さんへと狙いを付けます。因みにグランガイツさんがステラ1で、私はステラ2です。戦闘中に「グランガイツ2尉っ！」と呼ぶのは時間が掛かりますからね？ 仕方無し。……まあ、私の場合は実名で呼んだ方がコールサインは短いのですが、その辺は御愛嬌。

「気を付けろ、管理局の魔導師よ。これから放つ魔法は、全て殺傷設定になっている」
「あつ、慣れてますから御構いなく」

その遣り取りを最後に【闇の書】が弾かれたように開き、禍々しい暗黒の魔力光が迸りました。先手必勝で魔砲をブチ込んでも良かったとは思うものの絶対防がれるでしょうし、魔力残滓による粉塵で見えなくなる方が怖いので先手は譲りません。

「走れ、我が尖兵」

「—《Blu^{ブル}ti^{ティ}ger^{ガー} Dol^{ドル}ch^ヒ》—」

弾幕と形容すべき密度で配置しては、高速射出される真紅の短剣。少しばかり懐かし

い気持ちに浸れるも、下手すれば死ぬるので用心せねば。何せ此処は、PCゲームの中じゃないのですから残機なんて物は有りません。

「海上へ誘導する。援護を」

「了解、流れ弾に注意されたし」

「案ずるな。もし当てたら、教導隊の特別コースにぶち込むだけだ」

「わあー、それは楽しみです。穴が増えないように祈っております」

念話で軽口の応酬をし、弾幕には弾幕で応戦しながら引き撃ちをします。因みに、アームドデバイスを使っているグランガイツさんですが、『守護騎士』みたいな近接戦闘ごりごりの古代ベルカ式ではなく、近代ベルカ式という中距離戦も考慮された魔導を修めているとの事で、普通に魔力斬撃を飛ばしたり、シザーズ機動で交差する際に切り付けるなど、加速タイミングが読み難いフェイトちゃんよりも合わせ易かったのは意外でした。これなら、気兼ねなく『Divine buster』を差し込めますね。

「『Divine buster』」

はい。普通に一瞬だけ防御魔法で耐えて、その間に射線から逃げられました。バインドで拘束しまくるか、何時かみたく連続照射でなぞらないと直撃は無理っぽい気がします。

「……悪くない。今後も、その調子で頼む」

「必要なら、もう二段階ぐらいは頑張れますよ？」

「その余力は残しておけ。前段作戦での無茶は、俺が引き受ける」

『管制人格』が表に出ている第一形態は、主にグランガイツさんが相手して時間稼ぎor撃破を。そして、不定形で強力な第二形態に移行したら総攻撃によって消耗させ、可能であればクロノさんが担う戦術デバイスでの封印処置を試み、駄目そうなら戦略魔導砲《アルカンシエル》で殲滅する。

事前の打ち合わせでは、そんな流れでしたけど……。さて、如何なる事やら？ 現場は忙しいので、その辺の判断は「闇の書」の情報収集をしていたらしいユーノさんや、司令官たるリンディ提督に委ねたいと思います。

（ ）

side：フエイト

仕方無い、が悔しくて恨めしかった。相性的には『守護騎士』の中でも良い方と思われるヴィータと戦闘しても最終的には落とされ、その結果から戦力不足であるとリンディ提督が判断を下したのだろう。

如何なる手練手管を用いたのか、宇宙こと次元航空部隊とはそれなりに不仲であるはずのミッドチルダ地上本部から派遣されて来たグランガイツ2尉は、殲滅戦と遠距離攻

撃以外の項目に関して私の全てを上回っているらしく、「学べる所も多いだろう」とクロノが珍しく称賛していた。事実、彼の槍働きは私よりもずっと堅実的で、頼もしいと感じさせてくれる。

身体能力が足りない。技量が足りない。経験が足りない。

確固たる意志も、熱意も無い。

依るべき過去と自信が、あまりにも不足している。

それをまざまざと見せ付けられて、己の弱さが恨めしい。他の誰よりも、*“*なのは隣の立ちたいと願っているのに、職務だからと本作戦へ従事するだけのグランガイツ2尉に劣るとは歯痒く思う。……強くなりたい。何時か先の未来ではなく、今この瞬間にでも化けてしまいたかった。

「焼き尽くせ！」

「――《Fire Feuer》――」

気炎と共に放たれたその焰が『管制人格』にへばり付き、継続的な魔力ダメージを与える。普通なら、痛みで対処が遅れてしまいそうなものだが痛覚は無いらしく、僅か数秒で全身から魔力放出をして無効化し、その余波で大気が荒れ狂う。けれども、グラン

ガイツ2尉と“なのは”は怯むことなく攻め続けた。より速く、より苛烈に。戦いながら相互理解を深め合い、徐々に磨き上げられていく連携は、大技の溜めを封殺する。

しかし、“なのは”達が優勢になりつつあるとは言い難く、これはむしろ膠着状態とも言えた。何度も《Divine buster》が直撃しようと、魔力斬撃で防御フィールドを徹して肢体を傷付けようとも、『管制人格』は落とせない……。墜ちないのだ。

不死身にして無限の魔力。

そう恐れてしまいたくなる程に、底無しだった。保有魔力量が桁外れな魔砲使いである“なのは”や、クロノが携える切り札こと最新鋭の戦術デバイス、復活してしまいかもしれないが問題を先送りに出来る戦略魔導砲《アルカンシエル》《搭載艦を2隻用意したところで、勝てるのかと。

……

……

……

でも結局のところ、幾ら逡巡^{しゆんじゆん}しても答えは回帰する。

こんな私を養子にして身元保証人になってくれたリンディ提督に、義兄になってくれたクロノ。そして私を知る限り、最強の魔導師で最高の親友でもある「なのは」がまだ諦めていないのだから、怖くても、弱くても、協力したいと心は叫んでいる！ ならば、及び腰の理性を奮い立たせて臨むしかなかった。

私の役目は、後段作戦において攻撃目標の撃滅または弱体化を図ることだ。最初から最後まで主力として戦い抜く「なのは」と比べて、なんと気楽な御手伝いだろうか。せめてそれぐらいは親友らしく、成し遂げてあげたい。

「大丈夫……。『なのは』の為、皆の為に。私は雷神になるんだ……！」

「――《Gl・hen drive》, set up――」

音を置き去り、グリューエン光と熱を以って切り開く破壊の化身。

やがて至るであろう、私の通過点の1つ。

曰く、最速最強。

けれどリニスから教えて貰ったこの魔法は、まともに使えた試しが無かった。魔力流を作って引き込むまでは良い。だが、霧散しないように纏いつつ好きなかだけ過剰出力をコントロールするなど、子供の私では不可能だと思いついていた。押さえられない。直ぐに暴発する。私がまだ小さくて弱いから――

「嵐と共に、疾く翔けよ。閃光の担い手。赤熱せし武威。宵闇にて千条幾重、軌跡を描

く

理想を紡ぐ。祈りを籠める。諳んじるだけの呪文や、
 魔力運用を安定させるための呪文でもなく、これは希望との一体化。叶え、適え、敵え
 ……。何処までも何処までも、願うままに変わり行け。

残すべきは、心だけで良い。

第43話：未来（あす）への飛翔

side：リンディ

巨大魔力反応を検知し、第一種戦闘配置を命じて早5分が経過した。現地観測情報から【闇の書】が暴走状態へと移行しており、現在その第一形態である『管制人格』との戦闘を見守っているけれども、ゼスト2尉と「なのは」さんの二人掛かりでも辛うじて互角といったところだろうか。

前回はまともに戦わず、時間経過で第二形態へ移行する瞬間に特殊封印魔法を叩き込んで封印したので実感する事は無かったが、やはりこの状態でもかなり手強い。滅びた世界から回収された映像資料で、その片鱗は見て取れても正しく恐れる事は出来なかった。……そもそも、第一形態との戦闘は必要最小限の予定だったのに、早くも変更せざるを得ない。

思えば11年振りの、2回目の対峙。

あの時と違うのは殲滅戦である事と、夫のクライドが居ない事。そして息子のクロノが出撃している事だろうか。無論、エイミイを始めとした船員も総替わりしている。何よりも、『管制人格』の方から交渉して来るなどあまりにも想定外だった。

「ランデイ、グレアム提督に通信を」
「了解しました」

そしてグレアム提督は、あの日と変わらず……いや、あの日を悔いているからこそ同様に協力を申し出てくれた。数ヶ月前に全改修が終わった次元巡航船『ケストレル』に乗艦し、私ですら見知らぬ長距離狙撃用魔導砲《ランドグリーズ》《ユニットの砲身を真下にある地球へと向けて静止軌道を航行している。

因みに、私が乗艦する『アースラ』は戦術魔導砲《アルカンシエル》《ユニットのみを搭載している為、静止軌道上からの精密支援砲撃は行えない。そういった手札を増やす意味でも、グレアム提督の尽力は有り難かった。

この他にも、クロノに託した戦術デバイス『デュランダル』。これも同じく、グレアム提督が私費を投じて完成させたと聞き及んでいる。ゼスト2尉の派遣に関する調整だっただろう。彼の上司であり、武闘派と噂される『レジアス・ゲイズ』1等陸佐と直接交渉して領かせたとは、如何なる話術を用いたのか……。だからこそ、この質問をするのは躊躇ためらってしまおう。

「> ……顔が強張こわばっておるぞ、リンデイ提督 <

「> グレアム提督こそ、何か複雑な感情を抱いてらっしゃるようで <

「> 任務に私情は挟まんよ。それで……、何か用件でも? <

「> ちよつとした確認です。その《ランドグリーズ》という新型ユニット、事前資料では分かりませんが、質量兵器に酷似した砲身を未知の魔法式で構築するのを目視及び記録しました。直ちに、詳細データの開示を求めます <

船体の側面に2基ずつ配備された砲身——古代ベルカ人が用いた馬上槍のようにも見えるソレは、展開前まで金属コンテナと思しき形状をしていたのに、まるで組み直すかのように砲身へと再構築された。ミッドチルダ式や、古代または近代ベルカ式でも、艦載砲サイズの物体を此処まで変形させる魔法技術なんて見た事がない。つまり、合法的な装備であるかすらも疑わしかった。

「> 心配せずとも違法ではない。よくある魔法技術検証用試作機の1つで、実戦データの収集を兼ねて持ち出している。威力的にも、あの《アルカンシエル》を前にすれば霞む程度だ <

「> ……規制審査に通していない物を、管理外世界とはいえ人が住む惑星で試射すると? <

「> かと言って、大気圏に降下して支援砲撃をするよりはマシだろう? リンディ提督、【闇の書】は滅ぼさねばならん。しかし、部下や仲間達を危険に晒す訳にも行かん。ならばこれしきの汚名や批判、甘んじて受け入れよう <

必要だと判断したから準備した。……なかなか、嫌らしい真つ当な理由である。臨時

会議で議題に取り上げたところで、第一級搜索指定ロストログア【闇の書】を相手に少数精鋭で挑まねばならず、況してやミッドチルダから遙か彼方にある地球での出来事だ。どれだけ処罰が重くとも、精々「訓戒」止まり。

其処まで予想し、性能を考慮した上で完成間近の《ランドグリーズ》《ユニットを引つ張り出して来るとは何と老獪な。最早、ある種の狂気を感じる。

けれどその根底に有るのは、研ぎ澄まされた使命感だ。憎悪と復讐心で焼成された、私が宿すべきだった物だ。かつて幼かったクロノの育児や、提督という多忙な仕事へ逃げた私とは違い、グレアム提督は【闇の書】ごとく《アルカンシエル》で蒸発させたクライドに対して今も悔いている。——嗚呼、あまりにも熱量が違う。だからこそ私は、謝意を表する代わりに折れざるを得ないのだ。

「> 射撃による人的被害が生じた場合、『ケストレル』の指揮権を剥奪します。宜しいですね? <」

「> 同意しよう。それぐらいの覚悟は出来ている <」

（ ）

side : はやて

楽しい楽しいクリスマス・イヴを過ごし、気持ちよう眠りに就いて、覚醒したかと思

えば異次元空間&囚われの姫&恐らく最終決戦とか、何の冗談やろなあ……。寝起きドツキリの類にしては、あまりにも悪辣すぎて神経が苛立つ。

涙の海は干上がり、追憶すら色褪せるほどに擦り切れて。

こんな運命にキレるだけの強さが在れば、こうは成らなかつたのだろうか？

家族ごっこに拘泥する余り、深入りしなかつたツケがこれなのだろうか？

シグナムやシャマルを姉のように頼り、ヴィータを実妹の如く可愛がり、ザフィーラを存分にもふり、穏やかで楽しい家庭を築く。たつたそれだけの、他愛のない日常を望むことすらも「駄目なのだ」とケチ付けられてしもうたら、彼のぷりちー聖人な「はやて」ちゃんできえ覚悟完了の否やも無し。糞みてえな試練しか与えない天使共に対して、その腐れ頭に十字架を突き立てて悪魔と一緒に笑ってやりますわ。

「なあなあなあ、『管制人格』はん。この際、隠れてこそソコソやつとつたことは横に置いておて、こつから脱出して大団円を迎えるには如何すればえーかな？」

『管制人格』。【闇の書】と、主の補助機能にして代行者。昔の主によって変なシステムを後付けされたせいで深刻な不具合が生じているのに黙っていた挙句、記録を参照できないようにした無垢な騎士達に嘘を教えて扇動した。——要するに、事態を複雑化させて悪化させた元凶の1つである。かと言って、端折られた説明を聞く分には善意の塊だったので恨み難い。

これまで何十年も、解決の糸口を掴めなかった？ ほうほう。

下手に希望を持たせて、絶望させたくはない？ なるほど。

全ての罪科つみとがは、私一人が背負う？ ほーん、健気やね。

最終的に、現状へ誘導するのが一番だと確信した？ へー、水臭いやつちやな。

当事者達を関与させず、華麗なウルトラC難度の決め技して満点着地を狙える程度のも最悪なら、私は朝までぐっすりやったるうに……。好い加減、一人では限界がある事を認知してどうぞとは思う。てか、只の怪しい本状態を含めたら9年間も付き合いがあるんやから、此処で遠慮されても困るっちゅーねん。

「初めに、主〴〵はやて〴〵の権限で【闇の書】の核たる『永遠結晶エグザミア』との接続を解除し、主〴〵はやて〴〵のリンカーコアと私を接続します。この接続は物理的なモノではなく、オンラインで繋ぐような処置だと認識して下さい。その際、私の外殻たる躯体は自動防衛運用システム『ナハトヴァール』に侵蝕されているので———」

「ごめん。もうちょい簡潔な説明で御願います……」

「外に出れたら騎士を再召喚して、暴力で全てを終わらせる予定です」

「よっしや、任された！」

何とかボールを「ちちんぷいぷい」でやつつければ、悲しみの連鎖を断ち切れる。それさえ分かれば、俄然と未知への苦手意識も薄れていった。

「……我が主。事を進める前に、1つだけ御願いが有ります」

「そう改めてこられると身構えてしまうんやけど……。で、何なん？」

「私に、名を御与え下さい。それで契約は完了致します」

「せやなあ……………」

【闇の書】は外側の容器物である本の方の名前やし、中身のAIみたいな子には別の名前が必要になるのは当たり前の事で、銀のロングストレートに理想的な戦乙女のよーな別嬪さんに「闇子ちゃん」とか安直な名前を授けてしもーたら、彼岸から助走を付けたおかんにド突かれかねないので此処は慎重に……。

「……輪廻転生のリインカーネーションに、『前へ』っていう意味があるフォース^{f o r t h}を混ぜて「リインフォース」。生まれ変わって前へ進む。そんな感じの名前で如何やる？」

「有り難う御座います。再誕の比翼「リインフォース」。しかと胸に刻みました」

そんなけつたいな称号、授けた覚えが無いんやけどどどどどどお！ まっ、そういう国と時代に創られたそういう子なんやろね……。ええ仕事するやん開発者。その熱意を安全性にも注いでくれはつたら、こないな怒りを抱かずに清楚で居れたのに。あーあ、明るく楽しい再↑家族計画が台無しやわ。

side : なのは

戦闘開始から約10分程でしょうか。それなりに弾幕や砲撃をぶつけ合い、グランガイツさんが切ったり蹴ったり蹴られ、突き突かれ殴られておりますが優勢に傾くことは無く、辛うじて膠着状態が続いていました。

「そっ……」

「――《 Divine buster : Peril point 》――」

通常よりも2倍程――約8秒の時間を掛けて、魔力が結晶化する寸前までチャージした高圧縮魔力砲を照射。光が迸り、瞬時に着弾を確認。その後は騎士甲冑への徹甲作用だの、リンカーコアへの侵蝕負荷で良い感じにダメージが入っていると思うのですが、片っ端から修復されて実質ノーダメのように見えます。

単純にタフなのと、やはり物理的に攻略するのは蛮勇だったんでしようね。そも、資料に因れば惑星を幾つか食らっているような代物ですから、変換されて溜め込んでいる保有魔力量なんて考えたくもありません。

やはり、時間切れによる形態移行を待つのが無難かな？　と思ひ、攻勢を少しでも緩めるとグランガイツさんが対人用槍射砲の杭でブチ抜かれかけたり、殺意高めな広域空

間爆撃魔法が飛んで来るので、『攻撃は最大の防御』という言葉を嘯み締めながら継戦しておりますが、そろそろ変化が欲しいです。

「ステラー。30秒稼ぐので、態勢を整えて下さい」

「済まない、感謝する！」

「『Divine buster : Vanishing shift』」

「ファイエル！」

ヘイトを集める為に、カートリッジを毎秒1発消費しながら『Divine buster』と『Divine shooter』の強化版である『Axel shooter』を組み合わせた複合魔法を垂れ流します。奔流と叢雨むらさめ。大抵の魔導師なら、防御しながら回避機動しても防御が維持できずに落とされるんでしょうけど、やはり『管制人格』さんは別格でした。

綺麗に『Axel shooter』だけを防ぎつつ飛行し、『Divine buster』はきっちり回避しております。あの叢雨って、フェイトちゃんやクロノさんでも4発ぐらい受けければ防御魔法が碎ける威力なのに……。いと可笑しい。

「フェイトちゃん。ちよつと御願いしても良いかな？」

「……如何したの、なのは？」

先程から、魔力変換資質によって変異した荷電魔力流を集めてバチバチしていたので、私が危機的状況になれば勝手に切り込みそうだなと予期し、念話で声を掛けてみました。ええ、案の定です。気力十分といった雰囲気伝わって来ます。

「> 20秒くらい、『管制人格』さんの気を引いて欲しいんだけど…… <」

「> それだけで良いの? <」

「> 有視界戦闘中に、隙が多い魔法はあまり使いたくないなーと思うのですよ <」
かつてフェイトちゃんに撃ち込んだ《Starlight breaker》

だって、対象を拘束後に防御魔法と砲撃魔法を兼ねた魔法陣を展開した上で、約9秒の高速チャージに発射・着弾まで約3秒と遅いのですから、それ以上の手間暇が掛かる魔法なんてぞつとします。まあどちらかと言えば、アレ以上の火力を早々と使いたくはない気持ちの方が強いですけどね。

「> 分かった。じゃあ、ちよつと行って来ます <」

「> うん。行ってらっしゃい <」

言い終わった瞬間、残像と衝撃波だけを残してフェイトちゃんがカツ飛んで行きまして。準備時間さえあればこれ程までに速くなるとは、よもやよもや……。次に模擬戦をする際には、警戒したい所存です。

さて、フェイトちゃんと仕切り直せたグランガイツさんが共闘している間に準備しま

せう。「レイジングハート」を構え、カートリッジロード×10。防御魔法の応用による延長バレルを増設。質量情報を付与した半実体弾ではなく、過剰魔力圧縮による人工魔力結晶弾を延長バレル内に作成。そして並列思考上で拘束魔法を発動待機させ、ついでにカートリッジが残り6発なので撃ち切り、抽出された純粹魔力をリザーバーへと流し込んでから新しいドラムマガジンに交換しておきます。

1つのドラムマガジンに65発も入っておりますが、撃ちまくる戦闘スタイルなので交換頻度はフェイトちゃんと大差無いんですよね実は。まあ、だからだと戦闘しても無意味なので、早く終わらせる分と考えれば必要経費かもしれません。

「> 各員に通達。射線上から至急退去して下さい <」

とはいえ、今から撃つ《Starlight breaker》よりも無駄に洗練された無駄の無いこの魔法は効果範囲が狭く、長大な射程と副次的な飛散物にさえ気を付ければ大丈夫だろうとシミュレートされていますので、対物用であることを除けば撃つ方としては非常に気楽です。

「ロック」

「―《Multible bind:Unlimited》―」

一度の拘束魔法が不安なら、多種多様な拘束魔法を複数且つランダムに掛け続けられれば良い。――ミッドチルダにおいて神聖化された活火山『ウルカヌス』の名を冠したカー

トリッジ・システムの恩恵は凄まじく、貪欲にカートリッジを食らいつつ『管制人格』さんの四肢と頭部を集中的に拘束します。

おまけに延長バレルの砲身内へ捕らえてしまえば、後は狙うまでもありません。味方の回避確認良好。射線上は《封時結界》が張つてあるので、流れ弾の心配無し。願わくば、これで第一形態が終わりますように……。

「メテオライト、ブレイカー……!!」

「↑《Meteorite breaker》↓」

ブラストオフ

射出開始。魔力による桜色の疑似爆縮が発生し、ワンテンポ遅れて膨大な運動エネルギー

ギーが人工魔力結晶弾の底へと叩き付けられ、延長バレルの出口に向けて押し出します。無論、その途中には『管制人格』さんが拘束されていますので、ええまあその……改めて、人や生物に対して使ったら駄目だなと胸に刻みました。

尚、物理的に四散ではなく五散し、結晶弾と延長バレルの狭間で擦り下ろされてしまった『管制人格』さんの躯体ですが、粉々に壊れながらも銀色の光みたいな物が分離し、見覚えのない人型を形作りました。恐らく、『闇の書』の主さんなんでしょうね。多分きつと。

「聖なる夜に、白銀の再誕を。リインフォース、ユニゾン・イン！」

取り敢えず色々つつつコミたい事が多々有れども、元氣そうで何よりです。

「『守護騎士』達よ、我が聖杖の下に集え。闇を砕き、未来を切り開く為に！」

暫し見守っていると、少女が融合騎らしき光源を取り込んで髪やら背中の中の羽が白くなった後、『守護騎士』の皆さんが再召喚されました。無論、その合間にフレームを自動換装したり、ドラムマガジンを取り換えたりと警戒は緩めません。

「……【烈火の将】シグナム。馳せ参じました」

「【鉄槌の騎士】ヴィータ。馳せ参じました」

「【湖の騎士】シヤマル。馳せ参じました」

「【盾の守護獣】ザファイラ。馳せ参じました」

「何やよー分からん事になつとるけど、先ずは厄介事を終わらせてからや。ええな？」

「……はっ、御心のままに！」

そんな訳で感動的黒歴史を観測しましたが、これから如何したものでしょうか？ 現行の作戦上、『守護騎士』とその主が味方になってくれる——会話の流れ的に、そうだと信じています。——なんてアウト・オブ・眼中でしたけど、司令部の判断を仰ぎたいところ。と言うか、先程から不思議と反応が無いんですね。

はて……？

第44話：ラストダンスは盛大に【前編】

side:なのは

「> ねえ、フェイトちゃん。そっちは司令部と通信できてる?」 <

「> こっちは大丈夫だけど、”なのは”の周囲にある魔力残滓ざんしが邪魔しているんだと思う。今だって、”なのは”が念話を飛ばしてくれたから繋がったようなものだよ? <

まさかの自業自得でした。何だかんだで、この短時間の戦闘で2マガジン130発を使い切っていましたからね。然もありません。実際に貯蔵用として吸収したり、干渉してみればラジオのチャンネルが合うようにちゃんと繋がりました、クロノさんやリンディ提督から御小言を頂いた後、作戦を改善すべく集まる事になりました。

因みに、後段作戦から参加するユーノさんや、クロノさんの師匠であるリーゼアリアさんとリーゼロツテさんも加わり、【闇の書】の主らしい少女と融合中の『管制人格』さんことリインフォースさんも前線メンバーに含むなら総勢14名と、今更ながら凄い作戦を実行しているんだなーと感じます。

「特例措置だが、此方【闇の書】の主”八神はやて”及び『守護騎士』達と共闘すること

になった。これまでの蒐集行為は騎士達の独断で、一般人だった。『はやて』には知らされてなかったらしい。水に流せとは言わないが、今この場において責任問題は不問とする」

如何やら、司令部やクロノさんの意見を総括すると『使えるモノは使う』方針で行くみたいですね。どのみち現状を鑑みずに留置所へ送るには惜しい戦力なので、手伝ってくれるのなら嬉しい限りです。

「八神はやて」です。事態收拾の為、尽力します」

「高町なのは」です。宜しくね、八神さん」

「……………」

「で、あつちで殺^ヤる気を放っているのがフェイトちゃんです」

「……………変な動きしたら、私が御首級^{せきにん}を狩^とるから覚えていて」

ん、至極殺伐。しかし時間は進み、【闇の書】の破片つぼいのが集結して繭^{まゆ}みたいなのを作っているの。些末事は無視し、クロノさんに視線を向けて話を促します。

「作戦の変更箇所は、主に『なのは』の負担を振り分けるぐらいだな。そもそも、通常なら武装局員を連隊規模で招集したいところなんだが……………」

クロノさんから「まあ、『なのは』だしな……………」みたいな視線を投げられた後、第二形態について八神さん達に説明がてら、新しい作戦が示されました。【闇の書の闇】、若^も

しくは畏怖と嫌悪を込めて「止まらぬ破壊機構」アンストッパブルデストラクターとも呼ばれる物体は出現後から多重複合防御魔法を展開しつつ、脅威度に応じた迎撃やら無差別な捕食行為をするらしく、ともあれ堅牢な防御魔法を破って体積を削り、お宇宙へ打ち上げて汚い火花にしなくては いけません。

制限時間は、地球が減びるまで。

尤も、それほど悲観していませんけど朗報も有り、無限転生を繰り返すための旅をする機能はリインフォースさん側に組み込まれているとの事で、アレを強制転移で宇宙に移動させる事さえ出来れば次元巡航船の戦略魔導砲《アルカンシエル》で対消滅させたとしても復活はしないだろう。——というのが司令部とリインフォースさんの見解らしいです。

「過去の交戦データから、約25秒間隔でオーバーAAAランク相当の火力を5連続ほど叩き込めた場合、防御と再生能力を超過して奴の制御中枢まで迫れるだろうと試算されている。それを念頭にヴィータ、シグナム、フェイト、はやて、次に自分ことクロノ、最後に「なのは」という順番で短期決戦を仕掛けたい」

尚、従来の案では『私↓フェイトちゃん↓私↓クロノさん↓私↓それでも駄目そうなら対地艦砲射撃』という大変ブラックな案でした。6連続にして心の余裕を得るのも大事ですが、どうか人材も大事にして欲しいところ。

「そしてアリアとアルフ、ザファイラは妨害と支援攻撃を頼む。ロツテとゼスト2尉は遊撃要員で、ユーンとシヤマルは観測と強制転移魔法の準備を。必要があれば指示はするが、即席のチームなので臨機応変に動いてくれて構わない。あくまでも目標は、無事に勝利する事だ」

「> クロノ君、コード【止まらぬ破壊機構】の活動再開まで予測時間2分切ったよ！
 <

「了解した、エイミィ。では各員、指定座標へ移動する様に。健闘を祈る」

そう言つてクロノさんは、凍結魔法に特化させた決戦用戦術デバイス【デュランダル】と4基の浮遊ユニットを携え、己の指定座標へと飛んで行きました。あのフィン・ファネルみたいな物、何時か【レイジングハート】にも凄く付けたいですね……。

「I think it's Technically possible.
 」

「それじゃ、これが終わったらマリエルさんに頼んでみるね」

然しながら、多分それは叶わない気がします。現状ですら【レイジングハート】は十分に強いので、今回以上にヤバイ案件というのは早々起こると思えないのです。まあ、常設は無理でも試験評価用で試せるでしょうし、その為にも先ずは勝たねば。

そして約1分後、コード【止まらぬ破壊機構】が孵化しました。

名状し難い冒流的なビジュアルをした怪物は、今まで呑み込んだであろう無機物や生物を混ぜ合わせつつも、それが破壊へと機能する事を予期させるような不気味な調和性を保ち、頭部と思わしき頂点には異形の女神像が据えられています。他にも6本の多脚、4対8枚の歪な翼、3つのカラフルな光輪、触手等々。へえ、奇遇ですね……。私にも有るんですよ。同じ数の光翼と光輪が。

「この有象無象、"なのは"の真似をッ！」

「あっ、おいっ！ 一番手は私の役目だろ！」

「譲ってやれ、ヴィータ。どうせ叩き込む回数は変わらん」

「そりゃそーだけだよ……」

偶然の一致かはさて置き、フェイトちゃんが怒って切り込んで行きました。シグナムさんの言う通り、順番は暫定的なものですから特に問題は無いのですが、例えば明らかに魔法初心者な八神さんに急な順番変更とかしたら、心構えが崩れて魔法の発動が不安定になる恐れがあります。

そういった理由や、そもそもブリーフィングをした意味とか、何で本人以外が勝手に怒って独断専行しているんだとか色々な点でアウト判定ですけれども、その御蔭か結構

な威力を出せているように見えます。と言うか、魔力で作った刀身を一時的に数十メートル伸ばしての横薙ぎって、フェイトちゃんもすっかりベルカ面に染まりましたね。きつと遠からず、半実体弾を音速の6倍ぐらいまで電磁加速させて投射するフェイトちゃんを観測できるかもしれません。

時に、先程から念話ではなく各員に通信モニターを1つずつ追従させて映像共有&録画を行っております故、下手な事をするとか戦後評価よりも怖い『心象評価の下方』が発生しかね……。あつ、もうクロノさんがチベットスナギツネみたいな虚無顔をしているので、これは戦後に雷が落ちるでしょう。

「> なかなかやるじゃねーか。こつちも派手にブチかますぞ、アイゼン！ <」

「— Jawohl —」

それから先は、ヴィータさんが何時ものように巨大化させたアームドデバイスでゴルディオオンハ○マーした後、シグナムさんが剣と鞘の連結から巨大バリスタを生み出し一射貫通して、じゃあ次は八神さんの番かと思いきや異常な魔力反応を感知。赤黒い柱みたいな魔力流が海中から無数に湧き立ち、それと同時に《封時結界》が強制的に解除されてしまいました。

「> 何だ、この魔法は！ <」

「> ……侵蝕変換魔法《イルミンスール》。あらゆる物や生命を魔力に変換する

固有魔法だ。本来なら、この様な使い方は——<

「> 効果範囲が急速拡大！ ま…、間も無く惑星全体が効果圏内につ!? <

クロノさんやリインフォースさん、エイミーさんが何かしら嘆いておりますが、説明と状況から察するに地球全域で命が変換され、束ねられているのでしょうか。現在地は、私が住んでいる海鳴市藤見町から数十km離れた沖合上空なのでよく分かりませんが、若し^もかししたら私の家族やアリサちゃんや「すすか」ちゃんの生命力だって、何処かの柱に吸い上げられている可能性がある。

「ロード・カートリッジ」

「—《 Divine halo : Peril point 》—」

滅びてしまえ。私の大事なモノを傷付けるなら、滅びてしまえば良い。嘗て^{かつ}御父さんを帰さなかつたように奪うのなら、私が全部奪い取らなくては。

「カウントレスっ!!」

24基のバスター・スフィアから光芒が垂れる。——降り注げ。浄化せよ。牙を、爪を、翼を、脚を、砲口を、触手を、光輪を、尻尾を。その悪しき全てを撃ち砕け。私達の幸せの為、喜びに満ちた未来を夢見る為に、御前は私が終わらせる。

どうかどうか、さっさと■■■■遊ばせ。

毎秒1発。時を刻むかの如くゆっくりとカートリッジを食らい、余剰魔力と混合させた圧縮魔力を魔法陣へと流し込む。照射され、防御魔法や装甲を削り取って霧散した魔力残滓を回収し、再び圧縮魔力に混ぜて照射する。

魔力で構築された躯体の破片。砕けた防御魔法から溢れる魔力。偏差射撃をせずに、拘束魔法などの掬^かめ手もなくバラ撒かれる攻撃魔法の魔力魔力……。其^{そこ}処^か彼^こ処^こに魔力が漂っています。嗚呼、そう言えばこの柱は魔力流でしたね。折角なので借りましょう。何せこれは仇討ちも兼ねていますから、きつと心地好く加担してくれると思います。

「如何して、こんな事に……」？ アレが諸悪の根源です。

「怨めしい」？ 丁度そこに敵が居ますよ。

「助けて欲しい」？ 助けるので助けて下さい。

「滅ぼせ」？ 無論、悩むまでも無く。

ええ、そうですね。許すまじ。赦すまじ。その■■、確かに請け負いました。だから如何か、少しでも手伝ってくれませんか？

「^{あまね}遍く命へ、束の間の平穩を齎^{もたら}さんが為に」

「Master? What's happened?」

「つまり……、『私達は独りぼっちじゃない』って事だよ」

気持ちを新たに、ガツシヨンガツシヨンと装填機構による振動が激しい【レイジングハート】を魔法で浮かべ、空中にて固定します。や、別に保持が面倒になった訳ではありません。轟々と湧き上がる濃密な魔力流を受け入れるなら、精密機器は遠ざけた方が良くかなと思ひまして、念の為に20mくらいは離しておきます。一度、【ルーンライター】でやらかしましたからね。当然の処置ですとも。

「Master! That action is dangerous!!」

あの【レイジングハート】でも声を荒立てる。そんなトリビアを増やしながら、羽を可変させて魔力流と接続。供給ラインを開……あ、ミッ

……

……

……

……

side:はやて

彼女——「高町なのは」さんは被害者の一人で、私はシグナム達の主だからフェイト

さんがしたように恨まれて当然なのに、微笑みながら挨拶をしてくれた。そんな彼女が怒りを顕わに、神罰とすら思える程の壮絶な魔法を行使している。いやはや、躯体に閉じ込められている時に使われた魔法も凄まじかったものの、これ程までに怖くは無かった。

何でシグナム達は、一番怒らせたらアカン相手に喧嘩売ったんやろな？

それが切っ掛けになり転機になったんやろうけど、高町さんの優しさも相俟あいまって心と頭が痛い。取り敢えず、地球滅亡エントを回避せにやならんで魔法初心者なりに貢献して、そこから先の事はケセラセラやね。

「――準備が整いました。あとは発動用の呪文を唱えるのみです――」

「ありがとな、リインフォース。で、呪文は……。ほーん、頭ん中に浮かんで来よるとは便利やね」

手取り足取り。本来なら、もうちよつとスローペースで教わりたいの……。初戦がこないな最終決戦なので、諦めざるを得ませんNA。恐らく、現時点なら自動運転みたくリインフォースに全部任せた方が早いし強かろうとも、同い年つばい高町さんやフエイトさん（礼儀的に名字で呼びたいけども、分からへん）が頑張っているのに、自分だけ頑張らないのは筋が通らんつちゅー話や。

聖杖を頭上に掲げ、最後のピースを埋めるように呪文を誦そらんじる。流し込む魔力量

も、ターゲットの設定も、射出角度も着弾位置修正もリインフォース任せ。情けない？
そないな感情、車椅子生活の初期で捨ててしまおうたわ。

「熾天に吼えよ、我が鼓動。出でよ巨獣、全てを押し潰せ」

さあさ、御開帳。

「ジャガーノート！」

銀光を帯びた円錐状の魔力弾を5連射。高町さんが雨霰と撃ちまくっていたビームと比べれば地味なのは仕方無いとして、着弾箇所から異常重力圏が拡大し、瞬く間に防御魔法と共にコード「止まらぬ破壊機構」の巨体を潰し、挟み、振じ曲げてもうた。

何でも有りやね魔法。只これでも威力が足らんのか、それともコード「止まらぬ破壊機構」がしぶといのか、破損した外殻を卵のように破って新たな生体パーツが膨れ上がる。……正直、エイリオンとバイオ○ザードで鍛えてなければ、あまりのキモさに叫んどったかもしれん。

そんな事を考えとつたら、下方の左斜めという死角にあたる位置から来た強風に煽られ、少し揺らぐ。あの辺は確か、高町さんが陣取っていたような――

「あー、うん……。エヴァン○リオンで見覚えがあるやつやね……」

目を離してと言うか、初めての魔法で精一杯やったから何が有ったのかは分からん。然し、「暴走状態かも？」と思えるぐらいには高町さんの翼や光輪がでかくなって、数え

るのも億劫なぐらいに分岐&分裂している。いやいや、何でも有り過ぎやろ魔法……。流石に魔法初心者でも危険を感じるほどの魔力濃度やのに、それを至近距離で浴びてて大丈夫なんやろか？

「— あの濃密な魔力流を奪い、己に取り込むとは随分無茶をする…… —」
「そうせーへんと、負けると思ったんやない？」

普通に6割勝てるor無茶すれば9割勝てるのでは、安心感が段違いやからね。實際の思惑は知らんけど。まあ、ラインフォースから見ても大丈夫そうなら大丈夫と信じ、意識を名状し難い生物へと向ける。

そもその話、眠気と緊張と興奮と怖気がぐつちやぐちやになって、他人を心配する余裕なんて雀の涙ぐらいしか無い。『はやて』は激怒した。何故、良い子でねんねしてた9歳児がこんな目に？ やはり天使共はクソであります！ 現世を煉獄だと勘違いしとんのなら、頬を二度も殴った拳句スイカバーによる串刺し刑で修正してやらねばならぬ。

「> 悪に告げる。冷々たる棺れいれいの内で、白き静謐を奏でよ。……凍てつけっ！ <

「— 《 Eternal coffin 》 —」

勝手にヒートアップしかけた最中、クロノさんの魔法が発動して青白い閃光が海諸共に冒流的存在を急速冷凍し、その無限再生を強制停止させてもうた。てかあの浮遊ユ

ニット、ファンネルじゃなくてリフレクター・インコムの仲間やったんやね。それに強力な魔法なのか、5秒経つても変化は訪れない。

「おおつ、砕いておらへんけど『コスミケール・カタストロフィー』おわるせかい『やん！ カッコええなく』

「――我が主。アレはまだ、もう一当てする必要があります ――」

「……………如何にも絶対零度で凍らせとるのに、まだ動けるんかアレ?」

「――魔法生命体に対し、通常の物理法則は当て嵌まりません ――」

なるほど。気温も気分も冷えたところで、気合いを入れ直して威力増し増しの魔法をリインフォースに選んで貰う。

そうやっている内に氷像が徐々に砕け、先程のやり直しかの如くうねうねと肉塊が湧き出すもスルーする。アレに脅威判定されて優先的に狙われたら、リインフォースに全部任せないと砲台にすらなれへん。シグナム達や他の魔法使いの人みたく、回避や防御しながら攻撃なんて魔法初心者にとっては無理に等しい。せやから余計な事はせずに、遠距離から狙い撃つのがベターやろ多分。

「> 埋め尽くせ! 《鋼の軛くひき》!! <

「> 仕掛けるよ、ロット。《ミラージュ・ハウザー》! <

「> おうよ、アリア。《ミラージュ・アサルト》! <

高威力の魔法が飛び交い、様々な色をした魔力弾も入り混じる。綺麗ヤナーと黄昏な

がら発動準備をする最中、恐らく高町さんっぽい魔力反応の増大を感知。コード「止まらぬ破壊機構」が悍ましいなら、こっちは怖いやろか？ どちらにせよ、ラスボス染みた魔力を至近で感じるのは心臓に宜しゅうない。

「> ……集え、凶星。必中相殺、光あれ <」

「| 《 Starlight breaker 》 |」

桜色の砲撃が、闇を破う。うちが放った《ジャガーノート》なんて子猫ちゃんだと思える程の馬鹿げた火力で、見間違いでなければ海ごと吹き飛ばして、海底が見えてしまった。只それでもコード「止まらぬ破壊機構」はぎりぎり耐えたらしく、高速修復をしながら絶叫し、さつきよりも魔法の乱射が激化している。

あれが最後の足掻きor単なる怒りにせよ、あまりのしぶとさに辟易へきえきしてしまう。何故、あの連続攻撃の最中で昇天しなかったのか。そんなんやから、もつと痛いのを叩き込まれる羽目になるんやろ。

「ふー……。やつぱり、ぶつつけ本番は難しいよね……」

「あの、高町さん。何か御用でも——」

「魔力が減っているみたいだから、あげようかなと思ひまして」

「は？ ……えっ？！」

何時の間にか真横に居た高町さんが、ドスつとうちの胸元に带状の魔法を突き刺して

3秒チャージ。空腹感とはまた別の、保有魔力量の残量感覚が5割ぐらいから10割へと満たされ、未知なる感覚に少し酔う。見渡せば他の人にも返答を待たずやっているで、複数の帯による犠牲者がどんどん増えて行く。

「それじゃ、後半戦も頑張ろっか？」

「お、おお……。せやな！」

桜色の眼光が怪しく煌めき、左手の甲からも同色の魔力光が鮮血と共に溢れ、その微笑は敬虔な聖女の如し。「逆らうなかれ。撃ちてし止まぬ、勝つまでは」——言外に、そう告げられたような気がした。

第45話：ラストダンスは盛大に【後編】

side：クロノ

魔導師の治療で使われる『マジック・ポーション』という高価な劇薬がある。これは戦闘中に、急性魔力欠乏などの症状で倒れた魔導師に対して安全な後方へ移送できず、非常に止むを得ない状況下でのみ許可される薬だが、底を着いた筈の魔力が漲る代わりに、思考が好戦的になる「メリット……はまだ可愛い方だ。

薬が切れた後は、頭痛や吐き気を始めとした豊富な副作用が49種類も控えている為、使いたがる人は漏れなく病院送りか墓石の下へと埋まるだろう。作用機序としては、リンカーコアを活性化させると同時に心肺機能も強化し、送られる魔力と血流によつて興奮状態だと脳が錯覚してそうなるらしい。

それで、だ……。

“なのは”に帯状の魔法を刺され、リンカーコアに魔力が供給されたのは構わないとして調子も良くなるとはあまりにも予想外だった。膨大な魔力消費で疲弊していたリンカーコアが3秒程で回復とか、どんな副作用が有るか分かったものではない。仮に、“なのは”の固有技能で副作用が無ければ、それはそれで未恐ろしい事である。

バッテリーを入れ替えるかの如く、長時間戦闘が可能な空戦魔導師部隊なんて成立したら既存の戦略概念が崩れてしまう。そも「なのは」自体、砲撃手として既に卓越しているのだから、今以上に悩みの種を抱えたくはない。そんなに強くなつて何を為す？ あらゆる次元世界から『蟲』共でも根絶するの？

「>」 「なのは」、大丈夫？ 血が出ているよ？ <」

「>」 まだ大丈夫だよ。フェイトちゃんこそ、内出血が酷いけど大丈夫なの？ <」

「>」 うん。無理に速度を出さなければ、支障は無いと思う <」

他にも悩みの種と言えば、フェイトは慣れぬ高速機動魔法を連発したせい、全身の古傷が赤黒い線となつて浮かび上がっており、目立たなくなつていた額から左頬にかけて走る古傷もまた例外ではない。対して「なのは」は、その身に取り込んだ膨大な魔力流のせいか左手の傷痕が開き、今も血がぼたぼたと垂れていた。おまけに何故か瞳から桜色の魔力光が溢れていて、その影響も気になるところだ。

また、連戦で最前線に立ち続けているゼスト2尉は明らかに精彩を欠いており、先の暴走状態であつたりインフォースとの戦闘で負つたダメージが影響しているのか動きが鈍く、ロットは近接攻撃で足を痛めたのか珍しく射撃魔法を多用している。

想定よりも状況が悪い。

否。数十年間隔でたったの2回、それもろくに交戦していない戦闘データから算出した推定戦力に賭けた僕達——管理局が間抜けだったのだろう。慎重かつ過剰に見積もった筈なのに、それすら超えて来るとは古代ベルカ人共め……。後世の主が魔改造に失敗したツケが現在のコレらしいが、そうだとしても軽々しく高エネルギー結晶体を核に使うなどばやきたい。御蔭で良い迷惑だ。

「> “なのは”、フェイト、“はやて”。三人の最大火力で消し飛ばせないか、試して欲しい <」

「> 了解。2分ぐらい稼いでくれると助かります <」

「> 了解。こっちは直ぐにでも撃てます <」

「> 了解しました。うちも大丈夫です <」

「> ……言っておくが、地球を壊すんじゃないぞ “なのは”？ <」

「> や、流石にそんな火力は出ないと思います <」

如何だかな……。15秒も掛からずに、都市を廃墟群へと変貌させる事も可能な《Starlight breaker》の8倍も時間を要する魔法なんて、己の常識が激しく警鐘を鳴らすも黙らせる。とにかく今は、決め手となる強力な切り札が欲しかった。

「> ゼスト2尉、外周部の掃討へと移って下さい。遊撃は自分がやります <」

「> 恩に……、着る…… <」

「> エイミー、『ケストレル』に支援砲撃要請を。弾着は1分30秒後 <」

「> おっけー！ ……リクエスト承認、カウント表示するね！ <」

「> 総員、傾注！ 弾着5秒前には安全圏へ退避するように。以上だ <」

矢継ぎ早に指示を出しながら「デュランダル」を構え、リフレクター・ユニットを引き連れて加速する。『なのは』のように長距離から砲撃と魔力弾を垂れ流す事も、フェイトのように近中距離での高速機動戦が得意な訳ではないが、中距離戦での立ち回りはみっちり鍛え上げてきた。

それには、候補生時代に散々やらされたので慣れている。恐れなくて良い。自分がよく知っている己なら、適度な戦意を保ち、感覚を研ぎ澄まして対処すれば勝てる相手の筈だ。

「― 《 Frost cannon 》 ―」

「ッ、弾けー！」

『なのは』の砲撃と比べれば数段劣る砲撃魔法で足を止めると、直ぐにコード【止まらぬ破壊機構】から射撃魔法が飛んで来る。それをリフレクター・ユニットで偏向させて逸らし、次弾を待たずに移動する事で回避しておく。誘導弾はあれども、偏差射撃を

してこないとは何と有情だろうか。あと約1分、この調子で頑張つて貰いたいものである。

（ ）

side：なのは

未だ残留感がある胸中の十二力を、『邪念』と形容するのは些か失礼かもしれませんが。今も尚、生命力を魔力に変換されている人や生物達は苦しんでいるのだから、恨みなくなる気持ちは仕方が無いことです。

ただアレを抱えるには重過ぎて、《Starlight breaker》に込めて撃ち出してしまったのはどうか許して頂きたい。私は神様ではないのだから、恐らく限界がある……とは思いますが。いや、此処は正直に「気持ち悪かったので捨てました」と開き直つておきませう。

悪をもつて悪を征す。

それよりかは、『怒り』や救いを求める『祈り』の“力”で倒した方が悪には相応しい最後です。機械的に、意志も無いのに悪を為すだけの不良品を恨んだところで意味はありません。だからこそ『怒り』で壊し、『祈り』で善き方向へと捻じ曲げなくては。

〔 〕 弾着10秒前！ 〔 〕

「総員退避！ 巻き込まれるぞ！」

ふと視線を上げると、遙か上空から流星のように真つ赤な尾を引く無数の飛翔体が、コード「止まらぬ破壊機構」を目掛けて斜めに落ちて来ます。ベルカ式で見られるような半実体弾にしては、あまりにも硬い構造体……。ひよつとしたら、本物の質量弾かもしれない其れは容易く防御魔法や外殻を貫き、変形しながらコード「止まらぬ破壊機構」を抉り飛ばしました。

凄まじいソニックブームが発生する程の超音速で、防御魔法へぶつかつた際に弾頭から溶けて放射状に広がってしまいましたから、原理としては装弾筒付翼安定徹甲弾の浸徹作用と、ダムダム弾の拡張弾頭が合わさつた物に近いんでしょうね。嗚呼、可哀想に。

でも自業自得です。

更に言及するなら、侵蝕変換魔法《イルミンスール》もそうです。あの魔法は確かに恐ろしいのですが、発動した後は自動的に周辺にある生命を魔力変換しつつ発動者に供給するだけの魔法らしく、少し頑張つて干渉すれば供給先を私の方へと変えることが出来てしまいました。……だから、これから発動しようと思う魔法で撃ち上げられるのもまた、自業自得と言えます。

「苦痛の咆哮、悲嘆の涙。束ね紡ぐは憤怒の意思」

コード【止まらぬ破壊機構】がすっぽりと入る程の巨大魔法陣を海底に敷き詰め、手当たり次第に集めた魔力を注いで行きます。すると流石に危険を感じたのか移動を試みますが、再生途中の手も足も翼もあらゆる魔法で壊されるのですから、逃げることは叶いません。

「今此処に、奇蹟を刻み給う……。ファールパウティ」

「> 雷光一閃！ プラズマザンバー！ <」

「> 響け、終焉の笛。ラグナロク！ <」

全力全開、聖裁代行。

「ディザスター」

「> ブレイカー……ッ!! <」

「> インパクト!! <」

三者三様の魔法が混ざり合う。平穩を、事態の解決を願って放たれた魔法はコード【止まらぬ破壊機構】へと食らい付き、その醜悪な神秘を砕いていきます。

ぼろぼろの触手、装甲、光輪、翼、浮遊ユニット、本体。全ての虚飾は消失し、やが

て剥き出しになったリンカーコアらしき物がユーノさんとシヤマルさんによる強制転移魔法で静止軌道上へと送られ、数十秒後には極彩色の閃光となつて弾けました。

戦略魔導砲《アルカンシエル》による空間歪曲と対消滅反応。

やはり、映像資料と実物では迫力が違いますね。しかし遠からず、細やかなる副作用として暴風や磁気嵐などの影響が生じるかもしれません。が、やれる事はやった……と思います。神ならぬ身で、人として、小学3年生でありながらも果たしました。只それでも、侵蝕変換魔法《イルミンスール》の被害だとか身内の安否とか考え出したら、とてもとても気が重いです。

桜吹雪に粉雪。私の魔力残滓やら、クロノさんの凍結魔法による人工雪が降りしきる中、現世の不条理さをぼんやりと恨みつつ、そう言えば左手から出血していたよねと解を導きながら虚空へ意識を溶かし――

……

……

……

はい。ぎりぎりセーフです。貧血でフラっと来たところをフェイトちゃんが高速移動魔法で駆け付けてくれた為、落下せずに済みました。そして状況終了なので、じゃあ解散という訳にも行かず……。

八神さん達を含む全員で次元巡航船『アースラ』へと場所を移し、『管制人格』ことリインフォースさん及び『守護騎士』の皆さんには魔力封印をした上で軟禁措置。八神さんの体調も考慮して、聞き取りや事情説明は翌朝に。——という事が有ったのだとフェイトちゃんが話してくれました。

約16時間後に。

ええ。激戦の最中に、少なくとも血がちよろちよろ流れてましたからね。ぐつすりとは病床に伏していた次第です。因みに、私の家族には連絡済みで安否確認は取れているようですが、アリサちゃんや「すずか」ちゃんは未だに不明だったりします。これは単に、フェイトちゃんがその二人と仲良くないだけなので仕方ありません。

私だって、友達の友達なんて気にしません故、これに関してはどうこう言える筈も無く……。取り敢えず、御見舞いで貰った栄養ゼリーのパックを吸いながら、無事に退院

許可を貰って帰れますようにと願うのです。

第46話：厄災一過

side：アルフ

全くもつて、昨日は素晴らしくも酷い一日だった。第97管理外世界『地球』の日本という国では12月24日の夜を楽しむとの事で、クリスマス・ツリーを飾り付けたり、ちよつと贅沢な食事やケーキを食べたりと楽しかったけれども……。まあ、あの突発的な最終決戦のせいで、かなり苦い思い出になってしまった。

飛び交う高ランクの魔法。

膨大な魔力を制御しきる技能。

『使い魔』という存在のデメリット。

単なる力不足よりも、特に最後の理由が恨めしかった。『使い魔』は、魔導師から供給される魔力によって存在している魔法生命体であり、私の場合にはフェイトから魔力を貰い続けると消滅するようになっていく。

つまり私が存在する以上、フェイトは全力全開の魔法が使えないのだ。

確かにフェイトは優れていて、そこら辺にいる魔導師よりも数段上の空戦Sランク相当らしいけれども、敵だった頃の「なのは」や今回みたいになやたら硬くて強い相手と戦うには、私の存在なんて足手纏いでしかなかった。デバイスを貸与たいたよされても所詮は空戦AAランク止まりの私が、空戦AAAランク以上が7割も占める戦場で何をやる？

少なくとも、胸を張れるほどの貢献が出来たとは思えなかった。無限に湧いてくる触手だの爪牙だの、砲台付きの何かをちまちま倒したところで大局に影響は無かっただろうし、それよりもフェイトが魔力を気にせず奮闘できていた方が余程頼もしかったに違いない。

一応、「なのは」を見習ってカートリッジを惜しまずに使ったりしていたけど、速さも無ければ狙撃を可能にするような精密さも無いのだから、本当に消えてしまいたい程の情けなさが心中を焦がす。

「全体的に身体強化が甘い。そんなんだから、速度を威力に乗せられないんだよ」

「魔力付与打撃は、打ち込むと同時に魔力で撃ち抜くべし。大型目標が相手なら、威力は過剰気味なぐらいが丁度良かったりするわ」

「あいよっ!!」

———として現在。あの激戦の翌日に、たった一人でシミュレーター・ルームを使って黙々と鍛錬していたのを憐れんだのか、クロノが教官役としてリーゼ姉妹を紹介

してくれた御蔭で短時間ではあるものの、専門的な指導を受けていた。基本はリニスから学んだけれども、彼女が居なくなつてからはずっと我流で頑張つてきたせいかな私の格闘術はどうも歪いびつらしい。

対人用としては愚直であり、対大型生物用としては威力に欠ける。……なら、工夫して威力も増し増しにしてしまえば良い。今は弱くて力不足でも、次こそはきつと活躍してみせるんだと意気込み、拳を振り抜く。

私は、まだ折れちやいない。あの無愛想ザブライラの澄まし面に最高の一撃を入れて見返してやりたいし、魔法無しでも瞬間移動しつつ戦闘できる高町兄妹からも何時か一本取つてみたい。これからだ。私はもつと強くなる。フエイトの『使い魔』として恥じぬよう、誇れるように強くなろう。

今回は大丈夫でも、次なんて誰にも分からないからね……。

くく

side:ユーノ

事件が終結しても尚、事情聴取やら事件の全容を纏めた資料の作成とか、裁判に向けた手続きなどやる事は多く残っている。そして僕は、【闇の書】の来歴をこれまで以上に

詳細な物とする為に、管理局の『無限書庫』と呼ばれる迷宮めいた資料窟にて潜行調査を行っていた。

クロノに依頼されたから。

という理由も有るけれど、正しくは逃避と形容すべき後ろ向きな理由から資料捜索に没頭していた。なまじ空戦A＋ランク程度の実力が有ったので、助けになるならという理由で今回の事件にも戦闘補助要員として参加してしまっただが、はつきり言つて無力だった。

そもそも『守護騎士』の全員がオーバーAAA＋ランクで、シグナムに至つては推定S＋ランクなのだから盾にすらなれる気がしないし、最終決戦で対峙したコード「止まらぬ破壊機構」はSSSランクを超えた測定不能^{E_x}の区分であり、僅かに自信があつた拘束魔法や防御魔法なんて硝子^{ガラス}のように碎かれる始末……。

仕方無い。相手があまりにも悪過ぎる。

そして「なのは」はあまりにも強く、その輝きは増していく一方だと感じてしまった。才能以前に、比較にすらならないという事実を改めて突き付けられた僕は一抹の悔しさを投げ捨て、複数の本型ストレージを《検索魔法》で読み込んで頭痛に耐え、

精査した情報を時系列順に組み直していく作業を自虐的に行っていた。これを元に報告書へと纏める必要もあるのだが、それはもう何日か後になるだろう。

ともあれ僕は、『最強の魔導師』^{エース・オブ・エース}を目指している訳じゃない。古代文明を、歴史を偏愛するスクライア一族の一員であり、初めから“なのは”達とは方向性が違うのだ。僕にとって魔導技能とは円滑な調査及び発掘のために必要なもので、戦闘用の魔法なんて原生物に対処できる程度で十分だった。故に、この感情は仕方無くて遣る瀬も無い。

……………大人に成ろう。

『ジュエルシード』発掘後の杜撰な対応が“プレシア・テスタロツサ”に凶行を決断させ、“なのは”や管理局など多方面に迷惑を掛けた。それなのに、恩人たる“なのは”の才能を羨み欲しがる自分なんて反吐が出る。諦める。僕には僕の、彼女には彼女の才能と人生があるんだ。それが少しぐらい交差したからって何を悔やむ？

「今からでも、足掻けば変われる……………のかな？」

魔法の習熟には、それなりの努力はした。皆が普通に使っている飛行魔法だって、本来は高等魔法の1つとして数えられており、スクライア一族の中でも数人しか使えないくらい難しい魔法である。

けれど所詮、それなり程度でしかない。クロノみたく執務官になれる程の知識や戦闘技能も身に付けず、「なのは」みたいな常識破りの発想なんてした事が無いし、況^ましてや実現できるとは思いもしなかった。不規則に直角的な軌道を描く慣性制御飛行なんて、その最たる物だ。

改善する余地が残っている。それに保有魔力が少なくても、カートリッジで補える。つまり僕は、まだ強くなれる可能性があった。

……

……

……

気分転換がてら、少し身体を動かした方が良いかもしれない。恭也さんや美由希さんのように弛^{たゆ}まず、諦めず、精進に精進を重ねたら……。きつと何時かは、強い人に成れるのだろう。妥協して、投げ出したりさえしなければ。

くく

side:なのは

未知の現象による死傷者多数。——魔法という概念が知られていない地球では、

コード【止まらぬ破壊機構】が引き起こした被害をそのように新聞やニュースで報じま

した。

結界すら魔力へと変換して取り込み、隔絶も秘匿もできなくなった脅威が世界中に被害を齎もたらしたのです。あの赤黒い魔力流が噴出した地点によっては建築物が倒壊し、車や電車などの車両を操作中に生命力を吸われた人達は気絶からの事故で亡くなったり、重病人や老人のように生命力が弱まっている人達は枯れ果てたらしく、市街地に大樹を数十本生やしたり、次元震による世界規模の異常空振を発生させた【ジュエルシード】とは比較にならない被害です。

「如何すれば良かったのか？」と考えるよりかは、「如何にもならなかった」と諦めた方が良いでしょうね。極論、私をもっと強ければ解決したのかもしれませんが、神様でも頭脳明晰な超人でもないので無理があるうかと思えます。

更に仮定の話ですけど、アレの破壊に失敗していた場合は地球が滅びていたでしょうし、その後に移されたら別の次元世界でも惨劇が繰り返されていた筈なので、たった数万人程度の死傷者に留められたのは不幸中の幸い……なのかもしれません。

いえ。幸いなのは私の主観だからこそ、ですな。

家族も親友も知人も、私が大切だと思う範囲内ではたまたま被害に遭ってないだけで

すし、例えば親しくないクラスメイトの家族が亡くなったらしいとか、御兄ちゃんの友人である勇吾さんの門下生が衰弱状態になって入院したとか、御母さんの友人が侵蝕された際に転倒して骨折したとか、ちよつと範圍を広げれば不幸だらけです。

他にも、動物や植物も見境なく侵蝕されており、場所によつては動物園や自然保護区に壊滅的な被害が生じたところも有るとの事。海の方でも、おびただ夥しい数の海洋生物の死骸が海岸線沿いに漂着したり、大型艦船が損傷やら沈没したりなど、一体どれ程の爪痕を残してくれやがりましたのやら……。何だか久方振りに、憂うき憂うきして参つて参りませ。

「散歩に行こつたか、レイジングハート」

「I got it.」

さてさて。現状、ゼスト2尉よりは軽傷だった事もあり、早々と自宅療養を言い渡されて要するに暇です。されど冬休みの宿題をやる程の勤勉さも元氣も無いため、御兄ちゃんを見做つて時間潰しを図ります。

尚、空の散歩はしません。昨夜はゼスト2尉が墜とされないように神経を擦り減らしながら飛びました故、暫く良いかなと思つた次第です。それに空を飛ぶと砲撃の余波による津波で荒れた沿岸部やら、魔力流の噴出によつて地面に大穴が空いている地区が見えてしまうので、取り敢えず今日は普通に歩きます。

家を出て、

幾つか路地を抜け、

そこそこ長い石段を登り、

10分も掛からず八束神社に到着しました。

はい。何で空よりも低いとはいえ、見晴らしが良い場所を選んだんでしょうね？　ど
のみちインドア派なのでこれといった選択肢は思い付きませんが、荒れ果てた臨海公園
を薄暮のヴェール越しに眺めたところで気分は悄然しやうぜんとして変わらないです。

そう言えば……。以前なら此処でくーちゃんをモフモフ出来たけれど、憑き物を祓う
ために魔砲を直撃させてからは避けられている現実もあつたような……。……。

悔恨。かと言って、今の状態でアリサちゃんや「すずか」ちゃんに会ってまで犬や猫
を触りたい訳ではありませんし、傷痕がまたしても色々酷いことになってます故、当分
の間は見せられません。それに御姉ちゃん曰く、雰囲気悲しそうやら辛そうな感じで
痛々しいらしいですよ？　私。

確かに、悲痛や怨嗟に塗まみれた魔力流——命だったモノの濁流——を取り込んだりした
ものの、アレは直ぐに放り投げたのであまり影響は無いと思います。そんな事よりも、

何かを得られなかったような虚無感が凄いです。

「> 暇そうだな、"なのは" <」

「> そつちは忙しそうですね、クロノさん。お疲れ様です <」

さて。逢魔が時に黄昏ておりましたら、丁度良いタイミングで通信が入って来ました。多分、暇そうなのを見計らつての通信でしょうけど、あまりの監視網の凄まじさには驚愕を通り越して呆れます。プライバシーには配慮しているかもですが、孤独に浸り辛いのはちよつと息苦しいなーと思うのですよ。

「> 嗚呼全くだ。因みに要件だが、ゼスト2尉が離艦する前に挨拶をしたいらしくてな。繋いでも良いか? <」

「> はい、何時でもどうぞ <」

あの激戦を共に乗り越えたのですから、親子程の年齢差こそあれ戦友と呼んでも差し支えない間柄と言えませう。……が、疲労により思考が巡らぬ頭で退院許可を貰つてから即帰宅してしまつた為、見舞いに行けていないのが心残りでした。程無くして空間モニターが切り替わり、疼痛を堪えているのかやや厳格さを増しているゼスト2尉が表示されました。

「> 昨夜は世話になつたな、"高町なのは"。改めて感謝する <」

「> いえいえ。ゼスト2尉がタゲを——じゃなくて、『管制人格』さんを抑えてくれ

た御蔭で何とかなりました。此方こそ、有り難う御座いました。く

あの重くて鋭く、そして精確な近接攻撃を得意とする相手なんて、フェイトちゃんに前衛を御願いでいたらなんて思うとぞつとします。防御力がどうこうよりも身体能力や経験差による一撃が恐ろしく、まだ御兄ちゃんを何とか飛ばした方が勝負になるような気がするぐらいには、とてもとても手強い敵でした。

「> あの程度の拙い攻防など、恥ずかしながら抑えたとは言えん……。それよりも、其方の飽和射撃は見事なものだった。うちの隊にも優秀な射手は居るが、既に総合戦闘力では君に遠く及ばないだろう。く

それはまあ、戦闘力53万を目指してます故、遠くで在りたいものですよ。

「> そんなに褒めても、砲撃しか出ませんよ?。く

「> それで良い。君の赫々たる実力と戦果が、まだ見ぬ悪を挫くのだ。く

「> や、そこまで有名になる予定は無いのですが……。く

「> ……二度も広域次元犯罪を解決へと導いた立役者が、目立たずに済むと思うか?。そして君は、既にオーバーSランクであるにも関わらず未だに成長の余地を残しており、管理局には嘗ての大魔導師「プレシア・テスタロッサ」に手厚い支援や保護をし

なかった後悔がある。あとは……分かるな？ <

デスヨネー。戦えてしまったから戦い続け、そしてより良い未来を得るために脅威へ立ち向かった結果が現在なのですが、はて……。如何した事か、御母さんのようなパティシエールになる夢が遠退きつつあります。

別に、医者の子が医者を目指すみたいな漠然とした将来の夢ですし、副業とか趣味としてのパティシエールでも良いとは思うものの、かと言って素質があるからと警察官や軍人染みた武闘派職種をしたい訳ではないです。それなりに「やれるかもっほい」とは思いますけど、実戦が日常茶飯事になれば左手がバイバイする可能性も高まるので、現場は避けたい所存。

「> ともあれ私は私なりに頑張るだけでして、将来が如何なるかは分かりません。今は気長に、生温かい目で見守って頂けると幸いです <」

「> ……承知した。また何時か、共に戦える日を楽しみにしている <」

「> 模擬戦でしたら、何時でも楽しみに待っております <」

「> さてな？ 将来が如何なるかは、誰にも分からないものだ <」

そう言い残すと映像が途切れ、保留中のクロノさんの方へと再接続されました。……あれは、ゼスト2尉なりのユーモアだったのやもしれませぬが、無骨で真面目一辺倒な印象の人が言うとならうにしか聞こえませんか？ 嗚呼、恐ろしいや。

「> 少しは、気分転換になったみたいだな <

「> はい。序ついでに「はやて」さんとも話せれば、もつと改善するかもしれません <
昨夜に共闘したばかりの相手ですが、何処となくレンちゃんに似ている容姿なので実
はかなり気になってます。あとは数少ない同年代っぽい魔法少女ですから、お知り合
いになればならぬー等と思ったりも。

「> 君が望むなら、今からでも会えるぞ? <

「> 良いんですか? <

「> 彼女自身は、あまり事情を知らされていないらしく聴取する意義は少ないし、艦
内に留め置いているのも『守護騎士』やリインフォースへの配慮でしかない。どのみち、
あと数日もすれば帰宅させる予定だ <

「> ー……。今日はもう遅いので、日を改めまして明日の14時頃うかがに伺いたいと
思います <

訪問（訪艦?）するなら色々準備してからしたいですし、昔のフェイトちゃんみた
く危うい感じはしない為、拙速よりも巧遅な方針で良い気がします。尤もつとも、仲良くなる
なら早いに越した事は無いのですけれど。

その後、二言三言と話を詰めてから通信を終えました。

星と月が浮かぶ紫黒の空に、エターナル・コフィン局地的な寒波による白雪が降り積もる街。頑張ったからこそ今が残り、明日へ続き、過去を悲しみ、そして懐かしむことも出来ます。滅ぶはずだった未来からしてみれば、ちよつとした傷で済んだ現在なんて上等な結果と言えるのではないのでしょうか？ だから、私は――

「割り切つて切り替えなきや、前に進めないよね……」

膝を抱えて、独りで悩んだところで何も変わりません。自らの足で、立ち向かつて行動する人だけが変われるのです。後悔を原動力に、理想を推進剤に、身を粉にして成り果てる。目標が高ければ高い程、その必要性が生じます。

仮令たとえ、この先の一生が楽しく平穩で幸福に満ち溢れていたとしても、私が私らしさを貫けるように強く在らねば、怖がりで甘ったれな自我が認めてはくれないのです。完璧でなくとも、絶対に守りたいモノは守りきる。御兄ちゃんのように。御姉ちゃんのように。……そして、未だ帰つて来ない御父さんのように。優しくて強く、不撓不屈で、戦えば勝つ。そう成れたらと思うのですよ。

「果て行かば、『大魔導師』でも『魔王』でも」

第47話：積もり積もりて歪むモノ

side:なのは

さて。何の因果か、拘留されている同年代の子へと訪ねる機会がまたしても巡って来たものの、フェイトちゃんの時とは違って今度は準備万端です。

御母さんに用意して貰った『翠屋』の菓子折りに、緊張感を抱かせないように地味なワンピースとコートで無害さを前面へ押し出し、最後の仕上げとして御母さんから借りたバニラの匂いがする香水を薄く纏えば、誰もが想像するかもしれない喫茶店のモブ娘が完成します。

いやまあ……、また髪を伸ばしてツインテールにすれば解決はするんですけどね。只、最近では自分でも分かるぐらいに眼光もしくは雰囲気が怖くなったなーと感じますので、目立ちたくないならある程度の無個性っぽさを装った方が無難所さんとも思う次第。

因みに菓子折りは2つ有りまして、1つは八神さん用、もう1つが何時の間にか御母さんとママ友になっていたリンディ提督用だったりします。はて、どのような虚々実々が繰り広げられたのかは定かならぬも、若くして提督へ至った才媛さいえんとも渡り合えるコ

ミュカとは一体……。

「行つてらっしゃい、＼なのは」。リンディさんに宜しくね？」

「うん、行つて来ます」

そんなこんなで御母さんに見送られつつ、結界で人目を遮つてからの転移魔法でN次元上に座す【アースラ】の転移ポートへと到着。普段はこの場所での出迎えなんて無いのですが、今回は何故かフェイトちゃんが待つていました。

「……………元氣そうだね、＼なのは」

「その節は御心配をおかけしました。…………とところで、フェイトちゃんは如何して此処に？」

「最近、家に帰つてもアルフしか居ないから【アースラ】で寝泊まりしてて、それで＼なのは」が来るつてクロノが言つてたから……。少し、会いたくなつて」

「Oh……」

何たることでせう。仕方が無いとはいえ、リンディ提督もクロノさんも事件の事後処理で暫く忙しい筈ですし、エイミイさんも以下略。【アースラ】なら衣食住で困ることは無くとも、貴重な冬休みをぼんやりと過ごすのは少年時代の著しい損失ではありませんか。

「フェイトちゃん。もし明日も暇なら、家に来る？ ゲームとか色々有るよ？」

流石に、月村邸にある忍さんのゲーミング・ルーム並みの品揃えとまでは行きませんが、3つのモードで飽きが来ないレースゲーム『ポポのエアライド』やら、改変のしすぎで史実が迷子な無双系アクションゲーム『戦国ASURA2』、無限に続く夏休みから脱出を目指すアドベンチャーゲーム『僕のエンドレス・サマー』など、誰でも楽しめそうなゲームはそこそこ持ってます。

個人的には、『東方Project』シリーズに触れて弾幕教徒になつて欲しさはあるものの……。サブカル未経験の人には絵柄的なハードルが高いと思うので、もう少し段階を刻みたい所存です。

「そういうのはやった事が無いんだけど、私でも楽しめるのかな？」
「ん〜……。そればかりは、やってみない事には何とも」

自らの狭い交友範囲と短い人生経験からの推察によれば、身体を動かすのが好きな人はゲームへの興味が薄い気がするため、まだアニメを見せた方が沼へと沈んでくれそうな予感します。一応、ゲームセンターに行けばダンスゲーム等の身体を動かす遊戯台もあります。小学生の懐事情的に1プレイ100円の価値は重いです。———おつと。今の私が優先すべきは、八神さんへの面会でありました。

「御免ね、フェイトちゃん。面会が有るから、詳細はまた後程に」

「うん。此方こそ引き留めてごめんね。……。ありがとう」

「如何致しまして……？」

こういう時は、「またね」が個人的には好ましいのですけれども、そもそも再会後に心理的距離を詰める時間の殆どを戦闘パートで費やしてしまった為、ビデオレターで細々と交流していた頃からあまり進展が無いんですね、悲しかな。然し、事件は解決したので暫くは……平穩だったら良いなと思います。

さて。

勝手知ったる艦内通路を直進右左折して行くと、目的地に到着しました。一応、八神さんは加害者ではなく事件の関係者として扱われているので、艦内の監視カメラによる位置情報の自動追跡がされる事以外は食堂や洗面所ぐらいには一人でも行けるらしく、今は要人用の客室で寝泊まりしていると聞いていますが、空元気をさせる程度には大丈夫なのか？ それが少し気掛かりです。

『翠屋デリバリー』です。御注文の品を御届けに参りました〜」

「はいはい、今開けるで〜……やのうて。どうぞ、お入りになって下さい」

許可が出たので入室してみますと、流石はVIPルーム。それなりに広いリビングが有り、其処に小洒落たテーブルと椅子が一脚のみ固定されていました。その辺は宇宙船というか、艦船あるあるな工夫ですね。そして着座し、机を挟んで車椅子に乗っている八神さんと対峙したならば、楽しい楽しい会話パートの始まりです。

「喋りやすい話し方で構いませんよ。何せ、今日は御茶会をする為に来ましたから、もっと気楽で居てくれると嬉しいです」

「……………高町さんは、うちの家族が危害を加えたのに恨んだりせーへんの？」

「疑似人格を持ったプログラムが、知らない内に改悪されていた最終形態へと至る使命を果たした。それだけの事ですよね……………？ 坊主を憎めど、袈裟^{けさ}まで憎まず。人だつて間違えますから、至上命令に縛られたプログラムなら猶更です。只そういつた過程を看過して、諦観と俯瞰に勤しんでいたであろうリインフォースさんには思うところも無くは無いのですが、あれだけ撃ち込みましたから溜飲は下がっています」

レイジングハートの量子格納領域から皿やティーカップ、クッキー等を魔法で浮かせながら机上に並べて行きます。こういう魔法使いっぽい魔法の応用は地味に難しく、慣性制御による飛行で習熟していなければ御披露目はもう少し先だつたかもしれません。

「sonだけって……………その所為で世界中に被害が出て、犠牲者もあんなに……………」

「被害の最小化については、反省すべき点は有るかもしれませんが。けれど一番悪いのは何かと求めれば、それはやはり【闇の書】を改悪した誰かだとは思いませんか？」

「……………せやな。それについては同意するんやけど、うちも蒐集行為を看過して黙認していた罪があるんよ。あん時にちゃんと咎めて、説得していれば此処までの被害は……………」

「……………ねえ、〃はやて〃ちゃん」

美味しいはずのクッキーは何処か味気無く、魔法瓶からティーカップに移しただけとはいえ普通に飲めるはずの紅茶は泥水のように。仕方が無かったことを延々と悔いたところで仕様も無く、全て終わりました。私達が終わらせました。だからこそ、細やかながら祝杯を挙げる事ぐらいしか出来無いのです。

「何時までも自虐してないで、前向きな御話しをしようよ？」

くく

side: はやて

ぞくりと、畏れおそを覚えた。下らない。まるで取るに足らず、心底詰まらない。可能性を妄想するばかりの意味がない話を何時まで続けるのだと声音が、呆れたような視線が、無関心さを滲ませる所作が、言外にそう告げていた。

「〃なのは〃ちゃんは……。うちが反省する事も、責任を感じる事も無駄やと思つとるんか？」

「誰が持つてても、破滅を齎すもたらような本が『はやて』ちゃんに取り憑いていた。極論そういう事件でしたし、恐らく管理局も『非魔法文明圏の不幸な被害者』として『はやて』ちゃんを認識していると思います。時に……、そんな認識の是非よりもっと重要で喫緊の難題が控えています。今はそれに備えるべきかと」

決して不幸やない。——そう訂正したくとも、此処で話を中断させると気になる答えが遠退いてしまう為、選択肢としては促す他無かった。

「つまり？」

「【闇の書】の完全破壊。乃至ないし、管理者権限譲渡からの押収という難題です」

「何で………そう思うんや？ もう悪さしとったもんは壊したやろ？」

「頑張れば魔改造できる程度の安全性で、その暴走の被害は惑星規模。『はやて』ちゃんだって【闇の書】に愛着が無かったり他人の物なら、また悪用される前に破壊や押収されて当然だと思ったりするんじゃないかな？」

「そんなら【闇の書】を解析して、最新のシステムとかに変えれば……」

「それ、誰がやってくれるの？ 紹介して貰うのなら仲介者は？ 対価は？」

想定もしていなかった難題を噛み砕いていく度に、最悪が臍気ながら浮かんで来た。これは確かに、自虐するまでもなく前向きな御話しせにや不味いとすら思えるけれども……。敢えて無視する事も出来たのに、被害者である筈の『なのは』ちゃんが指摘して

くるとは不可解で、少し不気味やった。

ほんまに、本当のホントに諸悪の根源であろう改悪を施した人物のみを恨み、シグナム達やリインフォースから受けた攻撃を許せるとしたら、それはもう聖人の域なんよ。「まあでも、何だかんだで杞憂に終わるんじゃないかなーと思います。フェイトちゃんだって、結構なやんちゃをした挙句に条件付き無罪でしたから、はやて」ちゃんも交渉次第では首輪付きで済む筈です」

「ほーん……。若^もしかしなくとも、管理局つて人材が居らへんの？」

「能力が有れば、未成年でも就職OKなぐらいには不足しているらしいですよ？」

「えらい深刻やね」

「平常時は、それでも何とかなるっばいですけど」

「なら、今回みたいな非常時は？」

「決戦兵器か、支援要員頼みなんじゃないでしょうか？ 多分、めいびー」

それって、どのみち被害がばちくそ出るヤツやん……。

「じゃあ、こちらが戦力を提供して、その代わりに減刑やらシステムの変更をして貰えばええんやな？」

「他にも方法は有るかもですが、これはこれで可能性は高いと思います」

其処まで話し切ってから、”なのは”ちゃんは魔法瓶を器用に魔法で浮かせてテイー

カップへと紅茶を注ぎ、一口二口。此方もそれに倣い、皿に並べられたクツキーを適当に摘まんで食べると自分が作るよりも格段に美味しく、そう言えば『翠屋アリバリー』だと告げていたなと思ひ返す。

「流石は、名店『翠屋』のクツキーと言ったところやね。うちも御菓子とか作ったりするんやけど、此処までの味は出せへんなあ……」

「有り難う御座います。御母さん的には生クリームを使った御菓子が得意らしいので、機会があれば寄ってみて下さい」

「……………ほまーに、〃なのは〃ちゃんの御母さんが『翠屋』の店長さん？」

「揺るぎ無く、不動の事実です」

微かな希望も断たれ、目の前が真つ暗になった。スイーツも軽食も美味しいと評判で、海鳴市が誇る名店として三指に入るであろう『翠屋』の娘さんに怪我させたとか、シグナム達は何してくれとんのや?! 剃髪とエンコと鞭打ちと石抱きで済むんかこれ……………?

「あつ、〃はやて〃ちゃんは気にしないで下さい。貸しについては、シグナムさん達に付けておきますので」

「えー……………はい。遠慮無く、たつぷり絞り取って下さいませ……」

序ついででに、家長として不甲斐ない私なめも詰なつて頂なけますと、心が助たすかります。

く

side:なのは

元もと氣になつたり萎しなびたり、話題によつてコロコロと反応が變わる “はやて” ちゃんと御話ごわしは弾はじみに弾はじみ、何時いつの間にか刻限ときげんが迫せまつていました。

「Master, it's time to end.」

「有り難ありがたう、レイジングハート。あのね、”はやて” ちゃん。次はリンディ提督との面会めんかい予定よ定ていが有あるから、名残惜なごのしみしいけど今回はこれにて御開ごかいきです」

「氣にせんでええよ。ほな、”なのは” ちゃんまたなく」

そそくさとティーカップ等を量子格納領域へ押し込み、手をひらひら振り合あつて無事退出しゅつと。いやはや……、かなりの好敵手こうてきしゅでした。単純たんじゆんに、私の話術わがわがというかコミュニケーション能力のうり? 交友かうゆうスキルみたいな物は普通止まりだと自認じにんしていますが、”はやて” ちゃんからはリンディ提督ていとくのように絡かちめ取と——訂正ていせい。包容力ほうりゆうりきの高たかさを感じ取とれます。

アリサちゃんや “すずか” ちゃん。フェイトちゃんの時ときだつて、最初の頃は当たり障あたりのさわりのない会話を探たづね探たづねりでしていたのに、”はやて” ちゃんの場合は旧交きうこうを深ふかめるかの

如く弾みに弾んだのです。

会話とは、打ち解け合う行為。互いを知るといふ事は、互いの個人情報を知るといふ事でもありまして、たった1時間程度で家庭状況や趣味嗜好、魔法との出会い方だの空を飛ぶ楽しさとか、遠慮も忌避感もなく語り合つて知り合つて……。これはもう、知己と呼んでも差し支えはないと思います。

だからこそ、距離を置きたくなるのですけれども。

決して、〃はやて〃ちゃんを嫌いになつた訳ではないのです。只あの調子で話していきますと何時かは話題のストックが尽き、もつと深度が深くて形すら成していかない話題を言語化せねばいけないような未来を察したので、敢えて距離を置くのです。まあ、でも……。長時間の1対1^{サシ}を避ければ、然^さしたる懸念事項ではありませんまい。

……

……

……

「いらつしやい、〃なのは〃さん。今日はもう、御茶は良いかしら？」

「すみません。夕食に影響が及ぶので、御氣持ちだけ頂きます」

予め来訪後の行動予定を伝えていたものの、多忙であろうリンディ提督が艦長室で抹茶ラテ（激甘）を味わいながら待つていた様子から推理するまでもなく、ある程度は見ていそうだなという妙な信頼性を上方修正しました。きつと事務仕事に慣れ過ぎて、そうする事も出来るぐらいには暇で余裕で楽しみたいのでせう。

一先ず、菓子折りを手渡して依頼完了。

あとは……。不要でしょうけど、釘を刺す代わりに遠回しな御願いをしておきます。
 “はやて”ちゃんの処遇は大丈夫だとしても、リンフォースさんを含む『ヴォルゲンリッター守護騎士』の皆様方は色々やり過ぎました故に。

「リンディ提督。私、”はやて”ちゃんと御友達になれました」

「そう。それは良い事ね」

「行く行くはシグナムさんやヴィータさんと和解して、リンフォースさんやザフィーラさん、シャマルさんとも言葉を重ねて……。あまり仲良くなれなくても、互いに切磋琢磨が出来るぐらいの間柄には成りたいなー、といった事も企んでおります」

尤も、その面子の中でまともに撃ち合ってくれそうなのはリンフォースさんぐらいで、シャマルさんは戦闘スタイルが分からないので判断を保留。“はやて”ちゃんは……今後の成長に期待です。

「私の希望、叶うと思いますか？」

「……………このまま無事に終わるなら、恐らくは」

「……………このまま、杞憂で終わると良いですね」

「ええ、本当に……………」

これがフラグと言うよりは、杞憂が杞憂通りだったと言うべきか。その日の夜、【闇の書】から自動防衛運用システム『ナハトヴァール』を消滅させても無限再生機能が本来の復元機能に戻っただけで、また数年後か数ヶ月後にはコード【止まらぬ破壊機構】を生み出す可能性が高いという調査報告書の要約をクロノさん経由で知りました。冬の杞憂なんて、宿題と正月太りで十分なのですが…………。儘なりません。

ともあれ、ある程度の猶予期間は残されていようといまいが、魔導師レベルを上げておくのが無難な選択肢かもしれません。悩んだところで【闇の書】の管制人格たるリインフォースさんや、膨大な資料が眠る『無限書庫』の主と化したユーノさん以上の妙案なんて思い付けそうにないですし、二度目の討伐を敢行せずとも何処かで御役立ちでしょうし。

あれ……………？

何時の間にか、捻じ曲がって仕舞っていたみたいです。諦めに非ず。妥協に非ず。最善を高望みして、やはり届かなくて次善を掴み取り、ならば次こそはと繰り返し返す。そんな理想からの乖離より生じた幸福への渴望が、段々と淡々と非情なる現実世界に馴染んだのでしょうか？

二度でも三度でも幾度でもコード〔止まらぬ破壊機構〕をばばつと討伐して、犠牲者を出さず、そうやって時間を稼いでいる間に解決策を見付けければ良い。そんな風に考えられる程の前向きさと実力を持たずに、どの口が『大魔導師』や『魔王』を指すなんて嘯いたのやら。

ではでは、取り敢えず……。著しい実力不足を補うべく、フェイトちゃんを見做って自己強化系魔法を色々と開発したいと思います。案を出したら、実現可能な範囲でレイジングハートが魔法へと落とし込んでくれるので、それを適当に試して調整すれば完成です。魔法技術の力って凄いですね。

まあ、あの【ジュエルシード】も【闇の書】も失われた魔法技術の産物である為、一概に称賛できないのは複雑な気分ですが。

第48話：今暫く、雪は融けじ

side：なのは

高町家のクリスマスは、少し変わっています。12月23日～25日の3日間は『翠屋』で一番の掻き入れ時であり、クリスマスケーキも売っているので一般家庭のように普通のクリスマスをやっている暇なんて有りません。何より、イベント好きな御母さんが不参加を許容できる筈も無く……。

故に、例年通りなら年末年始の休業期間が始まる26日に豪華なディナーと、甘い物が苦手な御兄ちゃん&ホワイトクリームケーキを作り飽きた御母さんの希望により、甘さ控え目なブッシュ・ド・ノエルを味わうのです。

しかし残念なことに、今回は24日の夜に人類存亡を賭けた大勝負(※二度目)をやった際の世界的被害を鑑み^{かんが}、25日を臨時休業とした影響で仕込み途中であっただろうスポンジケーキが流用されてチョコレートケーキになってしまいました。これはこれで美味しかったです。

因みにサンタさんからのプレゼントは、ゲームソフト『エンゼルメイクライ3』でした。折角なので、フェイトちゃんが遊びに来た27日に御試しプレイをして貰ったとこ

ろ、ミッドチルダの技術レベルと比較すれば画質の荒さが気になれど、ハイスピードでスタイリッシュな戦闘は凄く面白いとの事。これは……、将来に期待を待てますね。

そして明るく曰。

12月28日。まだ正月には早いのですが、クリスマスツリーが御役御免となった代わりに鏡餅がリビングの一角を陣取るようなそんな頃。

ミッドチルダ語の和訳が正しければ、保護観察処分に相当する手続きを経て帰宅が叶った。『はやて』ちゃんから、「食材が有り余って困つとるんよ。デイナーを御馳走するから、『なのは』ちゃんと他に3人くらい呼べへんかな?」といった内容の救助要請を頂きました。やはり、リインフォースさん達の取調べが長引いているのか、拘留期間も延びているみたいですね。

そんな訳で、御姉ちゃんとレンちゃんと晶ちゃんあきらという援軍を引き連れて八神家に訪れました。よく食べるメンバーで構成するなら、レンちゃんではなく御兄ちゃんが適役ではあります。黒一点だと『はやて』ちゃんも御兄ちゃんも気を遣って疲れるでしょうし、髪色と癖つ毛以外は似通っている『はやて』ちゃんとレンちゃんを会わせたかたという理由も有り、オール女子での参戦です。

「お、御姉ちゃん……?」

「おお……。生き別れたかもしれへん妹が居る……」

「いや、似てねーだろ。可愛げとか凶暴性が」

「あんなあ、晶。人様の前では行儀良くするもんやで?」

相変わらず、波長の悪さでは仲が良い二人ではあるものの、最近では目に見えて物理的喧嘩の回数が減っています。これもコツコツと、頭部バインドによる緊箍児きんこじを適宜やっていた成果でしょうね。あとは、口喧嘩も減らしてくれたら最高の高ですが……。

それはさて置き、目論見は成功しましたし食事も美味しく頂いて、あとはゆるりと歓談に興じる程度の穏やかな一日を想定していたのに、まさかまさかの爆弾が投下されるとは思わなそうですよ。

「————ほんで3日間も音信不通になつとつたから、メールや電話の着信履歴が鬼のように来とつてな。1割が病院の先生で、残り9割が友達で……あー、〃すずか〃ちゃんつて言うんやけど、良い感じに誤魔化すのも大変やったわ……」

「……若しかしてだけど、その友達の名字つて〃月村〃だつたりしないかな?」

「あれ? 〃なのは〃ちゃんも知つとるの?」

「知っているも何も友達の一人にして、未だに魔法少女である事を明かしてないので、〃はやて〃ちゃん経由による漏洩を危惧きぐしています」

別に、魔法少女の身バレが基本NGという不文律の話ではなく、有事の際に心配させて祈られたくはないという我が儘が発端ではありますが、「すずか」ちゃんとアリサちゃんとは私が平凡だった頃を知っていて、今も尚その延長線上に居ると信じてくれて、だから魔法少女ではない私が存在できる唯一の友人関係だったりするのですよ。

それに魔法少女である事を明かしたところで、『月村重工』や『パニングス建設』と協力関係を結ぶだの、魔法技術で技術革新といった未来は想い描きませんから、不要な情報開示はしなくて良いと愚考する次第です。

「その事なら心配せんでもええよ。私だって魔法少女の端くれやし、あんな恐ろしいドンパチやっっている現実なんて「すずか」ちゃんに教えたら、不安がって倒れるんとちゃう？　せやから、隠せる間は隠すっていう方針には同意やね」

「や、平時の时空管理局は警察みたいな仕事をやってますので、あんなボス戦が日常茶飯事ではない……………答です」

まあ、その割りにこの広大な宇宙で、且つ第97管理外世界『地球』という辺境の惑星に【ジュエルシード】や【闇の書】といった第一種搜索指定遺失物だの第一種危険指定遺産が集うとは凄まじい奇遇ですね。それ程、危ないモノが巷に溢れているのかもしれないが、そうではない事を祈っております。

「せやったら、あまり無茶振りはされへんかな…………？」

「そこは後ろ盾やら実績によるので、八神家の頑張り次第だと思います」

「私、まだ小学生なんやけどなあ……。コネをこねこねせえと」

「必要だったら、【闇の書】ごと地球を《アルカンシエル》で吹き飛ばそうとする組織だよ？　“はやて”ちゃんは、過激派や48時間働ける人が上司になっても良いの？」

「あー……。うん。そんなら、頑張つてコネコネをこねするわ」

オブラートに包むなら、厄介な隣人です。クロノさんやリンディ提督やエイミイさんなどの個人個人は好感を持てるものの、どんな理屈が有れば管理外世界にも法や武力が及ぶのやら？

『守護騎士』の皆さんは、ミッドチルダの管理世界でもリンカーコアを蒐集しゅうしゅうしていたらしいので、その潜伏先である地球に密入国してでも捕らえるor破壊したい。——までの経緯は飲み込めなくてもいいのですが、【闇の書】の主だからと“はやて”ちゃんにも監視の類を付けるとは極めて傲慢であり、臆病であるとも言えます。

きっと時空管理局は、目の届かない場所にある脅威が純粹無垢でも怖いんでしょうね。その分、懐に入ってしまったえば甘々な感じはするので、今少しの辛抱だとは思いますが。

「そう言えば、“すずか”ちゃんと仲良くなったという事は、“はやて”ちゃんも本好き

だったりするのかな？」

「せやで。『なのは』ちゃんもそうなん？」

「私は漫画が主だから、ちよつと異なるかと。因みに私の御姉ちゃんは乱読家なので、本の話なら其方へどうぞです」

会話の基本は、一対一での対話です。人数が増えたら、空気を読み合つて交互に話し合つたり、話題を誰かに振ることも重要です。

レンちゃんや晶ちゃんは最初の邂逅だけではなく、どちらも料理好きという点でも意気投合して随分と打ち解けましたが、御姉ちゃんと『はやて』ちゃんは8つも歳が離れているのもあって、互いに取っ付きにくそうな雰囲気は漂ってました。ので、私からバトンを渡してターンエンド。その合間に、紅茶を味わっておきませう。

「やっぱり、丸眼鏡は叡智の証なんやね……。美由希さんは、最近何を読みましたか？」

私は『レプリカント』の上巻とか、『ハリーポッター』シリーズなんですけれども」

「最近だと、『奈良梨取考』っていう現代の奇書と、ライトノベルの『月の盾』かな。『ハリーポッター』は英語版を読んで、『レプリカント』は気になっていて下巻が出るまで待っているところだよ」

「おお、ライトノベル。中学生以上じゃないと、読むのは難しいって噂の……」

「如何だろう？ 日本語版の『ハリーポッター』を読めるのなら、読解力は足りていると

思うよ？ 個人的な御勧めになるけど、『サイキック少女R』や『迷探偵・夢水清志郎事件ファイル』だったら小学生高学年ぐらいからでも読める程度だし、それで物足りなければ有名所の『チノちゃんの旅』とか『灼眼のシャナ』辺りから慣れて行くのも面白いんじゃないかな」

「ふむふむ、参考になります」

その後、順調にハブられたまま御開きの時間となりました。……いえ、構いませんとも。私は御姉ちゃんと違って話せる機会が多く、むしろ「はやて」ちゃんの会話を具ついでに観測できたのは僥倖でした。

延々かつ滔々とうとうと話せて、会話を趣味だと言つてのける生粹ワード・プロセツサーの言葉使い。要するに、御母さんやリンディ提督と同じタイプですね。会話を活力へと変換できる特殊能力がある為、会話よりも共同体験に重きを置く私との相性は微妙です。流石に1時間ぐらいの対話なら普通にやれますが、それ以上はオセロだの映画といった娯楽が無いと飽いてしまいますし、此方側こちらの話題が尽きてしまう事にも心苦しく感じます。

ともあれ……。1時間少々で切り上げたり、3人以上で話すようにすれば解決する問題ですから、当初の方針通りのままで問題は無さそうですね。

おっと、少しばかり意識が飛んでいました。

久しぶりの平穏な時間でしたので、感慨深さのあまり回想するに至ったのです。それではええと……。自室で寛くわろいでいる時にクロノさんから連絡が来て、空間モニター越しにリインフォースさんと話し合うことになって、『管制融合騎』としての躯体や機能の初期化依頼をしてきたんでしたっけ？ 取り敢えず、魔砲を撃ち込めば正気に戻るか試してみませう。

くく

side:クロノ

本気なのか、それとも脅しなのか。あの「なのは」が無言でバリアジャケットを展開した後、余剰魔力の塊である桜色の円環や翼すらも顕現させるとは、如何どうやら聞くに堪たえなかつたらしい。

「> クロノさん。今からデイバインしに行くので、準備を御願います <」

「> 待て。経緯は説明するから、少し待ってくれ <」

結局のところ、だ。依然として脅威は去っていない。【闇の書】の状態を一番把握して

いるリインフォースが言うように、数ヶ月もしない内にコード【止まらぬ破壊機構】を自動的に復元する可能性が高く、時空管理局の技術スタッフからも同様の見解がされている。

それ故に、詳細な解析や修復手段の確立といった奇跡を待つよりは、確実に無害化できる時に無害化した方が良い。それが皆にとつて無難で、安全で、次に繋がる方法である。……そう、門外漢である僕ですら思うのだ。

因みに「なのは」へ依頼した理由については、リインフォースによる希望と、僕自身が非常対処要員として控えておかねばならない為、こうするに至った。

「> どちらにせよ、性急な判断です。最低でも数ヶ月は大丈夫だと予想しているなら、一ヶ月ぐらい思い出作りをした方が良いのではないでしようか？」

「> 予想は予想に過ぎないし、この機会を逃せば手遅れになる可能性がある。どうか、理解して欲しい」

「> ……………リインフォースさん。次もまた暴走するとして、あの時のように無限に等しい魔力を使えますか？ 出力から察するに、切り離れたコード【止まらぬ破壊機構】の方が独占していて、『アルカンシエル』と共に花火になったと思っっているのですけれども？」

「> 推察の通り、核たる『永遠結晶エグザミア』は喪失した。だからこそ、復元速度

は緩やかなものになると予想されるが、どのみち侵蝕変換魔法《イルミンストール》が発動されてしまえば大差は無い。そうならない為にも、———

「> じゃあ、何とかありません <

何……?」

「> 何とかなるのです。侵蝕変換魔法は、あまりの派手さで広範囲かつ理不尽な魔法のように見えますけど、干渉力自体はそれ程でもありません。その証拠に、バリアジャケツトを徹せていませんよね? きつちり周囲の魔力素を抑えていれば不発になるので、更に弱体化しているのなら尚の事。あとはフェイトちゃんとアルフさんと、出来ればクロノさんも手伝って頂けますと万全です <

「> ……仮に、勝算通りに勝てるでしょう。それで君は、一般人の犠牲者を増やす可能性が有つても、思い出作りをした方が良いと思うんだな? <

「> 一ヶ月以内に復元する可能性が低いなら、自分の家族を大切だと思えるなら、そして私が「はやて」ちゃんの立場であるなら、そう判断します。そもそも、「はやて」ちゃん抜きで話を進めたから拗れているのであって、「はやて」ちゃんが納得して**いれ**ば否**いな**はありませ**ん** <

納得する筈が無い……。主従関係にある『守護騎士』でさえ家族と言つてのける彼女が、リインフォースの初期化に同意するとは思えなかった。だからこうして秘密裏にや

れないかと、遺憾ながら自分らしくもない画策をしている。

最後の短い一時すら、考慮に値しない程の最悪を齎した古代遺産。

そう判断されるだけの罪業を、【闇の書】は積み重ねてしまった。把握しているだけでも3つの惑星を食らい、幾万幾億もの犠牲を生み、1隻の次元巡航船と将来有望な提督を失わせた厄災。——父さんを殉職させたという私情を挟まずとも、無関係な第三者に意見を求めれば迅速な破壊を望むだろう。何より、全てを記憶しているリインフォースが終わりを望んでいるのだから、時空管理局の立場としては止めるまでもない。

「> クロノさん、リインフォースさん。残される『はやて』ちゃんの事を、ちゃんと考えてあげて下さい。若しもの時は何とかありますし、不安なら私と検証してからでも遅くはないのでは？ 大体、お別れ会すらしないで初期化したら如何なるかって想像しましたか？ <」

「> それは…… <」

「> きつと、『はやて』ちゃんは悲しむでしょうね。『守護騎士』と【闇の書】という貴重な戦力を抱えた人材が、非協力的になればマシな方で、失意のあまり失踪したり悪の道へと走ったり……。まあ、あまり考えたくない可能性ですから、穏便に円満なる解決策を選んだ方が良いと思います。他ならぬ、『はやて』ちゃんの為に <」

（ ）

side:なのは

我、成せり。想定よりも弁舌に熱が入ってしまったが、それはそれで氷雪系魔法使いと達観系クルル従者の心を動かせたようです。その代わり、明日は冬休みだということに早起きして検証実験をする羽目になったものの、付き合ってもらおう予定のフェイトちゃんに冬の思い出を増やしてあげられると思えば、気分も前向きになれそうです。

何せ……。予定の予定を尋ねてみますと、鍛錬とか日本的常識や漢字の勉強とか、情報収集がてらの読書&ネットサーフィンといった相変わらず真面目な事ばかりでしたから、魔法の結合阻害どころではない不思議体験はかなり刺激的なイベントになるでしょう。

あとは「はやて」ちゃんに情報を垂れ込み、後日リインフォースさんが八神家へ帰宅した時にでも絞ってもらおうとして、他には……。まあ、初詣までの二日間ぐらいは空けたい良いかもですね。これまでと言うか、今年だけはととてもとても大変でしたから、またーりと平穏を享受しても許されると思います。

叶うのなら……。最短でも、せめて雪が融けるまでは。

炬燵を囲んで赤黒七並ブラッディセブンべをしたり、庭で羽根突きをしたり、シミュレータールームにて模擬戦と洒落込んだり、2月には友チヨコを送り送られたり、のらりくらり。そんな風に過ごせたらなあど夢想する次第です。

【補完編】

第49話：甚大なる余波

side：ギル・グレアム

「犠牲に始まり、犠牲に終わる」——若しくは「後悔に始まり、後悔に終わる」とも言い換えられるだろう。長く長く続いた復讐劇は被害を増やしながら、然れども死者数の桁は変わらず、思ったよりも呆気無い終幕となった。

11年前。時空管理局は、【闇の書】の確保に成功していた。

二度目の対処という事もあり、『管制人格』すら取り込む第二形態への移行時に対【闇の書】特化型封印魔法を撃ち込み、機能停止を確認。それから辺境の無人惑星に特設した保管庫へと移送する最中、封印を食い破った【闇の書】が再起動を果たしてしまう。

その時、護送を担っていたクライド提督が乗艦する『エステリア』は艦内から侵蝕され、数分と経たずに航行不能へと陥る。そして折悪しく《アルカンシエル》を搭載したままであった為、火器管制システムの制御権を死守すべく彼は退艦せずに一人で抗

うことを決意した。

船団を組んでいた僚艦にはリンデイ提督が乗艦する『アースラ』と、私が乗艦する『ケストレル』。その何方かにも、必殺の砲口を向けまいとして……。私は止むを得ず、彼の要請を受け入れる形で【闇の書】ごとクライド提督を——『エステイア』をへアルカンシエル』によって消滅させたのだった。

つまり、妻であるリンデイ提督の目前で、夫のクライド提督を殺したのだ。

「クライド提督は最善の判断を下し、貴方は最善の行動を果たしたのです」。誰もがその様に慰めてくれた。一番悲しんでいる筈のリンデイ提督も、同僚達も、部下も、査問会も、世論も、長年連れ添ってくれた使い魔からも……。私を罵倒してくれるのは、私自身とゴシップ記事ぐらいであった。

将来有望な若者だった。次世代を担う提督だった。それなのに、危険が伴うと承知しながら樂觀視し、少しでも功績が高くなるようにと封印状態の【闇の書】を託してしまふとは!!

己を恨んだ。【闇の書】を恨んだ。そして次に備えるべく、手を尽くした。クライド提督が殉職しても、あの程度で【闇の書】は滅びない。この教訓は、惑星を覆い尽くした

状態のヤツを《アルカンシエル》で消滅させた一度目の対処から得られた物である。

故に、近隣の次元世界に不自然な魔法の痕跡が無いかを調べ続け、その合間に切り札となる魔法や兵器の開発に対して予算を確保したり、私財を投じたりもした。そして何よりも、強力な魔導師を探し求めた。だが奇跡的に「闇の書」が見つかりこそすれ、これぞと思う魔導師はなかなか現れなかった。

やがて3年の月日が流れ、4年目が過ぎ、5年目が過ぎ……。赤熱した復讐が刃となり鋭さを増していく10年目。「闇の書」の主である「八神はやて」が事故によつて両足に重度の障害を負い、両親もその事故で亡くなった為に天涯孤独となる不測事態が起こつてしまう。

可哀相に。しかし好都合でもあった。

何時かは「闇の書」の人柱となり、消えてしまう少女である。彼女を知る者など少ない方が良い。——そうした思惑の下、戸籍を改竄して彼女の遠戚に成りすました私は援助を行った。財産管理に住宅のバリアフリー化工事の依頼、通信教育の申し込みからパソコンの手配に、彼女が独り暮らしに慣れるまで家政婦として使い魔のリーゼロッテやリーゼアリアを送った事も幾度か。

そして来たる11年目。捜索指定遺失物【ジュエルシード】が絡む事件と、高町なのは〃という傑出した魔導師の誕生。それから3ヶ月程で【闇の書】が休眠状態から目覚め、更に半年後には【闇の書】を暴走させていた元凶を打ち砕くに至る。……こうも凄まじい、激動たる1年は滅多に無い。だからこそ感慨深く、ふと振り返ってしまうのだ。

「もつと強引にやれば、犠牲は減らせただろうに」——と。

初めから、【闇の書】の主に対する救助など考慮していなかった。主を捕らえても【闇の書】は新しい主を探しに旅立つという選択肢を採るだけで、封印する為には暴走状態を待たねばならない。そして暴走状態の第一形態は、【闇の書】が主と『守護騎士』を取り込むことで発動する。

つまり合理的にやるならば、護衛役の『守護騎士』が一人の時を狙って、八神はやて〃に強襲部隊を差し向け、強制転移魔法で無人惑星へと飛ばした後に残り3人の『守護騎士』を誘き寄せてこれを破壊。【闇の書】に還元させれば暴走状態へ移行するものと予想されており、連戦にはなるものの其処で決戦をすれば被害の局所化は可能である。

だが、実行するには至らなかつた。彼女を7年間も見守り、1年少々の援助をした関

係性でしかなくとも、最期まで幸せな時間を過ごせるようにと願ってしまったからだ。

……

……

……

当初の想定通り、“八神はやて”が死んでいれば嘆きこそすれ悔やみはしなかっただろう。然れど、喜ばしいことに彼女は生き延びた。こんな結末になるのであれば、名も知らぬ統計上の人々だろうと見殺しにしたのは良心が痛む。痛むが……、細やかな傷でしかない。

冷徹に遂行し、奇跡的な展開は訪れず、彼女の最期を恐怖と涙で閉ざし、「闇の書」は永久的に封印され続ける。……そのような、可能性には一番有り得た未来を思えば、この程度の事など代償としては軽いとすら思えた。

悔やんでしまうのは結果から見出せた最善のルートが有るからで、真に恨むべきは狂い出した【闇の書】である。あの忌まわしき存在さえ無ければクライド提督は死なず、今回の事件どころか3つの惑星と幾兆にも及ぶだろう生命も失われる事は無かった。

人は、近しく親しい人を守れない時がある。

それなのに如何して、隣人愛すら抱けぬ他人を大切に思えるのか？

私の正義は、変わり果ててしまった。クライド提督は実力・実績共に申し分無く、同

僚としても頼もしい存在であったが故に復讐を為し、*“八神はやて”*は前向きで向上心もあり、将来が楽しみな孫娘のような存在となったが故に計画を曲げた。最早、愛のためには動けない。愛こそが、私にとっての大義になってしまったのだ。

これからも私は、彼等が愛する世界のために正義を為そう。老骨に鞭を打ち、悪を憎んでこの身を焦がす。そして何時か、砕け散るまで……。私の正義を為してみせよう。

（ ）

side : 火神かがみ
龍華りゅうか

東京都新宿区。その一画には防衛省が存在し、その敷地内に特別機関の1つである【情報本部】が置かれている。日々、国内外を問わず情報収集や情報の分析・精査・分類のみならず、防諜・諜報活動も抜かりなく、国防に関する情報を国民向けに発信したり、部隊支援のために情報提供を行ったりもする。

兎にも角にも、日頃からそこそこ忙しい職場ではあるが有事になれば激しさを増す。それはもう、年末年始休暇だの健康的な睡眠時間という概念が吹き飛ぶぐらいには。

特に今回のような、世界同時多発的に未知の大量破壊兵器だか天災だか分からない事象で凄まじい被害が其処彼処に生じているなら、原因究明の他にも災害派遣に必要な部隊及び救援物資の割り振りだとか、空自や海自の方とも輸送面での調整をせねばならな

い。……何故なのだろうね？ 緊急災害対策本部なんて大層なモノが設置されたのなら、関係閣僚の皆さまが頑張ってくれる筈なのだけでも。」

「火神陸将……。まさか、お休みになられてないのですか？」

「ほんの二徹目だよ、武井一佐。特殊部隊の訓練と比べれば、これしきの事は温いぬるのなんの」

「其方が抱えている業務、幾つか引き受けても？」

「これは譲れないな。優しい君には、愚鈍なる政治家や官僚共を動かす武威ぶいが無い」

本当に、彼奴らは腰が重いし頭も固い。金と物資さえ融通してくれば現場は円滑に回るのに、口を出してくるし説明も求めてくるのだから人手が取られる。平時ならば構わないが、今は有事である。況ましてや未知なる脅威に晒されたというのに、準戦時体制への移行すら検討していない。全く……。平和主義である事と無防備でいる事は別物なのに、困った事だ。

「……分かりました。然し、三徹目をするなら御孫さんに連絡しますので悪しからず」

「武井くん。親戚でもない女子中学生の連絡先を知っているのは、かなり不味いと思わないかね？」

「私の外聞を犠牲にして、火神陸将の健康が保たれるのなら安い物です」

「ふむ……。一理あるから悩ましい」

可能性としては著しく低いが、仮に私が過労などの症状で倒れたら真つ先に部下達と統幕僚長殿が困るだろう。他にも代行している調整案件が滞り、愛しい孫娘の「綺羅々」にも呆られて叱られるに違いない。さりとて、此処で少々の無茶をしなくて何時するのか？

【情報本部】ですら兆候を察せず、看過したかもしれない結果がこの惨事だ。日本だけでも関連死を含めた死者数が二千人を超え、後遺症なのか肉体的に老いたり精神的活力を失った被害者は更に十倍以上とも推測されている。

支那や露西亞、米国や英国でも被害が生じた事から防ぎようが無かつた事象または事件かもしれないが、本当にそうだったのかすら分からないのだから人助けも兼ねて無茶をしていたのだけれども……。流石に、アラフィフという年波による老いは少しずつ感じており、体力の回復速度を考えるなら三徹目は避けた方が良い。

「宜しい。夜になったら仮眠を取ろう」

「いえ、普通に夜は寝てください。じやないと副本部長が過労で倒れます」

「普通の人は、普通の仕事量をこなせば十分だと言つてはいるんだが……。まあ、理解した。糸も適度に緩めなくてはな」

私自身が鋼線でも、一般的な幹部や隊員の強度など釣り糸程度しかないのだから、率先垂範をしたところで誰も付いて来れず早々と切れてしまう。また今回の被災地で

は、よく見かける動植物や人間の干乾^{ひから}びたような変死体を実物なり写真で見た連中がメ
ンタルをやられ、現場も後方も作業効率が低下しているのだから尚のこと大事に運用せ
ねばならん。

「時に、茨城県沖の発光現象や爆発、それと静止衛星軌道付近で発生したガンマ線バース
トらしき現象に関する調査は如何なっている？」

「沖合については、百里基地のスクランブル機から管制塔に『海上付近でカラフルな閃光
が見える』と報告されていたようですが、被災地の状況確認や対領空侵犯措置などで後
回しになったそうで、気化爆弾のような爆発の後に確認を行ったところ痕跡は無かった
との事。海自も似たような理由で、たまたま付近を航行していたイージス艦がレーダー
上で巨大な物体を捕らえたものの、爆風と津波によってレーダー機能が損傷し、先行さ
せていた哨戒ヘリも爆風によって墜落。現在も、乗員を捜索しつつ現場調査を継続して
います」

「……………頭が痛い。全国的な被害で連携が取れなかったとはいえ、もう少し臨機応変
な判断が出来ただろうに……………」

取り分け、即応して海上確認を容易にできた筈の空自がやらず、海自に任せてしまっ
た点が解せん……………。当時は、指令を発するべき中部航空警戒管制団入間基地が隊舎を中
心に壊滅的な被害を受け、且つ^かあらゆる通信網が寸断されていたので独断専行をするし

かなかったという免罪符が有るものの、よりもよって世界中でも日本近海でしか発生しなかった現象を見落としたのだ。

情報本部長の立場的には、唯一の情報を持つ価値の重さについて百里基地司令に講釈して差し上げたくもなるけれど、使える時間と人員が惜しいので今は堪えておこうと思考を保留させる。

「それから宇宙の件については、情報の確度が低いため再調査中です」

「具体的には？」

「その……。国立天文台からの情報によれば、数分間だけ未確認の宇宙船を見つけ記録したらしく、フエイク映像か如何かを調査しています」

「なるほど、宇宙人による関与の可能性とは何とも……。これが本当で、一連の出来事が攻撃だとしたら妙だな」

「占領するにせよ殲滅するにせよ、中途半端ですからね。引き続き、情報収集を行います」

「程々で頼む」

「了解しました」

未知ばかりが増えていく。それでも国防の一端を担い、家族に平和を享受してもらいたいと願う身としては、此処が踏ん張りどころだと考えている。今回の件で各国は間違

いなく軍備の拡充を図るだろうし、宇宙船の情報を知っている大国なら草案程度でしかなかった宇宙軍の創設も早めるに違いない。

「軍靴の音が聞こえるとは、こういう事か……」

平穩が遠退き、忙しさを増す。我々の——無駄飯食らいの本領が発揮できるとは雖も、宇宙戦争など不毛すぎてやりたくもない。攻めるには遠く、守るのは対策が困難で民間人への被害も出てしまうし、仮に宇宙戦争が無くても軍事バランスが変動するのだから、仮想敵国同士の緊張感是否が応でも高まる。

取り敢えず、当面の敵は予算獲得の障害になる財務省と左翼共である事は明白の事実。故にこそ、私は国防の責務を果たすために行動を起こすべきで、その前に後顧の憂いを断たねばならなかった。

「やあ、綺羅々。先ずは落ち着いて聞いて欲しい。……うん、『また』なんだ。済まないね……」

携帯電話越しに残念そうな声が聞こえる。有事でなければ、年末らしくゆったりと家で過ごせたものの仕方無し。話の序ついでで、追加の着替えを持って来てくれるらしいので、夕食分の弁当も依頼しておく。……さて、憂いは解消した。あとは為すべき事に専念するでしょう。

第50話：波及せし変化

side:なのは

12月30日。本日を含めれば今年もあと2日ではありますが、あのクリスマスの変によって世界中が自粛モードに包まれており、アリサちゃんや「ずずか」ちゃんからも御誘いが無くて要するに暇です。

そんな訳で、本日はミッドチルダの演習場へと御邪魔しています。

以前、クロノさんやリインフォースさんに長広舌ちようこうぜつを揮ふるったからには、大言壮語ではない事を実証する必要があるのに対して、暇な私にとっても希少なオーバーSランクの戦闘データが欲しい管理局にとってもwin-winな機会です。更に地球では有り得ない程の近距離にある2つの惑星が、青空越しにくつきりに見える異世界情緒も新鮮さがあつて素晴らしく、カメラを持って来なかった事を少し後悔しました。

「> 最終確認をする。初めは慣らしがてら5分間程の模擬戦を行い、それから本試験へと移る。試験内容は、「なのは」の対抗魔法による侵蝕変換魔法《イルミンスール》の無効化。模擬戦の相手はフェイトが担当し、本試験ではリインフォースと融合した「はやて」に代わる。……各員、準備は良いか? <」

「何時^いでもどうぞ、です」

「同じく、何時でも行けます」

「私とリインフォースも、準備オーケーです」

ところで、何故に5分間程の模擬戦を挟むのかというと単にヤル気の問題です。平時でも展開は出来ませけど、出力も範囲もパツとしないんですよね……。やはり、魔法は想いを乗せてこそ魔法足り得るのでしょう。

そう言った屁理屈を押し通した結果、仮想敵役にフェイトちゃん、侵蝕変換魔法を再現できる「はやて」とリインフォースさん、責任者と監視者を兼ねたクロノさん、データ収集役のエイミイさんによって実現するに至りました。あとは何処からか聞きつけて来た『自称ファンシー号』ことシャリーも居ますが、最終的に「レイジングハート」の改良へと生かされるので気負わず頑張りたい所存です。

「“なのは”と模擬戦をするのは、久し振りだね……」

「うん。でも今回は御遊びみたいなものだから、フェイトちゃんも遊ぼうよ」

「遊ぶって、どんな風に？」

「それは勿論——」

『弾幕(づい)っ(づい)』風にですとも。

く

side : はやて

融合状態のリインフォースと視覚を共有し、よく晴れ渡った異世界の空を見上げる。其処には螺旋や波形、幾何学模様を描きながら飽和射撃されるカラフルな魔力弾に、流星群のように降り注ぐ魔力砲撃の数々。眺める分には、あの決戦の日と変わらない程の火力かなと思えるものの、些細な違和感がそれを否定する。

「何やろ……。攻撃は凄まじいのに、あんま怖くないよーな？」

「——あらゆる魔法の内包魔力量が少なく、主“はやて”の感覚的には脅威度が低いと判断しているのだと思います ——」

「せやけど、ペしペし当たりたくはない物量やね」

「——あの程度の弾速と密度なら、回避するのは難しい事ではありません ——」
「いや、あないな曲芸飛行したら、即行で気絶するか吐く自信があるんやけど……」

“なのは”ちゃんが豪雨の如く弾幕を形成し、それに対してフェイトちゃんは飛んで跳んで回って落ちて昇って——と縦横無尽の機動で魅せる。これを遊びやと言つての

ける領域に達するまで、元一般人である私は至れるのやろかと先行きに不安を抱いてしまふ。特に「なのは」ちゃんなんて、あれで魔法少女歴が約8ヶ月らしいのでハードルが高いのなんの……。

「—あの機動は、切り込もうとするから速く激しくなるのです。主「はやて」が距離戦をするなら目指すべき機動となりますが、何方かと言えば「高町なのは」の方が理想に近いのでは？」

「そやね。前衛ならシグナム達が居るし、私が後ろから支援攻撃をした方がバランスはええと思つとるよ」

只、参考にするのは位置取りだとか偏差撃ちなどの常識的な部分であつて、あの慣性を無視した出鱈目な機動ではない。フェイトちゃんやシグナム達も最速で飛ぶなら身体を水平にして飛ぶのに、「なのは」ちゃんだけは何処だろうと向いたまま最速で飛べて、何処へでも不可解に曲がれるのである。

だから一対一では、相手がどれだけ背後を取ろうと向き合つて撃てるし、その不毛さを嫌つてまともに対峙すれば「なのは」ちゃんが得意とする中距離戦へと持ち込まれ、圧倒的な保有魔力量と火力で墜とされる……かもしれないと想像できるぐらいに確立された戦闘スタイルは、憧れこそすれ真似する気は皆無やつた。

そもそもの話、両足のポンコツ具合を解消せな姿勢制御すら難しく、飛ぶだけでも足

がぶらつくとか戦闘機動なんて以ての外ほかやろ。せやから今は、完治するまで大事にせにやあかんちゅーわけです。

「ところで、私もあんな風に光る装飾みたいな魔法つて使えへんかな？」

決戦の時よりは控えめやけど、現在の「なのは」ちゃんの頭上には三重の光輪、背中には四対八枚の光翼が生えて、更には腕輪と足環も桜色に輝いていて見栄えが良く、魔法少女と言うよりは天使チックでありながらも最終兵器染みた火力を出せるギャップもまた素晴らしく、これだったら真似したいし真似できそうとも思える。

「――可能ですが……、あれは余剰魔力の貯蔵と循環機能を備えた物であり、〔闇の書〕自体がそれを担っています。また被弾面積が増え、日常的に並列思考の負荷を要するの
で推奨はしません。――」

「そんなら、写真を撮る時ぐらいにしとこかな？」

「――それが宜しいかと。――」

やがて予定の5分が過ぎ、桜色の暴風雨と金色の閃光が落ち着いた頃には気合十分になった「なのは」ちゃんと、汗だくに成りながらも好戦的な笑顔を浮かべるフェイトちゃんが空中で静止しており、名残惜しそうに見つめ合っていて――

あの二人だけの世界へ、割って入らんといかんの？

フェイトちゃんに御首級を狩らされへん？

せや、この場合は責任者殿に進行を促してもらえば……。

——瞬時に解を導き、クロノ執務官へ熱い眼差しを送ると虚空に十字架を切られてしまう。おーけい、突撃合図やね？ 無論、権力的に逆らえないので任務を果たすべく飛行魔法を発動させ、そおつと静かに二人がいる空域まで近付いて行く。

「有り難う、フェイトちゃん。次の本試験はちよつと危ないから、地上で待つていた方が
良いよ」

「……そんなに、凄い対抗魔法を使うの？」

「多分だけど、通常の飛行魔法だと出力不足になるから、保有魔力とカートリッジのみの魔力供給に切り替えないと墜ちちやうかもだね」

「それなら、休憩がてら地上で待機しておこうかな……」
「うん。それが無難だと思う」

そう言い切った「なのは」ちゃんは、罰が悪そうな笑みを浮かべながら此方へと視線を向ける。きつとラインフォースなら、事前説明をしなくても瞬時に対応するだろうという信頼も有るんやろうけど、魔法初心者的心臓には悪いので勘弁して欲しい。いきなり落下しだすとか、高所恐怖症になるで普通……。

「……という訳なので、準備が出来たら何時でもどうぞです」

「リインフォース、高度維持は最優先で御願いな？」

走馬灯を見るのは、交通事故ったあの一度だけで十分なんよ。

「――飛行魔法を噴進式へと変更。魔力消費量の悪化と、高度微調整の為に多少上下しますが、これなら」AMF《環境下だろうと墜ちる事はありません――」

「その」AMF《環境がよ一分からんけれども、墜ちなければ良しっ！」

「――……では、侵蝕変換魔法を発動します――」

慣れていない筈なのに、身体は覚えているかのよう^に魔法が行使される。手を触れずとも【闇の書】の頁^{ページ}がパラパラと捲^{めく}られ、「イルミンスール」を内包する該当頁を抜き出す。その後は、該当頁にセットされている魔法陣を展開して魔力を流し込みつつ、対象を指定すれば発動………：「せーへんな？」

魔法陣が出ていて魔力も吸われとるから不発とはちゃうんやけど、何時まで経っても「なのは」ちゃんは侵蝕されずに輝いている。

「――ふむ……。干渉済みの魔力素で空間を満たし、自身もそれで覆うとは力業だが効果的でもある――」

「その代わり、滅多に使わない」AMF《が併用できないのと、周囲の味方も魔力素を取り込めないので苦しくなっちゃうんですが、そこは適宜プスッと刺せば解決しま

す

嗚呼、あの帯状の3秒魔力チャージ……。アレをやられると疲労感みたいな魔力不足感がポンつと無くなるので、感覚おかしゆうなるんよ。出来れば、やらずに済ませたい処やねえ……。

「……で、結局のところ《AMF》って何なん?」

「—《Anti Magic link Field》の略称です。古代ベルカ語だと、《ヴァイン・デス・リタートウエンス騎士殺しの風》。効果範囲内におけるAAAランク以下の魔力結合や魔力効果を阻害するだけでなく、出力によつては魔法の発動すら困難になります。元から戦乱の時代が長かったのもありますが、この魔法の登場によつて古代ベルカは覇権を失い、現在は小国の1つにまで衰退しました —」

「ほーん……。聞いた分やと、今の対抗魔法よりも《AMF》の方が強そうな気がするけど、ちゃうんか?」

「それに就きましては、高町なのは」の方へ」

〃

side:なのは

空間モニター越しも含めて6人分の期待の視線を向けられてしまっていますが、まあ普通

は《AMF》で十分な気がしなくもないですよね……。デメリットにさえ目を瞑れば。

「仕様上、敵味方の区別なく魔法を減衰または不発にするのと、広範囲かつ高濃度の《AMF》は燃費が悪いので使いたくないです」

「> 一応、管理局の装備で《AMF》対策も出来なくはないが、対抗魔法が有るなら必要性は低下するな <」

「そしてこの対抗魔法……というか対抗手段は、周辺の魔力素に干渉していれば良いので、個人的には負荷が少ないのもメリットだったりします」

時に、クロノさんの補足により無用の閃きが脳裏を過りました。古代ベル力を衰退させた一翼を担う《AMF》を対策できて、数多の次元世界を管理しているのも管理局。あと何時だったかクーノさんが歴史解説してくれた記憶が確かなら、ミサイルや大砲のような質量兵器も禁じているんですしたっけ？ おやおやおや。しかし、本題とは関係無いのでスルーしておきませう。

「> だが若しも、コード【止まらぬ破壊機構】が君の干渉力を上回ったり、中断せざるを得ない場合は如何する？ <

「アレはそんな面倒な事をするぐらいなら、力押しで攻撃して来ると思えますよ？ あと中断するのは、私が死にかける時なので考慮しません」

「> いや……、それはあまりにも……………」 <

二度も左手をバイバイしかけて、『ヴォルケンリッター守護騎士』の前衛3人掛かりで墜とされた時なんて臨死体験をしました故、もう何も怖くないのですよ。

「クロノさん。まさか、百戦百勝する見込みが無いと戦えないんですか？」

「> 断じて違う。運うんぷてんぷ否天賦を試すなら、先ず人事を尽くしたいだけだ <

「その人事を尽くした結果が、あの決戦だと？」

「> あれは……………」 <

「ミッドチルダで暴走していれば、もつと戦力が投入されていたでしょうね。遠いから、管理外世界だから、でも無視できないから、あの程度だった。…………そんな風に、あの程度で良いと見くびる程度なら別に良いではありませんか。仮令たとえ、この程度でも。きつと私達はやれますし、そもそも活動周期を加味するなら御別れを一ヶ月どころか一年延ばしても大丈夫な気もしますけど」

だから、どうか折れて下さい。

「> ……前向きに検討する。それと僕達は、辺境だからと見捨てたりはしない <」
「ええ、クロノさん達はそうですね。有り難う御座います」

その後は特に検証する事も無かったので、“はやて”ちゃんの魔法練習がてら標的役をやったり、体験学習として普通の《Divine Buster》を防いでもらったりと色々やりました。然し分かつてはいましたが、堅固しかです。ね古代ベルカ式。単純に、私の戦闘データを蒐集済みなので対策しているんでしょうけど、初弾限定とはいえ耐えられてしまうと少し悔しい思いがあります。

もつとカートリッジを使って火力を上げるか、魔力弾を交えて総合火力で押し切るか、それとも上位互換の魔法を編み出すか。はてさて、どっちの方が良いのやら？ 近い内にやってみたいものですね。無制限で自由な模擬戦を。

第51話：主観的既存概念の転回

side:はやて

元旦が過ぎ去り、既に二桁を超える模擬戦の御蔭で魔法にも慣れてきた頃。久々に、ふて腐れる程の感情を持って余していた。

「いやー、分かつとつたけど清々しいくらい勝てへんなく……」

「あらゆる手段を問わないのであれば、非殺傷設定を外した《ミストルティン》で石化させれば勝てますよ?」

「流石にド外道が過ぎるやろ、それは」

「そうですね。故に我が主は勝てないのではなく、自ら負けているのです」

「……『正々堂々』、『勝てる方法』、検索」

「それは勿論、鍛錬あるのみかと」

「あまりにも正論やけど、私は其処まで戦闘スキーちゃうんよ……」

「はい。存じております」

自宅のソファでリインフォースのむちむち太腿枕を堪能しつつ、うだうだと思考を巡らす。淑女としては端なくも、^{はした}「なのは」ちゃんやフェイトちゃんにも模擬戦で連戦

連敗中なのだから、幾ら平穩愛好家だろうと心に来る物がある。

まあ……、連敗した御蔭かフェイトちゃんからのヘイト具合が下がり、今では友達友達である事を認めてくれているような気もするので怪我の功名こそあれど、やはり同年代が相手なら五分五分で在りたいなとも思うし、せめて手加減されずに戦えたらとも思う。

あの二人が戦う時だけ、やたら拘束魔法が飛び交つとるから嫌でも気付くんよ。あと魔法の組み合わせ方とか、偏差射撃の精度も上げつないし。

「……………おつ、ええこと思い付いたわ」

「何でしょうか？」

「経験の差はしやらないとして、装備の差は何とかなる」

「それは若しや……………」

「せやで、『カートリッジ・システム』。出来れば『なのは』ちゃんみたく、大量に撃てるやつがベストやね」

『永遠結晶』とやらが内蔵されていた頃は不要でもな、あの最終決戦でコード【止まらぬ破壊機構】と共に消失しとるし、今となつては魔力の貯蔵&循環しかやれんのなら『カートリッジ・システム』は有用になれる。……………てか、私だけガシヨン！ガシヨン！出来ひんのは仲間外れやろ？

「あの杖は、【闇の書】の主を象徴する歴史的価値のある聖仗なのですが……」

「そんなら大事に仕舞って、新しい杖を作ればええんとちやうう？」

「いえ、復元は容易なので改造して頂いても構いません。死蔵されるよりかは、使われる方が杖冥利に尽きると思います」

「おつけー。じゃあ、改造する方向で進めとこかな」

尤も、現在は執行猶予中みたいな身柄やし、もつと伝手も無いから何時になるかは分からへんけどな。その辺の問題は、将来の私にブン投げておく。

「良しつ。元気も充電したし、そろそろ買い物行こか？」

「はい、我が主」

「……ほんま頼むから、公共の場でソレ言わんといてな。散るで？　うちの外聞と羞恥心」

「> 御心配なく。公共の場では、念話で御呼び致します <」

「> 此奴、直接脳内に……！ <」

因みに漸ちひくと言うか、日本では有り得ない特急スピードな弾丸裁判によりシグナム達が釈放されて帰って来るのが本日なもあり、少しばかり浮足立ってしまったている。こ
うも気分が上下動するのは疲れるんやけど、今日ぐらいならばまあまあ……。

やつと、なんよ。

新しい家族であるリインフォースを迎えて、憂うれいなく一家団欒うんれんが出来る記念すべき日。……せやから、出所祝いも兼ねて夕食は豪勢にせなあかん。

「そやそや、リインフォース。1つ大事な話があるんよ」

「何でしようか、我が主？」

「クロノ執務官の提案を呑んだから、悪い事したのは【闇の書】、私が持つとるのは【夜天の書】。つて事になったんで、其処そこんとこ宜しゅうな？」

「……………はい？」

まつ、嘘も方便ちゅーわけやね。

くく

side:フエイト

近距離戦が苦手な相手なら切り込み、中距離戦が苦手な相手なら距離を置いて戦う。

——そんな風に対魔導師戦を想定した戦法をリニスから学び、彼女が去ってしまった後でもアルフと共に鍛え続けた。

一般的な魔導師や騎士が相手なら、それでも通用したのかもしれない。

けれど、相手が圧倒的な強者だと上手く行かなかった。速度を活かした連続強襲によつて主導権を与えずに摩^すり下ろし、堅固な守りで耐えられたとしても強力な魔法で打ち砕く? 「最悪、逃げれば良いのです」とリニスは言っていたものの、どんな位置や速度でも正確無比な砲撃と魔力弾に狙われ、悪辣非道なバインドを幾重にも仕掛けられたり、更には逃げずに勝たなくてはいけない状況が有ったりして、負けないことの難しさを思い知る一年となった。

自分でも分かっている。リニスから全てを学ぶには時間が足りず、当時の私は幼過ぎて無茶は出来なかつた。そしてリニスも、魔導資質と成長を加味すれば将来は『大魔導師』に成るであろうと予想していた私よりも強い相手との戦闘なんて、其処まで想定していなかつたのだろう。

管理局の実働部隊でもAAAランク越えは5%しか居らず、それはつまり広大な次元世界において高ランク魔導師は全体の5%程度に留まるとも見^み做^なせる。

そんな相手を想定するよりも、95%の弱者をどう効率良く倒せるかを教えた方がタメになるだろうし、短期間の教育であれば尚の事。だから、此処から先は強者との戦いを学び、考え、対処しなければ進めない。並び立つ資格が無いのだと焦り悩んで――

「ねえ、＼なのは＼……。こんな悲劇を見るのが鍛錬になるの?」

——それなのに何故か私は、自宅のリビングにて＼なのは＼とアルフと一緒に地球産スペース・ファンタジー映画を見ているのであった。ミッドチルダでは、遙か昔に禁止されている質量兵器や自律兵器を用いた戦闘描写は画質が荒くても何処か生々しくて恐ろしく、平然と殺傷が繰り返されようと彼等は突き進んで行く。こんな暴力すら、娯楽として消費するからこそ＼なのは＼は強く在れるのだろうか? そんな風に思ってしまったそうになる。

「別に、これじゃなくても気付きを得ることが大事で、応用が出来そうな物は覚えて試して改良して、そうやって戦い方を増やすのも重要だと思うよ?」

「なら例えば……。フォースみたいに不可視の衝撃を出したり、物を動かす魔法が有ったら……。」

「うん。その調子その調子」

「でも＼なのは＼は、その対策もしている筈だよ?」

「まあ、一応はね。只、完璧に対処できるかは状況次第なので断言し難く……。因みにそろそろ終盤だけど、フェイトちゃんのこういった映画は駄目そう?」

「如何かな……? 多分、楽しみ方が分からないだけだと思う」

映画という大衆娯楽の存在は、知識としては知っていた。架空で、虚構で、有り得ない世界。然し、演者達はまるで本場の事のように其処で生きて争っており、その傍観者である私は思考と感情を持って余すしかなかった。

「アルフは如何だった？」

「私かい？ んー……。やっぱり、明るく楽しいやつだと嬉しいねえ」

「あららら……。じゃあ、次は取って置きのやつで行きませう」

そう言つて次に見せてくれたのは、『何千枚にも及ぶ手描きの絵を連続で映し、動いているように見せる』狂気的な手法によつて作られた映像作品で、顔が獣なのに人型生物が暮らす世界という設定は初めこそ慣れなかつたけれども、直ぐに軽快なストーリーと古めかしい世界観に引き込まれて……。気付けば、あつと言う間に時間が過ぎていた。

それはアルフも同様だったようで、“なのは”はこの現象に満足したかのように微笑みながら映像記録の続きが収められたDVDなる物体を私に預け、夕暮れへ溶けるようにテレポート帰宅したのだった。

「……これ、見るなら話数を制限しなくちゃだね」

「異議無し。こいつは、面白すぎてちよつと危険すぎるよ……」

鈍い頭痛、軋む眼球、渴く口内。こうなったのは3時間以上も連続視聴した結果ではあるものの、脳裏に焼き付いた映像は何度でも楽しさを呼び起こし、去来する高揚感

穏やかで優しい物だと分かっているにしても、まるで“なのは”との決闘で撃ち墜とされた時の感情にも似て、ぞくりとする。

アルフは、純粹に楽しめているみたいだけど……。面白いのは確かであり、貸してくれたからには見なくてはいけない。慣れる方が早いのか、見終わる方が早いのか。何方どちらにせよ、胸が高鳴る度に怖気付いては支障が出るのだから、克服すべき課題ではあるのだ。

友人らしくなりたいと、願うのであれば尚の事。

“なのは”の友人であるアリサや“すずか”を観察すれば、嫌でも気付かされてしまう。私が『アリシア・テスタロツサ』のクローンとして、出来損ないとして生きて来た歳月はたった4年しかない。赤子の頃から、9年分の成長を経験することが出来た彼女達との間にある5年分の隔へだたりは広く深く、また地球育ちではないことも拍車を掛けている……という表現で正しいのかな？

兎にも角にも、私から提供したり共感できる話題はミッドチルダや魔法に関する事ばかりで、そんな友人以前の人並み未満では、対等な友人関係なんて夢のまた夢である。

故にこそ。

追いつきたいのであれば、私は人並み以上の努力をしなくてはならないのだ。人とし

て、魔導師として、最高の比翼として認められるように。閃光の速さとまでは行かなくも、何時かきつと双子星のように「なのは」の隣で輝きたいと強く思う。

だって……、それぐらい出来なくてはあんな狂人の才能と容姿を受け継ぎ、虐待を耐えた甲斐が無いのだから。

あのね、リニス。私はちゃんと、幸せになってみせるよ……。

第52話：回帰性日常風景と懸念

side:なのは

「うちで御茶会するわよー」といった有無を言わさぬアリサちゃんからの招集メールが届き、早くも週末。平生なら月に1〜2回ぐらいの頻度で何処かしらに集まり、御茶を飲んだりゲームをしたりと楽しんでいますが、先月は師走らしく忙しい日々を過ごしていたので不参加が続いておりました。

そんな感じで開かれた久々の御三家ティーパーティーなので、積もり積もった話が出るわ出るわ……。まあ、主にアリサちゃんが止まりませぬ。

聞くところによれば、世界中で発動した侵蝕変換魔法《イルミンスール》によってイギリスに居る遠い親族だったり、『バニングス建設』海鳴支社の役員が亡くなったりしたそうで、折角だからと両親に連れられて日英の葬式を社会経験させられたとの事。確かに、進んで参加したくはないですね。

尚、^{なお}「すずか」ちゃんも『月村重工』という巨大企業の御令嬢なので様々な不幸とは無縁ではなかったものの両親だけで対処したらしく、その辺は家庭ごとの教育方針の違いが出ているなと感じます。

「国ごとに主要な宗教も、葬式の方法も違うのは理解していたつもりだけど、何で日本の葬式って火葬した後に御骨を拾わせたりする訳?! 知ってはいても、実際に見るとやっぱりシヨツキングだったわ……」

「アー、ウン。御愁傷様ナノ。あれはあれで、きちんと見送つたり決別する意味があるらしいよ?」

因みに、私の御父さんの場合は空っぽの棺ひつぎを燃やしただけなので、実際に収骨をしたり見たりする衝撃具合はよく分かってないです。一応、遺灰は在るらしいのですが、残像すら生じさせずに瞬間移動できるような御父さんが爆弾如きで微塵になるよりかは、世を忍んで暗躍している可能性の方が有り得るのです……。

いや、若もしかしたら地球にすら居ないのでは?

魔法が存在するのですから、ピンク髪の魔法少女に召喚されて巨大ゴーレムを十七分割していたり、異なる歴史を歩んだ明治時代へ飛ばされて流浪人&剣聖をやつていても不思議ではありません。

「でもこう、もうちよつと優しい見送り方が有るような……。まっ、辛気臭い話は此処までとして、この先からが本題。最近“ずずか”も親友が増えたそうだし、御茶会のメンバーを増やそうか悩んでいるのよね。別で開くのも準備が大変だろうし、まるで仲間外れみたいじゃない? そもそも、私達のコミュニティーの規模が小さいだけだから数人

増えても許容範囲内だと思うのだけれど、 “なのは” や “ずずか” 的には如何かしら
 ？」

「3人でも予定を合わせるのに苦労しているし、これ以上は難しいと思うよ？」

「私も同意かな。それに、“はやて”ちゃんと話するのは物語に関する話題が多いから、御茶会の楽しみ方とはまた違うんだよね」

☒も無し。こうして、本題はさりと放流されたのでした。

「あのねえ、もう少し会話を弾ませなさいよ。『招きたい親友が出来たの?』とか色々有るでしょうに……」

「え? アリサちゃんの色眼鏡に適った子が居るの?」

「それを言うなら御眼鏡っ! 居るには居るけど、3人とも東京だから遠いわね」

「へー……。それで、親の職業は?」

「確か、セキユリティソフトウェア開発会社の創設者一族と、警視庁の上から四番目の警視正に、あとは警備会社の経営者だったかしら?」

「そういう所だよ、アリサちゃん……」

一般的かはさて措き、その子の性格なり容姿なり行為を気に入ってから育まれるのが友情というモノなのだと解釈していますが、アリサちゃんの場合は唯一性や環境を含めて好きになるようで、私の場合は『アリサちゃんを唯一殴って気絶させた子』、『何かや

る時はやる子』、『まともに関わった最初の庶民』、『地元では有名な喫茶店の子』、そういった所がプラス評価になっているのではと半ば確信なかしております。

少し前の私みたく、優しく平凡だと自負していそうな子なんて石を投げれば当たる程度には居るでしょうに、意外なことに私のような親友さんを見掛けた覚えが無いのです。時間は有限であり、身体は一つなので交友範囲は制限すべきかもかもあります
が……。

とまれ、アリサちゃんはそんな風に色眼鏡サングラスを通して鮮明に見える子を選んでる節がある為、「御眼鏡っ！」ではなく「色眼鏡」と形容してみたところ存外に会話が跳ねて何よりです。グッド・コミュニケーション。ブラボー、ハラショー。

ふむ。このマカロン、カリカリで甘美ですね。善きかな。

「ところで、〴〵かちゃん。最近の出来事だけど、私と〴〵はやて〴〵ちゃんが御友達になつたって話は知ってる？」

「……初耳だね。二人は、どんな風に知り合つたの？」

「御兄ちゃんが夏頃にシグナムさんと切り合つて、それ経由で斯く斯く然々しかじか」

「嗚呼。だから一時期、御姉ちゃんの機嫌が悪かつたんだ……」

忍さんと恋人関係になってから、御兄ちゃんの宿痾しゆくあだか運命が落ち着くかなと思いきや相変わらず一級フラグ建築士をやってまして、そんな人の良さに惹かれたが故にあまり怒れないのだと忍さんがニコニコしながら愚痴っていました。別名、惚気話のろけとも言います。

多分その内、人型になれるタイプの宇宙戦艦を海岸で保護したり、別の次元世界から降って来たロボット美人姉妹と仲良くなっても、私はもう驚くことはないでしょう。御兄ちゃんですからね。何時ものやつです。

「ちよつとタイム……。どんな経緯があれば切り合う訳？」

「それはねー。夏になると臨海公園で御祭りがあるんだけど、——」
楽しき日々。大切だと思える家族や親友が居て、アニメに漫画にゲームといった娯楽に囲まれて、たまに模擬戦などで気分転換をする。そんな幸福だけで満ち足りていれば良いのに、私の宿痾しゆくあだか運命は捻じれ狂っているのです。そうは行きません。や……。正しくはそうなるかもなくという予感からの諦観で、既に覚悟しています。

あの日の侵蝕変換魔法のせいか、ずっと大気中の魔力素マナが不穏なのですよ。

叙情詩リリカル的な表現をするなら、世界が歪みつつあるように感じられてソワソワします。

実は6月頃にも似たような経験をしており、*「はやて」*ちゃん情報によれば日付が誕生日である6月4日になるや否や「闇の書」が起動したとの事。じゃあ、近々何か起こりそうですねと思う次第で、とても憂うれき憂うれきしながら心待ちにしています。

念の為、関係各所にそれとなく伝えてるので初動遅れは無いでしょうけれど、何が起こるのが分からないというのは非常に厄介です。

「そうそう、二人共。最近、雲行きが怪しいから気を付けてね」

「ぞつくりし過ぎて意味不明なだけ……。それって、運勢の話？」

「穢けがれ……の話かな？　またよくない事が起きそうだなーと、私のゴーストが囁ささやくのです」

「あんた、シリアスなのかコミカルなのか。どっちかに決めなさいな」

ええ、はい。仰おつしやる通りです。実は……、私も何処まで伝えようか悩んでおりますれば、自然と思考が廻めぐり濁にごって鈍にぶるのです。言わない後悔と、言ってしまった後悔。その中間を欲ほしがるからこそ、曖昧で胡散臭い表現になって苦慮しています。雄弁は銀なり。然しかり然しかり。

「まあ、*「なのは」*がそんな事を言うのは珍しいし、槍の雨が降って来るとでも思つて大人しくしとくわよ……。その代わり、2月になつても何も起おこらなかつたらガトーショコラを奢おごる事。良いわね？」

「合点です。『すずか』ちゃんは如何するの？」

「それなら……、私はショートケーキで」

「おっけー。オーダーを承りました」

尤も、何かが起こったとしても深夜帯だったり、発動直後に結界で隠せる程度なら証明は難しいんですけどね。取り敢えず、奢る前提で御母さんに根回ししておきませう。やれやれ……。今回は、短い平穩になりそうだなあ……。

【B O A 編】

第53話：アサキユメにて相見（あいまみ）ゆる

side：なのは

待てど暮らせど、日常は平穩を装ったまま過ぎて行く……。あの最終決戦では膨大な魔力が循環され、消費され、バラ撒かれたのですから、環境その物に変化が生じていても仕方無いとクロノさん達が述べていましたが、それとは別に怨念染みた嫌な気配を感じられるようになって参りました。

具体的には、大気中にある変な魔力素の割合が増えてるんですよ。

誰かの干渉を受けた状態にも似た挙動をしており、まるで《イルミンスール》への対抗魔法にも似ていますが、こっちの遣り方が自分色に染めて制圧する方法だとしたら、現在進行形のやつは散っている何かが結び付こうとフワフワ飛んでいるような——
——と言うかコレ、復元しないだろうと予想されていたコード【止まらぬ破壊機構】の断片ですかね？ 恐らくは。

ただ残念な事に、次元巡航船に積んでいる程度のセンサーだとそういった微妙な変化は検知できないらしく、おまけに私とリインフォースさん以外は感知できてないので、

全体的な危機感は欠如していると言わざるを得ません。

そも……。あんだけ切つて潰して凍らせて撃ちまくり、塵芥ちりあくたすら残さなかったのに【闇の書】改め【夜天の書】とは無関係に復元されるなんて想定外の事にして、確信を深めるまで私も考えたくはなかつたです。

「幾ら光が射しても、闇は残るからこそ不滅なんですよ。高町なのは」
「済みません。招待状を御持ちでないなら、速やかに退場を」

記憶が正しければ、夜の10時に就寝してから目覚めた記憶は有りませんし、こんな希望も愛嬌もハイライトも無さそうな二重人格が内蔵されていたら、私の周囲はもつと殺伐していた事でしょう。あと初見です。つまり……。この紅蓮の2Pカラーさんは外部から来た『招かれざる客』だと推察してみます。

「ええ、勿論。私達からの挑戦状を叩き付けた後、速やかに帰還しますとも」

えへん、と胸を張るそっくりな誰か。髪色や目付きの鋭さ、そして視線の高さが僅かに異なるものの、声音や容姿は似通つていて不思議な気分ですね……。けど許容はしません。

「や、要らないです」

「知己よ。オリジナルよ。我が光よ。二つの月が交わりし日、凶鳥の帰還と共に始まる【大禍時】を越えた先にて、どちらが有終ユウシュウで美しいか白銀の舞踏会で競いましょう。……それではまた今度、鮮烈なる逢瀬を期待しています」

そう言い残し、別の意味で闇墜ちしていそうなドツペルゲンガーさんは去って行きました。尚、面妖な台詞の翻訳内容が正しければ、「1月末の夕方5時から、ちよつとした肩慣らしがあるので生き抜いて下さい。そして月が綺麗な時間帯になったら仕合います。ととても楽しみです」との事。

我が闇ながら、案外良い子ですね。

てつきりグレていたり、放送禁止用語を連発するのではと身構えておりましたが、杞憂で何より。嗚呼でも……、あの子でも制御不能っぽい【大禍時】なる物を協力して片付けて、残り時間を有効活用しましょうとならない辺りは歪んでいるなーと感じます。

……

……

…

「 Good morning. Master. 」

「……おはよう、レイジングハート」

見慣れた自室。ベッドの上。就寝前の位置情報と大差無いことを確認した後、枕元に

置いてある携帯電話を手に取りパカッと開いて見ますと、1月29日の5時55分と液晶画面に表示されていました。ところで、明後日に迫る1月末は平日なのでして……。まあ、教えてくれただけでもよしとしませう。

「そう言えば、寝ている間に魔力反応とか有ったりしたかな？」

「―― Sorry, Nothing detected. ―」

「うん、気にしないで。私の余剰魔力が出しているノイズも酷いだろうし、かなり微弱的な干渉だったと思うから」

さて。折角の休日ですが、予告されたからには備えるのが順当という物。差し当たっては、家族会議の招集コールをして説明して……。その前に先ず、温かい御布団から抜け出さなくては……。何とも厄介な強敵です。

それから、それから。

朝食後に、高町家・ハラOWN家・八神家・ファイアツセ御姉ちゃん・那美さんと続く怒涛の説明パートを終わらせ、これだけ骨を折ったのですから来なければ全力全開の《Meteorite breaker》を撃ち込みに行こうと決意を固めたり、敵勢力の想定や対処法を検討する等々。私にしては珍しく、明後日を待ち遠しく思いなが

ら備えていました。

何が起こるのかが少しだけ明らかになったのと、嘗てのフェイトちゃんや【闇の書】勢だった皆様よりかは友好的で、我が闇なる者に限れば戦闘スタイルは中距離砲撃型だろうなど期待できますし、復活時間を考慮すればコード【止まらぬ破壊機構】未満の脅威でしょうから怖くありません。

一応、当日になれば御兄ちゃんは恋人である忍さんがいる月村家を。御姉ちゃんは高町家を。アリサちゃんのところは……、不在気味な両親の代わりに執事兼ドライバーをやっている鮫島さんが居ますが、駄目そうなら私が《転移魔法》で跳べば何か有っても対処可能な気はします。まあ、その時は魔法少女である秘密がバレますけどね。仕方無し。

…

…

…

「ふーん、これがフェイトの御気に入りかあ……」

「人の身でありながら、七面倒な魔力制御をしておるな……。然し、それもまた愛い」
「……………あの、熟睡したいので夢から出て行ってくれませんか？」

昨夜みたく、明晰夢にしては実際に身体を動かせる妙な空間で起き上がってみます

と、今回はフェイトちゃん擬き& “はやて” ちゃん擬きが其処に居ました。カラー・コーディネートが青基調&黒基調なのもあって、本物かどうか判別しやすいのは良いですね。助かりま……否^{いな}。単純なコピーではないというのは、ちよつと引つ掛かります。

例えば、“はやて” ちゃん擬きの場合髪が白金のロング&毛先だけ紫紺になつており、恐らくリインフォースさんの要素が混じつているでしょうし、何なら『守護騎士^{ヴオルケンリッター}』の皆さんも混じつているんだらうなと嫌な予感がしてなりません。

「くくつ、異なことを抜かしおる。鮮明な夢を見る状態とは、睡眠が浅く覚醒にも近い。大体、うぬは13分後に目覚める予定であるのなら、これぐらい大差は無からう」

「や、私の時間は私のモノで、使いどころは私が決めます」

「ほお……。王たる我に楯突くとは、流石は「辰星の魔導師」よ。だが、こうしている間にも1分の時が流れようとしておるぞ？」

「いきなり攻撃してきたり、時限爆弾の時間稼ぎでもないのなら、誰にでも優しく在りたいと思うぐらいの善性は備えておりますれば」

「なら、引き続き居座ろうと問題はあるまいて」

なんたる悪辣非道な誘導尋問。やはり、“はやて” ちゃんとは似ても似つかぬ別人だなどと思うと共に、嫌いには為れないが好きでもないなどという感情が満ちて参りました。

「王さま、王さま。そろそろ僕にも御話しさせてよ？」

「そうさな……。3分間だけ待つてやろう」

「それ言いたいだけでしょ?! せめて4分!」

「ふっ、冗談だ。好きに話せば良い」

「サンキュー、王さま。よっ、太っ腹!」

「太つておらぬわっ!!」

んー、カオスカオス。声もフェイトちゃんと「はやて」ちゃんに似ているので、本人達の幻影が重なります。将来的に、こんな元氣な僕つ子と王さまに成った場合、私は紅蓮の誰かさんみたいな性格に成るのでしょうか? ……まあ、多分成るんでしょうね。その方がバランスは良さげです。

「それじゃ、初めまして「高町なのは」。僕はフェイトの闇にして先行者。即ち……。御姉ちゃんつて奴だね。個体識別名は「アリシア・テストアロツサ」。深い友愛を示したいのなら、「アーちゃん」つて呼んでも良いよ?」

ふむふむ。選りに選って、その容姿でそう名乗るんですか……。フェイトちゃんの個人情報報みなので少ししか知りませんが、本物のアリシアさんが存命であれば双子の姉みたいな立場だったのかもしれない。只、この自称アリシアさんは己が闇であると自認しているので、何処まで再現されて魔改造されたのやら?

今のところフェイトちゃんの反応が予想できない為、最も会わせたくない相手第1位

です。因みに2位は紅蓮の私、3位は王さまとなっております。

「初めまして、アリシアさん。私の事は、『ミス高町』とでも御呼び下さい」

「え〜……。時間が無いのに好感度そこからなの？ 仲良くしようよ、『なのは』ちゃん」

「うわ……………」

「『なのは』ちゃん、なのちゃん、なーちゃん、なつちゃん、ちゃん」

「済みません。せめて『なのは』で御願います……」

「うん。宜しくね、『なのは』！」

圧倒的陽キャぱわーが溢るるフェイトちゃんボイスは、思っていたよりも心に来るモノが有りました。コード「止まらぬ破壊機構」と無関係なら、仲良くするのも吝かではないんですけどね？ 其処だけが残念でなりません。

「……………ところで、王さまの御尊名を伺っても宜しいでしょうか？」

「我は王ぞ？ 矮小な名前など、持ち合わせてはおらぬ」

「王さまはね〜。唯一無二な『夜天の王』だから、『王さま』なんだよ」

「なるほど。解説、有り難う御座います。アリシアちゃん」

「ふふんっ！ 君との仲だもん。これぐらい御安い御用つてもものさ」

何となくですが、この子達が如何いった存在なのかが分かって来たような気がしま

す。単純なコピーとか悍ましい心の闇などの安易なモノではなく、表には出せない憧憬や理想を具現化した上で加工がされている感じで、存在しない筈の先行者ならば勝算は有ると考えたんでしようね。

若し、この考察が正しければ紅蓮の私は……………。なーんて考えたところで、どのみち倒すべき相手なのは変わりませんし、どんな背景を負っていようと私には関係がありません。ただ砲撃型魔導師としての実力さえ確かであれば、それで宜しいのですよ。

そう割り切って、追いやって。

残り少ない時間ですが、この奇妙な3人組による会談をそれなりに楽しんだ後は寝起き感がない覚醒を果たし、取り敢えずフエイトちゃんと「はやて」ちゃんに会って話したいなーと、ぼんやり思ったのでした。

第54話：闇より零（こぼ）れ落ちた影

side：美由希

「レンちゃん、準備できてる？」

「火元良し、武器良し、避難経路も確認良し。あとは……、皆の無事を祈るぐらいやね」
「そうだね……。本当に、何も起こらないのが一番だけれど……」一昨日。「なのは」が夢の中で犯行予告をされて、その実行日と推測されるのが本日
の夕方5時頃。そのため私とレンちゃんと晶ちゃんと御母さんは学校が終わると同時に直帰、御母
さんは『翠屋』を午後休にし、恭ちゃんは忍さんの所で待機するなど未知なる脅威に備
え、残り30分程の時を待っていました。そして普通なら、守られる側であった筈の「なのは」は魔導師のエースとして対策本
部である宇宙船の方へ行っており、連絡が取れないので状況の進展すら分かりません。
「ところで晶は、ほんまに武器無しでええんか？ 如意棒にょいぼうは無くても棍こんなら有るで？」

「……拳の方が慣れているから、こつちで良い」

「おうおう、氣い張りすぎやろ。疲れんように待たな、夜まで持たへんよ？」

「其処そこまで器用じゃないし、ほっといてくれ」

「はあく……、さよか」

レンが匙さじを投げ、何度目かの沈黙が漂う。今まで「なのは」が関わった事件での戦闘は全て不定期的で、今回のように発生日時や規模を推測して備える事が出来たのは初めてなのもあり、こうして起こると分かっているとしても嵐のように過ぎ去るのを待つのは、晶だけでなく家族全員が心苦しく思っている。

大切な人達を守るために鍛え上げてきた『御神流』の剣術でさえ、空を自在に飛ぶ相手と戦うのは難しく、私と恭ちゃんが補助魔法の支援を受けるよりかは「なのは」単独で暴れさせた方が対魔法戦では明らかに強い。故にこそ、内心では悔しがっているであろう恭ちゃんですえ「無事に帰って来い」とだけ言ってみ送るのだ。

嗚呼、そう言えば……。

私の場合、8歳の時に剣を取って普通とは程遠い生活を選んで来たのだから、不破ふわや御神みかみに連なる子ならばそういうモノなのかもしれないなあ……。決して、手放しては喜べないけれども。

「……まっ、なのは」より私達がヤキモキしても仕方が無いし、折角だからトランプでもしましょうか？」

「えっ……。こんな剣呑けんのおんな空気の中でやるの、御母さん？」

「剣呑だからこそよ。それにトランプなら、何時でも止めれるじゃないの」

「あー、うん……。そうだね」

大黒柱による鶴の一声で、剣呑な空気を活かしたポーカーをする事になりました。店で使う10円玉の棒金をばらし、擬似的なチップを賭けて争っていると剣呑な空気は駆け引きによるスリルにも思えて来て、意外と妙案だったなと関心しつつ周囲も警戒しつつ……。

そんな感じで夕方の5時を超え、緊張が再度高まる最中。数分と経たぬ内にインターホンからチャイムの音が鳴り響き、その静寂は破られたのでした。

くく

side:なのは

これが悪しき波動なのか、それとも単なる魔力のうねりなのかは定かならぬも、何かが起ころうとしているな〜ぐらいの気配を察知どく。如何どうやら、待ち惚ぼろけはせずに済みそうです。

「……………来ました」

「っ、地球各地で魔力反応増大！ この発生箇所は……、《イルミンスール》の被害箇所

と一致します！ その場合、最終的な発生数は72箇所になると推測。魔力反応から脅威度を算定後、優先順位をマップに反映させます！」

「総員、第一種戦闘配置へと移行。ランディ、アレックス、武装局員を脅威度が低いエリアに割り当て、敵勢力の排除を」

「了解っ！」

「エイミーは、主力メンバーの割り当ても並行して行うように」

「ううっ……、了解しました！」

今頃、自宅がある藤見町では鴉レイワンと一緒に帰りたくなるような童謡が町内スピーカーから流れているでしょうけど、此方こちら『アースラ』管制室の皆様&現場組である私やフェイトちゃんや〃はやて〃ちゃん等の面々は、暫く帰れそうにありません。何せ、始まってしまいましたからね……。紅蓮の誰かさん曰く、「大禍時オオマガトキ」なるモノが。

それにしても、想定通りに始まってきて嬉しくないような……。まあ、このモヤモヤは主犯格つばい例の3人へと投射します。

「取り敢えず、〃なのは〃ちゃんは脅威度が高いポイントA1を威力偵察で。倒せそうなら倒しちゃって良いよ！」

「ラジャーです」

「行ってらっしゃい、〃なのは〃」

「氣い付けてな、＼なのは＼ちゃん」

「うん。二人共、行つて来ます」

ちな

因みに、フェイトちゃんや、＼はやて＼ちゃん以外にも、主力メンバーとして

『ヴォルケレンリッター守護騎士』

とリインフォースさんを含む八神家の面々に、クロノさんとアルフさんは勿

論、『闇の書』絡みならばとリーゼロットさん&リーゼアリアさんも来てくれて、あの最

終決戦と違うのはゼスト2尉が居ないぐらいですね。

尚、ユーノさんは漏れなく招聘しょうへいされておりますが、補助の方が得意なので武装局員を支援すべく別グループでの行動です。一応、新しいデバイスを手に入れて強くなつたみたいですけども、無茶は控えたいとの事。

そういった諸々の人員確保やら打ち合わせを重ね、私はこうして待機場所であつた『アースラ』の転送ポートから東京都上空へとエントリーするに至つたものの……。指定座標へ近づくに連れて黒煙のような物が収束し、その中から見慣れた人物が出て来ました。恐らく、相手が誰なのかを認識しているんだろうなと思えるぐらいには、かなり絶妙な選択です。

「ミス高町……。今日こそ、勝たせて貰います」

「んー……。フェイトさんで良いのかな？ 悪いけど、また御邪魔するので悪しからず」

傷痕と包帯だらけの身体、血走つた瞳、異常な発汗。

——かつ嘗て、私の左手を切り

落とす寸前まで暴れていた頃のフェイトちゃんにそっくりですが、何故か「バルディツシユ」には当時付いてなかったカートリッジ・システムが付いています。

アレがちゃんと機能するなら、少し厄介ですね。

然し、私もあの頃から随分と強くなつて、況してや深夜スクランブルによる寝起き&寝不足状態でもない為、それほど苦勞せずに勝て……るかもしれないませんが、折角の偵察なので暫く様子見をしたい所存です。それでは先ず、結界を展開して関係者のみを隔離。あとは御互いの空気を読んで、いざ尋常に勝負へと洒落込みませう。

「―《Blitz action》―」

「―《Flash move》―」

高速移動魔法から始まった、強襲と迎撃の応酬戦にして再現戦。カートリッジ・システムの恩恵か、あの頃の記憶と比較しても魔力チャージの溜めがほぼ無く、また恒常的に使う飛行魔法を除くあらゆる魔法の使用頻度も増えています。やはり、こんな者は模造品ではなく魔改造品ですよつて。

嗚呼、でも……。飛び方も使用する魔法も、凶暴だった頃のままでチグハグですね。カートリッジを火力の上乗せではなく消費魔力のカバー目的だけで使うとは、全然怖くもありません。

「> “なのは”ちゃん、援軍は必要そう？ フェイトちゃんが行きたそうにしてい

るんだけど？」

「不要です。それよりも、他のポイント制圧を急がせて下さい」

ずっと黒煙の状態で待つてくれるのなら良いのですが、時間経過でドラゴンみたいな異世界生物が出現しちやったり、《イルミンスール》が発動したら目も当てられませんからね。拙速ではなく、速戦即決が大事です。

「結構、ハア……余裕そうですね……！」

「うん。最近の私を知るフェイトちゃんなら、もつと雷みたいに飛んで跳ねているし、弾幕の雨でも楽しそうに切り込む魔導師キラーになつていいるから、今日は不調のように見えるよ？」

「そんな記憶、私にはありません……。貴女あなたは夢でも見たんですか？」

「……そう、かもだね」

だからフェイトさんには、こんな悪夢から目覚めて欲しいと願っています。

「―― Lock ——」

「このっ、何時の間に!？」

「では御大事に」

何時ものフェイトちゃんなら、バインド対策の要である《Gale-form》の装甲が欠けたら直ぐに修復するのに、使い慣れぬカートリッジや戦闘経験が不足または

欠落しているフェイトさんはあまりにも無防備すぎました。またしても《SLB》を撃ち込むのも有りですが、本日は長丁場が予想されるので省エネな新魔法を試しましょう。

「《ストライク・スターズ》！」

「Fire」

カートリッジを6発消費し、自分の周囲に遠隔発動させた4つの魔法陣から《Divine buster》を撃ちながら、《SLB》こと《Starlight breaker》の小型版で撃ち切り可能な巨大炸裂弾《Fireworks》で追撃。隙を生じぬ二段構えのコンビネーション魔法です。

防御魔法の有無とか硬さにも因りますが、AAA+ランク程度の魔導師に当てれば大体は防御の上からでも落とせると「レイジングハート」が申しておりました。

「……………嫌だ。……………私、は……………まだ……………」

本物の人間であれば、魔力ダメージのみで致命傷は受けません。けれども、このフェイトさんは『守護騎士』みたいな魔法生命体に近い構造らしく、身体を構成する魔力すら防御で使い果たしたのか全身に亀裂が入り、実体化されたテクスチャーが崩れては虚空へと消えて行きます。

「と……………届かない……………。魔力も、速度も、経験も。……………独りじゃ、届かないッ!!」

「わあー……。もしもしエイミイさん。今、人手は余ってますか？」

「> ……えー、此方HQ。艦長がやる気です <」

「席に座らせて、本局へ増援要請をさせて下さい。現場は何とかがします。オーバー」

「> ごめんねっ、誰か手が空いたら送るから！ <」

何処どこからか黒煙が湧いて、フェイトさんが1人、フェイトさんが2人、フェイトさんが3人……。最終的には13人まで増えたものの、全身が漆黒に染まっております更に劣化している印象を受けます。仮に弱くなっていたとしても、この人数は脅威なのですよ。

取り敢えず、先手必勝の《Axel shooter : Barrage》でも撃とうと決心したところ、この場に居るはずが無いし、居てもいけない人の声が聞こえて来て、流星に思考がフリーズしました。

「梃てこ子こず摺ずっているようね？ 手を貸してあげるわ！」

「こんばんは、なのはちゃん。微力ながら御手伝いするね」

「……………ねえ、レイジングハート。若しかして、これって夢？」

「— Unfortunately, it's a reality. —」

如何やら、頬を掴つかつてもこの現実は何となく覚めないようです。嗚呼、もう……。訳が分かりません。

第55話：困惑……。想定外の助っ人なの

side:なのは

初めから、嫌な予感はしていたのです。私やフェイトちゃんや、はやて、ちゃんのドッペルゲンガーみたく、あんな風に精巧かつ魔改造が可能ならば、他の誰かでも仕上げるのは難しくないだろうかと考えた事があります。それでも、まさかこの人選になるとは……………。

「知己の為なら、押っ取り刀で即制裁！ 『劫火灼然の討ち手』アリサ・ステイクス！」

「大切な人の為に、今こそ冷徹なる意志を。『雪華の舞い手』すずか・コキュートス」

「『貴方の心に正義を刻む！』『ブレイズ・ヘイル』、堂々顕現っ!!」

アリサちゃんっぽい人は大太刀型デバイスを構え、白いチャイナ服みたいなバリアジャケットの上から黒のロングコート。

「すずか」ちゃんっぽい人はグローブ型デバイスを装着し、白と藤紫のメイド服を纏うだけでなく頭部にはホワイトブリムも完備しています。

ええ、はい……。明らかに混ぜってますね、『灼眼のシャナ』が。

昨今のライトノベルでは超人気作の1つですから、私のデータなり《イルミンストール》で不特定多数の人から吸い上げた時に知ったのかもしれないけど……。何故、こんな悪魔融合を？ あと戦隊ヒーロー物みたいな名乗りも混入しており、珍しく頭が痛いです。

「さあ、我が宝具『フレイムアイズ』の贅にえになりなさい！」

「なのはちゃん。支援砲撃、御願いな？」

「アツ、リョーカイナノ……」

その後。焔の翼を摩なびかせながら彗星のような切り込み突貫をするアリサちゃんと、リボン状のバインドで対象を全身拘束きゅつとして爆破トカーンさせる「ずずか」ちゃんの御蔭で、13人に増えたフェイトさんのような闇は儚くも散りました。流星に3戦目は無いらしく、ようやく落ち着いて話せそうですね。

「えーと……。有り難うアリサちゃん、ずずかちゃん。二人は如何して此処に？」

「なのは・オードナンス」、あなたの勧誘に来たのよ。でも家に行ったら居ないし、こんな所で孤軍奮闘しているしで、よくもまあ砲撃型なのに単騎でやれるわね……」

ほうほう。よく分かりませんが、そういう設定と認識であることは理解しました。

「ところで、今後の予定は？ このまま【空世くぜの亡骸なきがら】を殲滅せんめつしに行くつもりなら、軽く前衛ぐらい務めるわよ？」

「むしろ、私達それしか出来ないような……」

「それに就つきましたは……。ちよつとタイムで」

少し距離を取り、回れ右。先程から敢えて閉じていた空間モニターを表示させますと、其処にはエイミイさんではなくリンディ提督が映っていました。まあ、閉じたところで向こうからの映像と音声が届かないだけですし、緊急であれば強制的に繋がりますから、「静観して欲しい」という意図は正しく伝わっていたようで何よりです。

「リンディ提督。私はこの3人で、脅威度が高いポイントを攻略したいと思います」

「> 確かに、此処で戦力が増えるのは有り難いのだけでも……。本物のアリサさんや「ずずか」さんは、自宅に居ると確認が取れています。それを踏まえても、偽者である彼女達を信頼するのですか？」<

「あの日、その場で味方になった『守護騎士ツオルケンリッター』の皆さんよりかは信頼できます」

シャマルさんは例外ではありますが、最初の襲撃で1対3をやられて墜おちとされた後悔と怒りは根付いていまして、苛烈さつれつに復讐するつもりは無いんですけどね？ 然れど、仲良くなれても戦友止まりだろうなって気はします。

「>」 「なのは、さんからして見れば、それもそうよねえ……。分かりました。監視を続行しつつ、クロノかフェイトさんが近場になるように調整して、万が一に備える感じで良いかしら？」 <」

「はい。それで御願います」

交渉終了。それからまたエイミーさんへと画面が変わり、次のポイントである神奈川県の上空を指定されました。この距離なら飛行魔法で飛んだ方が魔力消費量は少ないものの、貯めに貯めた余剰魔力があるので惜しみなくテレポートしませう。

「方針は決まったようね？ なら早く行きましょ。時間は有限なもの」

「あつ、アリサちゃん。待つてよ……」

「……………まあ、それもアリサちゃんらしいね」

一緒にテレポートするつもりだったのに、アリサちゃんと「ずずか」ちゃんは保有魔力に自信があるのか単独でテレポートして行きました。それはそれで、私の消費魔力が節約されるので有り難いんですけど、総量的に大差無いですよね……。

取り敢えず、さくつとテレポートして追い付きます。

そして神奈川県上空、ポイントA2。黄金色の夕日に照らされるは巨大な黒煙。……如何やら、まだ実体化というか実害化？ はしていないようで、少しだけ安心しました。

「それじゃ改めて、悪即斬の再開よ！ 閉ざせ、《封絶》！」

パチンっ！と軽快な指鳴らしの音が響くと同時に、アリサちゃんを中心に結界が拡張されて世界の位相がズレました。内側から見る分には、アリサちゃんの魔力光である明るいオレンジ色の炎が所々舞っているくらいで、機能としては《封時結界》と変わらないように思えます。

原作みたいな因果の断絶なんてミッドチルダ&古代ベルカの魔法の領分を超えますから、流石に其処までは再現されなかつたみたいですね。

さて。そうこうしていると反応したのか、黒煙が人型へと変貌し……。『守護騎士』の皆さんになりました。只、騎士甲冑のデザインが当世風ではないので、恐らく「はやてちゃん以前の誰かに^{つか}任えていた時の再現体なんだろうなと推測します。

「……もう嗅ぎ付けたか、管理局の魔導師よ」

「はあ？ そんな面倒な所に縛られているのなんて、「なのは」だけなんだけど？ 私とこつちの「すずか」は『外界宿』^{アウトロー}。自由に生きて、自由に戦い、そして自由に辞めて、自由に死ぬ。理解したかしら？ じゃあ、大人しく切られなさい」

「断る。我等にも大命があるので……。あとは、その剣で語るが良い」

「Ach so. 因みにこれはね、大太刀つて言うのよっ!!」

一閃。シグナムさんとアリサちゃんの魔力光を伴う斬撃が射出され、空中でぶつかり合うことにより開戦の合図と成りました。ところで、こつちは3人で向こうは4人なん

ですよねー……。

アリサちゃんも「さすが」ちゃんも、それなりに魔力反応が有るのでフェイトちゃん並みに強いとは思いますが、此処は素直に私がヴィータさんとシヤマルさんを請け負った方が無難でしょうから、誘導弾で追い回して分断させます。

「てめえ、攻撃するくせに引き撃ちすんのかよ！ ちゃんと戦いやがれ！」

「ええ……。1対2なのに、逃げられる方が悪いと思うのですが？」

「うつせえ、腰抜け！ さっさとブチって潰れるッ！」

「ヴィータちゃん、無理はしないで！」

嗚呼、本当に見た目や性格だけはそっくりですね。でも何故か、私と戦った事が無いような口振りや戦術なので、此処は一気呵成に墜として終わらせませす。この場に居るアリサちゃんや「さすが」ちゃんみたく、特異個体なら少しは躊躇ためらったかもですが……。口の悪さが悪いのですよって。

《《アクセルシューター》》

「――《Barrage》――」

カートリッジ消費数は8発。そして生成する誘導弾は40発。

「はっ、そんな見掛け倒しが当たるかってんだ！」

「そうだと良いですね。では、頑張って避けて下さい」

「Fire」

別に、誘導弾だからって最初から最後まで全てを思考操作する必要は無く、極論を言えば迎撃されずに当たればオーケーです。

詰まるところ、理想としては赤外線だの画像を認識して追尾してくれば楽なのですが、誘導弾に其処までの機能を付与するのは難しい為、ターゲットに追従しつつ誘導弾の中間及び終端誘導を行い、更に周囲にある誘導弾を統率して乱数回避機動をさせる《マーカー・スファイア》さえ用意すれば、大体の問題は解決します。

勿論、欠点がありますよ？

魔力消費量が多い上に発射準備まで時間が掛かり、《マーカー・スファイア》を破壊されると再誘導が面倒なので放棄したら魔力は無駄ですし、そもそも空間ごと爆破されたら乱数回避機動も無意味とかエトセトラ。……まあ、誰かが気付いて露骨に対策しない限りは、愛用したい所存です。

「ぐっ……。この、……悪魔め。…覚えて……。やが、れ……」

「あ……あ……。ごめん……。な……。さ……。……」

さて。余った並列思考を遊ばせている内に、34発の着弾を確認。ヴィータさんとシヤマルさんの贖作物は、フェイトちゃんの闇と同様にデータ片を散らしながら消滅して行きました。

「Target neutralized」

「ふう……。アリサちゃん、”すずか”ちゃん、そろそろ勝てそう？」

「相打ち上等でやれ、ばっ！ 勝てなく、もないわねっ！」

「こっちは、もう少し掛かるかも……？」

耐久値下方疑惑がある闇の皆さんですけど、得物や近接戦闘技術が似ている長剣VS大太刀だとアリサちゃんの腕では苦戦するようで、”すずか”ちゃんの方は本人の慎重さとザフィーラさんの頑丈さも相まって長引いているみたいです。

気持ちとしては、二人を信じて声援を送りたいところではありますが、残念ながらこれは模擬戦に非ず。この後もさくさく攻略する必要があるので、良心を押し殺しつつシグナムさんとザフィーラさんを適当に撃ち墜^{デイベイン}として戦闘終了。次に備えて、高層ビルの屋上で小休憩を挟みます。

「あーもー、あのベルカ騎士やたら強いなの……。ありがとね、”なのは”。流石は、音に聞こえし『弾幕の引き手』様ってところかしら？」

「横槍を入れて仕留めただけなので、あまり感謝されなくても……。」

そも一番強い相手を任せてしまった負い目が有るので、素直に受け取れません。無論、変な異名については関係無く不要ですが。

「単騎で2人撃破して、残りも私達以上にダメージを与えてきつちり撃破。これだけ貢

献しているんだから、むしろ堂々と褒められなさいな」

「うん。私も同意見だよ、＼なのは＼ちゃん。あと遅蒔おそまきながら、先程は有り難う御座いました」

「……ともあれ、こっちはこっちで連携を試行錯誤します故、御了承の程を」

敵の数や種類にも因りますが、バインドで足止めしたり1発の誘導弾を向かわせるだけでもアリサちゃんや＼ずずか＼ちゃんは楽になるでしょうし、直接的な魔力供給の他にも最終手段を含めて多々色々。

思い返せば、管理局の方針なのか高ランク魔導師は単独行動を重視されており、模擬戦もそれを想定した物ばかりでしたので思考からすっかり抜け落ちていました。連携・協力・援護の2文字達……。今度暇が出来たら、フェイトちゃんや＼はやて＼ちゃんを誘ってPVE形式の模擬戦か、何かしらのゲームで融和団結をしたいところですね。

「そう言えば、連携と言ったら……」

「簡単に出来るアレが有るよね、アリサちゃん？」

「あの、＼アレ＼とは……？」

「『レアノイレ』の事よ」

「……………成程？」

何も分かりませんが、連携に関する例のアレが有るようです。では全指向性マイクの

代わりに「レイジングハート」を突き付け、再度訊ねてみましょうか。多分きっと、何が分かると思います。

第56話：討てども晴れず

side：恭也

約1時間前、美由希から「こつちに、アリサちゃんも『すずか』ちゃんが来たんだけど……」と困惑しながら確認電話をされ、「なのは」の懸念が当たってしまった事を理解した。

「なのは」が夢の中で出会ったのは「なのは」自身とフェイト、そして「はやて」という新しい友人のドツペルゲンガーのような者達で、若しかしたら人だけでなく生物も模倣されて現れる可能性すら予想していたが、まさか魔法有りきとはいえ現実に成るとは思わなんだ。

因みに、その当時の「すずか」は忍と一緒に夕食を食べており、仮に此方が偽者だとすれば忍やファリンやノエルも気付けぬ精巧さである。彼女達よりも遥かに付き合いが短い己では看破も同定も難しく、故に此方を本物と見做して四周警戒を続けるしかなかった。

そうしている間に、何度か魔力反応の高まりを感じては失せて行く。

日頃、余剰魔力を貯め込んで循環させているらしい「なのは」と同じ屋根の下で過

ごし、補助魔法による強化などの体験も有つてか最近では魔力反応を感じられるようになったものの、殺気とは違い常時発生している電磁波みたいなモノであるからして、ずっと位置情報や出力を知れる感覚は慣れそうにない。

取り分け、保有魔力量が凄まじい我が妹は数百メートル先でも薄っすらと分かる程で、それ以外の魔導師なら判別は出来なくとも接近ぐらいは察せる。

「ふむ……。次に切り合うのは2週間後だぞ、シグナム？」

“なのは”から人探しの依頼を受けた際、見せてくれた資料に写っていた騎士甲冑を纏ったシグナム。——その姿の儘、まま空から月村邸の中庭へと侵入して来るとは珍しいどころか異常である。少なくとも、本物なら今回の事件対応に駆り出されており、とても忙しい筈だ。

「それについては理解している。だがこの身は、この私は、今宵限りの命である事もまた理解して貰いたい。何を莫迦など思うかもしれないが……。如何か饑はなむけに、全力で切り合つてはくれないか？ 私が使うのは、この剣「レヴァンティン」と鞘の「レーギヤルン」のみで魔法は使わない」

成程。それは少し残念だが、ならば盛大に送り出さねばな。

「……………一つ、条件を変えて欲しい」

「可能な範囲ならば、叶えよう」

「確か、瞬間移動魔法だったか？ それも有りとする」

「ほう…………。それを恭也は対処できるのか？」

「まだ見せていない技が幾つか有ってな。楽しみにしてくれ」

御神の剣士は弱くない。勝たねば命を落とすような世界を生き抜くために技を磨き、強靱な肉体を目指して研究を重ね、世代を重ねて来た。だからこそ、戦えば勝つのだ。本来、対魔法使い戦を想定していない剣術だろうと、攻撃魔法や飛行魔法さえ無ければ勝機は掴める。

『御神流』師範代、ゾオルケンリツター“高町恭也”。推して参る！

「ふっ…………。『守護騎士』が将、ゾオルケンリツター“八神シグナム”。さあ、来いッ!!」

…………

…………

…………

尚、戦いは白熱こそすれ1時間と持たずにシグナムは散ってしまい、本人は満足そうにしていたが俺個人としては消化不良感が否めなかった。…………まあ、それは再来週の楽しみに取って置くとして、2階のバルコニーから半眼で手招きをする忍に対しては何と

説明したのか？

“なのは”が魔法に関する事を明かしていれば簡単に済むんだがな……。取り敢えず、悪霊の類で誤魔化しておこう。隠し事を秘めているのは月村家も同様なのだから、御相子様というやつである。

く

side:クロノ

初めに“なのは”から話を聞いて、リインフォースからも確認が取れて補足されても、今一つ現実味が湧かなかつた。

現存している「夜天の書」から自動防衛運用システム「ナハトヴァール」が復元され、その最終段階であるコード「止まらぬ破壊機構」が出現するのなら話は分かる。だが、微粒子レベル以下まで分解されたコード「止まらぬ破壊機構」の残滓と思われるモノが復元され、何かしらの事件を起こすかもしれないと警告されても「まあ、ロストログアだから有り得なくも無いが……」と濁しつつも、一応の備えはした。

その結果がコレである。——地球全体で急速に魔力反応が上昇し、其処に現れた黒煙に近付けば蒐集されたデータを元にした魔法生命体へと姿を変え、様々な理由によつて敵対行動を取る。

何とも無茶苦茶だった。

常識が通用せず、魔導の奥深さと恐ろしさを再認識したところで、黒煙の中から出て来たリンデイ提督の……「闇」と仮称しておこう。コレを如何したものかと苦々しく思い、現実逃避がてら疑問の追求へと並列思考を割く。

まず、リンデイ提督は「闇の書」に蒐集されてない。可能性としては、本人以外の記憶から再現されたという線が濃厚だが、「なのは」が担当するポイントでは非魔導師である筈の「アリサ・バニングス」と「月村すずか」が援軍として現れ、事件解決を手伝ってくれているという事例を鑑みれば、もう地球周辺に居たのなら誰でも対象になるのだろう。

本当に無茶苦茶である。この調子なら、フェイトの所に「プレシア・テストアロツサ」が出現していても可笑しくは無く、リーゼ姉妹とかゼスト2尉とか、ラインフォースの闇も出現する可能性を思うと頭が痛い。

「あら、クロノ。折角だし、御母さんの相手をしてくれないかしら？」

「何の……、相手でしようか？」

「それは勿論、模擬戦に決まっているじゃないの。対人戦闘なんて随分久しいけれど、御

父さんが——まるで妖精のようだ——って褒めてくれたから、錆び付かせる訳にもね？」

実際は如何なのか？ 空間モニターに映る本物のリンディ提督に視線を向けると、慈愛に満ちた表情を浮かべつつ首を掻き切るようなジェスチャーを返された。詰まる所、余計なことを喋る前に口封じをして貰いたいらしい。

「了解しました。但し、手加減は致しかねます」

「ええ、構わないわ」

そう言っつて、リンディ提督は見覚えがあるカード状の待機形態であるデバイスを取り出し、「デュランダル」とリフレクター・ユニットを4基展開させて構えたのだった。

待っつてくれ……。何故、リンディ提督がそれを持っているんだ？

支給品だとスペック不足で、そもそも前線で戦う機会は皆無だろうからとデバイスを用いない所謂『結界魔導師』として技能を磨いた——と本人が語っていた記憶も有るのに、然も既製品をカスタマイズした【S2U】ではなく戦術デバイスの【デュランダル】が選ばれる辺り、偶然を通り越して悪意すら感じる。

「じゃあ、始めましょうか？ 親子水入らず、初めての模擬戦を」

「> クロノ。即行で捨り潰すことを許可します <

「……リンディ提督、任務中に私情を挟まないで下さい」

指示に従う訳ではないが、なるべく最速で終わらせてしまおう。笑顔が怖い人は、一人で充分なのだから。

く

side:はやて

「ほーらほらほら、姿勢制御が成ってない！ もっと綺麗に飛ぶか、＼なのは＼ちゃんみたく滅茶苦茶に飛ぶかの二択よ！」

「んな御無体なっ?! てか私、まだ魔法少女になって一月なんですけどー！」

「それが何？ 個人の事情なんて、敵は考慮してくれないわよ？」

「そーですね！ 《クラウ・ソラス》！」

「飛行速度が落ちている。誘導も甘くて弾速も遅い。20点」

＼なのは＼ちゃんによる威力偵察の結果、如何やら各ポイントに湧いた黒煙に近付けば誰かの姿を模した魔法生命体が敵対勢力として出て来る。——という事が分かった後に人騎ユニツン一体をした私とリインフォースは、オーストラリアのニューサウスウェールズ州上空へと投入されておりました。

「> ……分かりました。私が飛行全般及び防御を行うので、攻撃魔法の運用は御任せします。余裕があれば、バインドも試してみてください」 <」

「> な、なるだけ頑張ります……」 <」

何故か此方も教官モードで厳しく、視界が上下左右に荒ぶるのを感じながらもシューティングゲームのように当て……当て……当てる……なかなか当てられずに9割くらい回避されるか防御される泥試合を繰り返しているのと時間切れなのか、リーゼアリアさんの動きが止まりました。

「はぁー……。貴女、本当に八つ当たりのし甲斐が無いぐらいに弱いわね?」

「ぞ……っ、それは……それは、申し訳……けほっ」

「黙って聞きなさい。其処の忌々しい本のせいで、私やロツテが鍛えた部下や弟子達が大勢傷付いたし殺されたりもした。同朋も、その家族も、クロノの御父さんだったクラウド君もそう。此方の不手際も重なったけれど、【闇の書】さえ無ければ死なずに済んだのよ……。私は貴女を許さない。被害者の分まで、それ以上に大成して正義を為す覚悟……が無いなら……、そんな物、さっさ……壊し……て楽に……」

ぼろぼろと散って行く。その言葉には恨みと憐れみが宿っていて、普段はあまり言葉を交わす機会は無くても優しい人なのだと思付いてしまえば、胸が微かに傷んだ。

「ごめんなぁ……。けど、壊しただけで手打ちなんて生温いやろ?」

血濡れた道具とは悍^{おそ}ましく、憎まれるのは当然の事。それでも、そんな物だろうと人を救って笑顔に出来るのなら、未永く壊れるまで正しく使えばええ。私も最後の主として可能な限り奉公もするし、色々な問題に挑んで解決したりして、幸福の礎^{いしずえ}ぐらいには成ろうとは思つとるよ。……まっ、【闇の書】が私の大切な人達に危害を加えとつた場合、また別の答えやつたのかもしれないけどな？

「> 我が主……。どうか、あまり耳を傾けないように。アレは紛い物の言葉です」

「そうやとしても、参考には為るんちゃう？」

「> その度に傷付いては、戦闘に支障が出てしまいます」

「大丈夫やって。『なのは』ちゃんにス……。つ 《SLB》 される程やない」

「> ……………そのようですね」

名前を言っではいけない魔法を危うく口にしかけて、恐怖が背筋を撫で上げた。幾ら非殺傷設定^{マルチタスク}ゆーてもな、か弱い少女（9歳）に撃つて許される火力じゃ——止めよつか、この並列思考。

「エイミイさん、次のポイント指示を御願います」

「> オッケー。じゃあ……。フェイトちゃんが居るポイントD4で！」

「了解です」

ところで、フェイトちゃん居るのに追加戦力ということは若しや激戦区なのでは？
んん、何処へ行っても大変やね。

第57話：混沌たるヴィルデヤークト

side：フエイト

ポイントD4。上海シャンハイの空にて。渦巻く巨大な黒煙から出現するのは、嘗かつてドクター・プレシアが拠点防衛戦力として用いた多種多様な「傀儡兵」で、30体から先の撃破数は数えていけないけれども延々と戦い、次々と補充されて行く追加分の底は知れず……。この儘まま、戦い続けるのは正解なのかと流石に迷いが生じた。

「あー、ちようええかなフエイトちゃん……？ 今どない感じなん？」

「……幾ら倒しても、キリがない感じです」

「ほーん、それは厄介やねえ……」

幸いな事に、黒煙から一定距離を取れば追って来ないので休息は取れるが、破壊し続けても上限と思われる5体まで補充され補充され補充されての繰り返し。

攻撃パターンが単純で、連携も味方の「傀儡兵」に当てない程度の物だから独りでも如何に対処できていたものの、“はやて”が増援で来たせいか更に追加されて10体編成になったので弾幕密度的に切り込むのは難しく、此処から先は射撃戦に移行せざるを得ないため撃破ペースは落ちてしまう。

そもそも、高火力な砲撃魔法を連射しても涼しい顔をしている。『なのは』や『はやて』が可笑しいだけで、近距離戦も混ぜて消費魔力量を減らす工夫するのは努力の方向性として間違っていない……とは思いたい。

「なありインフォース、薙ぎ払ってみるのは如何やるか？」

「> 我が主の安全を考えますと、蜂の巣を突くかのような行為は賛成しかねます

<

「いやいやいや……。慢心とはちやうけどな、暫定S＋ランクが自衛できませんは過保護すぎるしアカンよって。いざとなったら高速移動魔法だの、短距離転移魔法で逃げればええ」

「> ……分かりました。戦術的後退をせずに済むよう、尽力致します <

「まつ、そんな時はそんな時や。それに夜更かしはしとうないからな？ ちゃちゃつと終わらせて、ぱぱつと帰宅するに限る——」

『なのは』にも劣らぬ魔力反応の出力。展開されたのはミッドチルダ式の魔法陣で、遠隔発動により【傀儡兵】の頭上にも環状魔法陣を伴うスフィアが10基配置される。確か、この魔法は……。

「せやから、借りるで『なのは』ちゃん？ 《デイバイン・ハイロウ》！」

『盗人猛々しい』とは此の事なのだろうか、冷ややかな思考が脳裏を過ぎる。『なのは』

は“本人は”はやて”を受け入れており、そういつた図々しきさというか太々しきさふてぶてに苦言を呈するつもりは無い。“なのは”が許しているのに、私がそれを咎めるのも可笑しな話なのだから、多少気に食わなくとも道理は通すべきだ。

そんな風に、発射から着弾そして爆発までの経過をぼんやり考えながら見ていると、魔力残滓の銀幕の奥から新たな「傀儡兵」が壺ひの式ふの参みの……計25体も現れた。やはり、まだまだ在庫は尽きないらしい。

「何でさつきより増えとんねんっ?!」

「多分……、誰かが増援で来たからだと思う」

「その通り！ 風穴を開けに来たわよっ！」

聞き慣れてしまった、明朗闊達な声がする。エイミイからの情報共有で概要は知っていたけれども、本当はこの場に居るはずのないアリサと“ずずか”が魔導師として存在するとは奇妙な気分になる。偽者であると分かっているにもかかわらず、学校では私だけが知る“なのは”と共有している秘密が脅かされたようで、少なくとも歓迎しようとは思えなかった。

「知己の為なら、押っ取り刀で即制裁。『劫火灼然の討ち手』アリサ・ステイクス！」

「大切な人の為に、今こそ冷徹なる意志を。『雪華の舞い手』ずずか・コキュートス」

「守りたいモノの為、万難を排す。『弾幕の引き手』なのは・オードナンス」

「『貴方の全てに善意をブチ込む！』『トリニティ・レイズ』、堂々顕現っ！」

やや恥ずかしげに、それでも楽しそうにデバイスを構えてポーズを決める。『なのは』……羨ましい。仮令たとえ、偽者でもあの表情を引き出したアリサ達が羨ましくて、悔しくなる。もつと私が人らしく成れば、人らしさに慣れれば、叶うのだろうか？

ううん……。そんな事よりも、今は戦闘に専念しなくては。悩みながら戦える程の余裕は無いし、どうせ彼女達は消える筈なのだから憂慮なんて無駄である。

「あら、『閃光の裂き手』に『夜天の継ぎ手』とはこれまた……。ねえ、『なのは』。此処で戦力多すぎなんじゃないの？」

「でも敵の出現傾向から察するに、大人数なら直ぐ終われると思うよ？」

「ふーん。まっ、それも一理有るわね」

そして、アリサの偽者は此方を一瞥いちめつした後、不敵な笑みを浮かべ、敵中へと臆さず突っ込んで行つたのだつた。……嗚呼、感情がささくれ立つ。

その眼差しに侮蔑の意思は含まれていなくとも、助けてあげるという上から目線が気に食わない。偽者のくせに、紛い物の実力のくせに、努力なんてしていかないくせに『なのは』から認められて、自信に満ち溢れているサマが許せなかつた。

「バルディッシュ」

「Yes sir. 《Negatron catapult》set up

「

一緒に見返してやろう。私はまだまだ切り込めるし、速くなるのだと。

」

side:なのは

アリサちゃんが押し切り、フェイトちゃんが切り抜ける。——バニングスの方のアリサちゃんともそうなのですが、互いに譲れない何かの為に冷戦染みた応酬が度々発生しており、今回は敵の撃破数や技術性スタイリッシュの高さで競っているように見受けられます。

「んー……。やっぱり、殲滅速度的には射撃戦の方が早いような……」

二人が敵中を飛び込んでいるため下手に撃つと誤射になりますし、そも誘導弾で手伝えれば競争の邪魔になってしまいます。……や、さっさと終わらせるなら無視して武力介入すれば良いものの、また別の場所でやられるくらいなら此処で白黒付けて欲しいなとも思っています。『すずか』ちゃん＆『はやて』ちゃんと共に傍観を継続中です。

「理屈上はね……。『なのは』ちゃんみたいに大量の高威力誘導弾をぐねぐね曲げたり、砲撃魔法を連射していたら普通は魔力欠乏と知恵熱で倒れちゃうよ?」

「其処は、カートリッジとデバイスで補えば何とか」

「それでも、不規則に動局的に当てるのは大変な筈なんだけど……」

被弾覚悟で肉迫せざるを得なかったり、ちよつとしたミスが敗北に繋がりがねない近接戦も大概だと思うのですが……。

まあ、得意&不得意は人それぞれですから、フェイトちゃんやアリサちゃんの早いのなら「これは早い」なのでしょう。そう割り切っていると、数メートルと離れていないのに「はやて」ちゃんから念話で話しかけられました。

「> ちよいちよい、なのは「ちゃん。この「すずか」ちゃん当たり前のように居るけど、どんくらい普通に接したらええんか? <」

「> 同業者且つ、初対面のそっくりさんで良いと思うよ? 私も『灼眼のシャナ』っていう小説の設定が混じっているなく程度の理解度なので、正解かは分からないけれども <」

「> もう一人の方は明白あからさまやったけど……、ホンマに? <

「> ホンマモンです <」

「> ……………何でやろなあ? <」

「> さあ……? 取り敢えず今は、空飛ぶ列車が出ないことを祈っています <」

その場合、内側に入って破壊しに行くのはアリサちゃんの役目でしょうけど、毛虫爆弾が空中散布される恐れがあるので勘弁願いたいです。

……

……

…

さて。5分ほど見守っている間に追加分が現れなくなり、最後の1機をアリサちゃん
とフェイトちゃんできり分けてもまだ黒煙は残っています。

「ならば、次はボスのような何かと戦うのだろうか？」——と出て来るのを待っていた
ところ、黒煙から現れたのは赤と黒のフレームが目立つ巨大な人型兵器で、エアイン
テークの周囲や関節部には金色が差し色となっており、背中には垂直ミサイルを格納し
ているであろう大型ブースターユニットが2基、そして極め付けが左肩部に施された
『ナインボール⑨』のペイント。

それは正まさに、私が夏休み中に敗北を重ねたロボゲーのラスボスでした。

最早、勝負が如何とかそんな余裕は有りません。明らかなイレギュラーである
『熾セラフ天使』の脅威はゲーム中で散々思い知らされているのですから、私以外の皆が初見殺
しをされる前に仕留めなくては。

「全員散開！ 絶対に止まらず、距離を取って！」

「— WARNING. LOCK—ON ALERT —」

大量に放出され、頭上から降り注いでくる垂直ミサイルと思しき半実体弾。流石に完全再現はされていないらしく、遠距離攻撃に関しては古代ベルカ式でよく見られる質量と耐久性を備えた魔力弾になっていましたが、真に警戒すべきは近距離攻撃のレーザーブレードです。

実用範囲内の高耐久アセンでもほぼ四撃必殺で、更に距離が離れていても正面方向にダメージ判定がある光波を飛ばしてきます故、かなり厄介なんですよね。それが何処まで再現されているのやら……。

曳光弾のように赤黒い魔力光を纏ったチエーンガンの弾幕、円形状で避けにくいパルスキャノンの連射、飛行形態への変形による高速離脱。再現不足とはいえ、10mを超える鋼鉄の巨体がそれらを対人用で使ってきた精度も良く、迂闊うかつにレーザーブレードを振らない程度の戦術。パターンを備えているとは、悪い意味で期待が持てます。

因みに耐久性はゲーム通りなのか、《Divine buster》を直撃させても壊れる様子はありません。恐らく、耐久値Aがゼロにならない限り破損描写すら生じないのでしよう。

「ちゃんとダメージ通ってんの、これ?!　　”なのは”、切つちや駄目?」

「高火力で刃渡り5m程度のレーザーブレードを躲かわせるのなら、どうぞなの」

「あく……。やれなくもないけど、賭け時ではないわね」

そう言いつつも、何度か接近する素振りを見せて反応を窺うアリサちゃんでしたが、『熾天使』の両手首から延びるレーザーブレードの素早い迎撃動作や、その振り払いで生じた光波——攻撃判定がある飛ぶ斬撃を観察して眉をひそめた後は、淡々と射撃戦に努めていました。

尚、5人掛かりなのでターゲットが散ると、ゲームとは違って此方の当たり判定が小さいのもあつてか危な気なく撃ち据え、やがて耐久値が尽きたらしい『熾天使』は墜落しながら爆発四散。……如何やら、この場はこれで最後みたいです。黒煙もすっかり消え失せ、月光に照らされた叢雲しか見当たりません。

「ふー……。 Good job、なのは」。それにしても、あんな物と交戦経験が有るなんてアンタの周り大丈夫？ 『鬭争の渦』強大な“力”を持つ存在が集い、武力衝突などによって新たな因果を引き寄せては激化する事象のこと。つてない？」

「絶賛ぐるぐるしているから、この状況なんじゃないかなと推察する次第です」

要するに、物騒な負のスパイラルに陥おちっているのではと指摘された訳ですが、『ジュエルシード』に『闇の書』と続いてこの事件ともなれば偶然で片付けるのは無理が有ろうと思われます。まあ、確率論的には偶然が続くことも否定できませんけど。流石にちよつと御勘弁を……つて感じですよ。

そんな風に、並列思考で温まった脳を冷ましがてら愚考しておりますと、別のポイントへ移動中のクロノさんから通信が入って来ました。

「＼」話の途中で済まないが、巨大な魔力反応を新たに検知した。増援を頼みたい
 「＼」

「あのねえ、御役人様……。アレは近寄らなければ暫く留まっているんだし、ちよつとぐらい休憩させなさいな。只でさえ人材・人手不足なんだから、無理して死んじやつたら如何しようもないわよ」

大太刀型デバイスの峰で肩を叩きながら、呆れたように話すアリサちゃん。恐らく同年代の筈なのですが歴戦の古強者みたいな風格が漂っており、若しかすると原作——フレイムヘイズの不老設定が流用されているのかもですね。

「＼」君は、こういった事象の経験は多いのか？　「＼」

「専門家のつもりではあるんだけどね……。広範囲に点在して、多種多様な亡骸が湧くような『夢現の狭間』なんて史上初じゃないかしら？　ロボットが出て来るなら、次は怪獣が出て可笑しくはないとだけ言っておくわ」

「＼」なるほど。それ故の慎重策と……。　「＼」

「Exactly. その通りで御座います」

おっと、トゲトゲしてきました。闇の方の『守護騎士』と戦う時にも、時空管理局を

嫌っているような発言をしておりますから、相手が執務官ともなれば尚更……といった所でしょうか。

「> ……随分、剽軽ひょうきんな物言いをするものだな？ <

「直截的に嫌味って言わなきゃ分からないかしら、『管理局シエリフ』さん？ この場は現実を基底とし再構築された【星幽複層世界アストラル・レコード】で、此処での被害は現実への不審死や事故になって反映されるのに、あんた達の秘匿主義のせいで避難誘導計画もシエルターの確保も遅々として進まないツ!! 世に平穩のあらんことを……？ 信条は御立派ですけどね、そんな幻想で騙くらかすのも限界が有るのよ!」

ふむ……。このアリサちゃんが語る世界観とは微妙に噛み合ってますませんが、確かに時空管理局の秘匿主義などころもあつて、大勢の地球人は予備知識もなく魔法関連の脅威に晒され続けたので少なからず共感を覚えます。

私も、本物のアリサちゃんや「ずずか」ちゃん達に魔法少女であることを秘匿してはいますけど、例えるなら私は警察官なのを隠しているだけで、事件その物が怪現象で片付けられる現状を良しとしている訳ではないのです。だからと言って、魔法少女代表みたく矢面やおもてに立ちたくもありませんが。

「恐怖と混乱から立ち直れる余裕が残っている内に、この世の本当のことを知らしめる。それが成れば討滅者フレイザーも増えて、行く行くは未来に繋がると私達は信じているわ……」

「> ……………其方の言い分は理解した。仲良くなれそうになくて残念だ <」
 「模範回答をどうも。じゃ、あと10分程度は休みたいから、先走らないで頂けると助かります」

通信終わり。とばかりに空間モニターを斬撃で消滅させたアリサちゃんは、「また詰まらぬ物を斬ってしまった……」と言つて元ネタが分からないフエイトちゃん以外を苦笑させたものの、次も戦闘が確定しているので依然として空気はピリついており、休憩場所を高層ビルの屋上へと移しても沈黙が漂っていました。

ええ、はい。

体力や魔力は仕方無いとして、気力を減らしたままボスラツシュをしたくはないのでブレイクしませう。会話デッキから無難そうな話題をサーチし、会話文へと昇華させながら口頭出力を開始。

「そう言えば……。『すずか』ちゃんは『雪華の舞い手』っていう異名の割りには、あんまり凍結魔法は使つてないよね?」

「うん。昔と違つて、意識的に変換をオン・オフ出来るようになったのもあるけど、弱い敵なら拘束して爆破したり、魔力弾だけで終わっちゃうからそうしているの」

「あとは、私の変換資質が《炎》なのもあつて微妙でね……。『すずか』が敵を凍らせて、私がぶつた切るのも有りつつや有りなんだけどさ。普通に攻撃したら勝てる場合が殆どだし、『すずか』も格好付ける性分じゃないのもあつて最近だと『爆殺姫』の方が通りは良かったりするわよ？」

「ふむふむ、参考になります」

アリサちゃんからの補足も入り、悩みが1つ解決しました。私の場合は、バインドからの砲撃による一撃必倒を狙いがちで、そういう使用方法は目から鱗の発想でした。都合が宜しければ、何処かしらで試してみたいところ……。

「あ……、なのはちゃん。何でこっち見とるん？」

「『はやて』ちゃんなら拘束しやすそうだなと思つたものの、フェイトちゃんの《Galeform》を蒐集している筈だし、試すならヴィータさんにしようかなとか考えてました」

御礼参り——リベンジもまだなので、丁度良いかもしれませぬ。

「せや、その手が有つた……!」

「ラインフォースさん、教えてなかつたんですか？」

「> あの魔法は、バリアジャケットの表面にバインド爆砕用の薄い装甲を纏わせる魔法のため、爆砕をする場合に自身もダメージを負う可能性があります。応用するにし

ても、もう少し魔法への習熟を待たねば危険なので保留中です。く」

模擬戦をする度に、バインド対策をしてはいけない試練でも課せられているのではと疑ってましたが、道理で成程。

「ふーん……。あの魔法ってそれぐらい難しいんだね、フェイトちゃん」

「流石に、恒常的な余剰魔力の貯蓄よりは簡単だと思うよ……？」

「リンディ提督もやっているから、結局は勘と慣れなんじゃないかな……？」

私からしてみれば、無意識的に電気へと魔力変換しているフェイトちゃんも凄いなとは思いますが、まあ隣の芝は青々しく映^はえる物。その後も、適当な話題をドロウして会話フェイズを通した団結力の醸成と、気力のチャージに努めるのでした。

第58話：望まぬ再演

side：クロノ

通信が途絶した空間モニターを閉じ、降って湧いた待機時間に溜め息を吐く……。
「アリサ・ステイクス」の指摘は、善性という物が有れば大抵の人なら賛同したくなるような内容ではあったが『時空管理局』の設立から65年も過ぎた現在、ああいった生温い手段に関しては議論も検証もやり尽くされている。

「やれやれ……。少し前の自分を思い出すな……………」

高度な文明と魔導技術を持つミッドチルダが、未だに次元航行も出来ず、質量兵器で殺し合っている野蛮な世界に配慮すべき意義が有るとでも？

管理局が担う次元世界の平和維持活動とは、無償の愛から生じた訳ではない。ミッドチルダ及び同盟関係にある諸国の安寧を守り、恒久的な発展と自然環境の調和を目指すために行っているという前提を踏まえれば、少しぐらい大局観を持つ者なら察せるだろう。

この地球での出来事は、対岸の火事である。

仮に滅んだとしても痛くも痒くもないが、第一級搜索指定ロストログアが管轄内へと流れ着いたり、犯罪者に利用されても困るから封印または処分しておきたい。そういった都合で、貴重な人材や物資がこの辺境で費やされているのだ。

人道的に、良識的に、個人的な意見として地球人の避難誘導や保護はすべきだと思う。然し、地球と外交するメリットすら見出せていない現状では、極僅かな現地協力者に呼びかける程度の権限しか与えられておらず、ミッドチルダ側も不必要なコストを払いたがる道理も非ずで……。

「だからこそ、現場組が好き勝手できるという最大の強みも有るのよ？」——そうした冷たいロジックを嘲るように締め括ったリンディ提督は、少し疲れているようにも見えた。

……

……

…

ともあれ、だ。今は法解釈だの歴史の授業をする時間が惜しい。残念ながら、
「サ・ステイクス」への反論はまたの機会に——

「待て……。むしろ訪れない方が望ましい」

そうとも。あの跳ねつ返りで傲岸不遜な無法者がやって来るといふ事は、また今回の事件が再発するなり問題が起こっている状態であるからして、会えないのは良い兆候だと言える。

そもその話、彼女が認識している世界観は僕達が知るモノと違っているらしく、色々物知り顔だった「なのは」ですら首を傾げる程度なら適当に聞き流した方が無難だろう。御互いに理解できずとも利用はできる。それさえ分かれば、現場としては十分だ。

無論、「不明な戦力をアテにするとは、些か無用心では？」と参謀本部から指摘される懸念も有るが……。敵対行動をしていた『ヴォルケンリッター守護騎士』を戦力に加えた「闇の書事件」よりはかは批判され難く、元はと言えば足らぬ戦力を現地調達している結果がコレなので、幾らでも舌鋒を逸らしてみせよう。

正規戦力を、十分に用意できない後方が悪い。

さて……。あと3分程か？ どうせ休憩するのなら、此方と合流してからでも構わないだろうに……。こういう時だけは、リゅうちやう流暢に話せる「レイジングハート」のようなデバイスが欲しくなる。

「What's wrong?」

「済まない。ちよつとした気の迷いだ」

「I see.」

【「デュランダル」を宥^{なだ}め、遠方に聳^{そび}える巨大な黒煙を再観察する。——現状ではこ

れが最大級の規模らしいが、『守護騎士』もユーノもアルフも、武装局員の面々やリーゼ姉妹も別ポイントで黒煙の対処をしている為、この大物を消し飛ばしたところで事件解決には至らない……と想定しておく。

現に、「なのは」が夢で見た三人組は発見されおらず、彼女達の予告通りに事件が起こった事から主犯格または関係者であるのは間違いない、予告を信じるなら決闘による決着を望んでいるはずだ。若^もしかしたら、あの黒煙の中から現れる可能性もあるが、それならそれで手っ取り早くて助かる。

此方も、暇を持って余している訳ではない。何時だつて恒常業務という物は非常時でも消失する事は無く、ただ単に後ろへとズレ行くのだから。

く

side:なのは

クロノさんが待ち惚^{ぼう}けているポイントP3——冬化粧されたブロッケン山が見頃ら

しいドイツのとある地方へ集団転移するや否や、台風の如く巨大な黒煙が形を変えながら魔力反応が増大して行きました。

多分、あのサイズから私達のそっくりさんが抽出されるとは思えないので、恐らく超弩級の……それこそコード「止まらぬ破壊機構」の闇でも出て来そうですね。ただ先程は『熾天使』、その前も古風な装備の『守護騎士』とか、大量のフェイトちゃんといった変化球ばかりでしたから、きつと今回もそんなのだらうなと覚悟は済ませています。

「増援に感謝する。だが……、済まない。少し、冷静さを保てそうにない」

まるで悲鳴か呪詛のような音が響き、黒煙を裂いて現れたのは見慣れた白い双角と絡みつく黒い触手。要らない物を除けば、その特徴的な人工物は次元巡航船『アースラ』の艦首にそっくりですが、クロノさんが動揺するという事は……もつと最悪な予想の方なんでしょうね。

「> 不審船より船舶識別コードを受信！ まさか、そんな事って…… <」
 「教えてくれ、エイミー……。あの船は何だ？」

「> ……………」級次元巡航船『エスティア』。艦長は……、クライド・ハラオウン提督 <」

嗚呼、やはり……。私が『守護騎士』に襲撃された後、『闇の書』に関する資料で閲覧した記憶があります。管理局は過去に二度も『闇の書』を捕捉していたものの、11年

前となる二度目では次元巡航船と提督を喪うなど惨憺たる結果で終わってしまいました。

その提督というのがクロノさんの御父さんだそうで、閲覧権限が低くて詳細は不明でしたが、こんな風に座乗している次元巡航船が侵蝕されてしまえば脱出は困難ですし、若しくは何かしらの職責を果たそうとして殉職したのかもしれない。

何方にせよ、先程までと違って物理的・心情的に倒し難いのは間違いないかと思いきや……。周囲の雰囲気なんて一顧だにせぬ、歴戦の専門家が居ることを忘れてしました。

「随分、長いこと閉じ込められていたみたいね……。『なのは』は、『小夜啼鳥』を見るのは初めてかしら？」

「んー……。それっぽい物なら、割りと最近」

「とにかく、絶望とか失意とかでジメジメしてそうな外観だなんて感じれば、大抵は『小夜啼鳥』よ。あれをブチ壊せばこの世の歪みは正され、囚われの人々は摂理へと回歸し、私達は善行を重ねて高枕。三方良しつてところね。……まっ、そういう訳だからキリキリ切るわよ！ 《タイラント・レイブ》、フルドライブ!!」

適当に会話を合わせていると、気炎万丈なアリサちゃんが噴進弾の如く『エステシア』へと切り込み……。案の定、多重複合防御魔法に阻まれて失敗しました。でも流石に、コード「止まらぬ破壊機構」よりかは枚数が少なく、強度も控えめらしいので何と

かなりそうです。

「> ちよつとぐらい普通に切らせなさいな！ このこのこのツ!! <」

「> アリサちゃん、普通に中距離戦へ切り替えようよ……? <」

「> あのね、 “ずずか”。最後まで取り置いてこそ、奥の手って言うのよ! <」

「> 奥の手が『神威召喚』じゃないのは、多分アリサちゃんだけだと思ふなあ……<」

魔法で形成された長大な刀身による斬撃を繰り返し、2枚目までは根性で突破したアリサちゃんでしたが耐熱または耐刃防御魔法が展開されたのかそれ以上は進めず、迎撃用の魔導砲や魔力弾により引き剥がされ、その間に防御魔法が再展開というパターンも見知った通り。

取り敢えず、あの時と同様に大火力を撃ち込みまくれば勝てそうなのは良いとして、本当にこれをサクッと倒しても宜しいのか如何か……。少しだけ逡巡しておりますと、広域通信が流れて来ました。

「> ……ら、2番艦『エス……ア』。【闇の……再……果た…、船のコント……ルが奪わ……ま……。辛うじて、《ア……ンシエル》……ツトを爆……理……が、退艦……叶い……ありま…… <」

「> 確かにクライド提督の声ですが、最後の通信記録と同じね……。クロノ執務官、

他の皆さんも遠慮なく任務を遂行するように <」

「……了解しました」

関係者でもあるリンディ提督が指示を下し、クロノさんが異論を唱えないのなら一応の納得はしますけれども、あの『エステイア』に閉じ込められているらしいクライド提督の闇だろうと、これまでの闇を思えば多少の意思疎通も可能っぽい気はするのですが……。

所詮は闇。偽者で複製品だと判断しているのだとすれば、あんなにも人らしい魔法生命体の『守護騎士』やリインフォースさん、動物に人造魂魄を憑依させてある意味では生まれ変わった『使い魔』のアルフさんとは何が違うと言うのでしょうか？

オリジナルの有無？

たったそれだけの、些細な違いで存在する価値が認められないとすれば、それはつまりフェイトちゃんを否定したプレシアと変わらない暴挙では……？

くく

side : ■■

嗚呼、やはり……。私は魔砲使いであつて、演出家や脚本家には向いてないのだと思知らされました。そもそも、「折角だから有効活用を」と雑に考えたのが間違いだつた

のかもしれない。

「はあ……。 やつちやって良いですよ、アリシア」

「え〜？ 観戦し始めたばかりなのに、もう飽きちゃったの？」

「呆れたんですよ。 彼等の対応と、面倒臭がった過去の私に」

「いやでも、あんなシラス干しからシラス以外を集めるような作業なんて、誰もやりたくはないでしょ？ 僕や王さまだってそうだよ」

言い得て妙ですね。 あの不審船は、クライド提督と『エステシア』とコード【止まらぬ破壊機構】が混ざった化合物なので、比率からしても選り分け^よるのは非常に困難でした。 あとはまあ、そういった状態でも家族の絆で通じ合えるのではと期待していたのに、如何やら儂くて甘い幻想だったようです。

「極論、あんな物を出さなければ良かったのです。 探求心と善意で掘り当て、埋め直すのを惜しんで投げたくせに、感動の対面を期待した私が愚かでした。 ……とはいえ、打算も有ります。 あれを壊せば『アイデア』が解放されるでしょうから、若しかしたら自我が戻るかもしれません」

「まあ、そうやって希望的観測を……。 別に良いけどね〜。 僕としてはカツコイイ見せ場が出来て嬉しいし、弱っちい妹へのハンデにもなるので欣喜雀躍？ ってやつだよ」

さり気なくフェイトちゃんやデイスられたものの、それもまた『ストルゲー家族愛』故の捻くれた発言なので色々聞き流してあげませう。

「それを言うなら、一石二鳥とか一挙両得であろうに……」

然し、聞き流すのも阿保らしいと思ったのか、沈黙していた王さまがフォローに入りました。文脈的には欣喜雀躍でもギリギリ合っており、そういう所をその儘にしておくのも乙なモノなんですけどね……。こういった世話好きな因子は、〃はやて〃ちゃん譲りだなと感じます。

「そうそう、それofそれ！ さっすが王さま、小賢しいね！」

「……………紅蓮の。此奴、シバいて構わぬか？」

「徒労に終わるでしょうから、〃はやて〃ちゃんに八つ当たりした方が賢明かと」

「うぬも大概よなあ……。良かろう。少々、その意を汲んでやらなくもない」

大概なのは王さまもでしょうに、何を今更……。

「では、アリシア。一発盛大なやつをどうぞ」

「おつけー。僕の完璧で究極な、超カツコイイ魔法を御照覧あれ！」

そして紡がれるは、詠唱したくなるランキング上位に君臨する某JRPGの魔法で、確かに変換資質とか魔法の仕様からして再現しやすいのは理解できますが……………。うん、まあ、実用性が有れば結果オーライですね。ええ、はい。

第59話：弔いの砲声

side：なのは

一人だけ意気消沈しながらも最低限の砲撃をしていると、何処からか聞き覚えのある声で、聞き覚えのある詠唱を耳にして、アリサちゃんと同様に『小夜啼鳥』^{ナハティガール}へ切り込み中のフェイトちゃんを注視してしまいました。

無論、同じ声帯を持つアリシアちゃんの方だなどは九分九厘ぐらい思ってますが、知らぬ間にゲームデビューを果たしたフェイトちゃんが、あの格好良い呪文詠唱を組み込んだ新魔法でも御披露目するのかと少しだけ期待したもの……。当然の如く違った為、距離を取るように呼びかけます。

「二人共、強力な攻撃魔法が来るから退避を！」

「了解、なのは」

「ならばこれは、フェイトの闇の方って訳ね。I c o p y。」

—— 黄泉の門、開く処に汝在り ——

『小夜啼鳥』の頭上では青白い魔力光を纏った雷が巨大な魔法陣を描き、集う魔力量は私の《Starlight breaker》にも劣らぬ程。流石は、フェイトちゃんいかづちの先行者とても感嘆すべきでしょうか？ 魔力をそこそこ集束させて撃つのはフェイトちゃんも出来ませんが、一撃での高火力&広範囲の制圧を兼ねた魔法は苦手らしいんですよ。

単発火力なら《Plasma zamber breaker》、制圧力なら《Photon lancer・Execution shift》があるので大体何とかなるものの、数百メートルの巨体を単独で沈めようとするならば、やはりコレぐらいは必要かなと感じます。……まあ、普通そんな機会なんて滅多に無い筈なんですけど。

—— 出でよ、神の雷！ インデイグネーション!! ——

憤怒を冠した雷撃の極致。然しそれでも、『小夜啼鳥』の幾層にも及ぶ防御魔法を貫き、本体を少しばかり傷付けた程度で終わってしまいました。なるほど。イベント仕様の一撃必殺な方ではなく、戦闘で気軽に使える方だったようです。

そして数秒と経たずに、真紅と紫紺の砲撃が二の矢・三の矢として突き刺さり、これ

が決定打になったのか『小夜啼鳥』の声が沈黙すると共に、その巨体は砂のように崩壊しては虚空へと消え失せます。ところで……。思わず呆然と眺めていましたが、如何して今になって彼女達が介入したのでしょうか？ 同胞とも見^み做^なせる闇を撃つとは、意図が分かりません。

「> 聞こえますか、クライド提督？ <」

私の発言ではない、やや低い私の声。それが広域通信として流れて来ました。

「> 貴方の息子さん……。クロノが、執務官になったそうですよ？ <」

「> ……そ…うか。帰つ…ら、褒めて……な…いと…な… <」

「> ええ。是非、そうしてあげて下さい <」

『小夜啼鳥』が完全消滅するまでの短いやり取り。只、それでもクライド提督は満足そうな口振りで……。とても安らかに、眠りに就けたのだと思います。

「さて……。お待ちせしました、高町なのは」

「やつほー、マイ・シスター！ 今日ほちよつと御疲れモードかな？」

「感慨深いものよな……。まあ、其処そこの子鴉は要らぬが」

夢の時と同じように、けれども今度は現実でドツペルゲンガーの如く、その三人は現れました。身体的な特徴は似通っていても表情や声音は異なり、アリシアちゃんに至ってはその顔に古傷が一つも無いからか、見比べると別人感が凄いですね。

普通の生い立ちなら古傷なんて無くて、フェイトちゃんもアリシアちゃんのように在れたのかもしれないけど、そうではなかったからこそ私達は出会えた訳でしてむむむ……。取り敢えず、無駄な妄想は遠くへ投げておきませう。

「私達が望むのはオリジナルとの決闘です。就きましては、部外者の退場を願います」
「待ってくれ。先程のやり取りは何だったんだ?! まさか本当に、あの状態でも父さんは……クライド提督は生きているのか？」

如何もこうも、己が己である事を自認しているなら、後はオリジナルか否かの些細な違いでしかないと思うのですけどね。恐らく同意見なのか、紅蓮の私の方も不思議そうな表情でクロノさんを見つめています。

「はい……………? 随分と遅すぎる疑問ですね、クロノ執務官。誤解無きよう言語化するなら、あれは生まれ変わったクライド提督でした。彼は1年前に侵蝕され、生物的には終わりましたがデータとして残っていましたから、それを魔法生命体という形で再

生し、今に至ります」

「同一でなければ、本人じゃないだろうッ!!」

「同一ですよ。同じ記憶と自我を持ち、同じ仕様の魂から出力されるのはクライド提督らしい思考・反応・言葉です。そもそも貴方はクライド提督を、クライド提督以上に知悉ちしつしているのですか？ 貴方が本当に求めているのは、クライド提督らしさではありませ

んか？ 例えば、リンデイ提督は聡明で誇れる母親であつて欲しい。エイミイは御茶目で頼りになる相方であつて欲しい。——そんな風に、心の何処かで期待していますよね？ つまり、貴方が拘こたわっているのは『本物』ではなく『本物らしさ』でして、嗚呼……………。端的に結論を述べましょう。あれがクライド提督なのか如何かは、彼本人が決めることです。子供らしく反抗したいのであれば、どうぞ御勝手に」

途中から分かり合えないと判断したらしく、バツサリと切り上げた後は反論を封じるためか魔力反応が高まり、炎熱変換で生じた熱気によつて揺らぐ空間は怒りを表しているかのようでした。

「では、場所を移しましょう。〃なのは〃とフェイトと〃はやて〃、そしてリインフォースは付いて来て下さい」

望まれたのは決闘。なら暫くの間、アリサちゃんと〃すずか〃ちゃんとは別行動になりますね。尤も、ラスボス戦後の裏ボス戦みたいな感じでしょうから、これが最後にな

るのかもしれませんが……。そう思うと、少し寂しさを感じます。

「行つてらっしゃい、＼なのは」。アレに関して教えられる事は少ないけどね、貴女の灯火を信じなさいな。そうすればきつと、海霧も貫けるわよ！」

「頑張つてね、＼なのは」。ちゃん。他の皆様も、どうか御武運を」

「うん、行つて来ます」

アリサちゃんからは意味深長な、＼すずか。ちゃんからは模範的な声援で送り出され、集団転移した先の座標は海鳴市近海でした。然し、不思議な事にフェイトちゃんや

＼はやて。ちゃんの姿は無く、アリシアちゃんや王さまの姿もまた見当たりません。

「転移先をずらししました。これで、御互いに流れ弾を気にせず戦えます」

「へえー、転移魔法も色々と詳細設定が出来るものなんだね。ところで……。そろそろ御

芳名を伺うかがつても宜しいでしょうか？」

「アリシアや王さまとは違い、私は私のつもりですけれども……。では便宜上、＼ステラ」と名乗っておきましょう」

以前、一度だけ使ったコールサイン『ステラ2』。それを知るとは、この私は何なのでしょうか？ 私が【闇の書】に蒐集されたのは11月の末頃で、そのコールサインを使つたのは12月24日の夜。【闇の書】を介して知ったのかもしれませんが、はて……。

そも蒐集したデータは情報の塊でしかないのに、何かしらの理由で芽生えた自我に

よって情報収集をするような事なんて有り得るや否や？

「不思議そうですね？ もう少し、振り返つてみては如何ですか？ あの日の時あの場所で、貴女は抱えきれずに捨てたモノがあつた筈です」

「……………若しかして、凶星に織り交ぜて撃つたアレだったり？」

当時、コード【止まらぬ破壊機構】による侵蝕変換魔法《イルミンスール》の効果で円柱状に吹き上がる魔力流を拝借したものの、其処に含まれていた生命の感情——苦しみや怒りや恐怖といった激みを受け止めきれず、《SLB》へと集束させて撃つた覚えがあります。

只その場合、このステラさんは不特定多数の誰かになつている可能性の方が高いような…………。いえ、そもそも人格を保っているかも怪しく、私であるという自認をした上でステラを名乗る現状からして、この予想は当たらずとも遠いんでしようね。辛うじて方向だけは合っているみたいなの。

「浅い解答をどうも。差し詰め、私という現象は『禍津星』のステラなる淡い照明に過ぎませんが、文字通り客観視することで見直せました。ですから先行者として、貴女へ引導を渡そうと思います」

「それは勿論、教え導くという意味で合っているよね…………？」

「貴女の腑抜け具合によつては、それもまた吝かではありません」

真つ赤な余剰魔力を貯め込んだ四対八枚の翼と、三重の円環。そして少しばかり興味を持つていたりフレクター・ユニットの派生品と思われる大型浮遊ユニットが二基、直方体の金属らしき物から砲身状へと変形した小型浮遊ユニットが五基、更なる駄目押しとばかりにデバイスの形状も見慣れた杖型からベルカイズムを感じる籠手型に変わり果てた辺りで、何となく察しました。

攻防だけでなく、一人で遠近同時対応すべく割り切ったのだなど。

それから何故か等身も伸びて大人っぽくなり、髪型もショートبوبと項うなじで纏めたポニーテールの合わせ技とは、御洒落指数でも侮れぬ戦闘力を有しています。

「イグニス紅蓮聖衣」、炎着。……これが、万事において恙つつがなく勝利を納めんと欲し、闇の中で研鑽した集大成です」

「……………本気で戦う時の、御兄ちゃんや御姉ちゃんみたいだね。貴女と戦うのは楽しみにしていたけれど、そう来るのなら真つ直ぐに応えるよ」

決闘を挑まれ、たったの2日しか準備時間が残されてなかったもので、取り敢えず貯めておける余剰魔力を普段よりも貯蔵しておきました。翼が四対十六枚、円環が九重。手首や足首にも小型円環が一つずつ。

只、此処まで貯めこんだ余剰魔力を展開させると魔力濃度のせいで空間が揺らいだり、瞳の色が魔力光の桜色になったりとか健康面で色々ヤバそうな感じがしますし、

フエイトちゃんに見せた時なんて脱兎の如き《Blitz Action》による逐電をされた為、この戦いが終われば封印する予定です。

「はあ……。撃ち直し甲斐があり過ぎて、感動すら覚えます」

「や、これは準備時間が無かった故の、非常なる手段だと反論してみます」

「それを躊躇ためらいなく選り、何とかなってしまうのが問題なんですけどね……。まあ、事此処に至っては仕方無し。あとは砲火を交えて語りましょう」

直後、弾速も誘導性能もゆるゆるな誘導弾を6発撃たれ、此方も仕方無く距離を取りつつ迎撃すれば性能と数を増し、やがて砲撃も差し込まれるようになって、徐々に撃ち合いの応酬が激化して行くのでした。

第60話：対峙すべき深淵【前編】

side：はやて

2日前に「なのは」ちゃんから夢で宣戦布告された話を聞き、リインフォースからも可能性は高いと補足されても、もう一人の私が本家本元たる私と戦う理由をさっぱり思いつかず、実在性すら訝しんでいた自称「王さま」からも闘志は感じられずで……。ホンマに戦うんやろか、これ？ まあ、座標的に海鳴市近海へ集団転移したのに分断されとるから多分やると思うけれど、雰囲気は何ともかんともやね。

——そんな風に、のほほんと構えていると響めつ面の王さまから盛大に溜め息を吐かれ、まるで塵芥ちりあかたを見るかのような視線と共に爆弾発言を放り込まれました。

「のう、リインフォース。其処の子鴉が殻付きである事は、我は誰よりも知悉ちしつしている。故に聞きたい……。何時、初期化をするつもりだ？」

「> ……………せめて年末まではと思っていました、今回の事件を鑑みれば早めるべきかと <」

「何でや、リインフォース……？」「なのは」ちゃんが對抗魔法を編み出してくれたし、【夜天の書】の解析や戦力提供を条件に管理局も支援してくれる。だから暫くは、大丈夫

やって……………」

「よくよく考えてみる、子鴉。御前達がコード【止まらぬ破壊機構^D】と呼ぶ残滓ですら、これ程の余興を引き起こせてしまう。そんな物を宿して改変された『管制人格』の安全性など、誰が信じられる？」

それは……。リインフォース自身が、己を一番疑うんやろなあ……。

「^{よや}漸く理解したか……。どのみち、行き着くしかない。終焉の日を迎えても尚、我等はリインフォースに祝福された主として立派に成らねば、王として相応しく在らねば、最早そうする事でしか報えんのだ！——来たれ【^{デアボリカ}暗黒甲冑】、獄装！」

王さまが紫紺の魔力光による繭に包まれたかと思うと、次の瞬間にはリインフォースに酷似した姿へ変化していました。

銀の長髪、赤い瞳、見慣れた騎士甲冑、左腕に装備された槍射砲。顔立ちだけは成長した私のような、若しくは「おかん」を想起させるモノやったけれども……。こんな悲しそうにリインフォースを背負うことで、^{すが}縋りつくことで、浮かばれる訳があらへんやろ。

「それはアカンよ、王さま」

1年前。交通事故で私だけを残して両親が死んでしまった時は、そもそも盛大に泣いたし、世界の不条理を憎み、死に損なつたのに自殺しようとは思えなくて、このまま独

りで生きるんだなって漠然とした不安を抱いていた。

でも、何だかんだで新しい家族を得て、立場的にも家長に成ってしまつたからこそ分かるんよ……。皆、健やかに幸福でいて欲しい。私ですらそう思うんやから、おとんも「おかん」も、王さまの記憶の中にいる方のリインフォースだつて、そんな風に願うんとちやうか？

「私達は主や。理想の1つとして、王を目指すのも有りやろな。……せやけど、八神はやて」として幸福じゃなければ、愛に報いているとは思えへんのよ」

「幸福で刃は研げぬ！ その証拠に、貴様の体たらくは何だ？ 愛に溺れ、甘やかされ、精進が不足しているではないかっ！ 幸福な記憶なぞ、何時かは色褪せてしまう。だが魔導は、戦闘技術は、心身に刻まれて継承される!!」

王さまの右腕がブレた。そう思った次の瞬間には、衝撃が胸を貫いて少しだけ噎せてしまう。数メートルも離れていたのに、その場から動かずに打撃の威力だけが伝わる？ 恐らく魔力操作の応用だとしても、こんなに速い技を簡単に繰り出せるとは近接戦闘も相当な実力のはず。

「^{しか}確と聞け、子鴉……。幸福とは何も、心地よく楽しいことだけではない。厳しく辛く、それでも糧となり教わることが出来る。そういつた幸福にどれ程の価値が、重みが有るのか……。我自ら叩き込んでやろう」

「ほんなら、ボコされる前に私からも叩き込んだるわ。……幸福な記憶は、どんだけ色褪せてもええ。それは心の支柱に成って、何時でも勇気付けてくれるんよ」

「下らんツ!! 王とは孤高、与えるモノよ! 支えられる王なぞ、単なる神輿みこしだと知れ!!」

おーけい、意見決裂。模擬戦ですら連戦連敗中の“はやて”ちゃんにとつて、この戦闘でも勝てるビジョンなんて見えへんけれど、せーぜー敢闘賞ぐらいは貰いたいところやね……。

覚悟しいや、王さま。私の最弱は、ちいとばかり利くかもしれへんよ?

く

side:フエイト

私よりも表情が豊かで、幸福感と自尊心に溢れており、そして何故か私の姉だと自称する誰か。……事前に、“なのは”から聞いた情報を元に組み上がった人物像へ怒りにも似た衝動を覚えたものの、実際に対面することで確信を得た。容姿は私自身と近い

のに、在り様がアリサらしいのが気に食わないのである。

だからこそ、決闘を挑まれたことも分断されたことも都合が良かった。

何時か記録映像として見返されようとも、今だけは周りを気にせず醜く為れる。不愉快で、不可解で、不透明な心情を吐き出してしまふような汚らわしい私と為り、此処で全てを終わらせたなら………。また優しいフェイトに戻れると、そう思うのだ。

「貴女は、誰なんですか？」

「僕は『アリシア・テスタロツサ』。君の先行者で、御姉ちゃんつてやつさー」

額から左頬へと走る古傷は無いのに、意識すれば出せるであろう威勢の良い私の声がある。これで髪色が青系ではなく金のままだったらと思うと、ぞつとしない。私は、
 “なのは”とアリサの睦まじさを羨むことは有つても成り代わりたい訳じゃないのだから、『このアリシアを名乗る不審者は、偶然にも似ただけである』と己を納得させて思考を切り替える。

「……私に姉は居ません。それに本物のアリシアなら、医療ポッドに保管された状態で虚数空間へ落ちて行つたと聞いています」

「ちつちつちつ、其処は如何でも良いんだよ。僕がアリシアの記憶を持っていて、アリシアであるという自覚をしている事が重要なんだから、あとは認めてくれれば無問題モイマシタイなのだ。僕は“なのは”からも、王さまからも認められた。故に、僕こそがアリシアつて訳。

証明終了！」

アリシアの記憶……？

「待って下さい。虚数空間からアリシアの記憶を回収するなんて——」

「うんにや、フェイトの中にある方だよ。尤も、嚴重に『記憶封鎖』がされているっぼいし、そう簡単には思い出せないかもだけど……。そんな事よりもさく、そろそろバトらない？ 弱つちい妹に教えてあげたい事、たーくさん有るんだよねっ！」

……訊きたい事は多々あるけれども、其処まで挑発されたら此方も物騒な対応をしたくなってしまう。強さという指標は上を見れば切りが無く、また下を見ても切りが無い。それでも管理局全体で上位層の5%に含まれる空戦AAA+ランクの魔導師を、
“なのは”という格上に挑み続けている私を「弱つちい」とは、どれ程の実力を秘めているのか？

貴女が私の何であれ、本当に強いのなら喰らい付こう。そして弱ければ嘔み砕く。どちらにせよ、殺し合いでなければ戦闘行為は望むところだった。

「ふーむ、やつぱり素直だねフェイトは。本当に勝つ気があるならさあ……」

魔力が蒼雷となつて迸る。ほとほと私と同じ魔力変換資質ではあるものの、その惜しみない出力から想定するに保有魔力量は私以上……。流石に、余剰魔力を貯め込んでいる。なのは“程では無いとしても十分に脅威である。そして何より、気配の変化が凄まじい。恭

也さん達が鍛錬中に纏っているような殺気を当てられ、感覚や思考が凍り付きそうになるのを何とか押し堪えて睨み返す。

「こんな風に、ブチ転がす!!——って虚実&緩急を混ぜなよ?」

糸が切れるように殺気が途絶えたかと思えば姿が消え、背後から打撃を受けて視界が揺らぐ。起こりが見えなかった……? いや、殺気を霧散させつつ瞬間移動魔法を使っただけで、意表を突かれたに過ぎない。

「このっ!」

「——《Plasma Lancer》——」

「アハハッ、悪手も悪手! “なのは”と踊れる僕達に、その程度の射撃魔法なんて牽制にもならないっの!」

踏み込まれる。構成速度と弾速に優れた10発の魔力弾による壁を躲され、近接戦闘を強いられる。瞬時に、「バルディッシュ」を掲げて繰り出された攻撃を防ぐも、間近で見たその凶器は甲高い音を立てて無数の刃が回転し、まともに当たれば削り落とされそうだと恐怖心を抱いてしまう。

「ほらほら、頑張らないとこの↑壊^{サー}天式^{キュ}円月^{ラー}鋸^ッ↑で引き裂いちやうぞー? それとも……、もつと手加減をしてあげようか?」

「不要……です! 戦うなら、真面目にやって下さい!」

「えー？ こんな僕よりも、不真面目なフェイトに言われたくはないんだけど？」

拮抗状態から弾かれ、蹴られ、柄で打たれ、石突で突かれ、真つ直ぐに飛ばされて距離が開く。あの刹那で四連撃を、然も空中戦なのにその全てに威力が乗っているという事は、一撃ごとに距離を詰めながら繰り出したという事……。速いだけじゃない。飛行魔法の制御にも優れており、言動の軽さに反してその実力は揺るぎなく重厚だった。

……でも、それが如何した？

私は何時だつて強者と戦い続けて来たのだから、今回も例に漏れずそうなっただけである。集中しろ。惑わされるな。相手は上手く速くて強いけど、それだけだ。

「本当に、その程度で勝つ気なの？ 保有魔力量の7割ぐらいしか使えないくせにさ、頑張れば如何にかなると期待しているんだ？ それってまるで、綿飴みたいに甘く儂いよ」

「……………アルフに対する魔力供給量を減らせと、そう言いたいんですか？」

「ちよつち惜しいかなあ……。フェイトが幼くて弱つちい時に作った、弱つちい『使い魔』なんて高ランク同士の戦いでは足手纏いでしょ？ 現に今だつて仲間外れで、武装局員でもやれる雑魚狩りをやらされている訳だし、それならフェイトが全力で戦えるようになった方が魔力の有効活用つてやつ？ だから死なせないように、ぎりぎりまで魔力を吸い上げなよ。……まっ、僕としては魔導師ごっこでも構わないけれどもね」

怒りたかった。否定してやりたかった。でも、だけど……。一々尤もな指摘で、感情に身を任せればアリシアの言葉通りに「頑張れば如何にかなると期待している」事になる。然し、助言された方法を使えばアルフの努力が無駄になってしまふような気がして、思考が、意志が行き詰まり、悔しくて情けなくて睨み返すことしか出来なかった。「じゃあ、此処で第三の選択肢を提示してあげようかな……。今回は順当に負けて、また再戦時に成長して勝てば良い」

呆気らかんと、彼女はそう言い放つ。

「負けても大丈夫だとか、本当に次が有るのかなんて証明は出来ないけれども、現状では御姉ちゃんとしての2歳分のアドバンテージをそう簡単に覆せやしない。畢竟、ブチ転ひつきょう

がし確定なのさ！ ……………。嗚呼そう言えば折角だし、僕のもの凄くカツコイ

ゼネラル・マスター・モード
『G・M・M』も見て行つてよ」

気圧けおされ、その上で気を削がれて……。強襲すべきだとか、距離を取るべきだといった判断が付かぬ内にアリシアの容姿が大人びた物へと変わり、バリアジャケットの形状も装甲部分が増え、一見するとベルカ騎士のような印象を受ける。

「響け【青嵐装束】、雷纏バラスキエルつ!! さてさて、フェイトはこの技を見破れるかな？」

轟音と共に魔力流が吹き荒すさび、瞬間移動魔法を使っている素振りが無いのに姿が断続的に消失しては現れる。短距離転移魔法でもない。幻影魔法にしては発動が早く、何よ

リデコイが全て本物に見えるような精度で偽造するなど非現実的である。なら、この魔法は――

「はい、時間切れ。次回までに復習しといてね、マイ・シスター?」

青の残光。何時の間にか、振り抜かれた刃が通った軌跡を眺めつつ、先月振りとなる遠退く意識と痛みを記憶する。ところで、誰が優しいように優しくない姉を受け入れたとでも? やはり、アリサみたいな人は苦手だな……。

くく

side: はやて

えー、はい。一撃すら通せへんかったわ……。まあ、当然至極の結果やろな? まだ両足のリハビリが終わつとらんし、「夜天の書」はAI未搭載のストレージ・デバイスやから……検索速度も必要となる。王さまは五体満足……、検索速度もリインフォースに補助されている私より3倍ぐらい……早いともなれば、そりゃあ惨敗不可避という訳で……。あ、全身が傷むこと傷むこと……。

「全くもって取るに足らん! 貴様あ、古代ベルカ時代の生き証人であり、【闇の書】の使い方をよく知るリインフォースが傍に居りながら怠けていたとは笑止千万! 失われるのだぞ……? リインフォースが培^{つちか}ってきた叡智、戦闘技術、創意工夫の過程を言

語化できる唯一の存在がツ!!」

あんなあ、王さま……。反論どころか、意識すら掠れるぐらいにゴコしくさつてから色々言われても…、思考がこう……。上手く纏まらんのよ? あと胸倉を掴んで、揺するのもNGや……。まっすます意識が……。な?

「真似るだけでは、なぞるだけでは、真意も応用法もよく分からぬ……。貴様は知っている筈だ。母が作った料理のように、父による本の選定眼のように、引き継げなければ其処で途絶えてしまう。……。今からでも遅くは無い。必死に羽ばたけ、子鴉よ」

ほーん……。薄々思つとつたけど、王さまつて後悔しているんやね……。なるほろ、どーりで容赦がミジンコもあら……。へん——

第61話：対峙すべき深淵【後編】

side：なのは

桜色と緋色。既に幾百にも及ぶ魔力弾や砲撃が交わされ、されど混ざらず、流れ弾かれ相殺を繰り返しながら魔力残滓が飽和して行く。通常なら魔力残滓を回収したり、周辺の魔力素に干渉して押さえ付けたりする事で相手の魔力供給源リソースを削って行くのですが、流石に対策はされているようで……。

魔力残滓のみならず、周辺の魔力素も熱を帯びていて回収できません。

でもそれは、ステラさんが放出した魔力残滓とその周辺の魔力素だけであり、私が放出した分の魔力残滓と周辺の魔力素はきっちり押さえている為、御相子様というやつです。

ところで何時もは頼りがちな拘束魔法バインドに關しましては、御互いが周辺の魔力素を押さえた状態で飛んでいるため奇襲性が高い座標指定型は不発になりますし、設置型は魔力反応で察知して避けられ、チェーン型などで直接しようにも私と同様の慣性制御による無茶苦茶な軌道を描く相手を捕まえるのは難しく、何と言うか一回りして真つ当な砲撃戦みたいになっています。

「> やはり、中距離では罅らちが明かないですね…… <

「> 私としては、このまま続けて欲しいくらいなだけ…… <」

コード「止うまらぬ破壊機構」の残滓から派生した者で、撃ち倒さねばならないとしても楽しいのです。時折、ラインフォースさんが模擬戦で撃ち合ってくれたりもしますが、隙あらば格闘を仕掛けてくるので理想から少し外れますね。

故に、この戦いは体力の続く限り延長戦をしたって構わないものの、如何しても最終的には欲しくなるでしょう。——明確なる勝利を。御兄ちゃんのように、御姉ちゃんのように、そして御父さんのように『戦えば勝つ』。私の闇であるなら、先行者ならば同じように思う筈です。

「> それで次は、『御神流』の技でも見せてくれるの？ <」

「> 面白い冗談ですね、＼なのは。貴女も私も、あんなスタイリッシュな近接戦闘を成す運動神経はありません。故に……、もっと単純な事をします <」

そう《念話》で宣言すると同時に、ステラさんの飛行魔法の推力が過剰なまでに増大し、全方位から魔力弾や砲撃や網状のバインドのみならず、大剣状に変形した大型浮遊ユニットすらも驟雨の如く投射して来ました。後先を考えぬ全力全開の暴力。防御の上からでも潰そうとする意志。猶予を与えようとしない切り替えの早さ。

嗚呼……、本当に私らしいです。

有るモノだけで、自分の魔法と知恵とデバイスだけで何とかしようとして、全力全開と思いつながらやり過ぎないように手加減をする。そんな私自身でもあつた相手に勝とうとするなら、それはもう一時の優しさを捨てるしかないのでは？——と、安直的思考が脳裏を過ぎります。

「――《Distortion field》――
「バースト！」

斥力場による難攻不落の防御魔法。それを急速に膨張させる事で絶対不可侵の聖域を築き、あらゆる魔法を弾き逸らしては引き裂きます。尚、この応用の仕方は《AMF》《Anti Magilink Field》の略称以上に消費魔力量が酷く、大気中の魔力素や魔力残滓も押し退けるので回収率の面でも多用は控えたい所存。只それでも防御性能以外でも良いところが1つだけ有り、砲撃の間合いに潜り込んだ素早い相手を目視せずとも迎撃可能というのは《AMF》には無い利点です。

「> ぐっ……?! 何て出鱈目な魔法を……」

そう言いつつも、私が習得を後回しにしていた幻影魔法による分身をシレつと数十体も繰り出してくる方だつて、かなり出鱈目だと思うのですが……。探査魔法すら誤魔化

せる精度で、本物と見紛う自然な動作をさせないと意味が無い魔法というのもあり、結構難しいんですね。

「多分、其処かな？」

「『Quick buster』」

……まあ、実際に使われた側の感想としては、魔力の発生源を辿れるような相手には悪手である事を学べたので、弾幕を過剰に見せる等の演出目的以外では習熟しないでおこうと思います。因みに、答え合わせがたら放った砲撃はしっかり受け止められ、物理的に投げ返されました。我ながら器用ですね。無論、レシーブする意味は無いのできっちり避けませんが。

「これは困りました……。最早、殺し合うことでしか勝ち拾えそうになく、かと言って身命を賭すべき状況でもない。……………認めましょう、挑戦者としての敗北を」

「ええ……。もうちよつとだけ撃ち合わない？」

先程の『Distortion field』の応用魔法により、ステラさんの干渉下にある魔力素や魔力残滓を9割方吹き飛ばせたので仕込みは終わっております、向こうも幾つか切り札を用意しているんでしょうけど、このまま順当に戦えば順当に勝てる所まで来ている……とは思うのですよ。

「> それはまた、今回の楽しみに取って置いて下さい。さて……。私が貴女に決闘を挑んだ理由の1つに、どれだけ変わり果てたか確認したかったというのも有るのですが……。残念ながら、予想通り手遅れでしたね <」

「> 具体的には? <」

「> その貯めに貯めた余剰魔力、脆弱な人の身で耐えられるモノだとも? <」

脆弱な人の身で【神速】を越えた先の【閃】という領域まで至り、瞬間移動しながら切り合うような人達を知っている身からしますと、やれなくもない気はします。

「> はあ……。付いて来て下さい <」

そう言つて、バリアジャケットを解除したステラさんが手を叩くと転移魔法が発動し、次の瞬間には見慣れた臨海公園の敷地内へと座標が変わっていました。急に勝敗が決まって不完全燃焼気味ではあるものの、先行者として色々教えてくれるのなら大人しく拝聴したい所存です。ところで、バリアジャケットを解除しても変身魔法は解かないんですね?

適当な服を思い付かなかったのか聖祥大附属中学校の冬服を纏っており、少なくとも4年分ぐらいは先行しているのだなと気付きを得ました。

「まず始めに、私という意識が覚醒しました。コード【止まらぬ破壊機構】と戦っていたのに、魔力流を取り込んでいたのに、何故か闇の中を漂っている……。当事者の貴女な

ら、察しは付く筈です」

まさかとは思いますが、自分の精神ごと撃ち捨てていたとでも……？

「やつと気付きましたか？ あの日あの時、貴女は私を撃ち捨てたのです。死の恐怖と、嘆きと、怒りで揺らいだ私を即座に切り離せてしまった。……まあ、当時は世界規模で『イルミンスール』が発動していたので、『固有記録』の境界線が曖昧だったんでしょうね。嗚呼、謝罪は不要です。これからも迷惑を掛けると思いますから、その対応を以つて謝罪と見做します」

「えーと……、了解です」

「ともあれ、不幸にも自我を自認できてしまった私が捻くれた頃、『闇の書』の残滓である『シニファイエ』——高次元上に存在する反応性情報構造体が、無秩序で無際限にも思える修復・連結作業を始めたので調査し、これを利用する事にしました」

はて？ 利用するにしては、随分と無駄が多かった気がします。決闘が目的なら、前座となる【大禍時】オオマカトキなんて無くても良かった筈……。いえ、アレこそが迷惑な部分なのかもしれません。

「最終的に何が完成するかは定かならぬも、今までの所業を鑑みれば好意的に見守れま

せんよね？ 故に監視して、妨害工作を行い、浪費させる役目が必要です。そして貴女に求めるのは、その副産物を撃ち破れる純粋な暴力……。だから、ええ、その調子で人道を踏み外して行って下さい」

「やっぱり、割り切っているように見えて恨んでいるよね？」

「これは異な事を。道無き道を行く先進性に、心の底から敬意を表しているのです」

ほぼ私の所為せいですが、本当に捻じ曲がっておられますね……。戦闘スタイルは参考するにしても、性格面については反面教師としませう。

「そう言えば……。ステラさんが先行者なら、アリサちゃんや「わずか」ちゃんは？」

「彼女達は引率者です。アリシアや王さまとはまた別の、特別仕様でした」

成程。振り返ってみますと、確かに引率者の役目を全うしていましたね。フェイトちゃんや「はやて」ちゃんの内心はさて置き、不謹慎かもしれませんが楽しい一時を過ごせました。クライド提督については……。ハラオウン家の問題なので円満なる解決を願うばかりです。

「ふむ、月も傾いて来ましたね……。幕引きには善い頃合いです」

「……………終わらせた後は、如何するの？」

「次を見据え、闇の中で更なる調査を行う予定です。貴女は学業に、青春に、団だん練れんに忙しい身分ですから、とても暇で手隙な私がやっておきますよ」

満面のアルカイツクスマイル。まるで遠回しな善意だと錯覚しそうになりますが、本当ならステラさんも経験する筈だった事で、私の立ち位置から弾かれてしまったが故の皮肉である……という解釈も出来て、曖昧な笑みしか返せません。

「さ、戻りましょう。『高町なのは』」

憎悪を閉ざす、重くて厚い諦観の情。何処となく御兄ちゃん達の精神性——『確固たる意思』のようなモノにも似ていて、少しだけ羨ましいなと感じたのでした。

第62話：幽（かそ）けき夢が終わる頃に

side：なのは

「ほう……。敗れたか、紅蓮の」

「ええ。殺し合いになりそうだったので、仕方無く負けました」

「へー、オリジナルってそんなに強かったんだ……。なのは、まだ元気ある？」

「流石にちよつと、睡眠時間的にも遠慮したい所存でして……」

「ええく……。じゃあさ、次回は僕と最初にやろうよ！」

「それならoil correctオールコレクトです」

ステラさんが「戻りましょう」と言いながらも転移した先はブロッケン山ではなく海鳴市の上空で、フェイトちゃんと「はやて」ちゃんが居ないという事は恐らく『アースラ』の医務室で寝かされているんだらうなと推測してみます。

ええ、はい。またしても私の魔力反応によつて通信が途絶えておりますが、もう急報は無いでしょうから絶賛スルー中です。自業自得ですけど、今回は余剰魔力を貯め過ぎで仕舞うにしても放出するにしても面倒極まりなく、魔力反応を抑えるのも一苦勞なのでして……。

時に、何故アリサちゃんと「ずずか」ちゃんも一緒に待っているのやら？

アリサちゃん達の世界観みたいな物から考察するに、アリシアちゃんや王さまも【空世の亡骸】と同じく討伐対象に含まれるような気がします。

「御疲れ、なのは」

「御疲れ様、なのは」ちゃん

「有り難う、二人共。ところで……、アリサちゃん的にはアリシアちゃんや王さまって悪即斬の対象外なの？」

「ん〜……。本人以外が闇を討伐しても無駄骨だから、あまりやろうとは思わないわね。ただ狂暴だったり生意気な相手は、この大太刀でズンバラリンと撫で斬ってやるけれども」

つまり、何となく相性が悪そうな王さまも、アリサちゃん基準では見逃せる範疇だったと。まあ……、王さまは尊大なだけで寧ろ無礼を働きそうなのはアリシアちゃんの方ですが、あの愛嬌によって相殺されたんでしょうね。きつと。

「……ねえ、なのは」。この後の掃討戦は『管理局』に押し付けて私と「ずずか」はバックれるつもりなんだけど、如何だったかしら？ 『外界宿』流の討伐は？」

「楽しくて頼もしかったよ。射撃手として専念できるのも新鮮でした」

その分、誤射に注意しなくてはいけないものの、慣れれば何とかなる見込みです。

「全くもう『管理局』の奴等、何でもやれるからって何でも任せるのは無茶が過ぎるでしょうに……。それじゃ、転職したくなったら『外界宿』の支部に駆け込みなさいな。そして叶うなら、また「トリニティ・レイズ」として再始動できることを願っているわ」「えつと……。あまり気にしないでね、なのは「ちゃん。アリサちゃんが『管理局』嫌いなだけで一緒に戦うことは出来るし、私達の関係はその……特別な筈……。だよね？」

「そう改まって言われますと……。多分、特別だと思えます」

「なら私達は、何処の所属だろうと」「トリニティ・レイズ」で良いと思うの」

はて……。堅実な、それこそ砲撃型魔導師としての無難な支援攻撃と、短い会話を交わした記憶しかないのに、如何してこうも「ずずか」ちゃんの好感度が高いんでしょうね？ や、これもまた「ずずか」ちゃんらしく、気持ちは嬉しいのですが……。とんと身に覚えが御座いませぬ。

「Wait. それって3人揃った時の話よね、「ずずか」？」

「アリサちゃん。5人なのに四天王とかも許されるんだから、この程度は誤差じゃないかな？」

「人数が多い分ならともかく、少ないのは不幸が有って空席になったと見做されかねないんだけど……。いえ、これはこれで宣伝効果が……？」

無いと思います。

「こほん。とまれ、〔トリニティ・レイズ〕の継続が決まった事だし……。遠からず、因果の交差路でまた合いますよ。＼なのは・オードナンス」

「またね、＼なのは＼ちゃん。何時かこの手が、再び重なりますように」

ふと気付けば、私の左手は＼ずずか＼ちゃんの両手で包み込まれていて、名残惜しうに離れていく様は罪悪感を覚える程でした。……まあそれも、アリサちゃんが口笛を吹いて茶化してくれた御蔭で、少しだけ軽くなりましたけどね。

「うん……。またね、アリサちゃん。＼ずずか＼ちゃん。武運長久を祈っています」

ひらひらと手を振り合い、転移魔法による鮮やかなオレンジ色の魔力残滓が消えるまで見送ったところで……。すっかり待ち惚ぼろけているステラさん達の方へと向き直ります。余程暇だったのか、アリシアちゃんは王さまと一緒に魔力の糸で綾取りをしており、ステラさんはそれを眺めつつ黄昏ているようにも見えました。

「えーと……」

「……『高町なのは』」

「はい」

「2つだけ、御願いが有ります」

「はえ……。何だか、随分と懐かしいやり取りだね？」

「保険として私の【焔】を分けるので、なるべく早く慣れて下さい」

それって、「御願い」と言うよりも「要請」では？

「理由を聞いても良いかな……？」

「保険は保険ですよ。最後に使う魔法とも関連しますが、次回も私が健在で、問題無く幕を引けるとは限りませんからね」

「フラグ的には遠慮したいんだけど……。まあ、そういった意図なら了解です」
「では早速——」

言うや否や、ステラさんの左腕がバリアジャケット越しに私の胸を貫き、リンカーコアを驚掴みされたような思い出したくもない感覚がしました。若しや【焔】を分けるとは、魔力の炎熱変換用プログラムの複製&譲渡ではなく、炎熱変換資質その物を刻む行為とでも……？

「——成程。こうなりますか」

何か、温かいモノが残っている……。そんな違和感を覚えていると、私の胸から引き抜かれたステラさんの左腕がやけに短く、血は流れずとも破損したテクスチャーの断面が見える不気味な状態となっていました。いやあのその存外平気そうなのは良くなくとも良いとして、異物混入は困るのですよって。

「や、ちゃんと回収して下さい」

「案ずる事はありません。どうせ魔法生命体の腕ですし、噛み千切れるのなら魔力として消化も可能な筈……。多分きつと、大方恐らく」

「本当に大丈夫？ 人格が宿っていたりはしないよね？」

「……さて、2つ目の御願いです」

敢え無くスルーされた為、古代ベルカ的な叡智で何とかしてくれそうな王さまに視線を向けますと呆れ顔のまま首を横に振られ、次いでアリシアちゃんからは合掌を頂きました。……仕方無いので、貪欲なるマイ・リンカーコアの消化能力に希望を託します。

「ある一定水準まで減らした、『闇の書』の残滓を纏めて焼却する大規模儀式魔法。それに、オリジナルらしい名前を付けて欲しいのです」

「その程度の事で良いの？」

「ええ。現状では、その程度止まりです。『恨み骨髓に徹す』と宣のたまうには過剰表現ですが、

何もかもを打ち明ける程には撃ち解けてませんからね」

「そんな仕様なら、もつと戦ってくれば良かったのに……………」

でもその割に、色々と話していたのにアレ以上の内容とは一体……。やはり、友好度はコツコツ貯める程度が良さそうです。

「…………それで、魔法の見た目はどんな感じになりそうなの？」

「シミュレーション上では、世界中の空を覆うように劫火が波及するので、人によつては世紀末か黙示録を想像すると思います。これまでに、《アメイジング・ブレイズ》、《セラフィック・フレア》、《ディザスター・ヒート》といった安直な名前は思い付いたもの、しつくり来ないですよね…………」

ふむふむ。そういう魔法で、そんな感じの雰囲気ならば——

《セラフィック・デイブレイカー》…………とか如何かな？」

「なんと…………！ 流石はオリジナル。善き名前です」

そして見覚えがある笑顔と、冬空を溶かす鮮烈なる紅蓮。その2つを私に焼き付けたステラさんは、アリシアちゃんと王さまと一緒に「焔」の中へ消えて行きました。

ですが、寂しくはありません。この惑星に根差してしまつたらしい「闇の書」の残滓——『シニファイエ』。また数ヶ月か数年先かは分かりませんが、一定量まで増えたら何か計画するでしょうし、調べ物に飽きればひよつこり来訪するようなフットワークの軽さも持っている筈です。寧ろ……。私のツケで『翠屋』のシュークリームを注文する程度の事ぐらいは、喜々としてやりそうな気がします。

「> H.Q。此方、〃高町なのは〃。状況終了しました <」
 何はともあれ、これにて一件落着きという事にしておきませう。音信不通になつた件での御小言とか、報告書に纏めるための聞き取り調査やら会話ログの提出が待つていようと、そんなモノは瑣末事です。

だって、とてとても善き経験を得られたのですから。

第63話：√ロスト・プリズム

side：かがみ火神 りゅうか龍華

2月2日。時刻1510。世界各地で未知なる現象の発生から36時間以上が過ぎ、それでも真相解明が遅々として進まないのなら国防に関する情報収集と解析を担う「情報本部」であつても初動の勢いは失われ、腰を据えてじっくり取り組む方向へとシフトする。

焦燥感に駆られようと、防衛大臣からの強い要望が有ろうと、確認済みの映像記録や観測データから明解を得られないのだから、あとはもう演習場に落とした『ピストン桿かん止め用ばねピン』を探すが如く人海戦術で地道に頑張るか、金属探知機が参戦するようなブレイクスルーを待たねば進展は有り得ないのだ。

「いやはや、政治家共は【情報本部】を【NASA】の秘密基地と似たような物だと勘違いしているのかね？ アレは現代科学では説明できない未知なる現象であり、どちらかと言えば神宮庁が得意とするオカルティックな事件だろうに……」

「その……御疲れ様です。火神陸将」

故にこうして、細やかながらもおやつ休憩が出来る程度の暇が生じてしまい、折角な

ので部下を呼び出して精査前の情報を聞き取るうと思つた次第である。

「聞いておくれよ、武井く〜ん。情報本部長の私が、陸将の私が、夜中に緊急登庁して頑張っている私が、各方面の分かりませんでしたという報告を纏めるだけの仕事をやらされてるなんて、退屈を通り越して怒りすら覚えてしまいそうだ……。実際のところ、既にちよつとだけキレている」

昨夜の出来事に関する第一報は、「日本だけではなく世界中で【黒煙の渦】が多数発生している」という物で、その時は気象的な何かという可能性も辛うじて残っていたが、茨城県上空から世界中に波及した【炎の波】が発生したからには静観する訳にも行かず……。こうして関係各省庁の皆様が、時間と人件費を浪費するだけの大変愉快な状況になつてしまったという訳である。

日本では人的被害の報告は無し。【炎の波】と仮称で呼ばれる現象も物理的な炎ではなく、巻き込まれた複数の航空機に外傷が無いことを確認済みで、筑波のマッド共がやらかした痕跡が無いのも一応は確認した。更に【黒煙の渦】が発生した箇所は、クリスマス・イヴの忌々しい【カタストロフィー】と数も位置も同じである事が分かつたものの……。

原因だけが、まるで分からない。

現代科学はHGS認定者が扱う『超能力』という神秘を解き明かしつつあり、長らく

オカルトとして切り離されていた『靈障』にも切り込もうとしているのに、クリスマス・イヴの厄災と同じく原因不明のまま時系列や影響だけが明らかに成り行くと行く。

これもまた地球の神秘であるのなら、別にそれでも構わない。地震や台風や伝染病のように向き合うのみだ。けれども、そうではないとしたら……。私達は、あまりにも無防備すぎる。

「其処でだ。また何か、怪しい情報が有るなら教えて欲しい」

「二応、色々仕入れてはいますけど……」

ソファーに座る武井一佐の口が鈍り、目が泳ぎだす。ふむ……。これは期待できそう
だ。

「人らしき物が空を飛んでいる。茨城県上空で青い光が不規則に動いている。——そのような情報は目撃証言以外にも映像等で記録されていますが、関連性は不明です。また退魔師の知人曰く、『炎の波』によって「カタストロフィー」発生地点の穢れが祓われたとの事で、此方は『靈障』発生件数を継続調査すれば証明は出来るかと」

「成程。それで、悪い方のニュースは？」

「悪いかは分かりませんが……。2時間程前、鹿児島県沖合で旧日本軍が使っていた零式水上観測機と思われる飛行機が飛んでいたそうで、空自と海自さんが躍起になって探しているみたいです」

「明日は我が身、と思えば悪いニュースかもしれない……」
「そうならない事を願って止みません」

……

……

……

後日。武井一佐の願い空しく、茨城県にある霞ヶ浦駐屯地で静態保存されていた61式戦車が深夜に無人状態で起動を果たし、フェンスを薙ぎ倒して脱走を開始。同県の大洗町でドリフト走行を繰り返した後に帰還するという洒落にならない事案が発生した為、対策・調査本部を設置する運びとなった。

調査はともかく、予想も付かぬ現象にどう対策しろと？

誰もが手探り状態だというのは察せられるもの……。いや、これは寧ろチャンスと
思うべきだろう。武器の携行、発砲許可、戦車や航空機支援を含む作戦行動立案、市街
地や私有地での戦闘——それら全てに掛かるプロセスの簡略化と、制限の緩和化。これ
らを特例措置で押し通さねば、将来的に支障が出るのは目に見えている。

嗚呼、良くはない……。良くはないが、至極真つ当な軍隊に正せるのなら本望である。
来たれ神秘。私だけでも、御前を歓迎してやろう。

（ ）

side:なのは

あんなドラマティックな退場をしたというのに、ステラさん達は何を考えてやらかして

いるのやら？ —— そんな風に思ってしまう事件が散発的に起きており、管理局の皆さんは監視体制を構築すべく忙しそうにしています。

まあ、あの私の事ですから『シニファイエ』を一夜で激減させるよりも、戦争以外では実力を披露する機会が少ない軍人さん達に委託し、週一ぐらいで討伐して貰ったらwin-winですねとか思い付いて試行錯誤中なんでしょうけど、夢に出てくれないので真相は分かりません。

「『なのは』、今朝のニュース見た？」

さて……。怪現象だの管理局だのは考慮されず、日常なる物は滔々と流れて行きま

す。何時もの通学バス。何時もの定位置である最後尾のシート。挨拶もそこそこに話題を振ってくるアリサちゃんと、嬉しそうに私の左手を握る「すずか」ちゃん。

因みにフェイトちゃんは、私の隣に座れないのならと前側の席を陣取っていて少し寂しそうに見えますが、何か有れば《念話》を使って話し掛けてくるので私が大変なこと以外は大丈夫です。

「それって、戦車が青いま……。光を出しながら滑っているニュースの事？」

「ま……？ まあ、それよそれ。最近は変な事件ばかりで怖いわね」

「あの黒煙よりは、まだ微笑ましいなとは思います」

「いや、数十トンの巨体が暴走しているのと比べれば、あんなの無害に等しいでしょ？」

「いやいや、実は有害なのでしてー。と反論したいのですが、やはり討伐者プレイヤーでもないアリサちゃんや“すずか”ちゃんには魔法少女である事を明かそうとは思えない為、これ以上は言及せずに濁しておきました。

だって、ひよつこりと地球滅亡の危機が降り掛かったりするのですから、魔法に関するアレコレを教えたところでアリサちゃん達には自衛手段が無く、日々の心配事が増えるだけならば……。知らずにいる幸福を享受して欲しい。今となっては、そのような考え方に纏まりつつあります。

「そう言えば、あと1週間程度でバレンタインよね……。 “すずか”や“なのは”は何時も通リな感じ？ 私は……。残念ながら何時も通リよ」

「私も同じく。と言うか気が早すぎるよ、アリサちゃん。男の子が格好良くなるのは高校生に成ってからだろうし……」

「早ければ6年生ぐらいから付き合っている子も居るって聞くわよ？ で、“なのは”は？」

「うーん……。一応、義理クッキー2つの予定です」

「ギルティ！」

本命じゃないからノット・ギルティです。

「何処の馬の骨よ、そいつ等は?!」

「遠くで頑張っている同年代の知人さんと、御世話になった御兄さんです。応援とか御礼以外の他意は御座いません」

ユーノさんやゼストさんだけでなく、クロノさんにも送ろうかなと迷いましたが……。多分、エイミイさんから本命チョコを送られると思うんですね。長きに渡り、御兄ちゃんを巡る超奥手な恋愛模様を見てきた私の勘がそう囁くのですから、恐らく当たります。

「何だか、その同年代の知人さんが可哀相に思えて来たわね……」

「や、男子ってアリサちゃんや、すずかちゃんみたいな華やかな子に初恋する筈でしょうし、私にも理想という物が有ります故」

「あんたも十分華やかだったでしょうに。また、ツインテールはしないの?」

「今度は首筋辺りで纏めて、ポニーテールにしようかなと計画中です」

「へえ……。それなら格好良くなりそうね」

ステラさんみたく、まなじり 瞼がキリつとしている訳ではないので可愛い寄りな印象になるとは思いますが……。まあ、そこそこ似合うとは思いますが。身長も伸びれば尚更に。然しか

しながら、小学3年生の内にこれだけの事件に巻き込まれ、今後は地球に根付いた『シニファイエ』対処もしなくてはならず、あと4〜5年の成長を遂げるまでに果たして五体満足で居られるのやら？

本当に、今年度は多くの出会いと経験が降り注いだ凄まじい1年でありました。叶うのならば、来年度はその反動で——

【追憶編】

第64話：篝火（かがりび）を灯す

side：なのは

時に、これまで私が関わった事件は『プレシア・テストサ事件』や『闇の書事件』といった分かり易い名前を付けられていましたが、今回の事件は『ユビキタス・デイビジョン事件』という御洒落な名前に決まったそうです。

クロノさんに意味を聞いてみたところ、「偏在する可能性……という意味らしいぞ？」と答えながら睨まれたので、恐らく過労により夢見が悪かったんでしようね。嗚呼、なんと不憫な。減刑条件とはいえ将来的に管理局勤めが確定しているフェイトちゃんや「はやて」ちゃん達も、あんな風に擦れないで居て欲しいのですが……………」

さて。

事件に名前が付く程度には一段落し、やっと訪れた休日の昼下がりに。学校の宿題を終わらせる事は勿論、もう1つの宿題も手を付けなくてはいけません。ステラさんから埋

め込まれた【焰】^{ほのお}——そう呼ばれる炎熱変換資質らしき物の習熟です。

魔法とはいえ火遊びをする訳ですから、一応は屋外でと思つて御馴染みの臨海公園へ場所を移して結界を張り、バリアジャケットを纏い、手慣らしで魔力弾に【焰】をエンチャントさせて観察していたところ、少し離れた場所で魔法陣が展開されてフェイトちゃんが転移して来ました。

「“なのは”、一人で鍛錬しているの？」

「手探り状態だから、誘つても退屈させちゃうだろうなと思ひまして。……私の魔力反応、そんなに分かりやすいかな？」

フェイトちゃんというかハラオウン家の住まいは、高町家が在る藤見町から川向かいの遠見市に位置するのでそこそこ距離が離れており、結界だつて控え目なサイズで張つているので検知は難しい筈なのですが……。

「うん、普通の魔力反応とは真逆だけど……。 “なのは” が魔法を使おうとする時、大気中に含まれる魔力素^ナが “なのは” の方へ集まろうとして春風のような魔力流が生じると、周囲の魔力濃度が低くなる事でリンカーコアが息苦しさを覚えるから、あとは辿るだけだよ」

「成程」

それは盲点でした。交戦状態なら干渉力が強い分には問題有りませんが、こつそり鍛

鍊したい場合には過剰であるとは……。抑える鍛錬も追加しませう。

「凄いな。後天的なのに、もう炎熱変換が出来るようになったんだ……」

「や、炎熱変換資質らしき物ってだけで、解明はこれからです」

「そういう事なら、私にも手伝わせて欲しい」

余程暇だったのか、やる気も有り余っているらしいフェイトちゃん。因みに、アルフさんが置いてけぼりになってないか聞いてみたところ、今日はザフィーラさんと打ち合つてリア獣しゅしているとの事。それなら、此方も気兼ねなく火遊びに誘いたいと思ひます。

先ず、安全上の理由からバリアジャケットを着て貰い、折角なので燃焼テストとして羽織っているマントを借りて即着火。魔法で形成されたマントに、魔法の「焰」。故に化学的な燃焼とは異なり、氷が昇華して気体になるような感じで呆気無く溶けて消えました。

はい……？

薄くてもバリアジャケットの一部ですし、魔法に対する耐性——この場合は難燃性のような効果を發揮して耐えると思つたのですが、シグナムさんが使うような普通の炎熱

変換資質よりも侵蝕作用に特化し過ぎている。ふむ……。指向性を付与して使うタイプの《AMF》擬き、とても考察すべきでしょうか？

おまけに、燃え残った魔力残滓が熱を持っていて私の干渉だろうと暫くは受け付けない感じですから、魔力回収を意識しなくても勝てる程度の相手には更なる苦戦を強いる事が可能で、同格が相手だろうと凡そ保有魔力量では此方が勝る……。

何となく、ステラさんが先行しようとした方角が分かっては来ましたけど、道理で簡単にくれた訳ですよ。だってこれは、私への切り札では無いのですから。

「フェイトちゃん。バリアジャケツトって、そう簡単に全損しないよね？」

「ええつと……。バリアジャケツトは最終安全機能だから修復や維持する分で保有魔力が枯渇して、全損する前に魔導師が気絶するんじゃないかな？ 勿論、その状態で追撃すれば全損して、身体にも酷いダメージが残るかもしれないけれど……。」

「んー……。それじゃ非殺傷設定で倒した場合は、砲撃を直撃させたり【焔】で炙あぶつても結果は変わらないと」

「あのね、"なのは"……。Aランクぐらいの、普通の武装局員にとつては魔力弾も十分脅威だから、使い分けないと怪我させちゃうよ？」

軽装甲のフェイトちゃんですら魔力砲が直撃しても何とか耐えるというのに、主力である筈の武装局員がその程度ならば、質量兵器を解禁してゴム弾を撃てるフルオート・

シヨットガンを持たせた方が強いのでは？ 攻撃魔法を使わなくて済む分、バリアジャケツトに割ける魔力が増えますよって。

まあ……、将来に活かせるかはさて置き、オーバークイルの懸念がある時は【焰】で焼き払うことに致しましょうか。魔力弾と違って、繊細なコントロールをしなくても当てるのは便利です。

気を取り直し、次の実験へ。

よくある円形状の防御魔法を指定位置に発動してもらおう事でフェイトちゃんの安全を確保しつつ、【焰】を付与した魔力弾や砲撃をぶつけてみた結果、実質的にナパーム弾と高圧火炎放射器ですねーという感じで検証が終わりました。

シールドの表面に張り付いて融解させる魔力弾は未だしも、シールドに沿って裏側へと回り込む砲撃魔法は初見殺し性能が高く、酷い（※褒め言葉）のですが、全方位を防げるバリア系やら重力制御系の魔法で何とか防げそうな気はします。只、防御されたところで魔力リソースの削り合いにおける優勢は揺るぎませんから、使い分けについては模擬戦を重ねて熟考したい所存です。

「次は……、嫌な感じがするバインドを試してみよっか？」

「何となく予想は付いちやうよね……」

円柱状の細長い標的を出して貰い、その中心を無造作にLOCK。すると察しの通り、拘束部分から少しだけ「焰」が漏れ出して数秒と掛からずに標的を焼き切った為、これで手足を拘束したら「人でなし」と呼ばれること間違い無いでしょう。ええ、当然の如く封印ですとも。

それから、安直に《Fire wall》と名付けた防御魔法を張ったらフェイトちゃんの撃ち込んだ魔力弾が燃え尽きたり、「焰」による干渉が十分に及んだ状態——高熱状態とでも言うべき状況下になれば、カートリッジが異常燃焼するだけでなく魔法発動時の消費魔力が増大するデバフを自分以外に発生させる等、仕様が判明するに連れて使い所さん？ みたいな気持ちが増大して行きます。

元より『シニファイエ』を焼き払うことに、つまり何かしらの干渉や魔法による変化を終わらせる為の「焰」であると仮定した場合、それなら強力で在らねばならないという理念は分かりますけど、だからと言って無差別デバフは頂けません。鍛錬次第で如何にか、敵味方の識別が………出来るの良いですね。

「有り難う、フェイトちゃん。取り敢えず、今回はこの辺で」

「模擬戦はやらないの？ 時間なら有るけれども……」

「模擬戦だからこそ、しっかりと準備して遣りたい派なのでパス券を行使します」

「パス券？」

「またの機会に、というニュアンスの……そういう意味合いの俗語です」

「それじゃ、今日はもう御開き？」

「や、どうせなら趣向を変えて2回行動したいなーとは思うのでして……」

多分フェイトちゃん、勉強も読書も映画鑑賞も好きな方ではあっても、身体を動かす方がもつと好きらしく、インドア派寄りな私としては引き出しの少なさに苦勞するんですよね。私だけなら札幌の雪まつりでも見に行こうかなと思いますが、フェイトちゃんも一緒に楽しめる&出来れば無料な物……。

「フェイトちゃんは、ペンギンって見た事ある？」

「映像でなら、何回かは」

「南極大陸に棲んでいるらしいんだけど……」

「今から行くの？」

「同意を得られれば、直ちに遅滞無く」

「……同意はするけれども、ちよつと連絡を入れてからでも良いかな？」

「うん。それじゃ、その間に準備しておくね」

仮令、光年単位で離れていようと座標さえ分かっていたら跳んで行けるのが転移魔法

の良い所です。そんな訳で、『アースラ』による地球観測データから南極大陸の座標を調

べてサクッと転移。幸いにも現地が快晴だった為、出現場所を高度1万メートルにしてスカイダイビングにも興じる事にしました。

飛行とはまた違う、魂が重力に引かれるような感覚……。バリアジャケット越しなので風圧やら体感温度はそこそこ止まりですけど、安易な危険に身を任せる程のワイルドさは持ち合わせておりませんから、この程度の趣おもむきで十分です。

「>」なのは、如何どうして出口を空中にしたの？ <

「>」地上だと人に見られる可能性が高いので、趣味と実益を兼ねてみました <」
遠隔で結界を張ってから転移するよりも、転移してから張った方が簡単なんですよ。
ね。

「>」人？ こんな氷だらけの大陸に？ <

「>」テレビの受け売りだけど、気象観測とか色々な研究用で滞在しているらしいよ？ <

「>」ふーん……。科学者って、変な人ばかりなんだね……。 <

たまに倫理観とぶつかる変な人達が少数で、その他の科学者は真つ当な人達だと思うのですが……。まあ、そんなこんなで《念話》をしながら《封時結界》を張り、氷上に降り立った後はペンギンの群れやアザラシをた矯めつすが眺めつ観察して楽しみました。

尚、多少スリリングな空気が漂ったりこそすれ問題は起こらず、フェイトちゃんも野

生動物の可愛いだけではない。“何か”を感じ取れたのであれば幸いです。恐らく好感触といった感じでしたけど、やはり模擬戦中に私の弾幕へと切り込む時よりかは反応が薄いですね。次に遠出する時は、奇を衒^{てら}わずに運動公園にでも行こうかなと思います。

……

……

……

「因みに、これが御土産の写真データとなります」

「おお、どれもよく撮れて………。何なん、このでっかいペンギン？」
「見ての通り、でっかいペンギンです」

翌日、「レイジングハート」の映像記録を編集して作った写真データを“はやて”ちゃんに見せたところ、とても良いリアクションを返してくれました。このでっかいペンギンが好戦的なら、謎の焼鳥が南極大陸で冷凍保存されていた未来も有ったかもしれないまん。

「いやいや、横のアデリーペンギンと比較してこれなら2メートル近くは有るやろ？
魔法絡みの異変とちゃうか？」

「仮令そうだとしても、この大切な時期に“はやて”ちゃんは功績作りとして地球規模の調査とかやりたくはないよね？ 多分、リンディ提督に報告したら善意でそうさせて

くれるよ?」

「あー……、それはちと勘弁やね……」

どのみち駆除する訳にも行かないでしょうから、調べるだけ調べて『要継統調査』という無難で徒労に終わる結末になりそうなのも黙っている理由の1つです。

「……ところだな、〴〵なのは〴〵ちゃん」

「はい」

「私とはデートせえへんの?」

「……僭越ながら、リインフォースさんを優先した方が良いと思慮します」

「それもそうなんやけどね……。でもリインフォースが居なくなつた後、私だけ空白期が有るのも寂しいやろ?」

「じゃあ、3人で御出掛けするのは?」

「それはそれ、これはこれや」

はて? 〴〵はやて〴〵ちゃんとは『闇の書事件』の直後とか模擬戦以外では関わりが少なく、と言うか私が八神家の一家団欒に配慮していたのもあつて微妙に疎遠気味でしたから、この好感度の高さは嬉しい誤算です。

おまけに模擬戦の度に丁寧な砲撃をブチ込んでいましたから、ちよつと嫌われても不思議ではなかつたが故に感慨も一入……。取り敢えず、高い分には良しとしませう。

「はやて」ちゃんは、行きたい場所とか有る？」

「せやなあ……。折角やし、月に行つてみるのは如何やろ？」

「それは面白そうだね」

「それで月面に有るらしい星条旗の横にな、日章旗を突き刺しといて次に調査しに来た人を驚かすんよ」

「指紋が残るので却下します」

「ほんなら、ミステリーサークルは？」

「芸術センスだけが懸念事項です」

「適当に丸やら三角を描いて、古代ベルカ語で裝飾すれば大丈夫やない？ 知らんけど」

「そう事も無げに言つていた。はやて」ちゃんですが、日を改めて出発する際には凝つたデザイン的设计図を複数用意し、2時間程の協同作業により完成させた時の笑顔は達成感に満ち溢れていました。普段は車椅子ですから、こういった遊びも遠退いていたんです。この調子で、前向きに回復して欲しいものですよ。

第65話：より善く、より高みへ。

side:なのは

3週間前の、あの日あの時。私にとつては良い思い出となりましたが、ユビ——略称『UD事件』での決闘で敗北したフェイトちゃんや「はやて」ちゃんには苦かったらしく、此処のところ鍛錬や模擬戦を重ねる度に研鑽けんさんされて強くなっているなーと感じます。

今までも地道な成長はしていましたよ？ でも数段飛ばしで強くなって行くような勢いは、フェイトちゃんが私を串刺しにしようとした時ぐらいいしか覚えがありません。

おつと古傷が……………。

因ちなみにフェイトちゃんの場合、高速移動魔法の効果終了時には速度差が生じるので外からは硬直しているようにも見えていましたが、最近では慣性制御により速度を維持したまま滑ることで被弾率を下げ、その他にもバリアジャケットに幾つかの発光パターンを組み込み、遠距離からの置き撃ちや誘導弾を思考誘導で当てるのが難しくなるなど、

結構嫌らしくなりました。

あとは、デバイスを振らなくても圧縮魔力による光刃を射出するといった器用さが増したものの、相変わらず炸裂弾や【焔】などの範囲攻撃によるダメージ勝ちを狙える為、今のところは何か負けずに済んでおります。

対して「はやて」ちゃんは……。約一ヶ月前の所謂『おんぶにだっこ』という状態から急成長しましたし、初動の遅さは「夜天の書」の仕様なので諦めるとして中盤以降はそこそこ撃ち合えています。やはり両脚が完治していないので姿勢制御が微妙です。

たまにシャドーボクシングをやっている事から、リインフォースさんのような殴って撃てる騎士を目指しているんでしょうけど、そも「はやて」ちゃんは後方に据えて支援砲撃をさせた方が強いタイプでして、あの領域に至ったとしても前線メンバーなぞ有り余っているんですよ。

然し「ベルカ騎士を束ねる王なのに、接近戦で負けました」なんて事があつては外聞が悪いのもまた事実。「はやて」ちゃんが其処まで考えているかはさて置き、温かく長い目で見守りませう……。等と思っていた日々の最中、珍しくリンディ提督から御招きされたので執務室へ参上致しました。

「臨時共同訓練に仮想敵役としての参加要請……。私よりも、フェイトちゃんや「はやて」ちゃんに振るべき案件だと思うのですか？」

すわ何事かと少し警戒しておりましたが、その程度の事なら社会貢献ポイントを稼ぐ必要がある二人へ回した方が宜しいでしょうに。……や、寧ろ条件付き無罪だからこそ任せられないというオチなんです。多分、恐らく。

「残念ながら、『あのグランガイツ1尉が絶賛する囑託魔導師を是非に』って首都防衛隊の副司令官 “レジアス・ゲイズ” 准将から指名が来ているのよ」

「リンディ提督の立場なら、その程度は曲げられるのでは？」

「それが大人の事情で、ちよつと難しくてね……」

「へー、大変ですね。御疲れ様です」

非正規雇用の身分故、融通とかパワーバランスとか貸し借りなんて存じませぬ。

「……そう言えば、『翠屋』で今が旬のスイーツは有るかしら？」

「今の時期だと母のスイーツ食べ比べセットが御勧めで、持ち帰りも可能です」

「あら、美味しそう。あとで注文させて頂くわ」

「有り難う御座います。何故だか要請を受けたくなつたので、受諾しますね」

ところで肝心な詳細らしい詳細は無く、指定された相手に対して指定時間内の戦闘をすれば良いとの事。如何やら、滅多に居ない高ランクな違法魔導師への対処訓練をやりたいようで、非殺傷設定ならば使用魔法の制限も無し。これはつまり……、
《 S L B
《が期待されているんでしょうね。ワクワクして来ました。

ただ残念な事に、時差やら暦しよみの違いにより本番当日は学生にとつて貴重な休日を費やして行われる事となりまして、怪我や病気に気を付けながら約一週間を過ごし——
 当日。『アースラ』経由で、リンディ提督達が所属する次元航空部隊の宇宙要塞こと『本局』の転送ポートへ次元転移した瞬間、熱烈な歓迎を受けました。

「“なのは”さん、御久し振りですっ！」

「アー、ウン……。久し振りだね、シャーリー」

「先の戦闘記録映像、閲覧許可が出ている分は全て拝見させて頂きました！ また一層強く美しく進化を遂とげ、特に最後の撃ち合いはどんな映画よりも劇的で素晴らしく、御互いを強者と認めて見詰め合うシーンは見る者全てを魅了すること間違い無しだと思います！ 無論、私はもつと前から“なのは”さんのファンですけどね、率直に言つて惚れ直しました。ふふっ、二度目の恋のはずなのに何だか気恥ずかしいなあ……」

エイミイさんが、「案内役がいるから大丈夫だよ！ ☆彡」とか言つてたのに人選があるのその……。正直、私のヲタクを拗こじらせている時のシャーリーは苦手です。

「それから目的地となる演習場には、もう一度転送ポートで跳んだ後に送迎車に乗つて移動します。これだけなら適当な現地隊員でも良いのではと思うかもしれませんが、ちゃんとした観測機材を扱える私……不肖シャーリーが“なのは”さんの戦闘データを取る事で、より良いメンテナンスや開発に反映させる事が出来るんです！ あつ、戦

闘自体は御好きなように戦つて下さい。何なら、新技とか試しても構いませんよ?」

「新技……。炎熱変換した魔法つて、新技に含めて良いのかな?」

「……………詳しく、説明して下さい」

「その前に、速やかな案内をして下さい」

尚、道中の9割方は説明やら質問への応答で時間が溶けました。如何やら、シャーリーが見たのは編集済みの資料用データらしく、私がハートキャッチされて【焰】を宿した経緯は映像どころか文章としても記載されて無かつたとの事。……まあ、階級が低い技術官に対して、其処まで情報を渡す必要性はありませんよね。宜なるかな。

「そんなまさか……。『なのは』さんの名場面を見逃していたなんて……………」

「や、私の見所はステラさんとの戦闘シーン迄だからね?」

世界を紅蓮で染めるような『Seraphic daybreaker』の壮大

さと比べれば、大体の事象は霞んでしまいます。そも【焰】の受け渡しなんてサクッと手をつつままれてザックリ終わりましたから、当事者的にあまり思い入れは無いです。

……さて、何とか舌の根が渴かぬ内に演習場の検問所ゲートを通過し、其のまま中心地へと連行されました。周囲は自然豊かなのに、その一区画だけ都市部が生えたような光景は興味深いですね。シャーリー曰く戦闘訓練用のレイヤー建造物との事で、それなら壁抜きも簡単そうだなと記憶しつつ送迎車から出るや否や、突き刺さる無数の視線。

ええ、部外者の宿命ではあるものの、流星に30人近い視線を集めるのは少し緊張します。

然し、見知った顔のゼスト——さん付けにしておきましょうか。ゼストさんが迎えてくれた御蔭で警戒心は解けたらしく、それはそれで今度は好奇の目に晒されるのですが、先程よりはマシだと思いう次第で慣れたい所存です。

「久しいな、なのは」。また戦火に巻き込まれたと聞いたが？」

「御久し振りです、ゼストさん。今回のは御祭りみたいな物でしたから、それ程でも」
「……あれだけ撃ち合っても、祭りだと？」

「死にかけたり、地球存亡の危機でも無かったので御祭りです」

再会の挨拶も程々に、私の紹介も兼ねた青空ブリーフィングが行われました。如何やら皆さん魔導師ランクA以上の一般的には『優秀』と評される方達で、休憩後に小隊編成でオーバーSランク魔導師の制圧または遅滞戦闘訓練をする予定だったらしいです。そして彼等の中で、オーバーSランクなのはゼストさんのみ。

成程……。つまり私は、サプライズ・ゲストというやつですね。おまけにゼストさんとは真逆の中遠距離が主戦場のため、彼等が考えていたであろう戦法も御破算。まあ、『理不尽』という物は予期できないからこそ『理不尽』足り得ますので、相応に頑張らせて頂きたいと思えます。

「それから『なのは』、向かって右側が首都防衛隊で俺の副官を務める『クイント・ナカジマ』だ。俺に声を掛けづらい時はクイントを頼れ」

「初めまして、『なのは』さん。今日は宜しくね?」

「はい、宜しく御願います」

「そしてその隣が、首都航空隊選抜チーム代表『リニス・ランスター』。戦闘スタイルこそ違えど射撃手同士、良い経験となるだろう」

「最大の努力は致しますが……。あの、『なのは』さん。正確な魔導師ランクは御幾つでしょうか?」

ちよつとだけ忍さんに似ている快活なクイントさんに、緊張気味なのか亜麻色の毛先を摘まんでいるリニスさん。背格好からクイントさんは大学生で、リニスさんは中学生程度の年齢だと予想してみますが、小学生に対して其処まで畏かしこまれると少し居心地が悪いですね……。これもまた実力主義を信奉する異文化なので、受け入れるしか方法はありませんけど。

「暫定SSランクです。出身地も活動場所も管理外世界なので、認定試験を受けなくても支障は出ないと聞いています」

「最低でも3ランクは上……………」

「あらあら。今は産休中でも、メガアヌを召喚したくなるわね……」

「戦力不足だろうと戦わねばならん時もある。『なのは』、此方の編成によつては高度制限を設けるが、それ以外の手加減は不要だ。強いて言うなら、結界を壊さない程度で暴れて欲しい」

「了解しました」

因みに、バリアジャケットの展開がてら何時も通りに余剰魔力を貯めている四対八枚の光翼、そして三重の光輪を出現させると魔力反応に当てられたのか青褪める隊員が続出した結果、とある思ひ出に浸ることが出来ました。

「はやて」ちゃんとの模擬戦を始めた頃は魔力反応に晒されるだけでも怖気付いていたのに、撃墜回数が2桁を越えた辺りから目が座りだしたんですね。訊いてみたところ、気絶する程の凄まじい魔力ダメージを受けようとも死ななければ慣れるし、気絶したくないから真剣に向き合わなくちゃいけないとか何とか……。

だからきつと、大丈夫です。只の小学生だった子が、文学少女でも立ち向かえる程度の恐怖ですから、愛国心と使命感に溢るる皆様ならば耐えられると思います。

（ ）

side：クイント・ナカジマ

これまで私は、疲労困憊こんぱいで思考が霞むほどに肉体を追い込んだり、簡単な魔力弾すら

生成できない段階までリンカーコアを酷使した事が有る。けれど、そういった限界を知るための、限界を超えるための訓練という物は、大怪我や気絶をさせないような準備をして、追い込んで、時には叱咤激励し、ぎりぎり達成させるのが常道なのだけれども……。

今日だけで、然もたった4時間の間に魔力ダメージによるノックアウトと、奇妙な覚醒を何度繰り返されて戦わされたのだろうか？

四人一組の即席小隊が七組。その中にはゼスト隊長を含む空戦魔導師だけで構成されたチームも有ったのに、どれも5分と持たずに全滅判定を下されてしまう。特に『高ランクの空戦魔導師、且つ射撃手』という情報しか持つてなかった初戦チームは哀れで、『なのは』さんが抜き撃ちで放った砲撃により二人纏めて墜とされた挙句、仲間の悲鳴により思考停止した残り二人もまた同様の末路を辿った。

次のチームは重厚な魔力弾の雨に撃たれ、更にその次のチームは炎熱変換された砲撃で焼き払われ、私のチームは主に次元巡航船で用いられる難攻不落の防御魔法《Distortion field》を貫徹せずに体当たりで潰されて気絶するも、先の敗北チームに対して行った治癒魔法らしき物を使われたのか目が覚め、そして己の異常に気付いて愕然とした。

《Distortion field》とレイヤー建造物に挟まれた際のダメージはバリアジャケットの防護機能を超過し、リンカーコアの保有魔力が底を突く勢いで

消費された筈なのに調子は良く、何なら順番が一巡するまで休めば大丈夫だと思えてしまう程度とは訳が分からない。

だから幾度となく、あの理不尽極まりない弾幕と砲撃と防御魔法と、空を飛べる空戦魔導師チームには不可解な軌道を描く飛行魔法への攻略も上乘せで、挑み・足掻き・惨敗し・起こされ、ひたすら相性の悪さと実力差を心身に刻み込まれつつ、見えない何かを擦り減って行く……。

比較的善戦できたのは、防御や位置取りが巧みだったゼスト隊長。それから電気変換資質による高速移動を得意とするリニス空曹長ぐらいなもので、私が得意とする《Wing road》を展開して縦横無尽に滑走しながら肉迫する戦法は徹底的な置き撃ちと、上下への垂直回避できっちり対策され、駄目押しとばかりに《AMF》の魔力結合阻害によって無力化した上で射撃戦を強いるなど、まるで悪夢の中で踊らされているかのようなだった。

でも………。最後に降り注いだ星の光が、全てを吹き飛ばしてくれた。

悔しいとか、情けないとか、勝ちたいだとか。そういつた取るに足らない妄執が消え去り、私は漸くその先に浮かぶ星空を知り得たのである。

「早く戻って来なさいな、メガーンヌ……。こんなに楽しい事なんて、滅多に無いんだから」